

帯広の森

OBIHIRO NO MORI
50th Anniversary

私たちと帯広の
森づくり







帯広の森50周年記念事業実行委員会
委員長 三日市 則昭



前夜からの雨模様で多少ぬかるんでいる駐車場。
スコップを持ち地面を均している男がいる。
(プロジェクトX風)

1975(昭和50)年6月1日(日)午前10時、帯
広市街地の西部、南の森西側の帯広の森用地で100
年の歩みの第1歩が記された。私は帯広の森市民
植樹祭実行委員会のメンバーとして、前夜からの
雨模様で多少ぬかるんでいる駐車場をスコップで
均したことが記憶に残っています。

「みんなで創ろう 帯広の森」。

これは第1回市民植樹祭の標語です。帯広の森
は市民の手により造り上げようとの理念のもと、
植樹が始まって半世紀が経ちました。現在、帯広
の森を歩くと、立派に育った木々の姿や、アズマ
イチゲ、ユキザサやオオバナノエンレイソウ等の
林床植物、エゾリスやエゾタヌキ等の小動物、オ
オタカやシマエナガ等の鳥類、ベニシジミやキア
ゲハ等のチョウ類に出会うことができます。

これまでになるには、30回延べ14万8500人の
参加者の手による植樹祭、15回延べ1万3000人の
汗が木々を育てた育樹祭、8団体のボランティア団
体等による森の育成、これらがまさに「市民が自
ら創り育てる」帯広市の文化へと昇華させたといっ
ても過言ではないと思います。

帯広の森の出発点は帯広市第5代吉村市長が
1959(昭和34)年に策定した「帯広市総合計画」
に始まります。その計画の一部を抜粋します。

——Ⅲ 計画の目標 1. 基本的目標

『…こうして明るく豊かな住みよい帯広市—近代的
田園都市—の建設をはかるとともにこれと一体的
な関係にある十勝地域ならびに補強的な関係にあ
る道東地域の発展に寄与しようとするのである。』

その総合計画の都市計画の章

——(3)公園及び緑地 C.緑地 (b)緑地帯
『都市計画用途地域の周辺部に緑地帯を指定すると
ともに、帯広川畔の風致地区を存置するようはか
る。』

と記載されており、市街地外縁部の緑地帯が種子
(帯広の森構想)の土壌シードバンク(埋土種子)
となり、土壌中(緑地帯の計画)で発芽する時期(吉
村市長の思い)を吉村市長は心に秘めながらその
時を探っていたのではと思います。

その後、吉村市長はウイーンの訪問等を踏まえ
緑地帯の姿を帯広の森へと発芽させることを決め
ました。1971(昭和46)年「第二期帯広市総合計画」
で市民ぐるみで推進する主要な施策として、行政
主導から行政・市民の協働による帯広の森づくり
が具現化されていきます。(同封のDVD帯広の森
20周年誌:詳記)

その考えは歴代市長にも受け継がれ、市民の財
産として育てられ、帯広の森はゆるぎなく行政・
市民により歩みを進められています。

しかし、まだ自立した森への道のりは長い月日
が必要です。「みんなで創ろう」の原点に返り、多
くの市民が参加することを期待します。まずは帯
広の森を身近に感じていただき、森の空気や香り
をまといに行ってみてください。そして、これか
らの50年で帯広の森を取り込む市街地風景と、帯
広の森から続く日高の山並み間の農村風景が、市
民の誇れる帯広の原風景となるように創っていっ
てください。

1959(昭和34)年から2024(令和6)年、この
間に森づくりに携わった多くの人々に感謝申し上
げ、また、これからの50年を創っていく皆様に哀
願し50年の節目といたします。



記念誌発刊によせて

帯広市長
米沢 則寿



日本が高度成長の最中にあった昭和45年、吉村市長の提唱から始まった帯広の森構想は、先人たちが開拓した大地に再び木を植え、育てた森で街を包み込むことで、人間社会と自然環境の調和をはかり、緑豊かなまちをつくるという時代を先取りした壮大なプロジェクトです。

前例のない中で、「100年後、200年後に夢を託し、新しい歴史をつくりだす母なる森」の実現を目指して、市民と行政が一体となり、試行錯誤を積み重ね、様々な課題を乗り越えてきたこの一連のプロセスは、不確実性が高く、将来の見通しを立てづらい今の時代を乗り越えていくモデルにもなり得ると思います。

昨年、市民植樹祭により帯広の森づくりが始まってから50年の節目を迎えました。市民団体の皆さんなどで構成される実行委員会を中心に、半世紀に及ぶ森づくりを振り返りながら、現在地を確認し、未来へつないでいくために、様々な周年事業が実施され、多くの市民の皆さんにご参加いただきました。

5月には、記念植樹・森づくりの集いが開催され、私も帯広の森で3回目となる植樹をしました。前回は、平成23年に開催された北海道植樹祭で、最初の植樹は、その前年、私が市長に就任した年の5月になります。帯広の森・はぐくむのオープン記念として、田本憲吾さん、高橋幹夫さん、砂川敏文さん、そして、森の少年隊の子どもたちと一緒にエゾヤマザクラを植えました。

このとき、歴代の市長をはじめ、多くの市民の皆さんによってつくられてきた「帯広の森」という伝統と文化をしっかりと受け継ぎ、誰からも愛され、親しまれる市民の森となるように尽力していくと誓ったのを今も覚えています。

それから14年、初夏を思わせるような、十勝・帯広らしい青空のもと、森の中から掘り取ってきた苗を植え、森の成長に支障となる外来種（チョウセンゴヨウ）の稚樹の抜き取りを行いました。

イベントには、多くの子どもたちが参加し、これまで森づくりに関わってきた方々の指導を受けながら作業にあたっている情景をみて、森づくりが確実に受け継がれていることを実感しました。

9月に開催されたシンポジウムでは、基調講演やワークショップなどを通じて、市民の皆さんの思いやパワー、そして、皆さんと一緒に50年の歳月をかけてつくりあげてきた森の価値と50年という歳月をかけなければ到達できないアドバンテージともいべきものを改めて感じ、帯広の森は自らの手でつくりあげた「まちの誇り」として、これからの稀有な存在であることを確信しました。

現在、帯広の森では、散歩やジョギングをする人、草花や野鳥を鑑賞する人、体育施設や交流館を利用する人、冬にはクロスカントリーを楽しむ人など、それぞれが心地よい憩いの「時」を過ごしています。

ここに暮らす人たちの日常には森との接点があり、その風景は、文化や豊かさを象徴するものです。様々な人が森に関わることで、森の価値もさらに高まるように思います。

この森が皆さんの日常と重なり、森の中で、仲間や家族と緩やかに流れる時間を過ごすことで、一人ひとりの幸せにつながっていく、そんな未来を想像しながら、100年に向けて、森づくりに取り組んでまいります。

ぜひ、皆さんも帯広の森へ足を踏み入れて、“皆さん一人ひとりにとっての帯広の森”を見つけてください。

帯広の森

私たちと帯広の森づくり

発刊によせて

帯広の森50周年記念事業実行委員会 委員長 三日市則昭

帯広市長 米沢 則寿

帯広の森へのいざない 5

第1章 「帯広の森」の現在 育成編 22

第1節 帯広の森とは	23
帯広の森の概要	23
帯広の森構想	23
帯広の森造成計画	24
帯広の森利活用計画	24
第2節 植樹・育樹	25
市民植樹祭	25
市民植樹祭後の植樹	27
その他(記念植樹等)	27
市民育樹祭	29
間伐・林床管理と帯広の森 森づくりガイドライン	31
十勝飛行場周辺の支障木伐採と再整備	33
危険木の伐採	34
第3節 育成状況	35
令和5年までの帯広の森植生調査の調査地と調査区の設定	35
帯広の森の定点区画調査報告	39
「帯広の森」の自然林	47
小動物生息環境調査から見てきた森の成長	51
モニ1000里地調査から見た帯広の森	55
外来種の侵入と駆除の状況	63

第2章 「帯広の森」の現在 施設編 66

第1節 施設整備	67
用地取得の状況	67
施設整備の状況	67
造成計画との対比	68
帯広の森エリアマップ	69
第2節 施設の利用状況	77
帯広の森・はぐくむ	77
帯広の森運動施設	81
森の交流館・十勝	84
JICA北海道センター(帯広)	85
帯広市都市農村交流センター(サラダ館)	86
帯広の森にかかる施設	87

第3章 「帯広の森」を支える市民運動と行政 … 88

第1節 市民活動 ……………	89
元市民植樹祭実行委員会 委員長、元市民育樹祭実行委員会 委員長 ……………	89
森の少年隊 ……………	91
帯広の森づくり協議会 ……………	95
森づくり活動団体 ……………	97
第2節 行政・事業者 ……………	113
帯広の森担当部署の変遷と帯広の森基金 ……………	113
帯広の森 指定管理者 株式会社ケイセイ ……………	115
帯広の森運動施設区 指定管理者 一般財団法人 帯広市文化スポーツ振興財団 ……………	121

第4章 「帯広の森」を未来へつなぐ …………… 132

第1節 帯広の森50周年記念事業 ……………	133
記念事業及び実行委員会 ……………	133
記念ロゴマーク ……………	134
フォトコンテスト ……………	135
記念植樹・森づくりの集い ……………	136
帯広の森50周年記念シンポジウム・ワークショップ ……………	137
帯広の森50周年記念シンポジウム基調講演 ～世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森～ 中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授 石川 幹子 ……………	143
パネルディスカッション ……………	157
絵本作成(漫画冊子・写真絵本) ……………	166
第2節 帯広の森に関するアンケート ……………	167

第5章 「帯広の森」を想う …………… 176

歴代市長と「帯広の森」 吉村博、田本憲吾、高橋幹夫、砂川敏文 ……………	177
帯広の森をつなぐもの 北海道大学名誉教授 小池孝良 ……………	187
帯広の森 50周年にあたって 高野ランドスケーププランニング株式会社 金清 典広 ……………	193
「帯広の森」・グリーンインフラ 山田 英和 ……………	195
いとなみの記録とネイチャーポジティブ 大熊 勳 ……………	202
「帯広の森」と私 伊藤 萌林 ……………	211

第6章 「帯広の森」のこれから …………… 216

第7章 「帯広の森」新聞記事 …………… 228

第8章 年 表 …………… 264

第9章 「帯広の森」に係る論文等 …………… 280

編集後記

帯広の森

OBIHIRO NO MORI
50th Anniversary

私たちと帯広の
森づくり

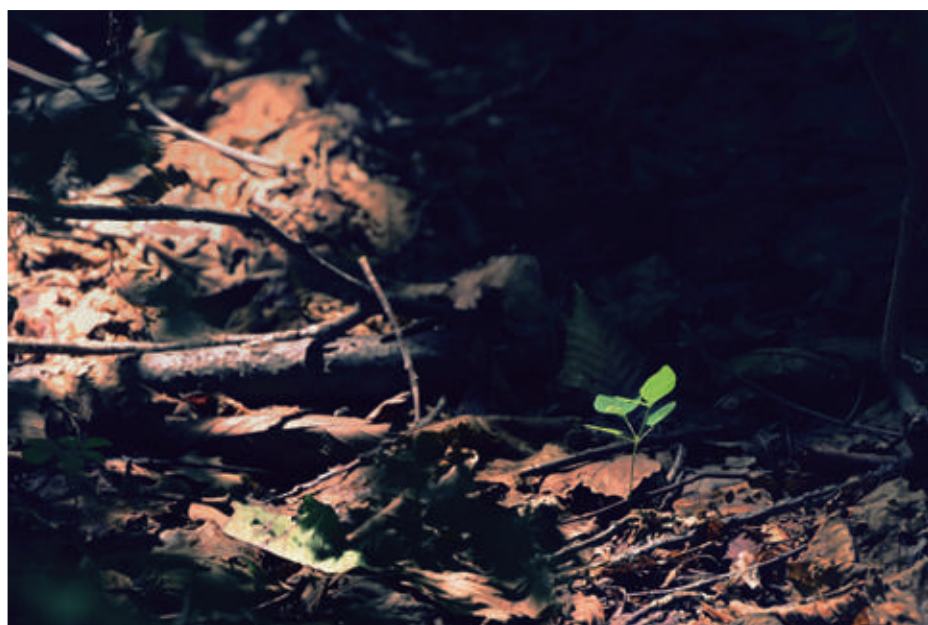


© 2024 小寺卓矢

帯広の森へのいざない

An Invitation to the Forest of Four Seasons

帯広の森フォトコンテスト



「芽吹き」

金 辰徳



© 2024 小寺卓矢

帯広の森フォトコンテスト



「やっと逢えたね」

高橋 俊博



© 2024 小寺卓矢

帯広の森フォトコンテスト



「帯広の夏」

富田 真智



「築山から」

手塚 仁菜



「応援合戦」

中原央太郎

帯広の森高校生フォトコンテスト



「明鏡止水」

尾形 里穂

帯広の森高校生フォトコンテスト



「俺も舞台に」

高橋 諒也

帯広の森高校生フォトコンテスト



「理想気体」

富樫 厚介



「ともだち？」

大野 裕季



© 2024 小寺卓矢



© 2024 小寺卓矢

帯広の森高校生フォトコンテスト



「秋日和」

黒田 美羽

帯広の森高校生フォトコンテスト



「水たまりに映るもう一つの景色」

本間 輝

帯広の森高校生フォトコンテスト



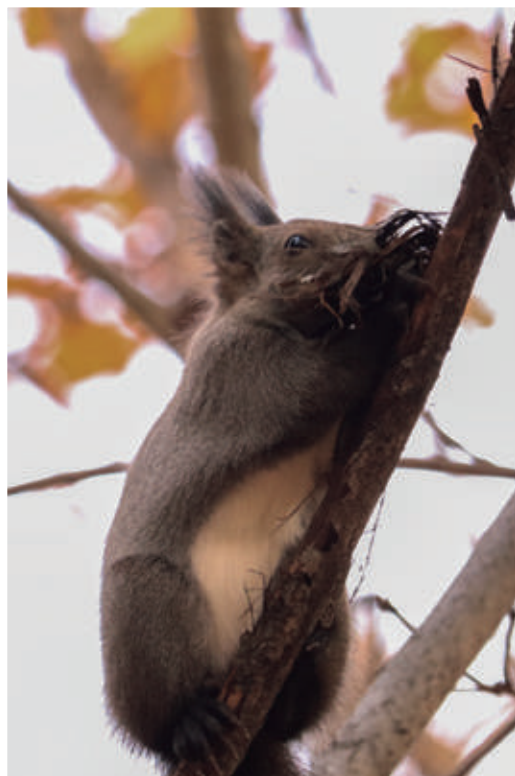
「次はどこへ」

仲田 琉人



「鏡界線」

千把 悠



「お家づくり」

高橋 美妃





© 2024 小寺卓矢

帯広の森フォトコンテスト



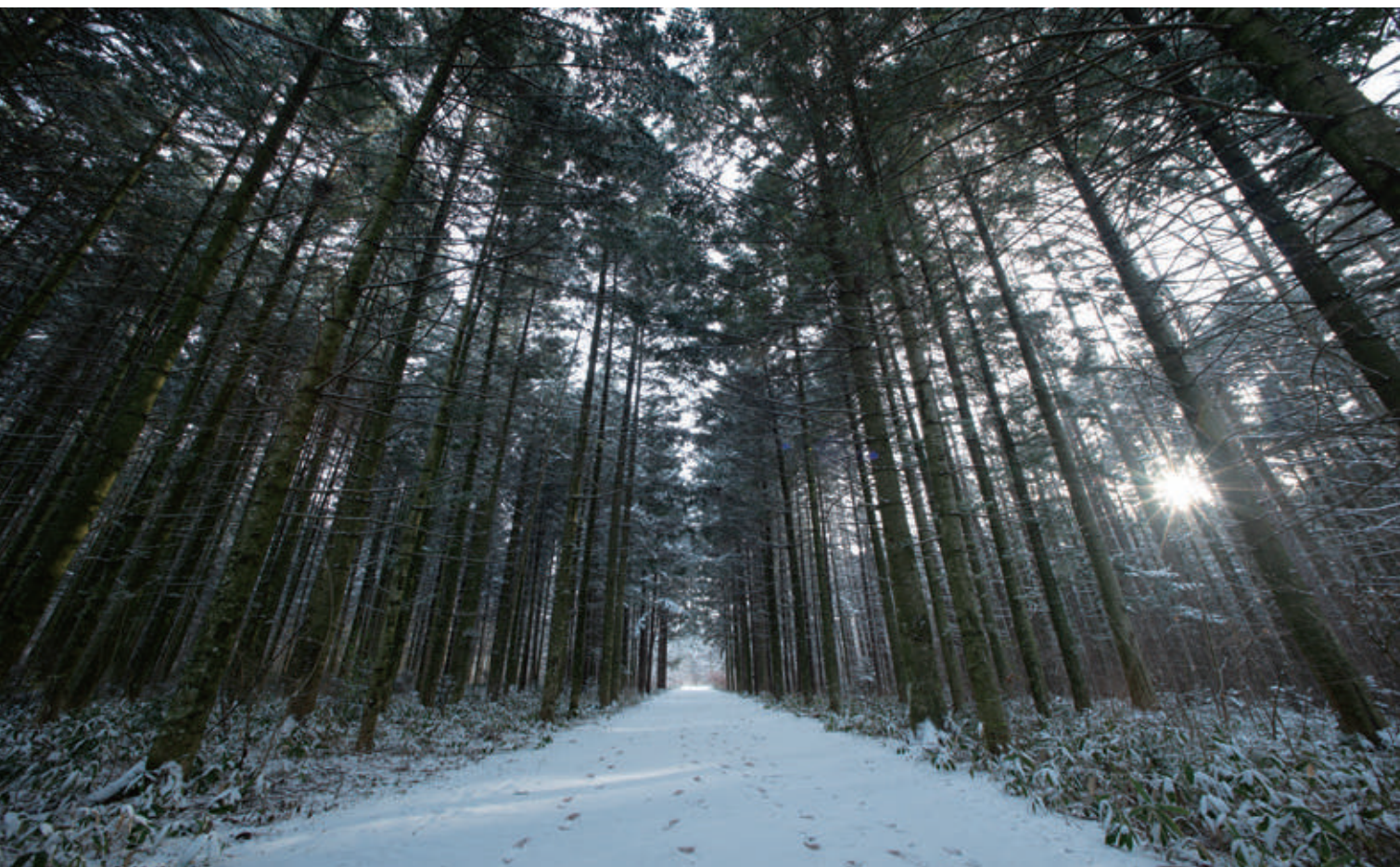
「白と青の朝」

平田 和治



「祝福を」

高田 昂



© 2024 小寺卓矢



4月

帯広の森・はぐくむオープン記念イベント

森に刻まれたとき

Echoes of Time in the Forest



5月

新緑の第二柏林台川を遡る



6月 雨の日の森のおさんぽ



6月 小学生による白樺の間伐



6月 緑のトンネルと木漏れ日



7月 ママの肩に手をそえて



7月 ゆらめく炎 はじける笑顔



7月

ほっぺが落ちる たき火パン



8月

見上げる先に 森の観察会



9月 幼稚園児による木の赤ちゃんのおひっこし



10月 くるみをみつけたよ



10月 木を切るこども 見守る大人



10月 森に響く秋の音色 森の音楽会



11月 うんとこしょ チョウセンゴヨウの抜き取り



11月 初雪の第二柏林台川



12月 冬の楽しみ クロスカントリースキー



1月 かまくらで



帯広の森 50 周年記念事業 シンポジウム パネルディスカッション

掲載写真・イラストについて

帯広の森 50 周年記念写真絵本「この森をつくるのは」著者小寺卓矢さんのご厚意により、一部掲載いたしました。

記念誌の、表紙を開いたページと巻末には、帯広の森 50 周年記念漫画冊子（たんけんブック）著者平田美紗子さんのイラストを掲載しております。

P16 からの「森に刻まれた時間」は、帯広の森・はぐくむの指定管理者が撮影したものです。

第1章

「帯広の森」の現在 育成編



帯広の森の概要

「帯広の森」は面積が406.5ha、幅が約550m、延長は約11kmにも及ぶ。この帯広の森を中心とした緑のベルトが、十勝川から札内川を結ぶことによって、帯広の市街地を包み込むようになっている。(図1)



図1 帯広の森の位置

帯広の森は、都市部への人口や産業の過度な集中が進むことによる宅地の郊外部への無秩序な延伸(スプロール化)を防ぎ、都市部と農村部を区分し、双方の交流の場としての役割を果たしている。また、都市林のもつ公害抑制、都市災害の防止、微気象・環境の緩和、生物生息環境の保全などの機能も有している。

さらに、緑による安らぎ、余暇利用のための空間確保なども重視しながら、快適な都市環境を確保することを目的としている。

帯広の森構想

帯広の森構想は、帯広市の第5代市長の吉村博によって輪郭がつけられた。昭和34年に策定した帯広市総合計画のなかでまちづくりのテーマを『近代的田園都市』と位置づけ、「良好な生活環境を保全しつ

つ、行政としての責任の果たせる都市人口の最適規模は20万人程度(当時の人口は約10万人)である」と、都市の成長規模の上限を設定した。この総合計画の土地利用計画の中には、「都市計画用途地域の周辺部に緑地帯を指定するとともに、帯広川畔の風致地区を存知するようはかる」とあり、グリーンベルト的な考えが包含されている。

昭和44年に吉村市長がオーストリアを訪問し、そこで『ウィーンの森』に出会ったことを契機として、「帯広の森」構想が具体化された。広大なウィーンの森と、それに共生するウィーン市民に大きな感銘を受けた吉村市長は、昭和45年に第二期帯広市総合計画策定審議会を発足させ、その場で「帯広の森」構想を発表した。

そして、昭和46年4月に策定された第二期帯広市総合計画において、帯広の森はまちづくりの主要な施策として明確に決定された。その後、市議会での激しい論争、市民の機運の高まりなどを経て、事業をスタートした。

(帯広の森計画の経過)

昭和49年2月12日

都市計画決定(334.6ha)

昭和52年10月5日

都市計画決定変更(334.6ha → 402.2ha)

芽室町分70ha(運動施設区)を追加編入し道路2.4haを除外

昭和58年2月3日

都市計画決定変更(402.2ha → 402.5ha)

不整形地整形のため計画変更

平成5年3月5日

都市計画決定変更(402.5ha → 405.6ha)

道路部分の変更に伴う計画変更

平成15年3月28日

都市計画決定変更(405.6ha → 406.5ha)

自由が丘地区の緑地0.9haを追加編入

帯広の森造成計画

「帯広の森造成計画」は、帯広の森の地形、地質や、土壌、植生、動物相、気象などを調査した「帯広の森計画基礎調査報告書」の内容に基づき、昭和50年に策定した。

帯広の森は、計画の中で全体を8ブロックに分けており、各ブロックは、それぞれの特色を生かした位置付けがなされている。(図2、表1)

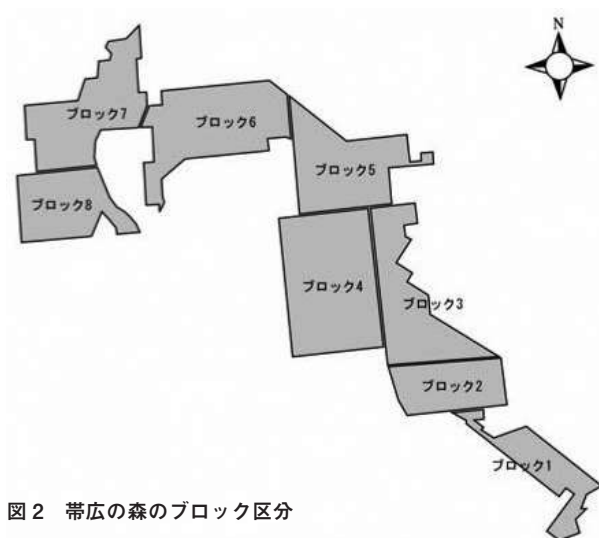


図2 帯広の森のブロック区分

表1 帯広の森の各ブロックの整備計画概要

ブロック	面積 (㎡)	整備内容
ブロック1 森林区 (ふるさとの森)	25.8	園路、植栽、芝生広場、駐車場
ブロック2 公園区 (自然学校の森)	23.9	樹木植栽、市民の森緑化技術センター、温室、植栽、芝生広場
ブロック3 記念植栽区 (記念の森)	57.4	園路、芝生広場、修景植栽
ブロック4 運動施設区 (スポーツの森)	80.0	陸上競技場、体育館(仮設型)、野球場、サッカー・ラグビー場、テニスコート、アイスアリーナ、スピードスケートリンク、研修センター、河・和弓場、プロムナード、園路、植栽、芝生広場、駐車場
ブロック5 森林区 (緑意の森)	42.9	市民の森文化センター(展望レストラン)、彫刻、野鳥安全、広場、園路、修景植栽
ブロック6 森林区 (レクリエーションの森)	75.1	キャンプ場、フィールドアスレチック、大池、園路、芝生広場、駐車場
ブロック7 森林区 (ふるさとの森)	58.0	園路、修景植栽、駐車場
ブロック8 森林区 (ふるさとの森)	42.4	園路、修景植栽(果樹園)、駐車場

計画では、施設として、園路や駐車場、トイレ、水飲場、消火栓、各種標識、芝生広場などの全ブロックに共通するもののほか、ブロック4には運動施設を集中的に建設することとされている。なお、森林区と施設区の割合は8:2としている。

目指す森の姿は、生物的連続性を持ち、立地条件に合った豊かで多様な森をつくるため、カシワやミ

ズナラ、ハルニレ、ヤチダモ、ハンノキなどの郷土樹種による『ふるさとの森』を創ることを基本的な考えとしている。また、それぞれの立地に原始的自然の森を配置し、斜面林等の骨格となる森でそれらを連続させ、主要道路沿いには、各ブロックの特色ある活動の展開の場として、「散開林」を配置する計画となっている。

帯広の森利活用計画

「帯広の森利活用計画」は、造成開始から20年を経て、帯広の森の利活用に対する要求が高まったことから平成6年に策定した。計画では、造成後20年の経過を振り返り、現在の森の姿を分析し造成計画の主旨を生かして、今後の帯広の森の方向性を示している。

森づくりの期間を100年とし、森の成長に合わせた4つの森のステージ(植樹期、育林期、森林形成期、成熟期)を定めている。(図3)

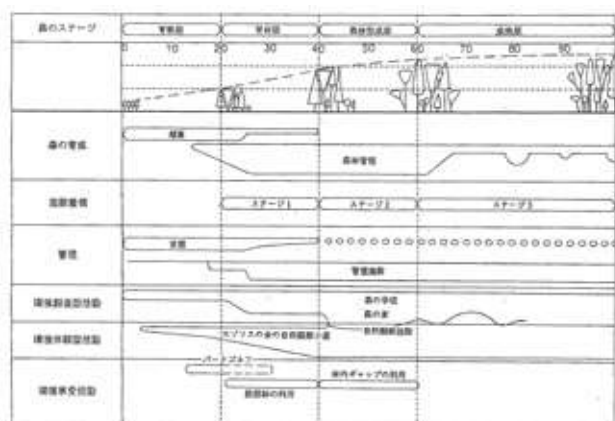


図3 100年の森づくりにおける4つの森のステージ
(平成6年帯広の森利活用計画)

また、森林配置計画において、帯広の森のタイプを、①原始的自然の森(森林の保全を重視し、原始的な森林の再生を図るとともに、残存する自然植生を保全し、必要最小限の維持管理で自然に更新していく)、②森(生物多様性の保全を重視しながら、場所に応じて利用者の快適性や安全確保に配慮するなど、自然度の高い森林の保全と、利用者が森林に親しむ利活用との両方に資する)、③散開林(森の連続性を維持しつつ、人々が森林に親しむことができる明るい景観づくりを意識するほか、快適で多様な利活用に資することができる)の3つの森林タイプに区分している。

市民植樹祭

帯広の森の造成には莫大な事業費がかかるため、「市民の立場で積極的に森づくりを推進しよう」という市民運動が起こった。そして、市民有志による『帯広の森市民植樹祭実行委員会』が組織され、帯広市と同実行委員会の共催により、昭和50年から、市民参加による『帯広の森市民植樹祭』が開催されることとなった。その後、森づくりに対する市民の情熱はますます高まり、毎年5月中旬に開催される市民植樹祭は、4,000～7,000人にもおよぶ参加者で賑わっていた。



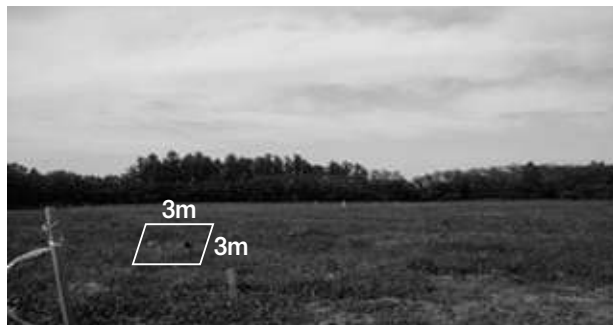
市民植樹祭の様子

市民植樹祭は、平成16年度までに30回開催され、132.9haで植樹が行われた（表2）。参加した人は延べ148,527人、植樹した樹木は、針葉樹が13種類75,652本、広葉樹が42種類154,040本、合計で55種類、229,692本になる。



平成2年第16回植樹祭会場への行列の様子

植樹後1年目の様子。高さ0.3～0.5m程度の苗木を3m×3mの間隔で植樹している。植樹間隔は、自然の森の形としていくためにはランダムに植樹することが望ましいが、草刈りなどの管理の容易さから等間隔で格子状に植樹している。



植樹1年後

植樹後5年目の様子。植樹後5年目までは年2回の下草刈りを実施しており、この頃になると下草に負けないくらいの樹高となっている。



植樹5年後

植樹後10年目の様子。この時期を過ぎると樹冠が閉じ始め、森林内が暗くなり、草原性の植物が衰退し、森林性の植物に移り変わっている。



植樹10年後

表2 市民植樹のこれまでの実績

(令和6年3月末現在)

	年度	回数	面積 (ha)	参加者数 (人)	植樹数(本)			事業費 (千円)
					針葉樹	広葉樹	計	
市民植樹祭	S50	1	8.7	500	1,800	1,200	3,000	0
	51	2	3.4	1,198	9,647	1,650	11,297	1,121
	52	3	4.6	2,004	14,660	4,350	19,010	710
	53	4	5.0	2,241	5,300	3,345	8,645	2,498
	54	5	4.3	3,000	1,000	7,041	8,041	4,269
	55	6	5.0	2,461	800	7,250	8,050	2,800
	56	7	5.0	3,236	2,400	6,840	9,240	5,034
	57	8	6.7	6,136	2,600	9,400	12,000	8,615
	58	9	4.6	6,000	9,300	1,700	11,000	7,010
	59	10	4.4	6,000	7,500	1,200	8,700	6,939
	60	11	4.4	7,072	4,200	4,350	8,550	6,897
	61	12	4.0	6,987	3,620	4,300	7,920	5,547
	62	13	4.0	6,980	3,175	4,825	8,000	5,545
	63	14	4.0	7,040	2,400	5,600	8,000	5,555
	H1	15	4.0	7,020	1,900	6,100	8,000	5,672
	2	16	4.0	7,100	1,400	6,600	8,000	6,306
	3	17	3.0	6,050	1,300	4,700	6,000	7,229
	4	18	3.0	6,067	1,300	4,700	6,000	8,473
	5	19	3.0	5,985	1,100	4,900	6,000	7,063
	6	20	4.5	5,950	0	7,260	7,260	7,051
	7	21	4.2	5,140	0	6,994	6,994	6,234
	8	22	5.0	5,320	0	6,040	6,040	5,851
	9	23	5.0	5,280	0	6,100	6,100	6,671
	10	24	4.3	5,000	0	6,380	6,380	6,544
	11	25	4.0	5,500	0	6,120	6,120	5,953
	12	26	3.8	5,200	0	6,388	6,388	5,906
	13	27	3.5	4,810	0	5,253	5,253	5,988
	14	28	4.0	4,750	0	4,304	4,304	5,003
	15	29	4.0	4,000	200	4,050	4,250	5,325
	16	30	5.5	4,500	50	5,100	5,150	5,205
	小計		132.9	148,527	75,652	154,040	229,692	163,014
植樹体験	17	—	0.6	600	50	800	850	735
	18	—	0.7	350	0	800	800	735
	19	—	0.8	500	0	800	800	704
	20	—	0.9	500	70	1,100	1,170	672
	21	—	1.4	718	358	1,311	1,669	670
	22	—	1.3	474	151	1,202	1,353	430
	23	—	2.9	1,964	620	2,060	2,680	2,837
	24	—	0.6	194	120	570	690	313
	25	—	0.6	197	80	546	626	349
	26	—	0.6	347	40	1,165	1,205	2,049
	27	—	0.5	113	40	490	530	539
	28	—	—	91	0	80	80	0
	29	—	—	45	0	30	30	0
	30	—	—	77	20	40	60	0
	R1	—	—	77	30	73	103	0
	2	—	—	47	0	35	35	0
	3	—	—	34	0	40	40	0
	4	—	—	40	0	30	30	0
	5	—	—	28	5	20	25	0
	小計		10.9	6,396	1,584	11,192	12,776	10,033
合計			143.8	154,923	77,236	165,232	242,468	173,047

※H23の参加者及び植樹数には、十勝飛行場周辺の修景植栽、北海道植樹祭を含む。

※H26の参加者及び植樹数には、十勝飛行場周辺の伐採跡地植栽を含む。

※H28以降には、森づくり活動団体で実施している植樹における参加者数と植樹数を記載。

植樹後 20 年経過の様子。間伐や下枝払いが行われ、森林が形成されつつある。



植樹 20 年後

植樹後 30 年経過の様子。樹木が 1 本 1 本太く成長し、森林性の植物が林床を形成している。一次林の形としてほぼ完成しており、植樹された樹木の種などから次世代の苗木も誕生し、天然更新の仕組みができ始めている。



植樹 30 年後

市民植樹祭後の植樹

市民植樹祭終了後、平成 17 年度以降は、子どもたちの体験機会として、市内の小学校を中心に小規模な植樹体験活動を実施しており、植樹できるスペースがなくなったことから平成 27 年度をもって一定の植樹は終了した。

平成 28 年度以降は、主に市民団体等による植樹活動を毎年行っている。

その他（記念植樹等）

昭和 59 年 9 月 27 日の中曽根総理大臣との記念植樹や平成 22 年 5 月 16 日の帯広の森・はぐくむオープン記念植樹のほか、市民団体等の創立周年記念の記念植樹などが行われた。

そのほか、大分市緑の親善訪問団が市民植樹祭に参加したことや、JICA 研修生、森の少年隊による植樹活動も行われた。



帯広の森・はぐくむオープン記念植樹（両端が森の少年隊員、中央左から砂川前市長、高橋元市長、田本元市長、米沢市長）

また、平成 23 年 5 月 29 日に第 62 回北海道植樹祭が帯広の森（西 23 条南 5 丁目）で開催され、約 1,600 人（うち一般参加者 1,100 人）の参加者が 2.76ha の面積に 2,000 本を植樹した。



第 62 回北海道植樹祭記念植樹後の記念撮影

併せて、関連イベントとして、植樹祭の前日に記念フォーラムが帯広市民文化ホールで開催され、「みどりが救う地域と地球」と題した東京都市大学教授 涌井 史郎氏による基調講演のほか、「みどりの恵みを生かした産業の可能性 in とかち」をテーマにパネルディスカッションを行った。



图 4 植樹区域图

市民育樹祭

市民植樹祭が軌道に乗り約15年が過ぎると、成長の早いシラカンバやチョウセンゴヨウなどを植樹した初期の森は、樹高と樹冠のバランスが取れず、不健康な林相を呈し始めた。そのため、樹木の健全な成長のため、間伐や下枝払い等の育樹作業が必要になった。

しかし、育樹に関しては、誕生や結婚など人生の記念に植樹した方々がいること、植樹と異なり刃物を使う作業で危険が伴うことなど、種々の問題が想定され、これらを整理するため、平成2年に『プレ育樹祭』および『市民環境シンポジウム』を開催し、体制づくりや間伐に対する市民合意がなされた。

これらの検討結果を踏まえて、平成3年に市民参加による『帯広の森市民育樹祭』が開催され、平成17年度までの15年間に、81.1haを対象に育樹作業が行われた。参加者数は延べ13,072人、間伐した樹木の本数は49,800本になった。(表3)



市民育樹祭の様子

この頃には、樹木は全体的に大きく成長してきており、一般の市民が、大きな木を切り倒すには危険が伴う場合が多くなってきたため、市民育樹祭も平成17年度の第15回をもって終了した。

その後、平成18年度以降は、「帯広の森育樹体験ワークショップ」や、森の里小学校児童による育樹体験事業など、少人数制による小規模な育樹体験活動を進めた。

「帯広の森育樹体験ワークショップ」は、平成22年度の帯広の森・はぐくーむの供用開始に伴って、はぐくーむによる間伐体験事業へ移行した。



平成29年度 森の里小学校育樹体験活動

市民植樹祭や市民育樹祭は終了したが、帯広市や市民団体などにより、現在も植樹や育樹活動は続いている。

帯広の森に関わる市民団体の中でも歴史が古く特色ある団体として、昭和52年に創設された『森の少年隊』がある。帯広市内の小学校5、6年生で組織され、平成28年度まで帯広の森を中心に植樹、育樹活動を行っており、帯広市内の緑化など幅広い活動を展開していた。



森の少年隊以外では、平成9年に帯広みやま会が帯広の森で植樹活動を行ったことや、平成10年からエブリスの会が「里山プロジェクト」の活動を開始したことを契機として、市民団体による育樹活動などの森づくりが始まった。

その後、森づくりの重要な担い手である市民団体の活動を促し支援するために、平成18年に「市民団体による帯広の森づくり活動の促進及び支援に関する要綱」を制定し、市民協働による森づくりを実践する環境づくりを進め、新たに森づくり活動を行う市民団体が増加した。

また、帯広の森では、こうした市民団体のほかに、教育や社会貢献活動として、植樹活動や育樹活動を行う学校や企業もあった。

表3 市民育樹のこれまでの実績

(令和6年3月末現在)

	年度	回数	面積 (ha)	参加者数 (人)	除間伐本数	事業費 (千円)
市民育樹祭	H3	1	3.0	442	5,600	3,089
	4	2	3.0	599	4,100	4,159
	5	3	4.0	638	1,300	4,150
	6	4	4.3	766	3,200	4,159
	7	5	3.5	769	2,900	3,602
	8	6	5.0	1,065	4,000	3,498
	9	7	4.6	1,072	3,300	3,476
	10	8	7.0	1,099	3,700	3,527
	11	9	6.0	1,130	3,000	3,527
	12	10	7.0	829	2,000	3,479
	13	11	6.0	860	3,600	3,484
	14	12	8.0	1,003	4,800	3,355
	15	13	8.0	850	3,200	3,289
	16	14	7.2	950	3,500	3,285
	17	15	4.5	1,000	1,600	6,136
	小 計		81.1	13,072	49,800	56,215
間伐※	18	—	9.0	—	1,300	6,192
	19	—	9.6	—	2,000	6,161
	20	—	16.3	—	8,900	11,253
	21	—	9.0	—	2,600	4,715
	22	—	3.8	—	2,175	3,497
	23	—	5.0	—	2,866	3,655
	24	—	0.6	—	270	4,191
	25	—	4.5	—	180	3,152
	26	—	7.5	—	603	2,657
	27	—	4.0	—	157	2,337
	28	—	8.2	—	355	5,044
	29	—	9.0	—	369	4,983
	30	—	10.0	—	197	4,221
	R1	—	5.2	—	290	3,977
	2	—	6.2	—	466	4,406
	3	—	2.2	—	272	4,102
	4	—	5.1	—	494	4,532
	5	—	8.3	—	590	4,674
	小 計		123.5		24,084	83,749
合 計			204.6		73,884	139,964

※H18から、業者委託による間伐事業のほか、育樹祭に代わる市民参加型の小規模な育樹体験行事を年に2回実施している(事業費のみ表中に含む)。また、通常の間伐事業のほか、雇用対策事業としての間伐事業等(委託)も実施している。

※H24は、住宅地、歩道等に接する林縁部の安全確保・修景を目的として間伐を実施。

※H25は帯広の森育成費において、10月の台風の影響で帯広の森倒木処理業務を実施。また、防風林の安全な維持管理のため帯広の森PG場(林間コース)廃棄物仮置場設置業務、緊急性の高い帯広の森PG場(ふるさとの森コース)樹木伐採業務を実施した。H25の間伐については帯広の森間伐業務(雇用対策)の間伐本数のみを計上している。

※R2から、間伐業務が指定管理に移行されたため、支障木処理業務の事業費を計上している。

間伐・林床管理と 帯広の森 森づくりガイドライン

帯広の森では、これまで長い時間をかけ、67 種約 24 万本もの樹木が植えられてきたが、場所によって土壌等の環境が異なるため、より多様性を増していく森の成長に管理が追いついていないことなどにより、林内が暗く、ひ弱な木々が混み合っ立ち枯れている、外来種の侵入や繁殖がみられるなど、一部に不健全な箇所が存在している。散策などの市民利用に供するためには、人と自然が共存する森として良好に管理していく必要があった。

平成 27 年 4 月に策定した「帯広の森 森づくりガイドライン」は、森の現状を踏まえて区分した森林タイプごとに管理指針などを示すことにより、将来天然更新が促進されるための森の育成管理手法の確立や、森林タイプの特徴に即した適正な育成管理を実施し、市民協働の森づくりへの理解向上及び参画につなげるために作成したものである。

これまで帯広の森で森づくりを行ってきた市民団体などが森づくりの経験から得た知見を盛り込み、森づくりに関わる市民や行政が、森の育成管理にあたり留意すべきことを、作業内容の中で留意事項として示している。森林のタイプを 3 種類に区分し、それぞれの森の特徴に合った管理手法を示すほか、100 年の森づくりを 4 つの森のステージに区分し、作業内容などにおいて、主な対象となる森のステージを示している。

平成 6 年に帯広の森利活用計画で区分した①原生的自然の森、②森、③散開林の 3 つの森林タイプを、利活用計画が策定され 20 年が経過したことによる状況の変化、植栽樹種や小動物の生息状況、園路等の施設や河畔林や段丘沿いの自然林の配置などの現状や、外来種や林床植生の未発達などの課題を踏まえ、新たに目指すべき景観別に森林タイプのエリアを区分した。(図 5)

市民育樹祭以降も専門的技術や機材等を要する間伐や支障木の剪定、伐採等を実施している。(表 4)ガイドライン策定後はそれに基づき、指定管理区域が拡大する前の令和元年度まで帯広市が実施し、令和 2 年度以降は、指定管理者による作業を毎年実施している。

表 4 間伐履歴

実施年度	実施植樹区	
	市民育樹祭	
H3	S51	
H4	S52	
H5	S53	
H6	S54	
H7	S57	
H8	S55	
H9	S58	
H10	S56、S59	
H11	S59、S60	
H12	S51、S52	
H13	H3、H4	
H14	S62、S63	
H15	H1、H2	
H16	H5、H7	
H17	S53、H6	
間伐業務（支障木含む）		
H18	S56、S57	
H19	S55、S58	
H20	苗圃	
H21	S60、H8	
H22	S57 ～ S63、S58	
H23	苗圃、S57 ～ S63、H9、自然林	
H24	苗圃、自然林	
H25	H1	
H26	H5、H6	
H27	苗圃、S62	
H28	S59、S60	
H29	S63、H8	
H30	S51、S52、S57	
R1	S57、H3	
R2	S58、H11、H12、H13	
R3	S53、H4	
R4	H7、ふるさとの森 PG 場周辺	
R5	H1、H15、H18、H19、PG 林間コース、吉村像周辺	



図5 帯広の森 森づくりガイドラインにおける3つの森林タイプ区分

林床管理は、ガイドラインに掲載しているとおり、針葉樹を植樹した植樹区で林床が暗く、林床植生が育っていない状況が確認されている。また、広葉樹植樹地でも、自然林と比較すると林床の種組成は大きく異なり、植樹地の確認種は少なく、多様性が低い傾向がみられる。これらは、植樹後 30 年以上が経過した植樹地でも同様の傾向であり、オオアワダチソウといった外来種の繁茂や種の供給源の不足等の要因が、このような状態を長引かせている可能性がある。

林床植生の発達は、多くの動物の生息にとって重要な要素であり、適切な管理のもと、林床植生の充実、回復を促進する必要がある。林床植生の回復の手段として間伐の効果が知られており、間伐により林床植生が改善され、新たな種の侵入、定着が促進される。今後も、適切に間伐を行い、林床管理を行っていく必要がある。

十勝飛行場周辺の支障木伐採と再整備

陸上自衛隊帯広駐屯地の十勝飛行場周辺にある市有地の樹木の一部が、航空法の高さ制限を超えるととして、陸上自衛隊帯広駐屯地から平成 14 年、17 年に撤去要請を受け、平成 18 年から対象エリアの伐採、及び再整備を行った。支障木の範囲は約 6 ha、このうち植樹祭により植樹した範囲が約 2.8ha、自然発生した樹木やカラマツ林の旧防風林などの範囲が約 3.2ha であった。

植樹祭による植樹地は、第 2 回（S51）、第 7 回（S56）、第 12 回（S61）の市民植樹祭でトドマツ、チョウセンゴヨウ、シラカンバなどを植樹している。また、植樹祭による植樹地以外の地区は、主に滑走路進入部付近で、自然に生えたヤナギ、シラカンバ、ドロノキなどが自生していた。

【支障木の主な樹種及び調査年による本数の比較】

支障木の位置	所管課	主な樹種
帯広の森	みどりの課	カラマツ、シラカンバ、カシワ、トドマツ等 15 種
支障木の本数（日付は調査年月日）		
H14.11.5	H17.9.14	H21.7.27
889 本	1,571 本	2,105 本

（参考）帯広の森以外の箇所

支障木の位置	所管課	主な樹種
①南町球場、南町テニスコート周辺	スポーツ課	シラカンバ、ヤナギ、ドロノキ等 11 種
②南町配水場内	水道課	イタヤカエデ、サクラ等 6 種
③滑走路の西側市有地	契約管財課	シラカンバ、ナラ、ドロノキ等 7 種
④西 10 号の街路樹	管理課	トウヒ
支障木の本数（日付は調査年月日）		
H14.11.5	H17.9.14	H21.7.27
① 428 本	① 495 本	
② 31 本	② 64 本	
③ 48 本	③ 65 本	
	④ 1 本	
計 1,396 本	計 2,196 本	

平成 18 年度に「十勝飛行場周辺帯広の森づくり検討会」における検討を踏まえて策定した「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり計画書」をベースに、平成 22 年 3 月に「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり基本設計」という対象地の特徴を生かした人と生物が共存し、楽しめる森に育てていくための植生配置区分、利活用・再整備計画を作成した。

その後、基本設計に基づき、伐採後の低木類の植樹及び草刈り、広葉樹のひこばえ（萌芽）処理、草本及び木本の植栽や移植、園路整備を行った。



【周辺環境の再整備】

年度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
H22									
H23									
H24									
H25									
H26									
H27									
H28									
H29									
H30									
R1									
R2									
R3									
R4									

(凡例：番号は内容、■は実施)

- ①伐採跡地草刈
- ②植栽箇所の草刈
- ③散策路の草刈
- ④散策路整備
- ⑤アイストップ植栽
- ⑥フェンス撤去
- ⑦萌芽処理
- ⑧樹木補植
- ⑨樹木伐採

※平成 26 年度以降の萌芽処理は、伐採跡地草刈に含めて実施。

平成 25 年度をもって要請のあった支障木の伐採は完了した。平成 26 年度以降は帯広市が周辺環境の再整備を行ってきたほか、令和 4 年度に園路整備、令和 5 年度からは指定管理業務として草刈り等を実施している。

伐採後の環境変化（林→草原）により、オオアワダチソウ等外来種の草原性草本の群落拡大がみられる。今後は、ササ等在来種草本との競合具合を慎重に観察しつつ、必要に応じて草刈り等の対策を実施する必要がある。

また、支障木の伐採は終了したものの、カシワ等の高木類はいずれ航空法の高さ制限に抵触する高さまで成長するため、制限高を超えないように、適時伐採や萌芽処理を継続して実施する必要がある。

危険木の伐採

帯広の森は植樹を始めてから 49 年が経過し、植樹した樹木や帯広の森造成前からある防風林の大木化・老木化が進んでいるほか、昨今の異常気象などによる風倒木、立ち枯れなどが発生している。

市民生活への影響がないよう、令和 2 年度から森に隣接する住宅地や道路沿いにある森の樹木の剪定や伐採を実施している。



令和 3 年暴風による倒木

【伐採履歴】

年度	箇所数	剪定本数	伐採本数
R2	9	255	127
R3	4	375	266
R4	8	138	123
R5	5	8	152

第3節 育成状況

令和5年までの 帯広の森植生調査の調査地と調査区の設定

帯広畜産大学 環境農学研究部門 佐藤 雅俊

1. 調査方針の変遷

帯広の森が目標とする姿は、住民が利用できるスポーツやレクリエーションの場であると同時に、可能な限り十勝に土着の種で構成される「郷土の森」である。100年後に「郷土の森」となるか否かを検討するためには、目標とする森の姿を明確にすることと同時に、可能な限り多くの植樹地について現状を把握することが必要である。この前提のもとで、帯広の森植生調査は「植樹地の植栽木等の情報が殆どない状態」から始められた。

調査方針を定めるための基礎的な情報が不十分であったうえに、多くの植樹地を網羅的に調査するには労力と時間が限られていた。初期の調査（平成5年度～平成26年度）では幾つかの植樹地を選定したうえで数年ごとの追跡調査を行うことを主眼とした。調査区等の設定は個々の植樹地の状況に応じた独自のものとなり、それらが植樹地間で違っても追跡調査に不都合はなかった。

やがて植栽木が生長し追跡調査の間隔を10年程度まで伸ばせるようになった。平成27年度（2015年度）以降の調査では、より多くの植樹地の情報を得ることを主眼として「原生的自然の森」内の未調査の植樹地の調査が行われた。令和2年度（2021年度）以降は、植栽後10年目・20年目・40年目という節目にあたる植樹地の調査に主眼が置かれるようになり現在（令和6年／2024年）に至る。

帯広の森の植樹地は、植栽樹種の構成や樹種の植栽位置が植樹地により大きく異なる。植樹地の立地も、例えば段丘上の高台と段丘下の平坦面とに大別されるほか、植樹地内でも土地の高低差が大きく地表水の流れなどの環境が異なる場合がある。このような植樹地内の樹種のまとまりや立地などの違いは、植樹地を代表させるための調査区の設定を非常に困難にしている。

2. 調査箇所数の集計

帯広の森植生調査の調査地の箇所数は、令和5年度時点で、植樹地17箇所と自然林7箇所の合計24箇所である。それらの調査地には毎木調査区および毎木調査線ならびに植生調査区が設定されており、両者の合計数（即ち、樹林の調査区の数）は、植樹地が92区であり自然林が18区であるので合計で110区となる（毎木調査区と植生調査区の重複を含む）。それらのうち樹木の生長を把握するための追跡調査が行われている区は、S51（第2回）の1区、S52（第3回）の8区、H6（第20回）の11区、H13（第27回）の3列、H14（第28回）の1列、H15（第29回）の1区、の6箇所25区・列に限られる。更に、植生の発達を把握するための追跡調査が行われている区は、H13（第27回）の10区、H14（第28回）の10区、H15（第29回）の1区、の3箇所21区に限られる。

3. 植栽後20年目の樹高分布

樹高が測定されているH6（第20回）植樹地では、植栽後20年目の時点で植栽木の樹高が14mから16mに達しており（図1）、植栽木の生長が概ね良好であるといえる。植栽木集団の樹高分布の最大値および最頻値は、H6（第20回）では植栽後2年目で最大値が6mおよび最頻値は2mであるが（図1a）、植栽後10年目には最大値が10mおよび最頻値が4mとなり（図1b）、植栽後20年目には最大値が16mおよび最頻値が10mに達している（図1c）。

令和5年時点で樹高が高い樹種はシラカンバであり、次いでミズナラやハルニレである。調査区内のヤチダモの生長は悪く樹高の低い樹木が多いが、調査区外では樹高が10m以上に達するヤチダモもみられ、植樹地全体としてヤチダモの生長が悪いわけではない。

4. 植栽後20年目の植生構造

植栽木を含めた植生調査（大きさ10m×10m×10区）が行われているH13（第27回）植栽地では、

植栽後 20 年目の時点で、高木層（高さ概ね 12m ～ 5m）が形成され草本層では牧草種が減少するなど、順調に林となりつつあるといえる（図 2）。植栽後 1 年目の草本層では牧草種であるオオアワガエリ（チモシー）やムラサキツメクサ（レッドクローバー）・ナガハグサ（ケンタッキープルーグラス）の量（被度）が合計で 90% 以上と多いが（図 2a）、植栽後 9 年目には 60% 程度に減少し（図 2b）、植栽後 20 年目にはナガハグサのみの 10% に減少している（図 2c）。ただし植栽後 20 年目でも外来種であるオオアワダチソウの被度が 40% 以上と多い。高木層の被度は合計でも 60% 程度であり森林としてはやや低い。

植栽後 20 年目の植樹地の状態は、植栽後 3 年目と比較した場合、林としての相観が整いつつある様子を認めることができる（写真 1・2）。

5. 調査体系の問題点

令和 5 年時点までの帯広の森植生調査の調査体系上の問題点は、1) 調査箇所数が少ない、2) 毎木調査区の規格が統一されていない、3) 毎木調査区の大きさが十分ではない、の 3 点である。

1) 調査箇所数について、植樹地の調査地が 17 箇所であるが、これは全 40 植樹地の 42.5% に過ぎず、全体を網羅しているとは言えない。追跡調査が行われている植樹地は 6 箇所のみであり全 40 植樹地の 15% でしかなく、これについても全体を網羅しているとは全く言えない。帯広の森植樹地の全体的な話をする場合には、当然ながら全ての植樹地についての調査が行われ、情報が得られていることが望ましい。

2) 毎木調査区の規格について、植樹地 17 箇所のうち例えば S51（第 2 回）や S52（第 3 回）・H6（第 20 回）の毎木調査区は大きさ 10m × 10m である一方で大きさ 20m × 20m の区がなく、逆に S57（第 8 回）～ H1（第 15 回）などの調査区は大きさ 20m × 20m であり大きさ 10m × 10m の区はない。また H13（第 27 回）・H14（第 28 回）については面的な広がりを持たない調査線であり調査区ではない。調査線では個々の植栽木の生長は追跡できるものの、面的な広がりを持つ「林分」ないし「森」の状態の記録であるとは必ずしも言えない。このままでは、一応は個々の植樹地における植栽木の追跡が可能であるとしても、全ての植樹地を何らかの同じ

軸に並べて現状を把握・理解することはできないため、規格の統一された調査区が設定されることが望ましい。

3) 毎木調査区の大きさについて、植樹地 17 箇所のうち 8 箇所（S51・S52・H6・H15・H16・H20・H25・H26）で大きさ 10m × 10m の毎木調査区が設定されている。一般的な植生調査の調査区サイズが植生高を反映するように設定されることを考慮すると、樹高が 10m を超える調査地が増えてきた現在では、順次、樹高に合わせた大きさ 20m × 20m 以上の調査区が設定されるべきである。

6. 関連する他の調査について

帯広市により行われているバイオマス調査の調査区は、第 30 回植樹会場（H16 植樹地）までの植樹地と自然林とに設置されており「規格が統一されている」。この調査区の継続調査は帯広の森の現状を把握するうえで重要であるが、集計解析の前提として個々の調査区設定の意図を確認・把握しておく必要がある。問題・要改善点が 2 点あり、1 点目は平成 17 年（2005 年）以降の植樹地にも同様な調査区の設定が望ましいことである。2 点目は、調査区の面積は 100m² であり方形区の 10m × 10m に相当するが、上述したように樹高が 10m を大きく超える林分では面積が十分であるとは言えないことである。せめて林冠木だけでも調査対象を 400m²（方形区の 20m × 20m 相当）か、或いはそれ以上に広げることが望ましい。

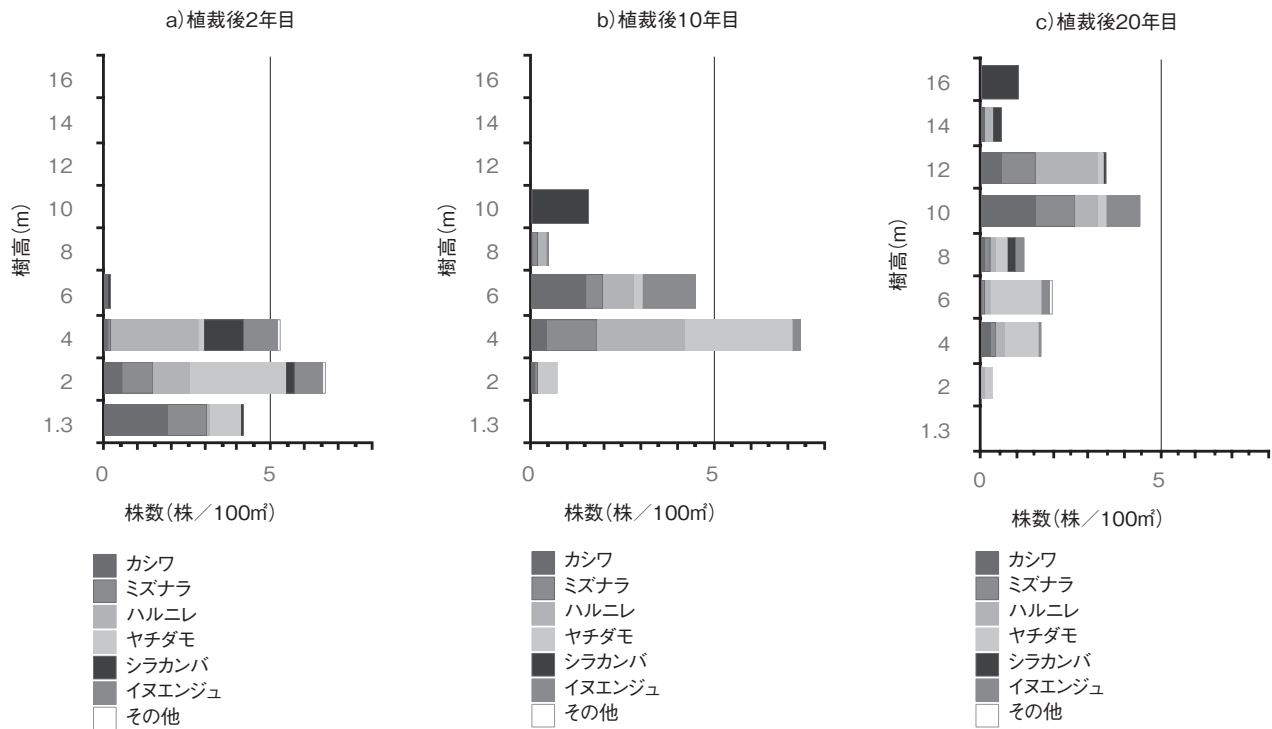


図 1. 植栽木の樹高の推移 (H6 植樹地) .

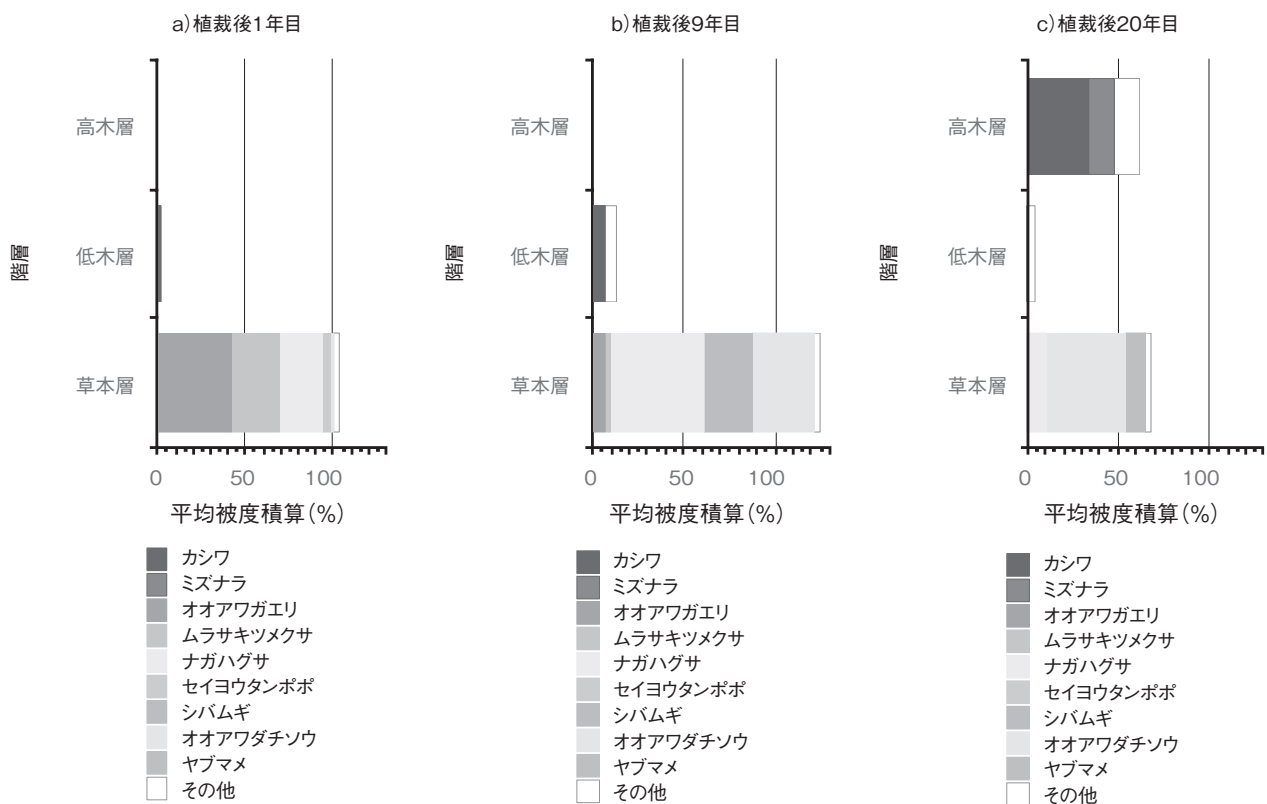


図 2. 調査区の主要出現種の推移 (H13 植樹地) .

階層の高さは概ね高木層が12m～5m、低木層が5m～2m、草本層が2m以下。同じ階層内でも植物種の高さに差があるため、被度の合計が100%を超える場合がある(例えば高さ2mのオオアワダチソウの下に高さ30cmのナガハグサが広がる場合など)。



写真1.H13植樹地(第27回植樹会場)植栽後3年目
牧草のチモシーが優占する



写真2.H13植樹地(第27回植樹会場)植栽後20年目
撮影地点は写真1とほぼ同じである

帯広の森の定点区画調査報告

帯広の森指定管理者 (株)ケイセイ 日月 伸

2010 年及び 2015 年～2022 年に行われた、帯広の森内の定点区画調査の結果から、帯広の森の生育状況、成長・変化について集計・分析し、報告する。

1. 経過

- ① 帯広市が帯広の森木質バイオマス賦存量調査業務として帯広の森内で 105 箇所の区画を設定して調査（2010 年）（以下、第 1 回調査とする）
- ② 帯広の森指定管理者が①と同箇所、同内容により再調査が可能だった 100 箇所で追跡調査（2015 年～2022 年）（以下、第 2 回調査とする）

上記の調査による調査地点数は延べ 205 地点で、2 回の反復調査を実施したのは 100 地点であった。

2. 調査方法

半径 6m の円形区を設定し、区画内の $H = 1.3\text{m}$ 以上の毎木の樹種、胸高直径、樹高を計測するとともに、調査区ごとのうっぺい率、林床植被率、林床優占種及び林床植生種（※）について記録した。

※林床植生種調査は第 2 回調査のみ

各調査区ごとの 2 回の調査による林況の変化については、調査した年度ごとに、報告書として別途まとめている。

3. 集計と分析方法

$H = 1.3\text{m}$ 以上の木本を対象とした計測によって得られた生育密度（本数、胸高断面積合計（BA））と生育種数、うっぺい率、林床植被率、林床優占種の各項目を以下の 2 つの集計方法により集計し、分析した。なお、調査区の消失等により第 2 回調査を実施できなかった 5 カ所、及び旧屋敷林、防風林である 2 カ所については集計から除外し、98 地点（196 サンプル）のデータを集計対象とした。

- ① 齢級別集計：各回、各調査区の調査結果をそれぞれ個別の独立したデータとみなし、各齢級及び自然林に区分して集計した。〔 $n = 196$ （一部の調査項目では欠損値あり）〕
- ② 植樹期別変化量集計（以下、変化量集計とする）：植樹期別〔30 年間の植樹期を 10 年ごとに区分：初期（1975～1984 年植樹区）、中期（1985～1994 年植樹区）、後期（1995～2004 年植樹区）、及び



写真 1. 定点調査箇所の位置図（丸が 2 回実施、十字は 1 回のみ実施）

自然林の4区分〕に集計し、平均値の変化を比較した〔n = 98（一部の調査項目では欠損値あり）〕。

なお、第1回調査と第2回調査の間の経過期間は5年から12年とばらつきがあるが、集計にあたって、そのばらつきは考慮しない。

また、調査区によっては間伐や草刈り、外来種の除去などの人為的な作業を行っており、それらが生育状況に影響を及ぼしている場合があるが、今回の分析においては、あくまで客観的な現況や変化そのものについて分析するものとし、人為的作業の影響や効果については検討の対象としない。

【用語の説明】

植栽木：植樹祭等で人為的に植栽された樹木

自然木：植栽木以外で、自然に生育してきた樹木

BA（胸高断面積合計）：単位面積あたりの樹木のH=1.3m位置の断面積の合計

うっぺい率：H=1.3m以上の木本によって林冠が覆われている割合の百分率値

生育種数：各調査区に出現したH=1.3m以上の木本種の種数

林床植被率：H=1.3m未満の植生によって林床が被覆されている割合の百分率値

林床植生種数：各調査区に出現したH=1.3m未満の植物種（木本と草本に分けて集計、ササ、シダ植物は草本類に含む）

齢級：森林の年齢を5年の幅で括ったもの。例）1～5年生は1齢級、26年～30年生は6齢級

4. 結果

1) 本数密度

齢級別集計（図1-1）では、植栽木は5齢級までで急激に減少し、5齢級（943本/ha）では2齢級（2,364本/ha）の約4割であった。5齢級以上では減少は緩やかであった。自然木は5齢級までは600～800本/ha程度で概ね一定し、6齢級以降で急激に増加していた。植栽木と自然木を合わせた総体本数は2～5齢級にかけて減少し、5齢級以降は増加に転じている。自然林は植樹林の8～9齢級に近い値であった。

変化量集計（図1-2）では、植栽木はいずれの期間でも第1回調査から第2回調査にかけて減少していた。自然木は後期で微増、中期と初期では大幅に増加していた。自然林は第1回調査から7割程度に減少した。

2) 胸高断面積合計（BA）

齢級別集計（図2-1）では、植栽木は一貫して増加がみられた一方で、自然木はほとんど変化はなく、総量としても植栽木に比べて僅かであった。自然林では植樹林の9齢級の総量も大きく上回る値であった。

変化量集計（図2-2）では、各植樹期間においてすべて初回調査から2回目調査で値が増え、齢級別集計と同様の傾向がみられた。自然林でも第1回調査から第2回調査で大きく増加した。

3) うっぺい率

齢級別集計（図3-1）では2～4齢級にかけて急速に値が増加し、林冠の閉鎖が進んでいることがわかる。4齢級以降は70～80%前後で大きな変化はない。ただし、個別の調査区でみると、値が増加する林分もあれば、間伐や倒木等によって大きく減少している箇所もあることに留意が必要である。

変化量集計（図3-2）では、植樹後期の若い林分で大きな増加がみられたほかは、70～80%前後で微増であった。自然林についても増加がみられた。

4) 生育種数

齢級別集計（図4-1）では、2～4齢級までは概ね4種程度で変化はなく、5齢級以降で種数が伸び、8～9齢級では9種程度で、自然林よりも多かった。

変化量集計（図4-2）では、各植樹期間においてすべて第1回調査から第2回調査で値が増え、齢級別集計と同様の傾向がみられた。

5) 林床植被率

齢級別集計（図5-1）では、2～4齢級まで急激に減少し、4～9齢級は60～70%で高齢級ほど僅かに高い傾向にあった。自然林は80.3%で植樹林の4～9齢級よりも高い値であった。

変化量集計（図5-2）では、若い植樹後期林分は低下、中期林分ではほぼ変化なし、林齢の高い植樹初期林分では増加という結果が得られた。これは、後述する林床優占種の結果等とも総合すると、若い林分の林床植被率の減少は主に牧草類などの草本類の衰退によるものであり、林齢の高い林分での林床植被率の増加は木本や森林性の草本の繁茂にあると考えられた。

6) 林床植生種数

齢級別集計（図6）では、3～4 齢級までは急激に増加し、4～8 齢級にかけては微増傾向がみられた。木本、草本別にみると、木本は齢級が進むに伴って一貫して増加傾向にあるのに対し、草本は4～6 齢級程度でピークを迎えたあとは減少していた。

7) 林床優占種

齢級別集計（図7）では2～3 齢級では牧草類、クサヨシが優占する箇所が全体の3／4以上を占めるが、4 齢級からは急激に少なくなり6 齢級以上ではほとんど見られなかった。

一方で、4 齢級以上では優占種なしの林分が増え、優占種がある林分についても優占種となる植物種が多様になった。また齢級が進むにつれて、木本類やキツリフネ、ツルウメモドキなど森林性の種が優占する箇所が増加した。

オオアワダチソウは最も比率が高い4～5 齢級で40%近くを占めるが、その後急速に減少していた。

第1回調査と第2回調査の変化は表3のとおりであった。第1回調査がオオアワダチソウ、牧草類、クサヨシだった箇所は第2回調査では多くが別の種に変わっていた。一方で、第1回調査がミヤコザサ、トクサだった箇所は第2回調査でも変わりがなく、これらの種は植生が固定化される傾向にあることがうかがえた。

5. まとめと考察

H = 1.3m 以上の木本層をみると、植栽木は、植樹から4 齢級にかけて林冠のうっぺいの進行とともに、本数が減少している状況が読み取れた。樹木同士の競合が始まり、自己間引き（又は人為的間伐）が進んでいることを示している。一方で、ボリューム（BA）としては、9 齢級にかけて一貫して増加するとともに、ボリューム全体のほとんどが植栽木のものであった。すなわち、現時点においては、主に植栽木が森林の物理的骨格を構成しているといえよう。

自然木は本数では6 齢級あたりから著しい増加がみられ、植栽木の下層に多数の自然木が更新してきている状況が読み取れる。その一方でボリュームとしては総量のごくわずかであり、現時点では森林の骨格をなすには至っていないといえる。しかし、個々

の個体をみていくと、すでに植栽木と同等の樹高に達しつつあるものや、林冠から一段下の階層を自然木がほぼ占有している箇所もあり、今後林齢の進行とともに、ボリュームの面でも自然木が増加していく時期を迎えてくるものと推察される。

自然林と植樹林の比較では、最高齢級の9 齢級時点で本数では植樹林が自然林を上回っているが、ボリュームでは植樹林は自然林の7割以下にとどまっている。このことは、植樹林が9 齢級時点でも成熟した状態には達しておらず、生育途上段階にあることを示しており、時間をかけて自然林に匹敵する量に増加していくものと思われる。

林床植生をみると、植栽当初の牧草や草原的景観の植生から、林齢の進行とともに、森林性の植生に移行していることがわかる。植生の遷移や多様性の高まりがみられる箇所がある一方で、ミヤコザサやトクサなど、単一種による排他的な優占、植生の固定化がみられる箇所もある。ミヤコザサについては、範囲が拡大し、植生が単調化している林分も散見され、今後注視が必要である。

なお、本報告においては各齢級や植樹期ごとの平均値をもとに分析を行ったが、個々の箇所別にみていくとそれぞれ固有の植生や変遷がみられ、必ずしもこの分析結果がすべての箇所に一様に当てはまるわけではないことに留意されたい。また、人為的な関わりの影響や効果については分析、考察の対象にはしていないが、個別の箇所ごとにみていくと、林分の成長や植生の変化において、これまでの森づくり活動の影響、成果が大きく関わっている区域があることに言及しておきたい。本報告ではそれらの取組について評価を与えるものではないことを改めて述べておく。

帯広の森の現状理解や森づくりの検証、今後の方向性の検討には、具体的かつ客観的なデータが重要であり、現時点で、限られたデータではありながら2回の調査によって現状及び変遷が把握できている意義は大きいと考えている。今後も調査を継続し、帯広の森の基礎データとして蓄積していくことが重要である。

表 - 1 各調査項目の齢級別集計一覧 ※「その他」は屋敷林、防風林

齢級	本数密度 (本/ha)			胸高断面積合計(m2/ha)			うっぺ い率	生育 種数	林 床 植被率	林床植生種数		備考 (林齢)
	植栽木	自然木	合計	植栽木	自然木	合計				木本	草本	
2	2,364	748	3,112	1.8	0.1	1.9	29.1	4.0	98.2			7-10
3	1,908	608	2,516	7.2	0.6	7.9	58.1	4.3	77.7	2.0	6.0	11-15
4	1,684	803	2,488	15.7	1.9	17.7	77.6	4.1	68.2	9.2	14.8	16-20
5	943	628	1,571	19.6	0.9	20.5	79.8	5.1	65.6	9.9	11.8	21-25
6	770	1,825	2,594	25.0	1.4	26.7	76.3	6.1	67.4	11.1	13.1	26-30
7	757	1,720	2,477	27.4	1.8	29.8	73.9	6.0	65.2	11.9	12.0	31-35
8	741	2,941	3,682	30.3	0.8	31.1	74.4	8.9	70.2	13.8	11.8	36-40
9	655	4,043	4,698	32.3	2.1	34.5	81.0	9.2	69.0	13.4	9.7	41-45
自然林	0	3,916	3,919	0.0	51.3	51.3	81.7	7.1	80.3	9.4	15.3	
その他	863	4,158	5,020	64.1	5.7	69.8	77.5	11.8	52.5	20.0	19.0	
総計	964	1,913	2,877	21.8	8.9	27.5	73	6.1	72	11.2	12.8	

表 - 2 各調査項目の植樹期別変化量の集計

植樹期	本数密度 (本/ha)						胸高断面積合計(m2/ha)					
	植栽木		自然木		合計		植栽木		自然木		合計	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
植樹後期	2,029	1,653	622	665	2,651	2,317	5.6	16.7	0.4	2.2	6.0	18.9
植樹中期	826	629	793	2,765	1,619	3,394	19.8	28.3	0.5	1.3	20.3	29.5
植樹初期	917	688	1,104	3,155	2,022	3,843	25.5	30.3	1.6	1.7	27.1	32.0
自然林	0	0	4,559	3,273	4,559	3,279	0.0	0.0	36.0	66.7	36.0	66.7
その他	885	840	1,990	6,325	2,875	7,166	53.1	75.1	3.5	7.9	56.6	83.0
総計	1,077	852	1,416	2,409	2,493	3,261	17.6	26.1	6.2	11.6	21.1	33.7

植樹期	うっぺい率		生育種数		林床植被率		林床植生種数	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	木本	草本
植樹後期	46.9	82.4	3.9	4.2	85.3	63.8	9.2	13.2
植樹中期	75.0	81.3	5.0	7.6	69.8	66.1	12.0	14.5
植樹初期	72.4	74.6	5.1	8.8	61.1	74.9	13.1	9.3
自然林	75.3	88.0	6.5	7.7	80.0	80.7	9.4	15.3
その他	75.0	80.0	7.5	16.0	35.0	70.0	20.0	19.0
総計	66.2	80.9	5.0	7.1	72.8	70.2	11.2	12.8

各植樹期の特徴をよく反映している植樹区の写真及び調査結果

(左：第1回調査)



(右：第2回調査)



植樹後期 2002年植樹区No.3調査区 植栽樹種：ミズナラ、カシワ、シラカンバ、ハルニレ
第1回：2010年(9年生)、第2回：2021年(20年生) うっぺい率30→90%、林床植被率100→60%、
林床優占種クサヨシ→優占種なし、生育密度2,123→2,123本/ha、BA 1.6→25.7㎡/ha、生育種数4→5種



植樹中期 1990年植樹区No.1調査区 植栽樹種：カシワ、カツラ、ヤチダモ、ミズナラ
第1回：2010年(21年生)、第2回：2022年(33年生) うっぺい率80→90%、林床植被率70→70%、
林床優占種オオアワダチソウ→優占種なし、生育密度1,150→2,831本/ha、BA 18.2→43.3㎡/ha、生育種数4→10種



植樹初期 1983年植樹区No.5調査区 植栽樹種：ハルニレ
第1回：2010年(28年生)、第2回：2022年(40年生) うっぺい率90→85%、林床植被率60→95%、
林床優占種ハエドクソウ→キツリフネ、生育密度1,946→5,219本/ha、BA 36.3→50.0㎡/ha、生育種数6→12種

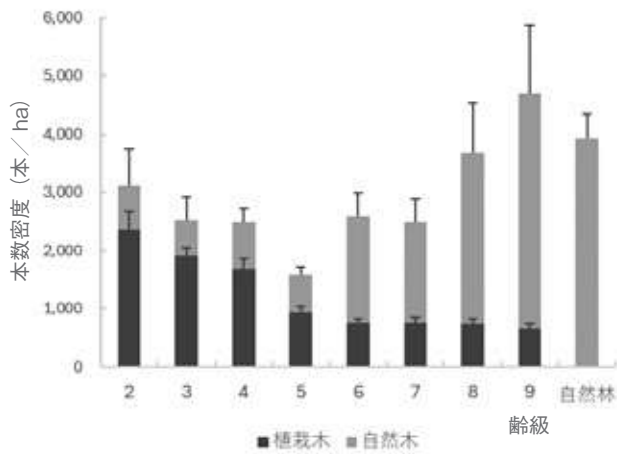


図 1-1 年齢別本数密度

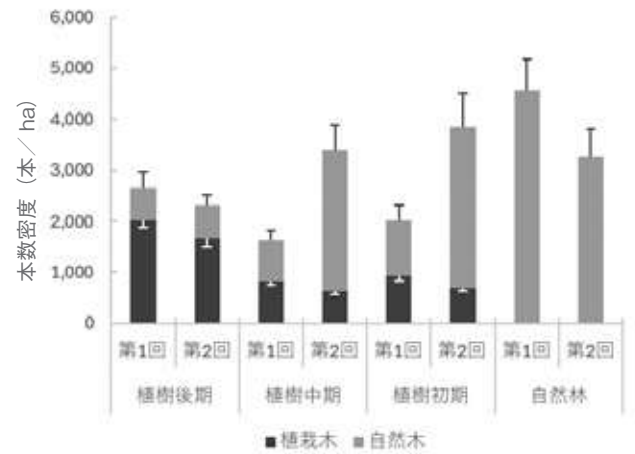


図 1-2 植樹期別本数密度の変化

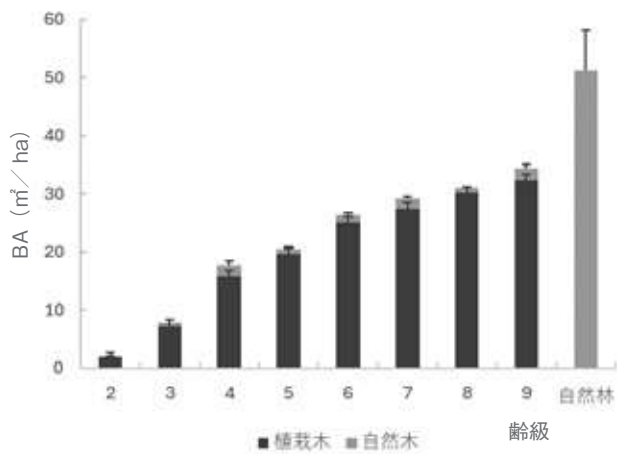


図 2-1 年齢別 BA

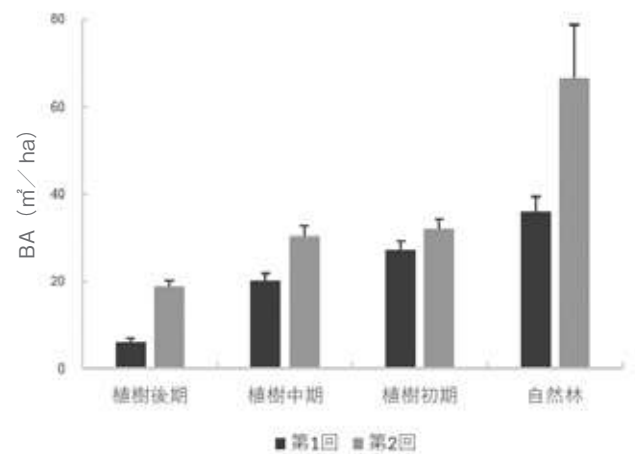


図 2-2 植樹期別 BA の変化

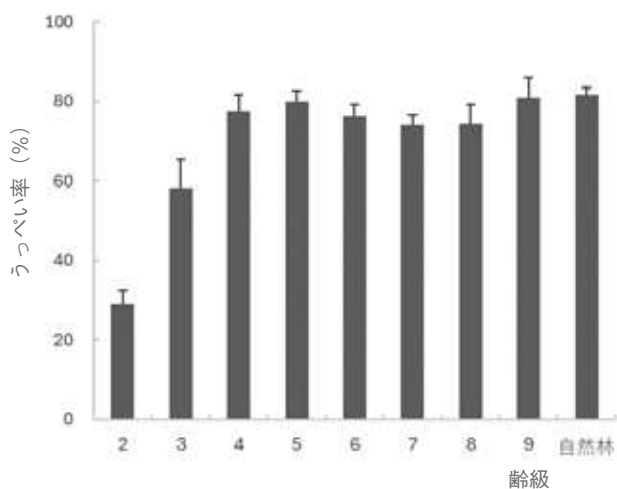


図 3-1 年齢別うっぱい率

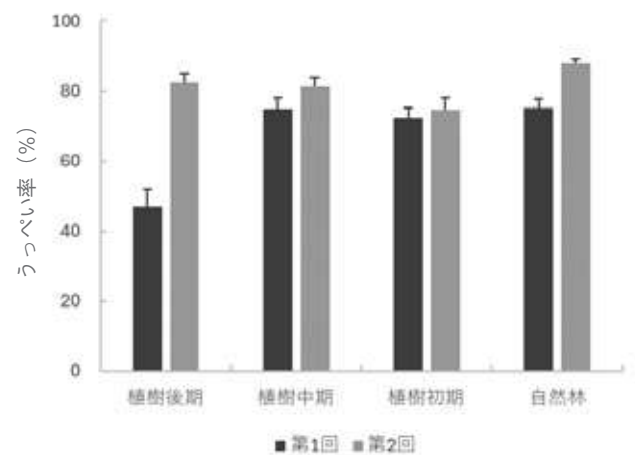


図 3-2 植樹期別うっぱい率の変化

いずれの図も棒グラフに表示した誤差範囲は標準誤差 (SE) を示す。

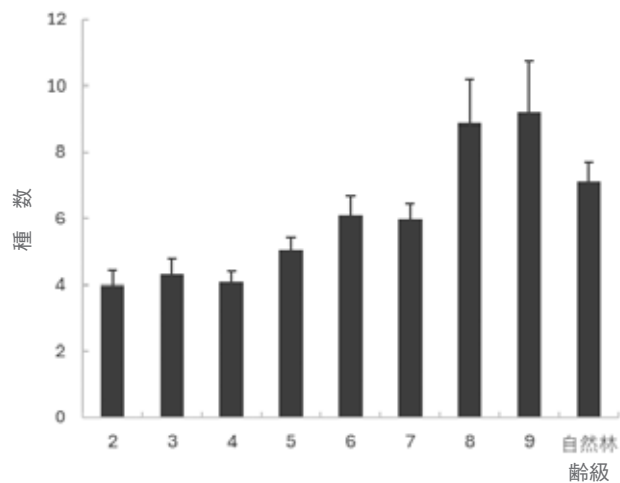


図 4-1 年齢別生育種数 (1.3m 以上木本)

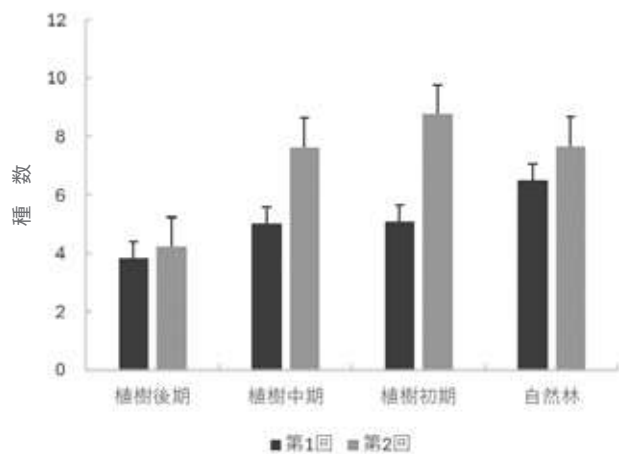


図 4-2 植樹期別生育種数 (1.3m 以上木本) の変化

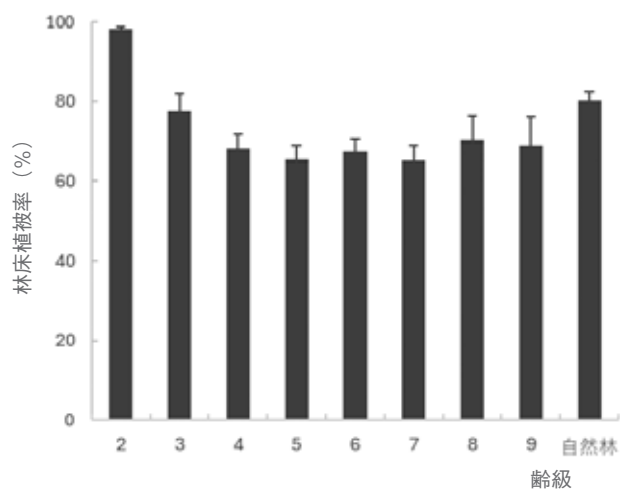


図 5-1 年齢別林床植被率

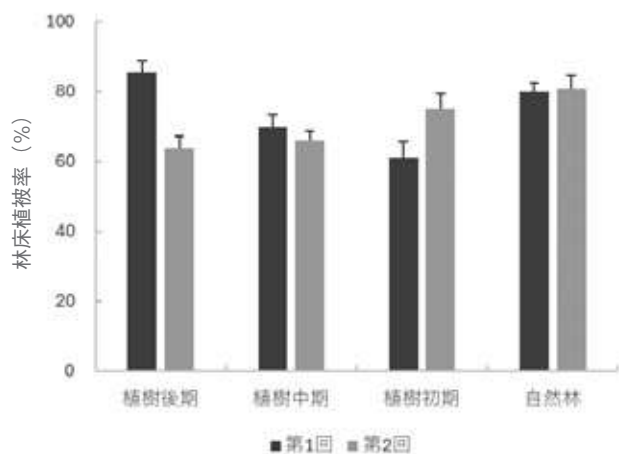


図 5-2 植樹期別林床植被率の変化

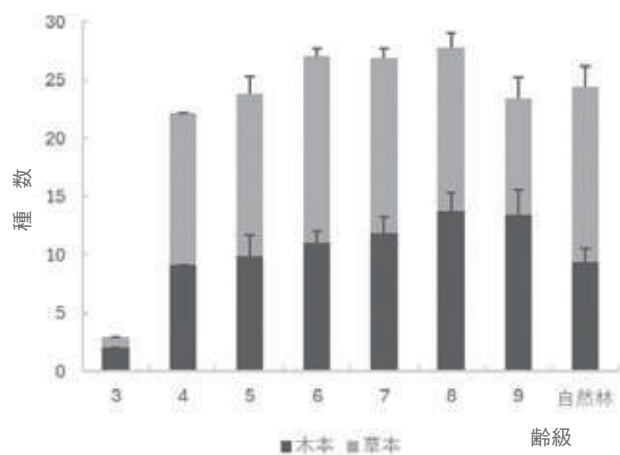


図 6 年齢別林床植生種数

いずれの図も棒グラフに表示した
誤差範囲は標準誤差 (SE) を示す。

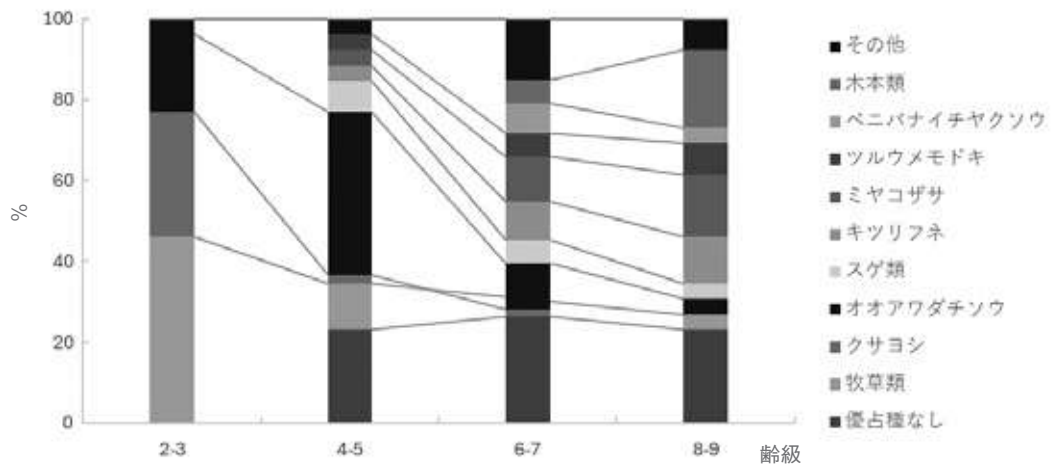


図7 齢級別林床優占種（個所数の割合）

2回目調査													
1回目調査	優占種なし	オオアワダチソウ	牧草類	ミヤコザサ	スゲ類	キツリフネ	木本類	ツルウメモドキ	ベニバナイチヤクソウ	トクサ	フッキソウ	その他	総計
優占種なし	6				1	2		1				1	11
オオアワダチソウ	2	8		2	1		2		1		1		17
牧草類	5	3	3					1					12
クサヨシ	4	1	3	1								1	10
ミヤコザサ				3									3
スゲ類	1				2								3
キツリフネ						2						1	3
木本類				1			1						2
ツルウメモドキ	1			1			1	1					4
ベニバナイチヤクソウ	1						2						3
トクサ										1			1
その他		1				1			1			2	5
総計	20	13	6	8	4	5	6	3	2	1	1	5	74

2回目調査						
1回目調査	優占種なし	ミヤコザサ	トクサ	フッキソウ	その他	総計
ミヤコザサ		7				7
スゲ類	2					2
キツリフネ				1		1
木本類	1					1
トクサ			2			2
その他				1	1	2
総計	3	7	2	2	1	15

表3 林床優占種の変化
（個所数）
上：植樹林
左：自然林

「帯広の森」の自然林

エゾリスの会 池田 亨嘉・伊藤 育子

1. 自然林とは

「帯広の森」の自然林は、「帯広の森」全体の生態系の連続性の核となる環境です。自然林の生物相についてよく知り、植樹林にも生物たちが生息しやすいような管理を行うことが肝要です。

高木から土壌、水域までがそろった環境は無論のこと、林床植生の一部だけが残る場所なども生物多様性の貴重な源泉となり得ます。

1974 (S49) 年の空中写真 (国土地理院) を見ると、この自然林の輪郭がはっきりわかります。

帯広川東岸の河岸段丘林が带状に東方へ伸び、現在の自由が丘まで続いています。南方から大小いくつかの沢が林を伴って合流します。とりわけ第2柏林台川沿いの林と段丘林が出会う部分は最も大きなまとまりのある林です。

東西と南北の二つの自然林が、T字型に繋がって、植樹エリアのフレームになっています。



1974 年の自然林
(国土地理院 MHO746X-C4-14 に加筆)

2. 自然林での調査実績

エゾリスの会による自然林での生物調査は次の通り (表記は年度)。

1993 (H5) ~ 1997 (H9) 年 冬期の小動物痕跡調査

1994 (H6) ~ 1995 (H7) 年 水生昆虫調査

1996 (H8) 年 カエル産卵地調査

1997 (H9) 年 第2柏林台川北部自然林での
アカゲラ営巣木調査

1997 (H9) 年以降 エゾリス目視調査の1コース
(北部段丘林を年2~4回踏査)

1999 (H11) 年~2000 (H12) 年 第2柏林台川沿い
および北部自然林で鳥類センサス

2003 (H15) 年 第2柏林台川沿い ネズミ類調査

2007 (H19) 年以降 第2柏林台川沿い自然林での
モニタリングサイト1000里地調査
(植物相、チョウ類、両生類、鳥類、哺乳類)

3. 植 生

○運動施設区内の第2柏林台川沿いの林は、ハンノキ、ヤチダモ、ハルニレ、ヤナギ類などの林です。十勝オーバルの北側はハンノキとヤチダモが多い湿性林で、春のフクジュソウ、キバナノアマナに始まり、初夏はバイケイソウ、オオウバユリ、秋のエゾトリカブトの開花が見られます。しかし、より湿潤な林床を代表するザゼンソウ群落は衰退しつつあります。このような乾燥化は運動施設区内の多くの林に共通した問題と考えられます。

この河辺林は幅が狭い線状の林でしたが、最近では規模を拡大しつつあります。特にアイスアリーナと陸上競技場の北側では、自然林の周囲にヤナギ類の二次林や植栽木などが連続し、林床の自然植生も拡大しつつあります。植生再生の重要な例として注目しています。

○北部段丘林は、S63年植樹林に接する自然林が帯広川の段丘とともに東方へ伸び、アルバータ通りに接する細長い林です。

段丘上部はカシワ、ミズナラ林で、中径の株立ちの木が多く見られ、林床にミヤコザサが目立ちます。1984~1986年頃と思われる皆伐 (国土地理院の空中写真からの推測) で林床が明るくなった影響で、ササが多く繁茂する現在の姿になったと推察されます。

段丘下部では、伐木跡は少なく、高木はウダイカンバ、ハリギリ、ハルニレ、ヤチダモ、ハンノキ、キハダなどが生育します。林床はやや暗く、オオバナノエンレイソウやオオウバユリの見事な群落が多く、フッキソウ、ゼンテイカ、コウライテンナンショウ、エゾエンゴサクなどが生育します。他に、ヒトリシズカ、オクエゾサイシン、オニノヤガラなど植樹林へはまだ進出していない草本も多く見られます。



北部段丘林のオオバナノエンレイソウ

段丘下部の一部で、H7年植樹林の東側には「帯広の森」には少ない平坦地の湿性植生があります。ハルニレ、シラカンバなど高木は周縁に限って生育、エゾニワトコ、マユミなどの中低木が多く、中央部はアヤメ、ゼンテイカ、オオアマドコロ、カヤツリグサ科などほとんど草本だけが生育しています。オオバナノエンレイソウが中央部にはなく、高木のある周縁部に限定的に見られます。

また、哺乳類の項でも述べますが、「帯広の森」にとって注目すべきシマリスの生息を記録している環境でもあります。

○第2柏林台川と北部段丘の合流点は最も大規模な自然林です。高木層はヤチダモ、ハンノキ、ハルニレなどで構成された湿性林です。中低木はノリウツギ、エゾノウワミズザクラ、カンボク、ミツバウツギなど、河岸にはヤナギ類やカエデ類が生育します。高木層の樹高が高いため、林内空間が大きく、中低木層、林床まで自然林の要素が充実した景観です。

また、林の中央を流れる第2柏林台川は、流量の増減により流路を変える自然地形が維持されており、侵食による自然な倒木が見られます。

林床には、バイケイソウ、オオバナノエンレイソウ、ルイヨウボタン、オクエゾサイシンなどが生育しています。また、「帯広の森」では希少なミズバショウやワニグチソウも生育します。

林の南部には廃棄物の埋設の痕跡があり、これに伴う攪乱によりヤナギ類やヤマハンノキ、シラカンバが見られ、ハリエンジュやオオアワダチソウが侵入し群落を形成しています。

この他に、帯広川西岸段丘林（西部の植樹林にとっての生物多様性の源泉）や、19条川沿い植生、栄通り西側切通し、平成15年植樹と園路に挟まれたナガボノシロワレモコウなど在来草本類が分布する草地（チョウ類の準絶滅危惧種等の生息地）、北部段丘上の古い人工林や耕地防風林なども、生態系の連続性の核として重要な要素です。



第2柏林台川と自然林

4. 水生昆虫

水生昆虫については第2柏林台川において、1994（H6）～1995（H7）の夏、秋、冬に調査しています。1994年は（運動施設内3区）上流で14種類、1995年は下流（自然林内）でトビケラを中心に6目38種を記録しました。水生昆虫の種構成（BECK-TSUDA法）から見る水質は、運動施設区はやや汚れている～かなり汚れている、自然林内はややきれいとは判定されました。

5. 両生類など水域の生物

「帯広の森」に生息する両生類は、エゾアカガエル、ヒガシニホンアマガエル、エゾサンショウウオの3種です。

詳細は小動物生息環境調査の章に述べますが、1996年に北部段丘林や第2柏林台川、第3柏林台川でエゾアカガエルの産卵、第2柏林台川と19条川でヒガシニホンアマガエルの鳴き声を確認しました。

2009年以降は第2柏林台川沿いで調査を継続していますが、カエル類は、現在では1996年よりも大幅に増加して、周囲の植樹林などでもよく見られるようになっています。



第2 柏林台川自然林のエゾサンショウウオ

この他の自然林の水域に生息する主な生物は、両生類：ヒガシニホンアマガエル、エゾサンショウウオ、甲殻類：ニホンザリガニ、魚類：トミヨ属、サクラマス（ヤマメ：第2 柏林台川で産卵）、スナヤツメ、ニジマス（外来種）、トンボ目：オニヤンマ、ニホンカワトンボ、ルリボシヤンマ、モイワアカネ、甲虫目：ゲンゴロウモドキです。

特にニホンザリガニは絶滅危惧Ⅱ類および特定第二種国内希少野生動植物種（法的な保護の対象）に指定されており、その生息地は自然林全域の小規模な湧水に点在しています。公園管理や整備にあたっては生息状況の精密な調査と保全策が必須です。



北部段丘林のニホンザリガニ

6. 鳥 類

○運動施設区内の第2 柏林台川沿いの林では1999（H11）年の繁殖期に30種、非繁殖期は14種を確認しました。林が狭いもののアカゲラが植樹林よりも頻繁に見られました。採餌や営巣に使われる

腐朽木が多いためでしょう。同様の要因でシジュウカラ、ハシブトガラ、ゴジュウカラなどの樹洞営巣性の鳥類も多く見られました。

また、非繁殖期にはアオシギやオオモズなど「帯広の森」の他のエリアではほとんど見られない種が記録されています。

植生の項で述べた自然林の周囲に自然再生が進みつつある環境で、鳥類相にも変化が見られるかも知れません。

○北部段丘林では、2000（H12）年と2021～2022（R3～4）年に異なるルートで調査を行っています。2000年が38種、2021～2022年は32種、のべ48種を記録しました。距離あたり個体数は2000年が9.12羽／100m、2021～2022年は9.55羽／100mでした。

樹洞営巣性や森林性の鳥類が多く見られ、中でもシジュウカラ、キビタキ、ヤブサメ、ゴジュウカラ、エナガ、アカゲラ、コサメビタキ、ハシブトガラの個体数が多く、アカハラ、ヒガラ、キバシリ、エゾムシクイなども含めて19種を確認しました。

2000年の調査ルートでは、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコなどの林縁・疎林や開放地を好む鳥類の個体数も多く、ノゴマ、モズ、ノビタキなどの非森林性の鳥類5種は2000年調査時のみ確認しました。2000年の調査ルート周辺は森林環境に面的な広がり無く、林縁・疎林の要素を含んだ環境であったことを反映していました。

一方、2021～2022年の調査区域は、自然林が成長した植樹林に囲まれ連続した一続きの林となり、森林性鳥類にとって利用しやすい環境であったと考えられます。

「帯広の森」の中では最もまとまりのある北部段丘林ですが、オオアカゲラのような規模が大きい森林に生息する鳥類やオオルリのような大型ヒタキ類はほとんど確認していません。また、フクロウなど自然の指標性が高い鳥類も確認できませんでした。

鳥類相から見た「帯広の森」の自然林は、植樹林よりもはるかに多種多数の森林性鳥類が生息していました。しかし、林の幅が狭いなど、現時点では、規模が不十分である影響が見られます。また、自然林と接する小規模な草地在、わずかな

がら草原性鳥類の生息地となっていることも注目しておくべきでしょう。



オオアカゲラ

7. 哺乳類

植樹林ではエゾヤチネズミが確認種の大部分で他種はわずかでしたが、自然林ではエゾヤチネズミが多いものの、エゾアカネズミ、カラフトアカネズミ、ヒメネズミを確認し、個体数は2～5倍になりました。この他に自然林では、オオアシトガリネズミ、エゾトガリネズミを確認しました。

エゾシマリスは地上で行動することが多く、高木層だけでなく地上付近の自然環境も充実した自然林に生息します。「帯広の森」では、S58年植樹林の北側、北部段丘林の湿性植生地ではエゾシマリスを確認しています。1998年に2回4頭、1999年に2回2頭確認。2003年にはS58年植樹林から続く沢地形と段丘林との合流点付近で1回確認しましたが、2004年以降は確認できていません。その要因には「帯広の森」内の道路の整備が進み林床の分断が進んだことやネコの侵入で捕食圧が高まったことなどが考えられます。エゾシマリスの生息には「帯広の森」と周辺環境との連続性の確保と高木層から林床までの環境の充実が必要です。

エゾユキウサギは1997（H9）年2月までは北部段丘林で足跡を複数確認していました。ウサギは自然林だけでなく、伐木後の萌芽があるような環境を餌場とします。このため、林縁や「森」、「散開林」の管理状況が、今後のエゾユキウサギの定着を左右するものと考えられます。

この他に、イイズナが第2柏林台川下流の自然

林で夏期に直接観察され、同じ林でクロテンの足跡が2023～2024年の冬期に観察されています。

8. 爬虫類

「帯広の森」では爬虫類の記録がありません。戦中戦後の森林の減少、周辺の耕地化、宅地化によって生息環境を失ったようです。

帯広市内緑ヶ丘公園ではニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウの観察例があるため、これらが自然に分布することも「帯広の森」の自然の回復の指標になりうるでしょう。

9. 自然林の今後

「帯広の森」の自然林は、過去の伐採などの影響からまだ若齢の場所が多い状態です。このため、林床植生に攪乱の痕が残る場所があったり、中・大型の森林性鳥類の中には定着していない種もいます。また、林が細長いために、その面積に対して林縁が多く占めるため、植物も鳥類も森林らしい構成とは異なる部分も見られます。

この問題を解消し、十勝平野の自然林らしい生態系となるには、自然林に接する植樹林の存在が重要です。

「帯広の森 森づくりガイドライン」は、このような林同士の位置関係や管理のあり方についても示しています。自然林が充実した「原生的自然の森」として機能するために、ガイドラインを理解し、遵守した管理を行うことが重要になります。



エゾシマリス

1. 調査の概要

植樹開始 50 年で「帯広の森」は野生動物の生息環境としてどれくらい成長したでしょうか。

エゾリスの会では 1989（H 元）年から現在まで、「帯広の森の小動物生息環境調査」を実施・報告しています。下記 85 件の調査から見てきた「帯広の森」の野生動物の様子を紹介します。

このうち 2008（H20）年以降の鳥類、哺乳類、両生類、チョウ類調査は、モニタリングサイト 1000 里地調査のデータの一部を使用しています。

※ 小動物生息環境調査では、植樹年は元号で呼称してきたため、これを踏襲し昭和:S、平成:H、令和:R を使用し適宜西暦を付記します。調査年は文章中の初出時のみ元号を付記します。

鳥類調査 31 件（実施年は年度）

自然林

繁殖期 2000,2008 ～ 2010,2021,2022 年

非繁殖期 1993,2008 ～ 2010,2021,2022 年

キツキ営巣 1997,1998 年

植樹林・運動施設区

繁殖期 1989 ～ 1991,1998 ～ 1999,2008,2010,2021,2022 年

非繁殖期 1990,2008 ～ 2010,2021,2022 年

キツキ営巣 1996 年

哺乳類 40 件

冬期踏査

植樹林 1986,1989 ～ 1991,1996 年

全域 1994,1995 年

自動撮影カメラ 2019 ～ 2020 年

エゾリス生息状況

個体数と分布の目視 1997 ～ 2023 年

植樹区画ごとの営巣 1993 ～ 2018 年

チョウセンゴヨウ結実 2001 ～ 2023 年

ネズミ捕獲調査

植樹林 1988 年

広範囲 2003 年

両生類 10 件

段丘林 1996 年

第 2 柏林台川 1996,2009 ～ 2016 年

昆虫類 4 件

水生昆虫 1993,1995 年

チョウ類 2017 ～ 2018 年

2. 鳥類調査

植樹した林での鳥類の生息状況は、どのように変化したでしょうか。それは、自然林の鳥類の生息状況に近づいているのでしょうか。

○ S51 ～ 53 年植樹林での調査

S51 ～ 53（1976 ～ 1978）年植樹林では 1989 年と 1998（H10）年に調査を行いました。植樹後 13 ～ 15 年と 18 ～ 20 年を経過した林を比較します。

1989 年当時は、林冠が未完成で、林床に直射光が届いていました。1998 年になると、林冠が形成され林床に直射光が届かなくなり、イチヤクソウ類などが生育するようになりました。直射光の当たる林縁には、イネ科やヨモギ、オオアワダチソウなどの高茎草本が繁茂する環境でした。

1989 年の繁殖期には 22 種の鳥類を確認し、距離あたりの個体数は 1.04 羽／100m でした。うち、森林性鳥類はビンズイ、シジュウカラなど 8 種、林縁や草原を利用する鳥類はアオジ、ムクドリ、ノビタキ、オオジシギなど 10 種が見られました。

1998 年の繁殖期には 34 種を確認、距離あたり個体数は 3.66 羽／100m に増加しました。うち、森林性鳥類は 18 種で、距離あたり個体数は 1.71 羽／100m でした。新たに、森林性のアカゲラ、エナガ、コサメビタキなどや針葉樹林を好むヒガラやキクイタダキを記録しました。1989 年に確認していた林縁・草原性鳥類のうち、アオジは引き続き確認種中最多でしたが、カッコウ、モズ、ノゴマ、ノビタキは確認しませんでした。

○ S59 東・61 年植樹林などの調査

S59 東・61（1984・1986）年の植樹が隣接する区域について 2008 ～ 2010（H10 ～ 12）年と 2021 ～ 2022（R3 ～ 4）年に調査を行いました。植樹後 24・26 年経過と 38・40 年経過の林を比較します。

2008 年調査時は林冠にまだ所々ギャップがあり、林床は、隣接した自然林から進入した在来種はわずかで、外来種のオオアワダチソウがパッチ状に見られました。2022 年調査時には林冠形成後数年を経ており、オオアワダチソウがほとんど見られなくなり、木本の実生やイチヤクソウ類、オオバ

ナノエンレイソウなどの在来種が見られるようになりました。

2008～2010年の繁殖期に確認した28種のうち森林性鳥類が18種でした。2021～2022年の繁殖期に確認した25種のうち森林性鳥類が12種でした。距離あたり個体数は2008～2010年の5.30羽／100mに対して、2021～2022年は6.92羽／100mへと増加しました。うち森林性鳥類の個体数は、2008～2010年の1.35羽／100mから2021～2022年の2.21羽／100mへ増加し、そのうちキツキ類の合計が0.11羽／100mから0.35羽／100mに増加、キビタキは0.09羽／100mから0.74羽／100mに大きく増加しました。また、繁殖期の行動圏がほぼ林内に限定されるヤブサメ、コリ、アオバトのような鳥類を新たにかつ複数個体確認しました。

これらのことから、植樹林において森林環境が整いつつあることがわかりました。

その一方、エナガ、オオルリ、クロツグミ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、フクロウなどの森林性鳥類は確認していません。このことは、これらの鳥類にとって、営巣や採餌等の生息に必要な資源が植樹林に不足していることを意味します。



集積された枯れ枝の山で巣材となる蜘蛛の巣を集めるエナガ

○植樹後経過年数と鳥類個体数

植樹後年数順の距離あたり個体数を比較します。

1989年	植樹後13～15年	1.04 羽／100m
1998年	植樹後18～20年	3.66 羽／100m
2008～2010年	植樹後24～26年	5.30 羽／100m
2021～2022年	植樹後38～40年	6.92 羽／100m
2021～2022年	自然林	9.55 羽／100m

このように植樹後の年数に伴って、鳥類の距離あたり個体数は増えていることがわかります。

S59 東・61 (1984・1986) 年では調査するごとに森林性鳥類が増加していますが、自然林の値にはまだ及びません。隣接している自然林を目標のひとつとして、森林性鳥類が生息しやすくなるような植樹林の管理を進めることが大切です。

○運動施設区

運動施設区では1990 (H2) 年と1999 (H11) 年に調査をしています。調査ルートがやや異なりますが、距離あたりの個体数が3倍に増加しました。ヒガラなど針葉樹を好む鳥類や林縁を好むアオジの増加、エゾセンニュウなどのヤブを好む鳥類を記録しました。しかし、ホオジロ、イカルチドリなど草原や裸地を好む鳥類が見られなくなり、ヒバリも激減しました。草地や裸地などの急速な減少の影響と思われます。

3. 哺乳類調査

○冬期踏査

1994～1996年にかけて「帯広の森」全域を分担して一斉に歩いて動物の痕跡を記録しました。これを植樹林、帯広川沿い、自然林(段丘)、自然林(第2柏林台川)の区域に分けて比較します。

キツネの痕跡は帯広川沿いが最も多く、次に自然林、植樹林の順に少なくなっていました。

エゾリスの痕跡数には一定の傾向は見られず、自然林と植樹林の間にも差は見られませんでした。ネズミ類の痕跡は植樹林では1件か0件で、自然林は1～7件見られました。

エゾユキウサギは北部段丘林で見られ、1994年は0件、1995年は13件、1996年は2件でした。

○自動撮影カメラ

自動撮影カメラによる調査について2019～2020 (R元～2) 年の記録を評価します。

モニタリングサイト1000里地調査の中・大型哺乳類調査で、S62年植樹林と接する第3柏林台川の河岸、S58年植樹区域の東側の沢、第2柏林台川下流の自然林にセンサーカメラを設置しました。

確認種のうち哺乳類はキツネ、エゾリス、ネズミ類、エゾシカ、ネコ、コウモリ類、アライグマでした。鳥類はアオジ、アカゲラ、アカハラ、クロツグミ、キジバト、シジュウカラなどが記録さ

れました。中には、ヤマシギなど自動撮影でのみ確認された種もありました。

冬期踏査と自動撮影カメラ調査の結果から、中・大型哺乳類は帯広川沿いをたどり、「帯広の森」の段丘の自然林に到達する可能性が高いと推測しました。また、外来種が自然林に侵入している実態も確認しました。

○エゾリス調査

営巣調査、エゾリスの目視調査（カウント）、チョウセンゴヨウ結実調査について述べます。

・営巣調査

1993～1996（H5～8）年は、冬期に営巣確認調査を行いました。この調査当時は、ほとんどの巣が耕地防風林の高い位置にありました。同時期の植樹林はまだ十分に成長していなかったため、樹高が高い耕地防風林が営巣場所として選択されたと考えられます。

2005年以降は植樹年の区画ごとに調査しました。巣の数が多かった林は、常緑針葉樹林の植樹後20～30年を経過していました。S58年やS59年西に植樹した林のように、巣を10個前後、ねぐらを30～80個確認した区画は植樹時の針葉樹の割合が50～80%に及び、調査時には林冠が閉じていました。

しかし、S51年やS52年の植樹区のように上記と同様の特徴を備えていても、巣やねぐらの合計が10個に及ばない区画もありました。

また、H5年植樹林では、2005（H17）年と2017（H29）年に巣の調査を行っていますが、巣の数は1個のまま全く変わらない結果でした。このことから、林の成長はエゾリスの増加を伴わない場合もあると考えられます。

・目視調査

「帯広の森」に7つの調査ルートを設定し、春と秋に年2回～4回踏査し、エゾリスの分布状況、年変化を記録しました。

1997～2013（H9～25）年までの確認頻度は、春0.13頭／100m、秋0.19頭／100mでした。

これらの値と2020～2023年の4年間の平均値春0.23頭／100m、秋0.36頭／100mを比べると、春0.10頭／100m、秋0.17頭／100m増加しており、倍増していました。

このエゾリスの増加は、そのまま「帯広の森」の自然の評価となるのでしょうか？

この調査ではエゾリスのいた場所も記録したため、植樹年などで区切られた場所を「区域」とし、区域ごとの1調査あたりのエゾリス頭数を算出し比較しました。全区域の平均は、春は1調査あたり0.23頭、秋は0.38頭でした。

エゾリスを多く確認した区域は、S58年植樹、S59年西植樹、十勝オーバルとアイスアリーナの間の自然林、運動施設周辺、S60年植樹林、S57年植樹林と付近のカラマツ林、S50年植樹付近のパークゴルフ場など、針葉樹林やチョウセンゴヨウ林または運動施設周辺など人間の利用が多い場所でした。これらの区域では1調査あたり春、秋とも1～2.75頭と非常に多くのエゾリスを確認しました。

チョウセンゴヨウ林や運動施設区にエゾリスが多いという結果は、エゾリスの個体数の多少だけでは自然の復元度を推し量り難いということを示しています。

・チョウセンゴヨウ結実調査

秋のエゾリス調査のルート上の結実数の相対的な変化を記録しました。結実数は250～2000個の間で年ごとに激しく変動しました。越冬前の栄養条件の変化とエゾリス個体数の関係を明らかにすることを目的としましたが、極端に少ない結実数の翌春でも個体数が減少することではなく、明確な関係性は認められませんでした。

結実数と生息数が連動をするという仮説は、エゾリスが結実した資源を1年でほぼ使い切る程度の需給バランスで成り立ちます。しかし、現状の植樹林では、林床にまるで緑の絨毯のようにチョウセンゴヨウの実生が繁茂している箇所が多く、この実生の除去が林床管理上の重要な作業になっています。もし、エゾリスと果実の需要と供給が釣り合っていれば、ここまで実生が多い状態にはならないと思われます。エゾリスが必要としているチョウセンゴヨウの実の数は私たちの想像よりもずっと少ないと思われます。

エゾリスの個体数が増減する要因は、各種餌資源の増減、積雪や気温、感染症、捕食者の動態などが考えられ、一部エリアに偏った分布傾向から、これらの要因も偏っていると考えられます。

「巣の調査」で述べたH5年植樹林のように、長期間に渡り一定数のエゾリスが安定して生息する林は、「帯広の森」が目指す自然に近い状態にあるのかも知れません。

4. 両生類調査

小動物生息環境調査では1996（H8）年と、2009～2016（H21～25）年の調査結果から両生類の生息状況について報告していますが、両生類については2023年までの結果を加えて考察します。

1996年は、エゾアカガエルの産卵地は第2柏林台川と北部段丘林、ヒガシニホンアマガエルは19条川で集団の鳴き声を確認し、調整池周辺の2ヶ所で個体の鳴き声を確認しました。

2009年以降は第2柏林台川沿いで定期的に調査を行っており、当初4年間のエゾアカガエルの産卵数は400個を維持し、2013年以降は600個前後で維持され現在に至っています。2022～2023年の産卵数は1000個を越えましたが、突然の増加であるため、今後の推移を見守る必要があります。

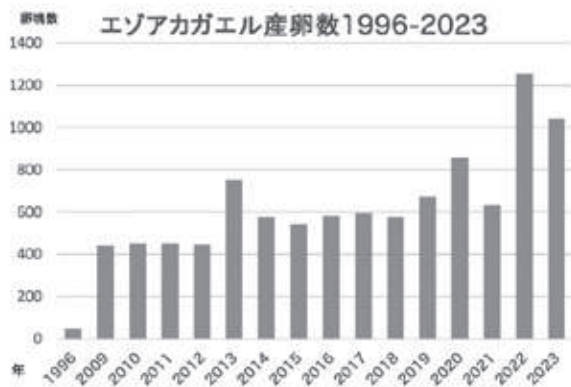


図 エゾアカガエル産卵数

ヒガシニホンアマガエルは、1996年は2頭でしたが、徐々に増加し、2022年以降は5月下旬に50～100頭で鳴いている群れを確認しています。

増加の要因に、十勝オーバルの北側にある調整池への土砂の堆積があります。2008年頃から徐々に土砂の堆積が顕著となりガマなどの湿性植物も定着し、現在では水位が浅く小規模な止水が数多く見られます。この止水群は4月にエゾアカガエルが、5～8月はヒガシニホンアマガエルが産卵地として利用しています。

同時に調整池周囲の草地の湿潤化が著しく、コケ類やカヤツリグサ科が優先し、地表は踏むだけで水分が滲む状態です。このような環境は、上陸直後のカエルの生息に適しています。また、近年、産卵場所周辺の植樹林に亜成体や成体のカエルが頻繁に見られるようになりました。



当年生まれのエゾアカガエル（繁殖期以外は水辺に隣接する自然林の林床で暮らしている）

「十勝平野のエゾサンショウウオ個体群」は、北海道の「絶滅の恐れのある地域個体群」に指定されており、「帯広の森」も貴重な生息場所です。

第2柏林台川沿いの産卵地では、2009年以降現在まで産卵数は20～50の間で増減しています。

産卵地は5～6箇所、500mにわたって分散し、林内の湿地や本流ではない緩い流れにあります。

2019年から2023年の22～32個の産卵のうち、6～9割がただ1つの止水の産卵地に集中しています。この池は幅1.5m長さ20mほどの広さで、小規模な湿性林内にあり、毎年夏以降は水位が低下し、池を維持できない時もある不安定な環境です。他の産卵地では小規模な1～5個程度の産卵数しか確認されておらず、個体群の維持が危ぶまれる状況です。また、エゾサンショウウオの亜成体や成体は広葉樹林の落葉層を主な生息地とするため、産卵地周囲に広い広葉樹林が必要で、池と周囲の森林環境のセットでの保全が重要です。

更に重要なのは、当該調査地以外にもエゾサンショウウオの生息の可能性がありますので、公園全域の調査を早急に行う必要があることです。今後の公園整備や環境管理作業による干渉を避けるために、公園全域を網羅しておくことが肝要です。このことは、エゾサンショウウオに限った話ではなく、生息環境が脆弱な全ての生物種について言えることです。

モニ 1000 里地調査から見た帯広の森

エゾリスの会 伊藤育子・池田亨嘉・宮崎直美

森の回廊@十勝 堤公宏

データ整理協力:エゾリスの会 ジョンソン美亜

1. モニタリングサイト 1000

モニタリングサイト 1000（通称：モニ 1000）は、全国に1,000 か所以上の調査サイトを設置し、100 年以上モニタリングを継続することを目指している環境省の事業です。基礎的な環境情報の収集を継続し、日本列島の多様な生態系について、質的・量的な劣化を早期に把握することを目的として2003 年から始まりました。高山帯から湖沼・湿原、磯・干潟・アマモ場・藻場、小島嶼などの生態系タイプの特徴を踏まえた調査が行われています。

このうち里地調査は、里地・里山の生態系を対象とし2005 年から開始され、日本の陸域における自然環境を気象や地形の違いにより10 区域に区分してコアサイトが配置されており、『帯広の森』は道東区域のコアサイトとして2008 年よりエゾリスの会と森の回廊@十勝の2 団体で調査しています。後述する5 項目の生物調査に加え、植生や土地利用から人間活動をとらえる人為的インパクト調査（相観植生図の作成）も行い、水辺と森のつながりや森林や草原の手入れの程度などの状態を記録してきました。

森の自然度は、樹木の成長だけでは測れません。生物多様性の現状を把握する必要があります。このページでは、モニ 1000 里地調査で取り組んできた生物相調査から森の今を紹介します。

植物相調査では生態系の特徴や人の活動の影響を、鳥類では空間構成の環境変化、中・大型哺乳類では周辺も含めた広域的な環境の連続性、カエル類では水辺と森林の連続性、チョウ類では森林や草地の植生について評価することを目的としています。

なお、40 周年記念誌にて、各カテゴリーの調査方法と2008 年度から2014 年度に確認できた生物種について紹介しています。併せてお読みいただくと、森の成長をより深く理解していただけると思います。

また、2024 年10 月に里地調査の事務局である

日本自然保護協会より「モニタリングサイト 1000 里地調査 2005-2022 年度とりまとめ報告書」が公表されました。各地の人の生活圏内の身近な自然環境の現状を知り、日本列島の中での「帯広の森」の立ち位置を知ることができます。こちらもご一読下さい。



植物相調査の様子（オオウバユリの観察中）

2. 調査の記録

2015 年度から2023 年度の調査記録より、鳥類、チョウ類、植物相、哺乳類について記録種を以下のとおり紹介します。（カエル類調査については、この50 周年記念誌の第1 章第3 節4.「小動物生息調査から見えてきた森の成長」において一部を紹介しています。）

調査対象区域は、鳥類および植物相は西21 条南6 丁目、チョウ類は西21 条南6 丁目から運動施設区北半分、いずれも第2 柏林台川兩岸の高台に調査ルートを設定しています。哺乳類調査については、西23 条南5 丁目の第3 柏林台川沿いおよび西22 条南5 丁目の段丘上部、西21 条南6 丁目の第2 柏林台川沿いにセンサーカメラを設置しています。

調査対象区域内の1984・1986 年植樹区においては、1998 年よりエゾリスの会による里山をつくろうプロジェクト（カシワ林の復元を目指す森づくり活動）が実施されています。環境管理作業を計画するにあたっては、モニタリングサイト 1000 里地調査を始めとする調査で見えてきた生きものたちの状況を森づくりガイドラインに照らす順応的管理を行っています。調査の記録とともに、その考え方の一部も紹介します。

○鳥類調査確認種一覧

調査期間 2015年1月11日～2024年1月14日

営巣環境		種名	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
森林・林縁	森林以外										
	●	ヒシクイ								●	
	●	マガモ			●			●			
●		ハリオアマツバメ		●				●		●	
●		ツツドリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		カッコウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		キジバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		アオバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	●	オオジシギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		アオサギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ダイサギ	●								
●		ハイタカ					●				●
●		オオタカ	●	●			●			●	●
●		トビ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		オジロワシ			●	●					●
●		ノスリ		●							●
	●	カワセミ	●								
●		アリスイ	●							●	
●		コゲラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		コアカゲラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		アカゲラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		オオアカゲラ						●	●		●
●		ハヤブサ				●					
●		モズ					●		●		●
●		カケス	●		●				●	●	●
		(ミヤマカケス)									
●		ミヤマガラス	●								
●		ハシボソガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ヒガラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ハシブトガラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		コガラ						●			
●		シジュウカラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	●	ヒバリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ヒヨドリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ウグイス						●			
●		ヤブサメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		エナガ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		(シマエナガ)									
●		センダイムシクイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		エゾムシクイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		メボソムシクイ	●							●	
●		オオムシクイ	●					●			
●		エゾセンニュウ	●	●	●	●		●		●	
●		メジロ		●			●		●	●	●
●		キクイタダキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ゴジュウカラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		キバシリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	●	ムクドリ									●
●		クロツグミ		●					●		●
●		アカハラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ツグミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		コサメビタキ	●	●	●	●	●	●	●	●	
●		オオルリ		●	●		●		●		
	●	ノゴマ	●	●	●	●	●	●	●		●
●		コルリ		●	●	●	●	●	●	●	●
●		キビタキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	●	ノビタキ	●								
●		ニュウナイスズメ		●							
●		スズメ		●				●	●		
	●	セグロセキレイ						●			
●		ビンズイ				●					
●		シメ	●	●	●	●	●	●		●	●
●		イカル						●			
●		ウソ			●						●
	●	ベニマシコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		カワラヒワ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ベニヒワ	●								
●		マヒワ	●	●				●	●		
	●	ホオジロ			●	●		●			●
●		アオジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	●	カワラバト (ドバト)			●		●	●	●	●	●
累計 69種		総計	43種	46種	41種	38種	39種	47種	42種	42種	44種

※掲載順は「日本鳥類目録【改訂第8版】」(2024)に準拠した。

○チョウ類調査確認種一覧

調査期間 2015年5月17日～2023年10月1日

食草		種名	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
草本	木本										
●		ウスバシロチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		キアゲハ	●		●	●	●	●	●	●	●
●		カラスアゲハ			●				●		
●		ミヤマカラスアゲハ	●		●	●		●	●	●	
●		ヒメシロチョウ		●							
●		エゾヒメシロチョウ				●	●	●	●	●	●
●		オオモンシロチョウ		●	●	●	●	●	●	●	●
●		モンシロチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		エゾスジグロシロチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		スジグロシロチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		エゾシロチョウ	●		●	●				●	●
●		モンキチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ウラゴマダラシジミ					●	●			●
●		ムモンアカシジミ				●					
●		アカシジミ			●	●					●
●		ミズイロオナガシジミ							●		
●		オナガシジミ		●	●	●			●	●	●
●		ウラジロミドリシジミ			●	●		●		●	
●		ハヤシミドリシジミ	●				●	●			
●		エゾミドリシジミ	●				●		●		
●		オオミドリシジミ	●	●	●		●	●	●	●	●
●		ジョウゼンミドリシジミ		●	●			●	●	●	●
●		ミドリシジミ		●	●	●	●	●			
●		アイノミドリシジミ								●	
●		メスアカミドリシジミ				●	●	●	●	●	●
●		カラスシジミ	●		●	●	●	●	●	●	●
●		コツバメ	●								
●		トラフシジミ			●						●
●		ベニシジミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ツバメシジミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ルリシジミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		カバイロシジミ	●					●			●
●		ゴマシジミ	●		●	●	●				●
●		アカマダラ			●	●	●	●	●	●	
●		サカハチチョウ			●	●	●			●	●
●		ヒメアカタテハ	●		●	●	●			●	●
●		アカタテハ				●			●		
●		シータテハ			●	●		●	●	●	
●		キベリタテハ	●		●						
●		クジャクチョウ	●	●	●	●	●		●	●	●
●		カラフトヒョウモン	●								
●		キタヒョウモン									●
●		ヒョウモンチョウ			●	●		●		●	●
●		ウラギンシジミヒョウモン	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		オオウラギンシジミヒョウモン	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ミドリヒョウモン	●		●	●	●	●	●	●	●
●		ギンボシヒョウモン			●	●				●	●
●		ウラギンヒョウモン			●	●		●		●	●
●		アタスジチョウ									●
●		コムシジ		●		●	●	●	●	●	●
●		コムラサキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		シロオビヒメヒカゲ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ヒメウラナミジャノメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		オオヒカゲ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		ジャノメチョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		クロヒカゲ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		サトキマダラヒカゲ	●		●	●	●	●	●	●	●
●		ヤマキマダラヒカゲ	●	●		●				●	●
●		ミヤマセセリ			●	●	●	●	●	●	●
●		ギンイチモンジセセリ		●	●	●	●	●	●	●	●
●		カラフトタカネキマダラセセリ				●					
●		コチャバネセセリ				●			●	●	
●		コキマダラセセリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
●		キマダラセセリ								●	
●		オオチャバネセセリ			●		●			●	
●		イチモンジセセリ								●	
累計 66種		総計	35種	29種	46種	47種	36種	40種	38種	46種	43種

※掲載順は「日本産蝶類標準図鑑」白水(2007)に準拠した。

○植物相調査確認種一覧 *1,2

調査期間 2015年4月24日～2023年10月1日						確認・ 抽出 *3					
科名	種名	2015	2016	2017	2018		2019	2020	2021	2022	2023
マツ科	トドマツ										
	カラマツ										
	アカエゾマツ										
	ブンゲンストウヒ										
	チョウセンゴロウ										
マツバサ科	チョウセンゴロウ										
	キタゴロウ										
セリウ科	ヒトリシズカ										
	フタリシズカ										
ウマノズナササ科	オウエゾサイシン										
モクレン科	モクレン										
	オウエゾ										
サトイモ科	アムシグサ										
	ミズハシロ										
	ゼンセン										
シュロソウ科	アルマバクバネソウ										
	オオバクバネソウ										
イヌサフラン科	ミヤマエンレイソウ										
	ミヤマエンレイソウ										
	バケイソウ										
ユリ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ラン科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
アヤメ科	アヤメ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ススキノキ科	ゼンセン										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ヒガンバナ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
キリカクサ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ツユクサ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ケシ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
メギ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
キンポウゲ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
フグ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ユキノシタ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ヘンケイソウ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
ブドウ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
マメ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
バラ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
グミ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
クマノミドリ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
アサ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
クワ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
イラクサ科	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										
	ミヤマフタ										

科名	種名	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	確認・ 抽出 *3
イラクサ科	アオミズ										
	ホソバイラクサ										
	エゾイラクサ										
	クサコアカソ										
	ナガバイラクサ										
ブナ科	ミズナラ										
	カシワ										
クルミ科	オニグルミ										
	カバノキ科										
カバノキ科	カバノキ										
	カバノキ										
ウリ科	ウリ										
	ウリ										
ニンジン科	ニンジン										
	ニンジン										
カタバミ科	カタバミ										
	カタバミ										
ヤナギ科	ヤナギ										
	ヤナギ										
スミレ科	スミレ										
	スミレ										
オトギリソウ科	オトギリソウ										
	オトギリソウ										
アザミ科	アザミ										
	アザミ										
ミツバソウ科	ミツバソウ										
	ミツバソウ										
アブラナ科	アブラナ										
	アブラナ										
ミツバソウ科	ミツバソウ										
	ミツバソウ										
アブラナ科	アブラナ										
	アブラナ										
タデ科	タデ										
	タデ										
ナデシコ科	ナデシコ										
	ナデシコ										
セコ科	セコ										
	セコ										
スベリヒユ科	スベリヒユ										
	スベリヒユ										
ツリフネソウ科	ツリフネソウ										
	ツリフネソウ										
サクラソウ科	サクラソウ										
	サクラソウ										
マタタビ科	マタタビ										
	マタタビ										
アザミ科	アザミ										
	アザミ										
リンドウ科	リンドウ										
	リンドウ										
ムラサキ科	ムラサキ										
	ムラサキ										
ヒルガオ科	ヒルガオ										
	ヒルガオ										
ナズナ科	ナズナ										
	ナズナ										

科名	種名	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	増減・ 抽出*
モウゼイ科	モウゼイ	●		●	●	●	●	●	●	●	
	イボタノキ		●	●	●	●	●	●	●	●	
	ハシドイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
オオバコ科	オオバコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	タチイヌノフグリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	エゾタギソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	コナツタワラギタ		●		●						○
シソ科	シソ							●		●	○
	ヤマタリマバチ			●					●		
	ミヤマトウバチ										
	ナギナタコウジュ	●	●	●	●		●	●	●		
	チシマオドリコソウ	●	●	●	●	●	●	●	●		
	カキドオシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	キバチオドリコソウ								●		○
	ウツボグサ	●	●	●	●						
	エゾタツナミソウ						●				
	ナミキソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヤマハハコ			●				●			
	ハツカ					●		●			
	ハエダクソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
キタ科	セイヨウノコギリソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	ノゾキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヤマハハコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	オオヨモギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヤブヨモギ								●		○
	エゾゴマナ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	エゾノコンギク	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	セイヨウトゲアザミ	●				●					○
	チシマアザミ		●								
	エゾノサワアザミ		●	●	●	●	●	●	●	●	
	タカアザミ								●		
	エゾノキツネアザミ	●									
	ヒメムカシヨモギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	ヤブタビラコ					●					○
	ヒメジョオン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	ハルジョオン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	ヤチヅバヒメジョオン						●				○
	ヒヨドリバナ							●	●	●	
	ハキダメギク	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	マルバトゲチシヤ							●			○
	アサシメギク	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	コシカギク	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	コブスマソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	アキタヅキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	コウリンタンポポ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	キナナコウリンタンポポ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	ハハコグサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヤマニガナ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ハンゴンソウ				●						
	アラゲハンゴンソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	オオハンゴンソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	キオン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ノボロギク	●			●	●					○
	オオアワダチソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	セイタカアワダチソウ	●									○
	オニノゲシ							●			○
	ノゲシ	●	●						●	●	
	ユウゲンギク	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	セイヨウタンポポ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○
レンブタソウ科	レンブタソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	エゾニウトコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
スイカズラ科	ベニバチヒョウタンボク		●		●						
	ミヤマウダイスガダラ					●	●	●	●	●	
ウコギ科	ウド	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	タヌノキ					●	●	●	●	●	
	ケヤウコギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	エゾウコギ					●				●	
セリ科	オオバシセンキュウ					●					
	エゾノヨロイダサ	●									
	シヤク	●									
	ミツバ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	オオハナウド	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヤブニンジン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ウマノミツバ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
	ヤブジャコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
累計 293種	総計	192種	174種	167種	192種	190種	177種	194種	188種	189種	

*1 調査対象外とした種：イネ科、カヤツリグサ科、イグサ科、スゲ属、シダ植物
 *2 灰色で網掛けした種：未本種を示す。「北海道産植物目録」(2015)に基づいた。
 *3 増減・抽出：北海道産植物目録を示す。「北海道産植物目録」(2015)に基づいた。

○中・大型哺乳類調査確認種一覧

種名	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
コウモリ類		●	●		●		●	●	●
キタリス	(エゾリス)	●	●	●	●	●	●	●	●
タイリクモモンガ	(エゾモモンガ)			●					
ネズミ類		●	●	●	●	●	●	●	●
アライグマ	特定外来生物	●	●	●	●	●	●	●	●
タヌキ							●	●	●
キツネ	(キタキツネ)	●	●	●	●	●	●	●	●
イヌ	外来種								●
ミンク	特定外来生物						●		
ネコ	外来種	●	●	●	●	●	●	●	●
ニホンジカ	(エゾシカ)	●	●	●	●	●	●	●	●
累計 11種	総計	6種	7種	7種	7種	7種	6種	9種	9種

※ 種名および種の配列は「令和6年度河川水辺の国勢調査生物リスト」に準拠した。

3. 鳥類

2015年1月から2024年1月までの調査で確認した鳥類は69種でした。2008年からの通算では83種になりましたが、14種が確認できなくなり、11種を新たに確認しました。

確認できなくなった種には、ハクセキレイやホオアカのように草原などの開けた環境をよく利用する種が多くいます。また、カモ類やツバメ類のように上空を飛翔しているところを確認する機会が多い種も目立ちます。代わって森林や林縁で営巣するタイプの確認が増えました。オオアカゲラや繁殖期のアオバトの定着は象徴的な変化と言えるでしょう。

これらの変化から、植樹した樹木が林冠を形成するまでに成長したことが読み取れます。

詳細な比較資料は割愛しますが、調査対象区域のうち1984・1986年に植樹されたエリアでは、この調査を始めた2008年頃と2021・2022年を比べると、記録できる個体数が倍増しました。このエリアでは高木が形成する林冠の下に亜高木層、中・低木層、林床の草本層という階層構造が整いつつあり、複数種の棲み分けが可能になってきたことが示唆されます。

また、同エリアでは、キビタキの個体数が約1羽／kmから7羽／kmに著しく増加しています。キビタキは、折れた枝の先端や枝の基部のくぼみなどの開放型の樹洞に営巣します。



開放型樹洞に営巣するキビタキ ♂

1984・1986年に植樹されたエリアは、第2柏林台川沿いの自然林も含めて、森づくりガイドラインにおいて原生的自然の森としていく区域であり、

エゾリスの会が1998年から外来種の草刈りや間伐などを行ってきました。枝打ちなどは行わず、大雪や強風による枝折れなどの処理も安全管理上必要な最低範囲に限定しています。この順応的管理が、発達した自然林で多く見られる樹洞の形成など多様な生物の生息場所の創出に寄与しているものと思われます。抑制された管理がもたらす効果を示す象徴的な変化です。（「令和4年度 帯広の森 小動物生息調査報告書」でも考察しています。参照して下さい。）

1984・1986年に植樹されたエリアの北側は1960年代半ばに植栽され、その後ほぼ無間伐のカラマツ林とトドマツ林です。枯損木が多く、10年前ぐらいから立ち枯れの倒木が続き、林内の光環境が年々変化しています。

この林分では、以前はオオタカが必ず記録されていました。毎年、同じカラマツに営巣し、調査中に巣立ちに遭遇する機会に恵まれたこともありましたが、しかし、営巣木の周囲に立ち枯れが目立つようになり、2012年以降は営巣を確認していません。また、この林分で姿を確認する機会もほとんど無くなりました。

今後、枯損木によって生まれたギャップで急成長している自然林由来の広葉樹が林冠に到達するなどの変化を鳥類がどのように利用していくのか注目していきたいと考えています。

ここまで紹介してきた確認の有無は、あくまでも帯広の森の一部（西21条南6丁目）で行ったラインセンサス調査の結果です。帯広の森全域を網羅したものではありません。モニ1000調査時以外あるいは他の区域では、ヤマシギやアオシギなどの湿地を好み急激な個体数減少が心配されている種やエゾフクロウやクマガラなどの大径木に営巣する種も確認されている（一時利用も含む）ことも記しておきます。

4. チョウ類

チョウの種数は2008～2014年が59種だったのに対し2015～2023年では66種に増加しました。2015年以降に初めて確認したり、確認した年が増加したチョウは、「帯広の森」の成長や変化を示していると考えられます。

アカシジミやエゾミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミなどミドリシジミ類4種、ミズイロオ

ナガシジミの増加は、食草であるカシワやミズナラ林の発達を示しています。



自然林を代表するウスバアゲハ

コミスジも確認した年が増加しました。マメ科植物各種を食草とすることから、主に林床植生の多様化が影響しているものと思われます。

エゾエンゴサクなど湿性林の林床植物を食草とするウスバアゲハは、2014年以前から確認していましたが、2015年以降は毎年確認されるようになり、見られる場所や個体数も増えており、湿性林の環境指標として注目しています。

2003年に植樹されたエリアと自然林に挟まれたナガボノシロワレモコウやオギが生育する草地にはギンイチモンジセセリとゴマシジミが生息しています。どちらも環境省レッドリストの準絶滅危惧種で、このような草地が残っていることも帯広の森の生物多様性を高める役割を担っていることがわかります。



ナガボノシロワレモコウに産卵するゴマシジミ

調査結果と一般的に知られるチョウの生態から、チョウにとって重要な環境要素は次の5つと考えられています。

- ① 樹冠の状態と樹種
- ② 林床植生の有無と植物種構成
- ③ チョウから見た飛行空間があるか
- ④ 日照の有無
- ⑤ 自然林との距離

樹冠の発達には日影をつくり、オオヒカゲなどの生息環境となり、高気温時には多くのチョウが逃げ込む場所となります。また、ミドリシジミ類はミズナラ、ウラゴマダラシジミはイボタ、ウスバアゲハはエゾエンゴサクというように、チョウ類の食草は種ごとに異なります。高木から林床までを構成する植生がチョウの種構成にも影響を与えます。

飛行空間の地表は、植物による被覆があった方が裸地よりもずっと頻繁に利用されます。また、チョウの生息状況にとって重要な要素に飛行しやすい空間があります。チョウは見通しが悪い空間はあまり利用しません。南北方向に伸びるギャップは日差しが入り多くのチョウが利用します。東西方向のギャップでは、自然林内であっても植樹林の南北のギャップの半数も利用しませんでした。

チョウの生息状況は植生の発達とともに変化します。植樹林では、樹木の成長とともにチョウ種類数も個体数も増えますが、林冠が鬱閉すると日陰を好むチョウ類の割合が増え、見られる種数や個体数は減少します。この時に南北方向の帯状のギャップのある空間では、多くの種類のチョウが飛行すると思われます。そのギャップが閉じれば、主に日陰を好むチョウばかりになっていきます。現に1984・1986年に植樹されたエリアでは、チョウが減り始めています。一方で、森林環境が整って来ると、食草となる植物種も多くなり、チョウの産卵や休憩などの利用は増加すると考えられます。

このようにチョウの生息には「原生的自然の森」よりも明るく見通しの良い空間である「森」や「散開林」の管理が大きく影響すると言えるでしょう。

5. 植物相

植物相調査は、2015年度から2023年度の4月から10月の月1回を基本として、繁殖状態にある（蕾、花、実のいずれかがみられる）植物種を記録しました。ただし、月1回の調査時期は不定だったこと、悪天候のため調査を実施できなかった月もありました。

確認種一覧について、2008年度から2014年度にみられた確認種は、累計で283種、うち木本種が47種、草本種が236種（カヤツリグサ科、スゲ属、シダ植物は対象外）だったのに比べ、今回は累計で292種、うち木本種が63種、草本種が229種（イネ科、カヤツリグサ科、スゲ属、シダ植物は対象外）でした。草本種の種数に大きな変化はありませんでしたが、木本種は種数が約1.3倍に増加しました。新たに確認された主な木本種は、自然林のエリアではウスゲヒロハハンノキなどのカンバ類、イタヤカエデ、タラノキ、エゾウコギなどがありました。この要因として、自然林では多くの高木の倒木が確認されたことから、林内の光環境の変化に伴い、さまざまな樹種の成長が促されたことなどが考えられました。



エゾノウワミズザクラ

また、調査対象区域のうち1986年に植樹されたエリアで新たに確認された木本種のなかで、エゾノウワミズザクラは自然林からタネが飛んで植樹林に入り込んだ種と考えられます。低木類のベニバナヒヨウタンボク、ミヤマウグイスカグラは周辺の庭木などからタネが飛んで定着した種と考えられます。これらの種は鳥が果実を食べてタネが運ばれるタイプなので、植樹林の木本種の多様化には、鳥によるタネの散布が影響していることがわかりました。

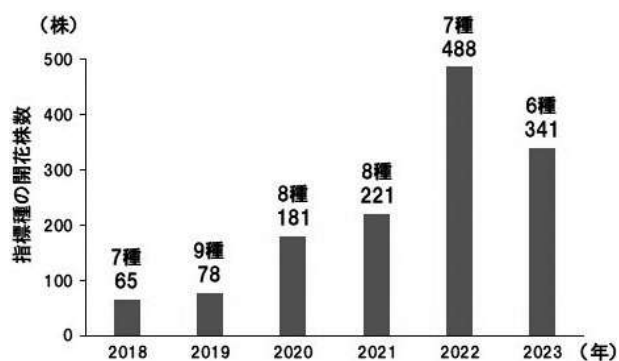
草本種について、自然林のエリアではオオバナノエンレイソウ、オオウバユリ、コンロンソウなど、河畔を代表するような多くの種が生育しています。この自然林のエリアに隣接する1986年に植樹されたエリアでは、2008年度から2014年度には確認されなかったオオウバユリ、コンロンソウが、今回の調査で新たに確認されました。また、2008年度

から 2014 年度には数年おきにみられていたオオバナノエンレイソウも、2015 年度以降は毎年確認されました。これらの草本種は、自然林のエリアからタネが飛ばされて、植樹されたエリアに入り込んで定着したと考えられます。



コンロンソウ

2018 年度からは、植樹されたエリアが自然に近い森の姿にどのように近づいていくのかを調べるため、モニ 1000 の植物相調査とは別に、自然林で多くみられる植物種 40 種を「指標種」として（「帯広の森 里山づくり 2017～2020 年度報告書」に記載）、1986 年に植樹されたエリアでの指標種の調査を開始しました。



1986 年に植樹されたエリアにおける年ごとの指標種の開花株数

1986 年に植樹されたエリアでの 2018 年度から 2023 年度にかけての指標種（オオウバユリなどの草本種）の開花について、種数の変化はほとんどありませんでしたが、開花株数は全体でみると増加傾向にありました。自然林から植樹されたエリアに入り込んだ指標種が、個体数を増やしていることが明らかになりました。ただし、自然林から植樹林へ入り込んだ先での指標種の生育は、タネによる繁殖よりも根などの栄養繁殖によって個体

数を増やしていると考えられ、生育範囲は局所的でした。2023 年度の開花株数の減少は、特定の一ヶ所に栄養繁殖で群生するホウチャクソウの開花株数が大きく減少したことが主な要因です。指標種が植樹されたエリアに全域的に広がって開花株数を増加させていく段階には達していないため、今後の調査で引き続き指標種の変化を捉えていく予定です。

2008 年度からモニ 1000 植物相調査を続け、植物相の現状を捉えてきたからこそ、上述したような指標種の生育を把握する新たな調査の展開につながっています。

6. 中・大型哺乳類

モニタリングサイト 1000 の哺乳類調査は、動物の熱を感知して自動で撮影するセンサーカメラを使用して行っています。

調査開始当初はフィルム式のカメラを使用していましたが、2015 年以降はデジタル式カメラを使用しています。カメラは帯広の森の西側の 3 か所に設置し、撮影された写真の判別により生息する哺乳類を確認しています。

哺乳類の多くは夜行性のため、普段はあまり目にする機会はありませんが、カメラにはニホンジカ（エゾシカ）やタヌキ、ネズミ類、コウモリ類、アライグマ、ミンクなどが写っており、思った以上に多くの種が生息していることがわかります。

確認種のうちで最も撮影数が多いのは、帯広の象徴的な動物のひとつとなっているキタリス（エゾリス）です。帯広の森では植樹が始まった当初チョウセンゴヨウの木が多く植えられました。チョウセンゴヨウの実キタリスの好物であり、キタリスの個体数を増やす要因になっているようです。ただ外来種であるチョウセンゴヨウは森づくりにとっては厄介ものでもあり、毎年増えすぎたチョウセンゴヨウの抜き取りなどが行われています。次に撮影枚数が多い種はキツネ（キタキツネ）が挙げられます。キツネは一時期撮影枚数が少なくなった時期がありました。これは疥癬症という病気がキツネに蔓延したことが原因のようです。疥癬症はヒゼンダニという小さなダニが引き起こす皮膚病で、重症化すると餌も捕れなくなり、キツネは痩せ衰えてやがて死んでしまいます。幸い近年は疥癬症も収まったようで、キツネが撮影され

る枚数も増えてきています。

調査の途中から新たに確認されるようになった種としてはニホンジカ、アライグマ、タヌキなどが挙げられます。

2011年に初めてカメラに写り、2015年以降毎年確認されるようになった種はニホンジカです。ニホンジカは全道で個体数が増加しており農業への被害などが問題となっていますが、帯広の森でも最近では毎年確認されています。愛らしい姿のニホンジカですが今後生息数が増加すると帯広の森の植生への影響が懸念されます。



ニホンジカ（2017年7月17日撮影）

また2013年から確認されるようになったのは外来種のアライグマです。アライグマは農林水産業、人の生命・身体、生態系への被害が大きい種として、外来生物法により「特定外来生物」に指定されている種です。現在は駆除活動が行われていますが、2013年以降毎年確認されており、帯広の森周辺に定着して生息しているようです。

そのほか2021年からはタヌキも毎年確認されるようになりました。

調査は2024年現在で17年目となりますが、今後も継続していけば、帯広の森の成熟を表すような結果がみられるかもしれません。ただし近頃問題となっているヒグマだけはカメラに写らないよう願っています。

7. 帯広の森の豊かさは本物か？

自然の豊かさは生物多様性によって担保されています。生物多様性は、単に生物の種類の多い少ないでは評価できません。多様な生きものたちが

直接に間接的につながり合うことで安定した生態系を構築している状態にある必要があります。

環境管理が適切に行われているエリアにおいては、モニ1000里地調査のいずれの分類群においても累計種数に大きな変化は見られませんでした。一方で、確認種には変化があり、鳥類や植物相では確認個体数の増加も見られました。これらの変化は、植樹木が成長し森林の構造を備え始めたことの表れですが、変化はまだ続くことが予想され、帯広の森が自然としての均衡を保つレベルには至っていないことも示しています。

ほんの一部の変化が全体に及ぼす影響を吸収し得る底力を持てるようになるには、今しばらくの時間と人手が必要と思われます。

チョウ類、鳥類、哺乳類で新たに確認されるようになった種類からも、帯広の森が森林環境として生きものたちに利用されるようになってきたことがわかりました。移動能力の高い鳥類や中・大型哺乳類は、周辺の自然伝いに帯広の森へ辿り着き、定着しつつあります。しかし、この動静はまだお試し期間中という様子で、高次捕食者で累代繁殖し個体数を維持していると言えるのはまだキツネぐらいでしょう。

安定していない環境には、アライグマやミンク、オオハンゴンソウやアレチウリのような特定外来生物が容易に侵入し勢力を拡大します。また、ヒグマのように都市公園の安全性確保の観点から定着を防ぎたい生きものもあり、環境管理は計画的に行う必要があります。そういう制約の中で、森の豊かさを育成するには、環境の変化を常に観察しながらその結果に合わせて対応を変える順応的管理が必須となります。

その基礎情報として、モニ1000里地調査の記録を皆さんと情報共有したいと考えています。

改めて、確認種の一覧を見てみて下さい。思った以上に生きものたちは身近にいるもんだ！と思った皆さん、その豊かさを感じに森へ遊びに来て下さい。

帯広市 みどりの課

1. 外来種とは

人によって本来の生息生育地からそれ以外の地域に持ち込まれた生物で、特に明治時代以降、人の移動や物流が活発になり、国内に持ち込まれてきた。

生態系は、長い時間をかけて食う・食われるといったことを繰り返し、微妙なバランスのもとで成立している。ここに外から生物が侵入してくると、生態系のみならず、人や農林水産業まで広くにわたって悪影響を及ぼす場合がある。

2. 特定外来生物とは

海外起源の外来種であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業への被害を及ぼすもの、又は及ぼす恐れのあるものの中から外来生物法により環境省が指定する生物である。指定された生物の取り扱いについては、輸入、放出、飼養等、譲渡し等の禁止といった厳しい規制がかかる。特定外来生物は、生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる。

国内にはあらゆる特定外来生物が定着しており、帯広の森も例外ではなく、様々な要因から、特定外来生物が定着している。外来種の問題は森づくりにおける重要課題の一つであるため、科学的な知見を踏まえ、費用対効果や実現可能性などを考慮して、効果的・効率的に防除対策を講じる必要があり、その実施に当たっては、帯広市をはじめとする行政機関のほか、指定管理者や森づくり活動団体が連携して取り組むことが大切である。

以下に、帯広の森で見られる主な外来種を紹介する。

3. アライグマ

アライグマは北米原産の動物で、日本では昭和50年代に放映されたテレビアニメの影響でペットとして輸入され、その後捨てられたり、逃げ出したりして野生化したとされている。

雑食で繁殖力が強く急激に数を増やすため、納屋などを棲みかにして、農作物や水産物、家畜飼

料、在来の動植物を食べるなど、農林水産業や自然環境、人の財産への悪影響が懸念されているため、特定外来生物に指定されている。

夜行性で、昼間は樹洞や巣穴、および家の屋根裏、作業小屋、廃屋などの中で休息している。木登りや泳ぎが得意で、水辺を好み、森林、農地のほか市街地でも生息でき、気が荒く手先が器用な動物である。



出典：環境省ホームページ
(<https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/asimg.html>)

帯広の森では、平成25年8月にエゾリスの会が受託しているモニタリングサイト1000の調査において、設置していたカメラにアライグマが確認された。平成26年3月11日には帯広市環境都市推進課が「帯広市におけるアライグマ・カニクイアライグマ（以下、アライグマ等）の防除実施計画」を策定した。

平成26年度には、専門家がアライグマ捕獲のための箱罠を帯広の森内に設置したものの捕獲には至らなかったが、平成27年7月にモニタリングサイト1000哺乳類調査のカメラに再びアライグマが映り、8月13日から箱罠を3か所に設置したところ、9月4日にアライグマの子どもを捕獲した。

平成28年2月23日には、帯広の森づくり協議会が主催して、専門家を講師とした近隣町村防除従事者対象のアライグマ勉強会を開催した。

その後、平成29年度と平成30年度に箱罠を設置したが捕獲には至っていない。

なお、帯広市全域でみると、その後、新たな計画期間となった「帯広市におけるアライグマ等防除実施計画書」に基づき、箱罠の設置や広報媒体による普及啓発等を行っているが、帯広市内にお

けるアライグマの捕獲頭数は年々増加しており、令和5年度には98頭捕獲されている。

4. オオアワダチソウ

オオアワダチソウは、外来生物法により要注意外来生物に指定されており、日本生態学会によって日本の侵略的外来種ワースト100に選定されている外来種である。

もともと、オオアワダチソウは明治時代中期に観賞用として国内に導入され、樹木が成長していない、もしくは間伐等を行い樹冠が開けており、日照条件が良いところに繁茂し、植樹地などでは在来植物への被圧がみられる。

帯広の森では、オオアワダチソウを根ごと引き抜く作業を、小学生の環境学習や帯広市民大学講座の一環として実施している。



小学生によるオオアワダチソウ抜き取りの様子

小学生の環境学習では抜き取りしたオオアワダチソウを活用し、草木染めを行っている。



草木染めの様子

5. そのほかの外来種

アライグマやオオアワダチソウ以外の外来種も帯広の森内には多く存在している。

チョウセンゴヨウ、ルピナス、ハリエンジュ、メマツヨイグサ、キバナコウリンタンポポ、オオハンゴンソウ、セイヨウタンポポ、キショウブ、カモガヤ、オオアワガエリ、など。

(出典：2012.2 株式会社ズコーシャ 帯広の森における調査取りまとめおよび帯広の森リーフレット 作成業務 2. 資料調査 .2-2. 確認種 .表 2-3 植物確認種一覧)

また、帯広の森周辺において、日本の侵略的外来種ワースト100に選定されているアレチウリも発見されており、帯広の森区域内に侵入した場合、在来種に影響を及ぼす恐れがある。

これら外来種は、その侵入を完全に防ぐことは難しく、一度定着した本種を根絶させることもまた困難であることから、今後対策の検討が必要となる。

第2章

「帯広の森」の現在 施設編



用地取得の状況

帯広の森は、昭和49年2月12日に334.6haの都市計画決定と同時に用地買収を開始した。その後、都市計画決定面積は昭和52年10月5日(402.2ha)、昭和58年2月3日(402.5ha)、平成5年3月5日(405.6ha)、平成15年3月28日(406.5ha)への変更を経て現在に至っている。

令和6年度末の用地取得の状況は買収予定面積が、都市計画決定面積406.5haのうち、河川、道路、その他の公共用地面積49.7haを除く、356.8haであるのに対して取得面積が347.8haとなっており、取得率は97.5%となっている。

年度	取得面積	取得面積累計	取得予定面積	進捗率	備考
平成27年度～令和5年度	取得なし	347.8 ha	356.8 ha	97.5%	
令和6年度	362.81㎡	347.8 ha	356.8 ha	97.5%	

※用地取得の実績は、40周年記念誌に掲載した年度以降の実績を掲載

施設整備の状況

帯広の森は、都市のスプロール化を防ぎ農村部と都市部の交流の場となるほか、自然環境の学習の場、安らぎ・憩いの場、スポーツ振興の場、温暖化・災害抑止効果としての役割を果たしており、これまで運動施設区の施設整備に加えて、森の交流館

などの国際交流施設、はぐくむといった森の育成管理・利活用の拠点施設、散策や休憩のための園路・四阿・トイレ・駐車場などの各施設の整備を進めている。

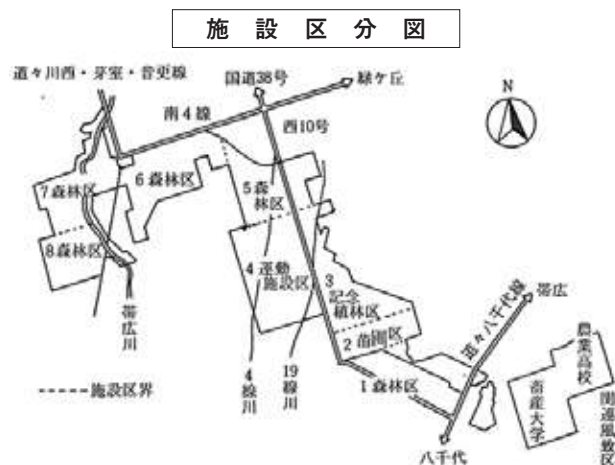
年度	事業内容	備考
平成27年度	築山施設整備(階段設置(本体工))	P75 区域5
平成28年度	築山施設整備(階段設置(附帯工)、トイレ新築1箇所)	〃
平成29年度	築山周辺整備(駐車場整備、園路整備 51m)	〃
平成30年度	築山周辺整備(園路整備 77m)	〃
平成31年度(令和元年)	築山周辺整備(園路整備 87m)	〃
令和2年度	築山周辺整備(園路整備 231m)	〃
令和3年度	築山周辺整備(園路整備 326m)	〃
令和4年度	築山周辺整備(シェルター設置1箇所) 飛行場周辺整備(駐車場整備、園路整備 579m、簡易トイレ設置2基)	P75 区域5 P73 区域3
令和5年度	整備なし	
令和6年度	西11～12号間整備(園路整備 360m)	P76 区域6

※施設整備の実績は、40周年記念誌に掲載した年度以降の実績を掲載

造成計画との対比

帯広の森では、昭和50年3月に策定した帯広の森造成計画を踏まえながら、公園区域を8つの区域に分け、それぞれの区域の現況を活かした施設を配置することとしている。

これまでの区域ごとの主な施設の整備状況は次のとおりである。



出典：帯広の森造成計画書より

区域	主な施設(計画)	主な施設(整備)
1 森林区 「ふるさとの森」	園路、駐車場、トイレ、芝生広場等	園路、駐車場、トイレ、休憩施設、PG場(ふるさとの森コース)
2 苗圃区 「自然の学校」	緑化技術センター、苗圃、園路、駐車場、トイレ、芝生広場等	はぐくむ、園路、駐車場、トイレ、休憩施設、芝生広場、PG場(林間コース)
3 記念植林区 「記念の森」	園路、トイレ、休憩舎、芝生広場等	園路、駐車場、野球場、トイレ、休憩施設
4 運動施設区 「スポーツの森」	陸上競技場、野球場、サッカー・ラグビー場、アイスアリーナ、テニスコート、弓道・アーチェリー場、駐車場、トイレ、池、芝生広場等	陸上競技場、野球場、球戯場、アイスアリーナ、テニスコート、弓道・アーチェリー場、体育館、スポーツセンター、市民プール、レストランぱわっく、研修センター、園路、駐車場、トイレ、池、PG場、芝生広場
5 森林区 「創造の森」	展望塔、展望レストラン、野外コンサートホール、レストハウス、彫刻群、園路、トイレ、芝生広場等	もりの山、森の交流館、JICA、園路、駐車場、トイレ、休憩施設、芝生広場
6 森林区 「レクリエーションの森」	大池、フィールドアスレチック、キャンプ場、レストハウス、園路、駐車場、トイレ等	園路等整備中
7 森林区 「ふるさとの森」	園路、駐車場、トイレ、水飲み場、芝生広場等	未整備
8 森林区 「ふるさとの森」	レストハウス、園路、駐車場、トイレ、芝生広場等	未整備



もりの山



トイレ (もりの山)



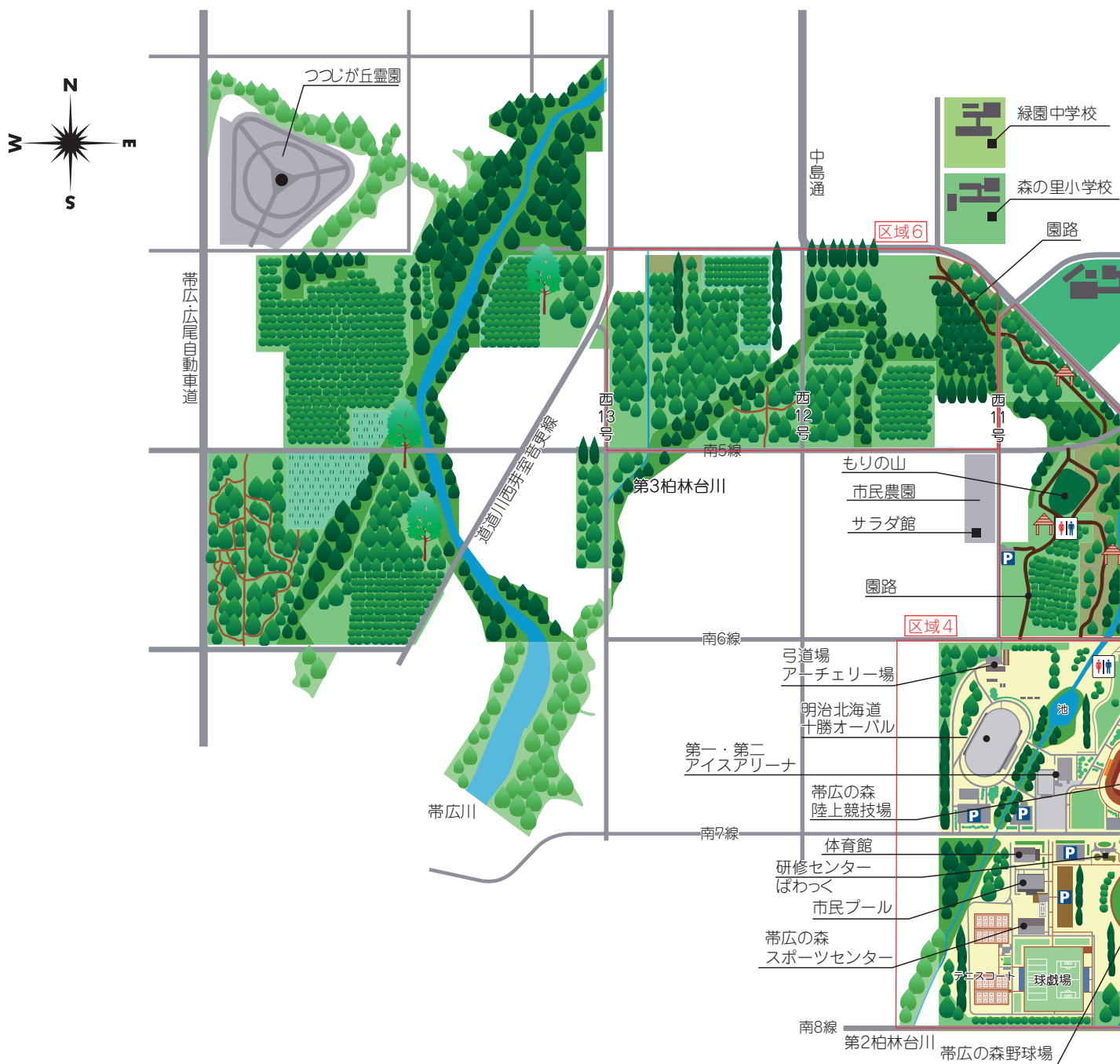
休憩施設 (もりの山)



園路 (西11～12号間)



駐車場 (飛行場周辺)



0 100 200 300 400 500 (m)

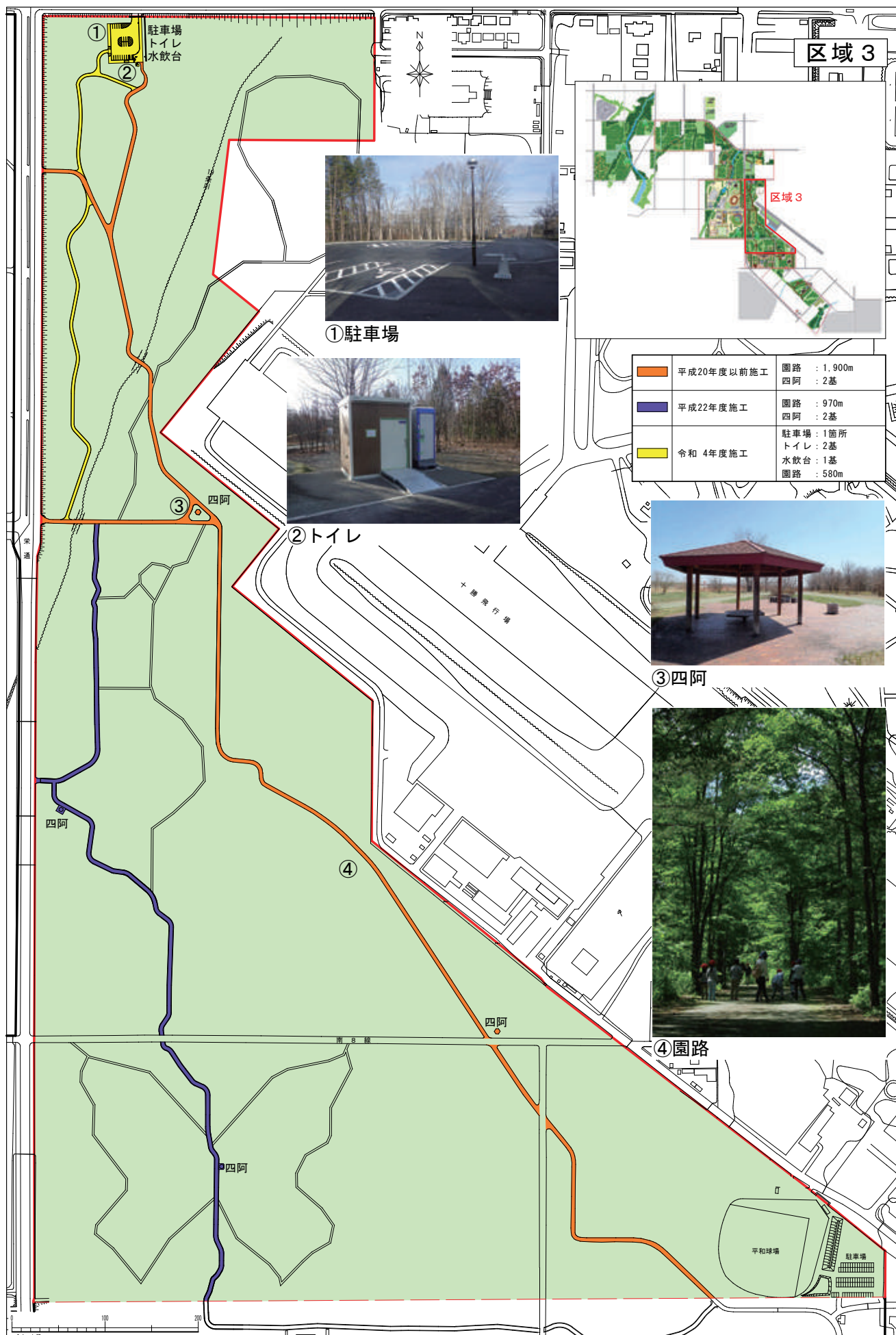
※ 各区域の施設については、これまでに整備したすべての施設を掲載

帯広の森エリアマップ











区域 5



①もりの山



②シェルター



③トイレ



④園路



⑤園路



平成19年度以前施工	園路：1020m 駐車場：3箇所 トイレ：1棟	平成30年度施工	園路：80m
平成20年度施工	園路：210m	令和1年度施工	園路：90m
平成22年度施工	園路：720m 四阿：2基	令和2年度施工	園路：240m
平成24年度施工	園路：210m	令和3年度施工	園路：330m
平成28年度施工	箕山(H23～) トイレ：1棟 水飲台：1基	令和4年度施工	シェルター：1基
平成29年度施工	園路：50m 駐車場：1箇所		

第2節 施設の利用状況

帯広の森・はぐくむ

帯広の森指定管理者 (株) ケイセイ 佐藤 航

帯広の森・はぐくむは帯広の森の育成管理・利活用の拠点施設として2010年4月に開館した。育成管理の拠点として、森の育成に関する計画・運用や、公園施設の維持などを担っている。

また、利活用の拠点として、帯広の森に関する様々な情報の発信や、森に親しめる行事の開催や学校の体験学習の受け入れを行っている。

施設概要

所在地	帯広市南町南9線49番地1
延床面積	364.36㎡
構造	木造平屋建
開館年月日	平成22年4月1日
施設の概要	【施設本体】 事務室、ホール、多目的室、便所、デッキテラス、作業室 【付属施設】 ①倉庫 構造:木造平屋建 延床面積:54.65㎡ ②ペレット工房 構造:木造平屋建 延床面積:66.25㎡ 内容:破砕機、ペレタイザー、昇降機、自動供給機、ホイス、乾燥エリア、チップ原木置場
駐車場	普通車44台(うち身障者用2台) 大型車2台
開館時間	4月29日～10月31日▶午前9時～午後7時 11月1日～4月28日▶午前9時～午後5時
休館日	毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始、祝日の翌日



はぐくむ全景



はぐくむ館内

館内マップ



来館者数の推移

開館以来、はぐくーむを訪れる来館者の数は順調に伸びてきている。(表1 参照) 特に学校等での体験学習の利用は伸びが顕著で、2023 年度には開館史上最多の 17,186 人が訪れ、森林体験の場として、はぐくーむの認知度は上がってきている。

一方で、一般来館者の伸びは緩やかで、まだはぐくーむを知らない市民も多い。帯広の森の玄関口として、市民からの認知度を上げていくことが今後の課題として挙げられる。



小学校の体験学習



はぐくーむ東側ウッドデッキ



クロスカントリースキー

表1: はぐくーむ利用実績 ※行事の参加者数に秋まつり、森の音楽会は含まない

年度	来館者総数	行事		学校等利用		うち団体		その他
		回数	参加者数	回	人	回	人	
2010	9,632	57	710	11	663	115	2,024	6,235
2011	13,433	52	809	26	1,519	163	2,395	8,710
2012	14,083	64	1,116	27	1,442	132	2,012	9,513
2013	14,771	61	969	36	2,207	140	1,970	9,625
2014	15,069	61	1,052	49	2,366	115	1,745	9,906
2015	15,080	59	1,006	44	2,236	126	1,875	9,963
2016	15,193	64	1,209	65	2,705	142	2,094	9,185
2017	15,284	61	1,076	69	3,268	128	2,044	8,896
2018	13,248	50	925	78	3,420	97	1,339	7,564
2019	15,030	45	781	64	2,946	95	1,394	9,909
2020	13,958	35	795	66	3,219	77	1,007	8,937
2021	13,753	31	573	67	3,411	80	968	8,801
2022	16,422	41	782	88	4,104	107	1,533	10,003
2023	17,186	38	738	74	3,945	139	2,058	10,445

はぐくーむ主催行事

はぐくーむは年間を通して森に親しめる様々な行事を開催している。行事を開催する目的は大きく分けて2つあり、1つ目は帯広の森を知ってもらうためである。自然観察会や森の間伐材を利用した木工体験、森というフィールドを利用したウォーキングや歩くスキー体験などの行事がこれに当たる。開館当初はこれらの森に親しむ入口となるための行事が中心だった。

しかし、これらの行事だけでは森との関わりは限定的となる。そこで、行事を開催する目的の2つ目、参加者にもっと森と深く関わってもらうための行事も開館の数年後から開催するようにしている。例えば2015年から始まった「森の寺子屋」では、小学生を対象に年6回程度、生き物調べや間伐などの様々な体験を行い、森づくり、森あそびの達人となることを目標としている。また、2018年からは森づくり活動団体のぶれいおん・とかちとの共催で「あそびの森のあしあとづくり」を定期的に開催し、親子でできる森づくりをみんなで協力しながら続けている。

市民と森の関わり方を考える中で、やり方が変わってきた行事もある。自然観察会は開館当初は一人の講師による解説だけで森を案内していたが、やがて「四季の森めぐり」として、スタッフだけではなく森のボランティアや参加者の気付きや知識を共有することで、参加者の主体性を高めた行事に変わってきた。また、木工体験も、当初はスタッフが事前に用意した間伐材などで工作していたが、やがて「グリーンウッドワーク」など、参加者が間伐体験をして切った木を使って工作するような、森づくりにつながる内容に移行していった。

その他、「森の音楽会」や「はぐくーむ秋まつり」など、数百人規模が集まる大きな行事も毎年開催している。

これらの多種多様な行事を通じて帯広の森を周知し、そこから更に森に深く関わる人を増やしていくことが今後も求められる。



森の寺子屋



あそびの森のあしあとづくり



グリーンウッドワーク

学校等の体験学習による利用

学校等による体験学習の利用は増えてきており（表2参照）、近年は年間70回前後を受け入れている。利用する団体も開館当初は小学校がほとんどで、一部に中学校や幼稚園などの利用がある程度だったが、段々と子育て支援センターや学童、高校、大学など幅広い世代の利用が増えてきた。

2020年度からは中学校の利用が大幅に増えている。これは帯広市の施策で始まった「おびひろ市民学」の一環で、帯広市の全中学校が帯広の森の取り組みを学ぶ授業として、はぐくーむに来るようになったからである。

学校等による体験は、元々森に興味がある人々が来る行事と違い、興味の有無に関わらず授業を受ける全員が森に来ることになる。若い世代が、帯広の森やはぐくーむの取り組みに興味を持つきっかけになりうる貴重な機会として、今後も様々な世代への体験学習の受入れを継続していきたい。



小学校 間伐体験



中学校「おびひろ市民学」

表2:学校等利用実績 ※「支援」は子育て支援センターの略、「PTA」には親子レクなども含む

年度	回 数								人数
	支 援	幼稚園/保育園	小学校	中学校	高校/大学	学 童	PTA	合計	
2010	0	0	9	2	0	0	0	11	663
2011	0	3	19	3	1	0	0	26	1,519
2012	0	3	16	6	1	1	0	27	1,442
2013	0	5	24	4	0	2	1	36	2,207
2014	2	8	31	1	0	5	2	49	2,366
2015	3	6	25	2	3	5	0	44	2,236
2016	10	11	27	3	4	8	2	65	2,705
2017	10	12	26	6	5	8	2	69	3,268
2018	11	11	29	7	8	9	3	78	3,420
2019	9	8	25	7	7	7	1	64	2,946
2020	9	11	20	17	8	1	0	66	3,219
2021	7	6	25	22	7	0	0	67	3,411
2022	11	17	33	23	4	0	0	88	4,104
2023	12	16	28	17	1	0	0	74	3,945

帯広の森運動施設

帯広市 みどりの課

本稿では、帯広の森運動施設の施設概要及び利用状況について掲載する。

各施設の詳細は P121 ～ 130 に掲載。

帯広の森 陸上競技場	
所在地	河西郡芽室町北伏古東7線3番地1(運動施設区内)
敷地面積	79,333.00㎡
着工年月日	昭和55年 9月22日
竣工年月日	昭和57年12月23日
開館年月日	昭和58年 4月 1日
施設の概要	【競技場】 日本陸上競技連盟第2種公認 1周400m[8コース] (走路及びアウトフィールドウレタン舗装、 インフィールド芝舗装) 【管理棟】 鉄筋コンクリート造一部2階建 延面積1,158.88㎡ 1階～事務室・更衣室・役員室・器具室・放送室 2階～スタンド(固定席1,004人収容) 【写真判定室】鉄骨造5.94㎡ 【用具室】鉄骨造84.00㎡ 【盛土スタンド】17,500人収容 【駐車場】4,700㎡(237台収容) 〔冬季〕陸上競技場南西の特設コースをウォーキング コースとして開放

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	37,616	43,264	36,378
入場者(観覧者)数(人)	777	3,381	4,830

帯広の森 体育館	
所在地	河西郡芽室町北伏古東7線6番地2(運動施設区内)
敷地面積	5,040.00㎡
建築面積	3,388.00㎡
構造	鉄骨造一部鉄筋コンクリート
竣工年月日	昭和60年 8月 2日
開館年月日	昭和60年10月20日
施設の概要	【設備・装置】 暖房設備、照明装置、音響装置 【主要施設】 第1体育館 面積 1,403.584㎡(36.40m×38.56m) 第2体育館 面積 283.10㎡(19.00m×14.90m) 第3体育館 面積 253.30㎡(17.00m×14.90m) 走路一周150m 指導員室、医務室、幼児プレー室、会議室、 身障者用トイレ・シャワー室 【観覧席】 移動席2,448席、立見席946席 計3,394席

競技種目

バスケットボール2面、バレーボール3面、バドミントン8面、卓球22面、
庭球2面、柔道9会場、剣道9会場、銃剣道9会場、空手9会場、ハンドボール、
弓道、洋弓、フォークダンス、ボクシング、その他(サーキットトレーニング、
体力スポーツ(運動能力診断))

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	63,599	67,977	36,670
入場者(観覧者)数(人)	7,300	9,857	7,927

帯広の森 アイスアリーナ	
所在地	河西郡芽室町北伏古東7線5番地1(運動施設区内)
敷地面積	7,700.00㎡
建築面積	5,899.21㎡
構造	鉄筋コンクリート2階建 一部鉄骨造
着工年月日	昭和60年10月11日
竣工年月日	昭和62年7月31日
開館年月日	昭和62年8月30日
施設の概要	【リンク】 公認リンク(60m×30m) 永久床式(鋼管埋設) 【主要施設】 1階～事務室・ラウンジ・選手控室(4)・研修室(2)・ レフェリー室・医務室・放送室・身障者用トイレ・ 冷凍機室・電気室・倉庫・プレイヤーズベンチ(2)・ オフィシャルベンチ・ペナルティベンチ(2)・ 会議室 2階～観覧席・ホワイエ・トイレ 【観覧席】 固定席1,500人、立見席1,000人 合計2,500人

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	48,988	39,699	49,566
入場者(観覧者)数(人)	0	10,978	6,280

帯広の森 第二アイスアリーナ	
所在地	河西郡芽室町北伏古東7線5番地1(運動施設区内)
敷地面積	4,870.00㎡
建築面積	2,976.76㎡
構造	鉄筋コンクリート造一部鉄骨造
着工年月日	昭和62年6月1日
竣工年月日	昭和62年12月24日
開館年月日	昭和62年12月30日
施設の概要	【リンク】 公認リンク(60m×30m) 永久床式(鋼管埋設) 【主要施設】 選手控室(4)、放送兼監視員室、休憩室、レフェリー室、 プレイヤーズベンチ(2)、オフィシャルボックス、 ペナルティベンチ(2)、身障者トイレ 【観覧席】 立見席1,000人

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	27,254	23,069	21,085
入場者(観覧者)数(人)	0	30	1,020

帯広の森 研修センター

所在地	河西郡芽室町北伏古東7線4番地2(運動施設区内)
敷地面積	6,000.00㎡
建築面積	1,549.59㎡
構造	鉄筋コンクリート造2階建
着工年月日	昭和63年8月3日
竣工年月日	昭和63年12月26日
開館年月日	平成元年1月15日
施設の概要	【宿泊室】 定員100名〔和室7室(12畳4室・23畳3室)、 洋室3室(3人2室・4人1室)〕 【食堂】 150人 研修室50人 浴室 【トレーニング室】 108.65㎡

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	7,774	9,517	12,357

帯広の森 野球場

所在地	帯広市南町南7線56番地7(運動施設区内)
敷地面積	75,525.00㎡
建築面積	5,242.988㎡
構造	(内野)鉄筋コンクリート造2階建 (外野)盛土
着工年月日	昭和61年8月13日
竣工年月日	平成2年3月10日
開館年月日	平成2年6月24日
施設の概要	【グラウンドの大きさ】 両翼97.60m(320.0ft) センター122.0m(400.0ft) バックストップ20.0m(65.6ft) 【外野フェンスの高さ】 2.50m コンクリート壁(ラバーフェンス)1.50m ネットフェンス1.00m 【スコアボード】 磁気反転式(幅29.50m・高さ7.00m) 【主な諸室】 ホール・事務室・会議室・医務室・ ダックアウト・グラウンドキーパー室・競技役員室・ 選手控室・シャワー室・コンコース 【収容人数】 23,044人〔内野8,008人・外野15,000人・ 身体障害者用36人(身体障害者・付添人各18人)〕 【駐車場】391台(バス9台) 〔冬季〕野球場南西の特設コースをミニスキー場や 雪中パークゴルフ場として開放

利用状況

		令和3年度	令和4年度	令和5年度
夏	利用者数(人)	6,470	8,201	10,582
	入場者(観覧者)数(人)	13,215	28,966	23,905
冬	利用者数(人)	2,587	2,237	2,241

帯広の森 市民プール(スインピア)

所在地	河西郡芽室町北伏古東7線6番地2(運動施設区内)
敷地面積	15,000㎡
建築面積	5,991.77㎡
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造地上2階、地下1階
着工年月日	平成7年6月20日
竣工年月日	平成8年9月17日
開館年月日	平成8年9月28日
施設の概要	【50mプール】 水域50m×25m 水深1.2m～1.4m タイル仕上げ、(財)日本水泳連盟による公称50m 競泳プール公認、一部可動床採用 (10m×25m水深0.8m～2.5mFRP製) 【児童用プール】 132㎡ 水深0.8m FRP製 【幼児用プール】 94㎡ 水深0.5m FRP製 【その他施設】 更衣・ロッカー室(男女各360人分)、採暖室、 ランニング走路(1周230m)、会議室、監視・放送室、 救護室、エレベーター、観覧者席(509席)、事務室他

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	82,551	102,618	113,661
入場者(観覧者)数(人)	3,422	2,940	4,325

帯広の森 弓道場・アーチェリー場

所在地	河西郡芽室町北伏古東6線8番地1(運動施設区内)
敷地面積	23,400㎡
建築面積	1,085㎡
構造	鉄骨造平屋建
着工年月日	平成8年9月17日
竣工年月日	平成9年8月29日
開館年月日	平成9年9月1日
施設の概要	○弓道場 【射場】 近的(12人立)、遠的(6人立)、室内近的(6人立) 【主要施設】 更衣室(男・女)、控室、近的的場棟、遠的看的所 ○アーチェリー場 【的】 屋外短距離固定的(6的) 屋外長距離固定的(3的) 屋外的36的設置可(夏期間) 【主要施設】 記録集計室、審判控室、器具庫 ○その他 事務室、研修室、男女トイレ、湯沸室

利用状況

		令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	弓道場	21,181	25,347	27,614
	アーチェリー場	1,030	2,033	1,932
入場者(観覧者)数(人)		58	60	708

帯広の森 テニスコート

所在地	河西郡芽室町北伏古東8線7番地1(運動施設区内)
敷地面積	39,000㎡
建築面積	コート面積 16,296㎡
構造	砂入り人工芝
着工年月日	平成10年3月27日
竣工年月日	平成11年10月12日
開館年月日	平成12年4月30日
施設の概要	【コート】 砂入り人工芝 20面(内夜間照明10面) 硬式・軟式兼用 フェンス 564m 【収容人員】 盛土芝生スタンド 約6,000人 【クラブハウス】 鉄筋コンクリート造 一部2階建 身障者駐車場7台 411.8㎡ 事務室、会議室2室、シャワー室、男女トイレ、 身障者用トイレ、更衣室、物品庫、ロビー

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	42,751	68,207	69,311
入場者(観覧者)数(人)	685	4,410	5,590

帯広の森 球技場

所在地	河西郡芽室町北伏古東8線5番地1(運動施設区内)
敷地面積	47,002㎡
球技場面積	30,240㎡
構造	サンド工法
着工年月日	平成12年6月19日
竣工年月日	平成14年3月15日
開館年月日	平成14年7月
施設の概要	【サッカー公式戦】 大人使用時2面(105m×68m) 小人使用時4面(68m×50m) 【ラグビー】公式戦2面(144m×70m) 【観客席】固定席400人 立見席8,000人

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	7,145	6,656	7,448
入場者(観覧者)数(人)	769	5,238	11,286

その他の施設

●帯広の森 平和球場(1面)

所在地	帯広市南町南8線46番地1
-----	---------------

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	2,703	3,283	4,942

●帯広の森 運動公園PG場(18ホール)

所在地	河西郡芽室町北伏古東7線
-----	--------------

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	27,020	32,660	32,760

●ふるさとの森PG場(18ホール)

●林間PG場(18ホール)

帯広の森 スポーツセンター

所在地	河西郡芽室町北伏古東7線6番地1-1(運動施設区内)
敷地面積	11,883㎡
建築面積	1階3,676㎡ 2階651㎡ 延4,327㎡
構造	鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・2階建
着工年月日	平成12年8月10日
竣工年月日	平成13年9月28日
開館年月日	平成13年10月6日
施設の概要	◎年間を通して利用できる 多目的屋内体育館 ○冬期利用種目(アイスアリーナ) アイスホッケー・フィギュアスケート・ スピードスケート・ ショートトラックスピードスケート ○夏期利用種目(体育館) インラインホッケー・ インラインスケート・バドミントン・ フットサル・バウンドテニス・ 社交ダンス・卓球等

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	25,890	27,352	29,051
入場者(観覧者)数(人)	4,331	6,971	7,843

帯広の森 屋内スピードスケート場 (ネーミングライツ:明治北海道十勝オーバル)

所在地	河西郡芽室町北伏古東7線7番地3(運動施設区内)
敷地面積	104,900㎡
建築面積	18,088.18㎡
構造	鉄骨造一部鉄筋コンクリート 2階建
着工年月日	平成19年 6月25日
竣工年月日	平成21年 7月31日
開館年月日	平成21年 9月 1日
施設の概要	【リンク】 標準ダブルトラック・Cタイプ リンク1周400m×幅15m 【中地多目的広場】 フットサル3面、テニス6面 【ランニング走路】 1周約470m 【健康増進多目的室】 【観覧席】 合計3,000人収容 固定席1,000人 立見席2,000人 【駐車場】 318台収容(身障者用6台)

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
利用者数(人)	164,803	165,953	171,543
入場者(観覧者)数(人)	14,080	12,025	41,520

沿革

十勝地域における住民の国際理解の高揚を図り、国際親善交流及び国際協力を推進するとともに、地域住民と外国人との交流を図る場を提供するため、平成8年4月に、JICA 北海道（帯広）に隣接して設置された。

「世界のともだち」や「森のハロウィーン」、「国際フェスタ」をはじめとするさまざまな国際交流イベントの実施のほか、十勝管内の主要な国際交流施設として日頃から市民や在住外国人に利用されている。

平成28年度には、森の交流館・十勝、JICA 北海道（帯広）、十勝インターナショナル協会の設立20周年を記念し、帯広商工会議所、帯広畜産大学とともに組織した実行委員会により、記念事業を森の交流館・十勝及びJICA 北海道（帯広）、帯広畜産大学で実施した。

施設概要

所在地	帯広市西20条南6丁目1番地2 (帯広の森第5ブロック内)
構造	木造(一部鉄筋コンクリート造)
建築規模	地上2階、地下1階、茶室棟、倉庫棟
敷地面積	約6,300㎡
建築延べ面積	1,708.57㎡ 地階 423.51㎡ 1階 1,042.37㎡ 2階 119.04㎡ 茶室棟 42.65㎡ 倉庫棟 81.00㎡
施設の概要	多目的ホール、ウィンターガーデン、調理室、図書資料室、展示コーナー、茶室他

利用状況

		令和3年度	令和4年度	令和5年度
有料施設利用者	件	455	514	633
	人	8,978	13,338	14,178
一般入館者	人	5,692	7,677	9,910
合計	人	14,670	21,015	24,088



世界のともだち



森のハロウィーン

- 多目的ホールではミニバレーやバドミントン、卓球等を楽しめます。

一般利用料金	大人	170円
	高齢者	80円
	高校生	80円
	中学生以下	無料

- 図書資料室では、世界の絵本を読むことができます。また、世界のボードゲームを貸し出しています。

沿革

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、国内に拠点を設置し、開発途上国からの研修員受入、大学や民間企業等による国際協力活動の支援、市民向け国際理解教育支援、ボランティア事業の募集、多文化共生支援等を行っています。

JICA 北海道（帯広）は道東における国際協力の拠点として、平成8年4月に設置されました。産官学を始め様々な団体と連携し、農畜産業や自然環境保全分野を中心に、地域の技術や特性を生かした協力を進めています。

施設概要

所在地	帯広市西20条南6丁目1番地2 (帯広の森第5ブロック内)
構造	鉄筋コンクリート造一部鉄骨造
建築規模	地上3階、地下1階、塔屋1階
敷地面積	5,789.78㎡
建築延べ面積	4,418.32㎡
施設の概要	宿泊室(48室※内ツインルーム2室)、 セミナールーム(4室)、オリエンテーションルーム、パソコンルーム、図書資料室、ラウンジ、レストラン、その他

利用状況

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
一般来館者(人)	1,028	4,233	6,398
レストラン利用者(人)	0	2,427	5,164
研修員(人)	262	343	376
合計	1,290	7,003	11,938

※令和3年度は新型コロナウイルス感染拡大によりレストランを休館したため、利用者実績なし。

帯広の森の構想と市民の参画を学ぶ

JICAで行っている課題別研修「地域住民の参加による持続的な森林管理」研修では毎年、「帯広の森・はぐくむ」で、森づくりについて学んでいます。令和5年度にはアジア、アフリカ、南米、ヨーロッパ、大洋州10ヶ国の森林官や専門家計10名が、帯広の森の歴史や構想について学んだあと、森を散策しながら独自の森林生態系や保全・管理方法、

そして子どもたちの自然教育の場になっていることについて説明を受け、森づくりに携わる市民ボランティアの方々と意見交換を行っています。

研修員からは、「高齢のボランティアの方々が、森から受けた恩返しのために自発的に働き続けていることに感銘を受けた。自国でも豊かな緑地帯づくりを進めるとともに、一人でも多くの住民を巻き込んで森林再生に取り組みたい」などの声もあり、帯広の森の取り組みから多くの刺激を受けています。



また、森づくり活動団体である「エゾリスの会」会長の三日市氏からは「研修員の皆様は国も文化も違う中、帯広の森の活動について自国に持ち帰り活用できないかと真剣に質問があり、また私たちの活動に対して違う視点からのアドバイスも頂いて、実り多い意見交換会でした」とお話しいただきました。



帯広市都市農村交流センター(サラダ館)※帯広の森区域外の隣接施設 ____ 帯広市 農政課

沿革

自然と土、農業とのふれあいの場として、「地域資源整備活用農業構造改善事業」及び「構造政策推進モデル集落整備事業」を導入し、平成4年度に供用を開始した。

施設概要

所在地	帯広市西22条南6丁目6番地
主要施設等	農園面積:23,000㎡ 市民農園:18,000㎡ 学童農園:5,000㎡ 都市農村交流センター「サラダ館」:1棟 874.36㎡ ふれあい広場:5,000㎡ 温室:3棟 606.8㎡
サラダ館概要	開館時間:午前9時～午後10時 (休館日:水曜日、年末年始) 主要な施設:農産加工室 (各種調理加工作業など。ガスコンロ、オープン、ホイロ、大釜あり) 工芸加工室 (手芸、工作、小規模集会など) レストラン その他 (研修室、集会室)



イベント、市民農園、レストランなど

帯広市都市農村交流センターは、農業に対する理解促進や都市と農村の交流促進を図ることを目的として開園しました。

市民の方へ貸付している市民農園、子どもたちのための学童農園は、自然と土、農業とのふれあいの場として多くの方々にご利用いただいています。

また、7月中旬～10月上旬までの毎週火曜日には「軽トラ市」、9月には「青空市」、11月には「晩秋野菜市」が開催され、地元の農家の方などが、採れたての新鮮野菜を持ち寄って自ら販売しており、生産者と消費者の交流の場としても活用されています。

さらに、じゃがいも収穫会や味噌作り教室、そば打ち体験会などのイベントを毎月開催している他、地場農畜産物をメニューに取り入れたレストランも併設しています。

利用状況

	令和3年度		令和4年度		令和5年度	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数
研修室	287	4,372	367	6,123	355	6,506
集会室	294	4,504	367	6,123	355	6,506
農産加工室	84	648	95	679	90	689
工芸加工室	87	771	147	1,300	142	1,376
小計	752	10,295	976	14,225	942	15,077
ふれあい広場	0	0	30	587	11	504
合計	752	10,295	1,006	14,812	953	15,581
	区画数		区画数		区画数	
市民農園	162		159		138	
	団体数	人数	団体数	人数	団体数	人数
学童農園	12	449	19	744	22	1,677



ジャガイモ収穫

青空市

園路等

園路・広場・駐車場・トイレ等は昭和 57 年から整備が開始され、帯広の森全域のうち東側から順次整備されてきた。

園路では、帯広の森に来た人々の散歩やジョギング、通学のために自転車で通る学生の姿がみられるほか、犬の散歩、ごみ拾いをする人など、多種多様な使われ方をしている。



園 路

園路の各所には四阿（あずまや：公園などに設けられる、柱と屋根だけの休憩用または眺望用の小さい建物）やトイレが整備されており、帯広の森内を散歩する方などが、休憩用として利用している。



四 阿

また、一部のトイレ付近には水飲み場も設置している。



飛行場周辺駐車場のトイレと水飲み場

もりの山

平成 28 年に完成したもりの山は、頂上の展望広場から市街地や令和 6 年に国立公園に指定された日高山脈を眺望でき、夜間は階段をライトアップし、夜景を見ることができる。

日頃から、散歩やジョギングをしている人が頂上に上り風景を眺めていたり、部活動の生徒が階段を利用してトレーニングをしているほか、冬期には斜面を利用してソリ滑りをしている親子の様子などがみられる。

また、もりの山周辺にはエゾヤマザクラを植栽しており、春先には桜を見ることができる。なお、「もりの山」という名称は、近隣の小学生を対象に募集し決定した。



もりの山

第3章

「帯広の森」を支える市民運動と行政



第1節 市民活動

「帯広の森」出会いと思い出

帯広の森市民植樹祭実行委員会 最後の委員長 高橋 猛文

我が家は祖父の時代に岐阜県から十勝に入りました。家業として木材に関わることを生業としてきました。父の代に樹木の伐開製材だけでなく、地場で生産される木材を加工して家具建具を作るようになりました。明治から昭和の30年代までの建具はアルミ製品とか鋼製、樹脂の家具建具は無く、建物の窓・ドアなどの建具はすべて地場の木材で創られていた時代です。

私は東京での学生生活を終えて、帯広に戻り、父の家業を手伝うようになりました。

ちょうどその頃、帯広の森を創り始めた時代でした。私はその頃ローターアクトクラブに入っていました。市民植樹祭が始まる頃より市内の様々な団体が参加するようになり、ローターアクトクラブもその一員として参加するようになりました。帯広市教育委員会がこれからの街創りの主体となる小学生にも参加させたいと相談があり、市内の教育関係者、福祉団体、事業者団体などが一つになって「森の少年隊」を創ろうと云うことになりました。そして、その実務を担う団体として、ローターアクトクラブが担当することになりました。私も実務としてお手伝いをするうちにすっかり「森の少年隊」活動にのめり込む様になりました。

結局ローターアクトクラブを離れてからも、この活動のお手伝いをするようになりました。

曾祖父の時代の十勝は、原始の森を切り拓き畑地を創り、街を創ってきました。祖父、父の時代の十勝はようやく人・物が集まり急速に地域が出来、町が作られた時代です。木材の需要が増えた時代です。当時の建物は地域で生産される素材で作られていました。多分ひとが生きる原則である、衣食住のうち、衣の素材は本州から持ってきてても加工は地場です。食と住は地場の素材を加工し地場で消費し、生産された農産物は地域外へと移出され、十勝経済の骨幹となってきました。

その時代を忘れないために帯広の森は存在している。また新しい次代を創るためにも、帯広の森は存在していると思います。

帯広の森植樹祭実行委員会は長い間、郷土史家の棚瀬善一さんが委員長としてお務めされていましたが逝去されました後、私が委員長を務めさせていただきました、様々な方と交流をさせていただきました事は、私の人生にとりましても家業にとりましても有難いことでした。

最後に「森の少年隊」創立時より、一生懸命に少年隊の活動に取り組み、人生を掛けて森の少年隊活動を成し遂げた畠山茂さんのご冥福をお祈りし、私の「帯広の森」出会いと思い出と致します。



平成14年(第28回)市民植樹祭

元市民育樹祭実行委員長 林 光繁

帯広の森の植樹祭は1975（昭和50）年6月1日にスタート、昨年で50周年になった。第1回の実行委員長は父、林克己（元十勝毎日新聞社社長）が務め、その後、私が育樹祭の実行委員長を務めた経緯があるので、人ごとではない。

最後となった第15回育樹祭でさらなる森の成長を願い、作業を行った参加者（2005年10月16日撮影）以来、植樹祭は30回の2004年で終了、延べ14万8000人が参加、約23万本の木が植えられた。木の成長と共に管理が必要となり、1991年から育樹祭を開き、間伐、枝払いを展開したが、2005年に終了、現在は森づくり協議会（磯野照弘会長）が見守っている。



最後となった第15回育樹祭でさらなる森の成長を願い、作業を行った参加者
（2005年10月16日撮影）

結果的には、十分な管理が行われず、中心施設の「帯広の森はぐくむ」周辺が市民の憩いの場となり、公園の機能を果たしているに過ぎない。文字通り「帯広の森」であり、「公園」とは言えない状態。住民や観光客に「帯広の公園はどこ」と問い掛けても、「緑ヶ丘公園」「すずらん公園」と返ってくるだけだ。

吉村博元帯広市長が、「近代的田園都市」をまちづくりの目標に掲げ、オーストリアの「ウィーンの森」に触発されて1970年にスタートした帯広の森構想。当初の志は着手、終了したが、吉村市長は「ウィーンの森のように、市民が利用し、親しむ場であり、誇りとする公園をイメージした」と思うので、私はまだ「完成していない」と思う。

世界的には国民が誇りとする公園が数多くある。その代表例として、私が見たことのあるボストンと

トロントにある通称「エメラルドネックレス」と言われる公園を挙げたい。両市の公園は、中心市街を「ネックレス」のようにぐりりと囲んでいる。市民は東西南北どこへ向かってでも公園に突き当たり、季節ごとの花、動き回るリスを見ながらベンチに腰掛け、くつろげる。

ボストンのガーデンは有名な野外演奏会が開かれる「ボストンコモン」だけではない。西側には1837年パブリック・ガーデンが造られ、コモンウェルス・アベニュー、リバーウェイ、オルムステッド・パーク、ジャマイカ・ポンド、フランクリン・パークと、つながり、「エメラルド・ネックレス」を構成している。中には、初代大統領・ジョージ・ワシントン像、つり橋、花壇、遊歩道、噴水等の施設が切れ目なく存在している。

カナダのトロントもボストンに劣らず美しいガーデンが、マチを取り囲む。ボストンとの違いは、マチに隣接して北米五大湖の一つ、オンタリオ湖があることだ。

ゲージ・パーク、ジャック・ダーリン・メモリアル・パーク、ヴィクトリア・パーク、リバーサイド・パーク、レークフロント、プロムナード・パーク、ウォータールー・パーク、ライオンズ・バレー・パーク…29箇所の公園が連なり、ネックレスを成立させている。

どの公園にも人があふれ、子供たちの声が聞こえてくる。野球場、サッカー場、テニス・コート等スポーツ施設も公園内外にあるので、活気にあふれている。

自治体が公園をマチの最重要施設として市民の憩いの場に必要施設を建設して管理している。帯広の森は、掛け声だけで、十分な施設の建設も管理も行われていない。

不思議なことだ。これだけ緑が豊かで景観の良い場所を市当局が放置状態にしておくことは…。406ha超の場所を全部整備するのではなく、ボストンやトロントのように、多くの公園をネックレスのようにつないでいく計画を立てられないだろうか。何か所かの小公園を公費建設するか、場所を民間に提供して、名称に個人名をつけることを許す（期限付き）と、スポンサーする人も出てくるはずだ。

50年を機に、知恵を集めて「帯広の森」を、市民の憩いの場に作り変えてもらいたい。

森の少年隊～ 40 年間の活動をふり返って～

畠山 八重子

昭和 52 年結成された当初、定員 40 名で隊員を募りましたが、応募数が上回り 58 名でのスタートとなりました。次の年には新たな隊員 56 名が加わり 114 名となりスタッフを加え、貸切バス 3 台で移動していたことを思い出します。

この 50 人を超える新隊員はこの 2 年だけ、その後は新隊員 45 名が最高で、年々減少を続け昭和 63 年(活動から 12 年)には総隊員数が過去最低の 26 名になってしまいました。

この頃に事務局長の畠山茂(私の主人)が十勝毎日新聞の取材を受けた記事がありました。

——会員減についてはスポーツ少年団、さらにはファミコンといった外的要因を中心に考えていましたが、それがすべてではなかった。指導態勢にも甘さがありました。指導員はすべてボランティアのため、責任の所在がはっきりしていないということもあり、内容が今一歩でした。数年前にこうした欠点に気づき、現在は活動内容をより楽しく、テーマのしっかりしたものにしていくと見直しを図っているところ です。

主な活動は、緑のボランティアと集団生活で従来と変わりませんが、内容に楽しむという要素をもっと盛り込んでいきたい。自然の中でもっと遊ばせてやる——ということをさらに追求していきたい。現在、子どもたちは親元を離れて年間 8 泊するわけですが、これは貴重な体験になります。一つ一つの行事を徹底して見直し、マンネリにならぬよう努力したい。現在、隊員数は減りましたが、全員の顔と名前が一致し、行事への出席率も上がりました。このぐらいの人数が活動していく上では適度なものと感じています。(平成元年 3 月 23 日掲載)——と今後の意気込みを語っていました。

その後、隊員数が増えた年もありましたが少子化もあってか、だんだん減少が目立つようになり、行事等にも困難が生じるようになってきました。

このころから森の少年隊の将来を考えるようになりましたが、森の少年隊をこよなく愛してきた主人は「入隊したいという子どもがいる限り続けたい」と頑張って活動を続けてきました。しかし、隊員の減少、後継者不足、主人自身の体調不良などから、

結成 40 年目を迎える平成 28 年度をもって森の少年隊の活動を終了すると決心しました。

人生の半分以上を森の少年隊と過ごした主人にとっては、健康であればまだまだ続けたかったのだと思います。森の少年隊をやめたその年の 8 月に体調を崩し入院。退院後の自宅療養では時折「今日少年隊か? おにぎり握らなきゃ」が目覚めの第一声。「また少年隊の夢見てた」主人の原動力は森の少年隊だったのだと実感。

本来であればこの「帯広の森 50 周年記念誌」の原稿も主人が引き受けるところではありますが、令和 4 年 9 月に他界。私が代わってエピソードなどを書かせていただきます。

家族みんなでボランティア

森の少年隊は民間ボランティアのため、活動費用は隊費、助成金や補助金、寄付金などでまかなっていました。

隊費は 1 ヶ月 1,000 円。これは主人のこだわりでもあり 40 年間変わることはありませんでした。そのため助成金や補助金の申請・報告書作りを右手人差し指 1 本で、キツツキのようにパソコンを使い奮闘していた姿を思い出します。

活動日数が年間 24 日とはいえ、年間行事が決まるとバスの手配、施設会場の申し込みに始まり行事の事前準備、キャンプなど大きな行事の片付け、事務的なことなどを含めるとかなりの日数になりますが、子供たちの生き生きとした楽しそうな笑顔が励みになっていました。

私たちの姿を見て育った娘も準備の手伝いやアイデアを出してくれたりと戦力の一人でした。もう一人の戦力は同居している私の母です。ボケ防止にと行事案内の封筒のあて名書き、日中の出欠連絡の電話番号を自分から進んでやってくれました。

そして、もちろん行事当日は、ジュニアリーダー、リーダー、指導員が何よりも大きな戦力でした。

新聞記事に主人のこんな言葉が載っていました。——森の少年隊では、学校では得られない、大人を含めた異年齢との交流、他校の子供との交流、野外活動で土や草のにおいを経験すること、それらすべてが子供にとっては貴重なものになっているはずです。卒隊後もジュニアリーダー(中学生)、リーダー(高校生)、指導員として活動にかかわりを持っている子供も多い。将来的には彼らが私の後継者として

隊の活動を支えていってくれるものと期待しています。】ですが、残念ながら後継者のめども立たず終了することになってしまいました。

隊員経験者の指導員であっても、行事だけでなく色々な作業までとなると仕事との両立は難しく、後継者のなり手がいなかったのと同時に後継者を育て、作り上げる事が出来ず責任を感じています。

主人にすれば、まだ自分は頑張れる。後継者はもう少し先のことと思っていたのかもしれませんが。

『自然の大切さを楽しく学ぶ』

森の少年隊の目的と4つの柱

- ①自然観察を通じて、身近な自然を知る
- ②植樹や育樹、桜並木の造成・清掃など緑化活動を行う
- ③自然と触れ合うことで、自然からの恩恵と大切さを学ぶ
- ④宿泊やキャンプ等の共同生活体験により仲間との絆を高める

この『自然の大切さを楽しく学ぶ』という目的は指導員研修の中で、KJ法（カードや付箋を使って情報を整理し、問題解決や新たなアイデアの創出に役立てる手法）を使い時間をかけ、森の少年隊が発隊して手探りで始まった指導体制も15年近くたってやっと目的が明確になりました。

隊員は、自然を知り、緑を育て、自然と触れ合い、共同生活体験を繰り返しながら自然のやさしさや大切さを感じ、仲間たちとの絆を高めている。このことは将来、地球を愛し、民族や隣人を愛する心や生命の大切さに必ずつながっていくものと信じ指導にあたっていました。

その指導をしている我々は社会教育をしているのだと自負していた主人でした。

今まで森の少年隊では数々の表彰を受けてきましたが、平成25年に国土緑化推進機構から「緑の少年団育成成功労賞」を森の少年隊指導委員会がいただくことができ長年続けてきた甲斐がありました。

森の少年隊の指導員は、卒隊生などで構成される指導委員会（中学生・高校生・大学生・社会人）が隊員の主体性を促す指導や安全で円滑的な運営を行って来ました。

中学生（ジュニアリーダー）、高校生（リーダー）は先輩リーダーや指導員の隊員への関りや指導を見

ながら、憧れの気持ちを持ち見て聞いて学んでいました。

長年指導員をしていると隊員との年齢の差は大きくなり、体力的にも厳しさを感じることもしばしば。そんな時、若い力には本当に助けられ、ありがたい存在でした。

入隊は一生に一度

入隊は、新年度小学校5年生になる児童が対象で3月に説明会、受付を行い入隊を決定し途中からの入隊はできず、隊員期間は小学校卒業までの2年間。

説明会には親子で来る場合が多いのですが、友だち数名での参加もありました。



平成28年森の少年隊入隊式

説明会の中で主人は「森の少年隊に入隊するには一生に一度のこの時しかありません。止めるのはいつでも自由です。つまり入り口は狭く、出口は広いんです」そう言って、心配であれば最終的には4月に行われる最初の行事、新・旧隊員の顔合わせの合同宿泊行事に参加して決めても良いことを伝えていました。

親御さんは入隊を望んでいるが子どもの気が進まない。集合場所までの送迎が難しい。また、性格、病気、家庭の事情など心配なことに対しては本人の気持ちを優先し、親御さんとよく話し合い入隊を決め、入隊してからでも安心して参加できるよう情報交換を続けていきました。

また、指導員の多くが隊員経験者のため年齢も近く隊員の気持ちを理解でき話しやすい存在であることが安心につながっていたようでした。

隊員は、同世代の友だちだけでなく、様々な世代の人と交流し繋がりを作ることができるのも一つの魅力だったようです。

時代遅れのキャンプ

森の少年隊のキャンプは、隊員・指導員を含めて班編成をし、自分たちでテントを建て、火起こしをし薪を燃やし飯盒でご飯を炊く。食事作りはもちろん準備から片付けまで班ごとに役割分担を決めて行っていました。「この便利な時代に薪でご飯を炊くの？すべて手作り？時代遅れのキャンプをしているね」と言われたことがありました。経験・体験から学ぶ大切さを知ってもらうためあえて便利ではない少し大変さを感じるキャンプを行ってきました。

軍手をはいているから大丈夫と思ったのか、軍手で直接火のついた薪に触れて熱いと気づく。煙で目が痛いとしねの来ない方へ移動すれば良いことを知る。

飯盒を焦がしてしまうときれいにするまでに時間がかかり、自由時間が無くなる。そうすると次からは焦がさないように気を付け真剣に取り組む。上手く炊けると達成感を味わうことができ、チームワークがますます良くなり、誰かがやってくれるではなく自分がやるに変わってくる。

このように体験があるからこそ失敗、成功を繰り返しながら学習し学ぶことができます。体験がなければ学ぶ機会もありません。便利さばかりを追求するのではなく、不便さや大変さを感じながら考え体験し乗り越えていくことが、自分の力になり、生きていく力になると信じて行ってきました。

3泊4日のキャンプでは2日目の夕食と3日目の朝食の献立を班ごとに考え決められた金額で買出しに行き、自分たちで作るのですが、餃子を作るのに皮から手作りには驚きました。

——ある班とのやり取り

「この班は何作るの？」

「手巻き寿司！」

「手の上にご飯とネタ乗せて巻くんだね」

「違うよ。海苔に巻くんだよ」

「大事な海苔買ってたっけ？」

「えっ！あ～忘れた～。どうする？」

予備であった海苔を渡してあげるとみんなで頭を下げて「ありがとうございます」ホッとしていたようでした。手巻きは生ものではなく、チーズやウィンナーなどよく考えられていました。

冷やし中華を作った9人の班、ストレートのたれ

小瓶1本のみ。絶対足りない量に「大丈夫！」と返答。夕食が終わり「たれ、どうだった？」と聞くと「ピッタリだった！」とみんなが同じ返答。

自分たちの力で協力して作ったものは、どんなものであっても最高なのでしょうね。私から見たら最高の仲間の姿だなあと思いました。

キャンプといえば、忘れられない市役所と合同で行った100人を超えるキャンプ。定員を超える応募に主人が「全員受け入れよう」この一言に市役所の方たちはホッとしたようでした。岩内自然の村で森の少年隊が前泊し2日目から合流で行いました。

市役所の職員の皆さんにも指導員になってもらい2泊3日のキャンプが無事終了した時は、ガッツポーズでやったー！って感じでした。

豚汁に使うごぼうのさがき、やってもやっても終わりが見えなかったこと、雨の中で遊ぶ子どもたちをびしょ濡れになりながら写真を撮っていた市役所職員のこと、バンガローが暑すぎて体育館で寝たこと、今でも鮮明に思い出されます。

楽しく学ぶ

隊員の一番人気の行事は宿泊です。宿泊行事を増やしてほしいと言われるほどでした。宿泊での楽しさは、友だちと一緒に入浴や夜遅くまでのおしゃべりのようです。

児童会館での宿泊は午後10時就寝。男子は午後11時の見回りには寝ている子が多いのですが、女子は廊下までベチャクチャ聞こえているのにドアを開けるとピタッと話し声が止まってしまう。寝たふりが上手ですが「明日、起床時間守ってね」と声をかけると「は～い」と返事。寝てないのバレバレ。

ジュニアリーダー、リーダーも同じ部屋に宿泊しているので見回りの度に「寝るよ」と声をかけ大目に見ていました。

日高少年自然の家での3泊4日では、日中の活動量が多く、朝も早いため2泊目からは就寝時間になるとほとんどの子が眠りについていました。

行事の中では、作業的なものは出席率もあまり良くなかったため、午前中に作業を行い午後からは楽しいことを取り入れるようにしました。

暑い日の桜並木のゴミ拾いには、主人がポケットマネーでアイスの差し入れ。大喜びでした。

楽しく学ぶ、楽しく参加できるように、森の少年隊オリジナルの行事（ゲーム）を作りました。クイ

ズ番組を見ては「これ使えないかな？」とアレンジして取り入れていました。

○植物クイズ教室（主人が撮影した野草の花の写真を使った神経衰弱などで名前を調べる）

○森の少年隊トライアスロン（グループの知力・体力・時の運でチームゲームを競う）

○ミステリークイズ（クイズを楽しみながらチャンピオンを決定）

思い出が次々と

○緑の羽根募金活動の際4月の末だというのに寒くて寒くてホッカイロを買いに走ったこと

○4月29日はぐくーむで入隊式をしている時に屋根からドドーと雪が落ちてきて驚いたこと

○苗圃で採れたキノコで作ったキノコ汁がおいしかったこと

○自分たちが掛けた巣箱を調査していると突然モモンガが顔を出し、隊員たちは大喜び。それからというものの巣箱調査＝モモンガ探しに

○隊員が少なくなってきたからの植樹祭では、他の団体が昼食を食べているのを横目で見ながら指導員も必死で植樹したこと

○苗圃で必ずこのカシワの木は1期生が植えたものと自慢げに子供たちに伝えていたこと。でも子供たちの楽しみはリンゴや梨、栗を拾うこと

○はぐくーむのおまつりで豚汁を作ったこと

○子供たちが川で遊んでいる最高の写真を撮ろうとカメラを持った指導員が転んでしまい、人もカメラもずぶ濡れになってしまったこと…などなどたくさん。

幸せな出会い

40年間の隊員数は1,000人近くになります。

隊員経験者の心の中に森の少年隊での思い出が一つでも残っていてくれたら嬉しいです。

10歳で出会った子どもたちが社会人になり、キャンプなど大きな行事には東京からも参加してくれる森の少年隊大好き人間がたくさんいます。

私もこの森の少年隊に関われたこと、たくさんの子どもたち、優しく思いやりがある頼もしい人たちと出会うことができ幸せでした。

最後になりますが、森の少年隊活動30年目の主人の思いが詰まった新聞記事を見つけましたので一部を紹介したいと思います。

次世代への手紙

～森の担い手から100年後の子供たちへ～

自然の大切さと他人を思いやる優しい心。それは、言葉でいくら教えても身に付けられるものではありません。自然と触れ合い、自然からの恩恵を知り、緑を育て、共同生活の体験を培う中で学んでいくものです。

森を育てることは人を育てること。それは、次代の帯広のまちづくりにほかなりません。帯広の森は生命の大切さを教え続けてくれる「生きた学校」です。森の中で30年。子供たちを指導することで私が学んだ、君たちへのメッセージです。

（十勝毎日新聞 平成17年12月6日掲載）

森の少年隊40年間の活動にご支援・ご協力いただいた多くの関係者の皆様に心より深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



平成9年度(第23回)市民植樹祭 植樹宣言

帯広市 みどりの課

協議会概要

帯広の森・はぐくむの整備を契機に、市民協働の森づくりをさらに進めるため、平成21年度に「帯広の森づくり協議会」を設立した。同協議会は、森づくりに関わる市民、事業者及び帯広市で構成し、森の育成管理や利活用の方向性などについて、これまでに延べ72回開催した。（令和7年3月末現在）

設置目的

帯広の森の適切な育成管理及び利活用の促進を図るとともに、市民協働の森づくりを進めるため、森づくりに関わる市民、事業者及び帯広市が参加して、帯広の森の育成管理や利活用などの検討、意見交換、連絡調整を行うもの。

協議事項

- 帯広の森の育成管理に関する事
- 帯広の森の利活用に関する事
- 帯広の森・はぐくむの管理運営に関する事
- 帯広の森におけるボランティア活動に関する事
- その他帯広の森の森づくりの推進に必要な事項に関する事

設置年月日

平成21年9月1日

歴代会長 ※任期2年

平成21年9月～平成23年8月

畠山 茂（森の少年隊）

平成23年9月～令和6年1月

三日市 則昭（エゾリスの会）

令和6年2月～

磯野 照弘（森の回廊@十勝）

活動経過

これまで、年1～10回程度開催し、帯広の森・はぐくむの名称選考、帯広の森 森づくりガイドラインの作成、40周年記念ティーチ・インの開催、帯広の森築山（もりの山）の名称選考、帯広の森の育成管理に関する協議、50周年記念事業に関するもののほか、森づくり活動団体による活動発表会の実施、参考林地への視察研修を実施した。

（詳細はP96を参照）

構成団体

①帯広の森づくり活動を行うもの

○8団体

⇒各団体は、市民団体による帯広の森づくり活動の促進及び支援に関する要綱により帯広市から承認された内容に基づき、森づくり活動を実施している。（P97～112にて紹介）

②帯広の森に関する業務を受託しているもの

○株式会社ケイセイ（帯広の森指定管理者）

○帯広畜産大学（帯広の森植生調査受託）

③その他帯広の森づくりに関与が深いもの

○十勝造園緑化建設業協議会

○帯広クロスカントリースキークラブ

④帯広市都市環境部環境室みどりの課



H21.9.1 第1回帯広の森づくり協議会

開催年度	回数	内 容
H21	3	・（仮称）帯広の森市民活動センター名称選出、OP イベントについて ・施設見学（帯広の森・はぐくーむ）
H22	6	・森づくりに関する計画の見直しについて ・十勝飛行場周辺の今後の森づくりについて
H23	12	・第 62 回北海道植樹祭 in おびひろについて ・オオアワダチソウ駆除、防除について ・帯広の森苗圃エリアの利活用計画について
H24	12	・バス学習（前田一步園） ・帯広の森造成計画図と今の帯広の森を見比べる ・十勝飛行場周辺支障木伐採について ・帯広の森整備計画、林分台帳について
H25	9	・バス学習（九州大学演習林） ・帯広の森現地踏査（帯広川左岸：西 24 条南 4 丁目付近） ・築山周辺の園路整備について
H26	9	・バス学習（新田牧場、大正カシワ林、農高カシワ林、帯広の森 S59,61） ・森づくりガイドラインについて ・間伐材の利活用方法について ・パークゴルフ場の管理について
H27	5	・バス学習（十勝三股地区） ・森づくり協議会の方向性や活動内容について ・帯広の森づくりガイドラインの活用法について ・帯広の森築山について、名称選考
H28	3	・バス学習（東京大学北海道演習林） ・森づくり活動計画事前確認書による各活動団体との協議内容 ・帯広の森づくりにおける担い手の発掘と育成について ・帯広の森の育成と管理について
H29	4	・バス学習（前田一步園） ・帯広の森の理念の確認とワークショップ ・はぐくーむ連携事業、その他育成管理について
H30	3	・バス学習（石井山林） ・間伐の課題に関する今後の取組み、間伐計画（短期）について
R1	3	・バス学習（農高カシワ林、R1 間伐予定地、帯広の森サポーターの会活動区域） ・林分台帳、指定管理区域の拡大について
R2	-	（新型コロナウイルス感染症により開催なし）
R3	1	・今後の協議事項等について
R4	-	・帯広の森づくり勉強会（帯広の森の歴史を学ぶ、帯広の森植生調査からみる森の変化）
R5	1	・帯広の森づくり勉強会（特定外来生物（アレチウリ）について）
R6	1	・帯広の森づくり勉強会（帯広の森をつなぐもの） ・帯広の森の利活用について

森づくり活動団体 エゾリスの会

里山をつくろうプロジェクト企画・運営担当／
モニタリングサイト1000帯広の森サイト コーディネーター
伊藤 育子

楽しく集い、森を育む。

「まちで森と暮らす」を考え続ける・・・

設立年月日	1986年4月4日
代表者 (連絡先)	会長 三日市 則昭 0155-33-4223 Mail : info@ezorisunokai.jp
会員数	41名(2024年4月現在)

設立趣旨

エゾリスの会は、エゾリスをはじめとする野生の生きものたちとともに暮らし続けていくまちづくりを目指して1986年に発足した市民グループです。自然かんさつ会、生きもの調査、環境保全作業、まちづくりへの提言などを行っています。

活動内容

私たちと帯広の森との出会いは、1989年に帯広市から「帯広の森小動物生息環境調査^{*1}」を引き受けることになったことでした。



巣を探して数える調査中
エゾリスは冬を過ごすボール状の巣と休息に使う皿状の巣を使い分けています。

エゾリス・センサスで歩き始めた頃は、わずかに残されていた自然林の豊かさに心躍る一方で、植樹区では外国由来の草本に覆われた林床や間伐の遅れが目につき、外来種が多く植樹された景観は、計画されているはずの“ふるさとの森”からはほど遠く感じられました。

このまま調べるだけでなく、自然再生を私たち自身の手で！と意を決し1998年に『里山をつくろうプロジェクト』を立ち上げました。

「北海道ではあまり馴染みのない言葉ですが、里山は、燃料や堆肥の材料を集めたり、木材やホダ木を得たり、季節の味覚を楽しんだりする生活に密着した二次林で、人が関わることで自然の多様性を維持してきました。帯広の森ではふるさとの森づくりを目指していますが、自然と人の関わり方の手法については未だに方向性が見えていません。そこで、里山をつくろうプロジェクトではカシワ・ミズナラ林造成予定地で、市民の手による継続的な育林・自然復元作業を行いながら、自然とのつきあい方・楽しみ方を参加者自らが考えていくことを目指します。」

これは、活動立ち上げの企画書に書いたプロジェクトの趣旨（一部抜粋）です。間伐、実生苗の移植や林床植生の管理を行いながら、炭焼きや草木染め、雑草料理なども楽しんでいます。



伐倒後は手鋸で寄って集って枝払いするのがエゾリスの会の作法？！

私たちの作業では、面白い生きものを見つけるとよく作業が止まっちゃいます。でも誰も注意しません。それと、持ち寄りおやつの休憩は欠かせません。そんなふうに頑張らないで楽しんでいたら、気づけば四半世紀を過ぎて続いてきました。

2008年からは、帯広の森を『モニタリングサイト1000里地調査^{*2}』のコアサイトとすることをお引き受けして、植物相、鳥類、中・大型哺乳類、カエル類、チョウ類、人為的インパクト(相観植生)の調査も行っています。自分たちが環境管理に携わっている場所に暮らす生きものたちとずっと出会いたい、暮らしぶりをちょっと覗かせてね、そんな動機から続けていると、オオタカの巣立ちに立ち会ったり、タヌキやクロテンの訪問を発見するようなご褒美もあった

りします。植樹区にもオオバナノエンレイソウが芽生え、花が咲くようになって・・・翌年にはその先にも広がっているのを見つけた時にじわじわ来る嬉しさもたまりません！



子どもたちと一緒に植物相調査中

自然の森に様々な生きものが棲み分けているように、森の作業や調査にもいろいろな役割があります。高い技術や詳しい知識ばかりが必要なものではありません。走るのが好きな人は捕虫網を振って調査で大活躍だし、名前は知らないけれど小さな生きものたちが何処にいたかを良く記憶している人がいるとうっかり刈り取っちゃうミスを防げたりします。抜き取った草を子どもたちが運び出してくれて木の上には草で子どもたちの巣が出来上がっていたりして。ちっちゃな子から後期高齢者まで、いろいろな人と一緒に森の生きものたちとの出会いを楽しみ、みんなで森の良き隣人となれるよう精進を続けられたら、嬉しい限りです。

里山をつくろうプロジェクトでは、ご近所の帯広農業高校のカシワ林^{※3}をお手本に、開拓以前の自然環境の復元を目指しています。崇高な目標の割に、「何をやっているんだ？」と叱られそうな呑気な作業ぶりです。しかし、自然相手には少しずつ、なるべくゆっくりが大事だと思っています。

エゾリス・センサスやモニ1000の調査結果に照らして、作業してきたことを振り返り、場合によっては作業内容を軌道修正する、を続けてきました。この繰り返しが順応的管理と言います。

私たちの実践をわかりやすく多くの人が理解できるものにしたいとの思いから、「森づくりガイドライン」の策定に参画し、自然度を計る指標となる林床植物のリストアップなどにも取り組んできました。

言うまでもなく、帯広の森は都市公園です。都市

公園は「都市にあって特定の用途によって占有されない空地を空地のまま（オープンスペースを）存続させることを目的に確保した緑地」です。十分なオープンスペースの存在が都市を暮らしやすく魅力的なものにしてくれます。

2015年、帯広の森は環境省より『生物多様性保全上重要な里地里山^{※4}』に選定されました。開拓史以降の新しい形の自然と人との共生の象徴として、地域の宝を次世代へ引き継ぐ取り組みに地域の外からも期待が寄せられています。

森の時間は人のそれよりもゆっくり進みます。私たちは、作業や調査で森に通い、豊かな森時間を過ごしながら森のこれからを考え続けています。“ふるさとの森”の育ちを今の中心メンバーたちは見届けられないでしょう。森の全てを今を生きる私たちが決めるなんておこがましい。森と向き合い森から学びながら、今より豊かにして子どもたちへ手渡したい。子どもたちもそのまた子どもたちへ手渡して行ってくれることを願って、私たちは今日も森へ出かけしています。



自然かんさつ会「帯広の森の川の中を歩こう！」

※1 エゾリス・センサスおよび動物相の調査を実施。

調査の成果はP51を参照して下さい。

※2 環境省の長期生態系観測（通称：モニ1000）

<https://www.nacsj.or.jp/activities/guardians/moni1000/site/areal/#hokkaido>

中・大型哺乳類調査は森の回廊@十勝の皆さんに分担いただいています。調査記録はP55を参照して下さい。

※3 北海道自然環境等保全条例に基づき環境緑地保護地区に指定された天然林

※4 https://www.env.go.jp/nature/satoyama/01_hokkaido/no1-1.html



令和6年6月18日 帯広の森 森づくり作業
帯広みやま会・(一財)日本森林林業振興会札幌支部帯広支所

設立年月日	1950年4月15日
代表者 (連絡先)	帯広みやま会会長 阿部 知行 0155-24-6153：日本森林林業振興会 札幌支部帯広支所内
会員数	99名(2024年4月1日現在)

活動内容

当会のボランティア活動の一環として、一般財団法人日本森林林業振興会札幌支部帯広支所の公益事業活動「帯広の森」森づくり支援活動に協賛し、毎年6月に植樹・育樹作業を実施しています。

設立趣旨

林野庁北海道森林管理局のうち十勝・釧路・根室管内の森林管理署等に在籍した経歴がある退職者及び同会の目的に賛同する企業をもって組織し、国有林退職者の福祉の向上と親睦を図り、林業の振興並びに愛林思想の普及を図ることを目的とする。



作業区域は、「はぐくむ」北側に隣接する約9haの区域で、「帯広の森」の入口として、春から秋には林内の散策や緑陰を求める方達の憩いの場として、冬には歩くスキーのコースとして利用されています。この区域では、森林の成長とともに林内に多くのエゾリスが生息し、鳥や獣の営巣も確認され自然豊かな森になりつつあります。



これまで、森林内の様子を見ながら、郷土種の広葉樹の育成、外来種の間伐、外来種実生苗の管理と散策路の管理（設定）を行ってきました。



活動当初は、当時植栽したチョウセンゴヨウマツ、シラカバ（外来種）、ニレ、イヌエンジュが成長し、林冠は鬱閉、林床の陽光が不足しており、下層植生が貧弱になっていました。

間伐作業が行われるまでは、イヌエンジュ、ヤチダモ、カシワ、ミズナラ、クルミ、サクラなどの稚樹や草本類も芽生えては消失していましたが、近年では陽光が林床に届くようになり、実生による稚樹の発生や下層植生の繁茂が見られるようになってきました。



これは、間伐の成果と言えると考えていますが、反面、林内が明るくなり、空間ができたことにより、セイタカアワダチソウ等とともに蔓やイチイの旺盛な芽生えと繁茂がみられ、蔓切りとイチイの間引き（伐採）にも力を入れています。



帯広の森のこれからについて

当会の帯広の森での活動理念である、広葉樹（郷土樹種）を主体とした樹林への遷移を促すとともに、散策路の整備などにより市民に親しまれる環境づくりを目指していきたいと考えています。

「生き物が豊かでみんなが楽しめる森を目指して」

設立年月日	2002年6月22日
代表者 (連絡先)	キャンベル・デイビット
会員数	11名

設立趣旨

帯広の森で森づくり活動をやりたいと仲間と話を始めていた頃、「2002年 全国雑木林会議とかち大会」の実行委員として参加してワークショップの開催などの貴重な経験をさせていただき、その後、帯広の森で活動を始めました。

街の近くにある日常の場所である帯広の森で森づくり活動をやってみたい。また、当時、間伐など手入れが十分ではない場所で「生き物が豊かでみんなが楽しめる森」を目指していくことにしました。

活動内容

○活動エリアの概要

活動エリアは十勝飛行場と帯広の森野球場の間で面積は約12haです。植樹年度は昭和51年から53年、平成3年、4年と初期に植えられた場所がメインで、主な構成樹種はトドマツ、アカエゾマツ、シラカバ、ケヤマハンノキなどで帯広の森になる前からのカラマツの防風林が入っています。

活動当初はトドマツ、アカエゾマツの間伐が不十分で真っ暗な森のイメージでした。また、活動開始後に、十勝飛行場近くのトドマツなどが航空法の高さ制限に抵触するとのことで、一部、皆伐されて林相が激変した時期、場所もありました。

○間伐と森に浸る散策路づくり

活動の初期はトドマツなどを間伐して林床を少し明るくするとともに、森の中を歩けるように間伐材をエッジにを使って散策路を作っていました。間伐の強弱、森の中にどうルートを引くか？面白いものは？どんな変化をつける？など考えて散策路をつく

るのは楽しい作業です。

伐倒作業ではほとんどの木が懸木になるため、安全の確保が大切になります。ロープや滑車を使えば引き倒す作業も参加者が一緒にやれる楽しい作業になります。

間伐によって少し明るくなると、林床の植生が豊かになりベニバナイチヤクソウの大きな群落が形成されたこともあります。また、散策路は年4、5回草刈りして、快適に歩けるようにしており、一般の方が歩いている姿を見かけると嬉しくなります。



○変化をつける草原、低木ゾーン

活動エリアには植樹した木がうまく育たなかった場所（ギャップ）があります。全て高木が育つ森にするより、所々に草原や低木による開けた場所がある方が、植物や昆虫など動物にも多様性をもたらすとともに、人にも明るさの変化を受けることを考え、ギャップは維持することにしました。

そうは言ってもギャップはツルウメモドキ、オオヨモギなどに覆いつくされていたり、オオアワダチソウが占有していたり、オニグルミがどんどん入ってきたりなど、なかなか厄介です。せっかくの草原、低木の場所にするので、エゾクガイソウ、ツリガネニンジン、エゾノヨロイグサ、ノリウツギ、ホザキシモツケなど在来種を実生で苗を育て少しずつ植えて、定着しつつあります。

目指す姿は一見、人の手が入ってないようでありながら豊かな植生や生き物がいる場所ですが、まだまだ、試行錯誤は続きそうです。

○間伐材の利用

活動を始めた頃は間伐材を散策路のエッジや案内看板、ベンチ、また、ワークショップ（WS）のクラフトなどに利用していましたが、最近では間伐材の量も増え、本格的な利用方法を検討する必要が出て

きました。間伐材は管理者が売り払いすべきものですが、伐採量が少なくコストが見合わないため、森に堆積している状況です。

毎年12月に実施している間伐WSでは、参加者には一定のルールで間伐材を持ち帰り、薪やクラフト材として利用してもらうことで、森づくりへの参加インセンティブとして間伐材の利用を試行的に実施しています。

○生き物の調査とすみづくり

活動エリア外の帯広の森になりますが、モニタリングサイト1000哺乳類調査を行なっています。これまで特定外来生物のアライグマやエゾシカの帯広の森への侵入などを確認しました。長期間継続して調査することで、森の変化をとらえていきます。

活動エリアの植物の変化を捉えるため、樹木の成長や、草本類の調査を行なっています。また、活動エリア近くの19条川の生き物調査では場所による違いを把握しました。

モモンガの巣箱は活動初期から設置していますが、最近ではフクロウ用の巣箱を設置して使用も確認することができました。また、フクロウのエサになるエゾヤチネズミのすみかになるように枝で小山を作るなど、いろいろな生き物が住む森づくりを進めています。

○飛行場周辺の里山づくり

高さ制限により20m以上に育ったトドマツがバツサリ切られた後の森の姿はショックではありましたが、これから里山づくりへの期待もありました。伐採後、植生の変化をしらべましたが、最初の5年間



2020年 モニ1000 アライグマ

くらいは優勢種が大きく変化していく状況を見ることができました。

この場所はカラムツの防風林があったのでハリギリ、ナナカマド、ヤマグワ、エゾヤマサクラなどが自然に育っています。これら広葉樹をいかして、高さ制限にかかるころに伐採して、切り株から発生する萌芽を使って育てることを繰り返す里山方式で森づくりすることにしました。伐採後10年経過し順調に育ち、次の伐採をどうするか考える時期になりました。

○掩体壕周りの整備

活動を始めた当初は大きなコンクリート構造物を堆肥場か何かと思っていましたが、第2次世界大戦の頃に戦闘機を格納していた「掩体壕」とわかり、周辺の草刈りや説明看板の設置、間伐材を使って実寸大の戦闘機を地面に描き、わかりやすく展示しています。



○今後の取り組み

高さ制限のある里山エリアはこれから本格的な手入れが始まり、トドマツなどの間伐もまだまだ作業は続きます。また、植生の修復や生き物の住みやすい環境づくりも時間のかかる活動になります。

これらの活動を通じて森づくりの面白さを知ってもらうことや、薪などの間伐材などで新たな関心、人材に活動に参加してもらえるように取り組みたいと思います。

森づくり活動団体 帯広の森サポーターの会

事務局長 緒方 潤

設立年月日	2006年12月4日
代表者 (連絡先)	秋葉 克幸
会員数	67名(2024年8月現在)

設立趣旨

帯広の森サポーターの会(以下、本会)は帯広の森を活動拠点に「植樹・育樹等の森づくりで自然環境保全に寄与すること」を目的として設立された。その後、活動の進展に伴い、「市民が楽しく安全に憩うことが出来る森づくり」、及び「自然豊かな市民の森を後世に残すこと」、を目的に加え活動している。

活動内容

1) 活動エリアと面積

第7ブロック: 約20ha (H11年、H12年、H13年、H16年植樹地)

第8ブロック: 約12ha (H9年、H10年植樹地、その他)
現状の活動エリア合計は、約32ha



2) 森づくりの基本姿勢

市民植樹によって作られた帯広の森は、人手をかけて管理しなければ健全な故郷の森には育たない。そのため私たちは個々の樹木の特性や森林の管理方法を多くの専門家に学びながら、保育作業を行っている。最終的には市民が集い、憩い、利活用できる、故郷の森として開放していきたい。

この実現のためには多くの市民を巻き込むことが重要である。私たちは「森を知り、育て、楽しむ」をモッ

トーに、誰もが興味を持って参加できる活動を目指している。

3) 具体的な活動内容

【日常の活動】

全員が参加する月2回の例会活動と、有志による週2回の活動が基本で、以下の作業を実施。

- 植樹／移植、下草刈り、下枝打ち、ツル切り
- 危険木／支障木の除伐、間伐、外来種の除去
- 散策路整備、看板設置、ベンチ製作等の安全に森を楽しむ為の林内整備



これら日常活動を安全に行うための各種対応。

- 作業前後のミーティング(作業内容の確認、班分け、安全確認、各種報告)
- 通報訓練、刈払機やチェーンソーの取扱い講習の実施等

【市民イベント、会員用講習会等の実施】

森に興味を持つ仲間を増やすため、市民イベントと会員用講習会を積極的に開催。

市民イベント、会員用講習会の実施例

森を知る	植生現地研修会
	優良森林見学会
	スズメバチ、マダニ等の現地研修会
森を育てる	選木と間伐の現地研修会
	チェーンソー、刈払機等の実技研修会
	林内作業安全講習会、救急法の研修会
森を楽しむ	森のめぐみを使った工作体験会
	白樺樹液採取体験会



【活動の成果】

H9年植樹域（約5ha）からスタートした当会の活動は、徐々にそのエリアを拡大し、現在の活動領域（約32ha）まで広がってきた。

下草刈りや下枝打ちにより、安全で見通しの良い森が広がってきた。特にH9年10年植樹域では散策路整備や看板設置等を進め、2023年からは市民開放日を設けて、会員の案内のもと市民にも自由に散策して貰っている。

外来植物を抑制し在来種を増やす森づくりを進めると共に、オオアワダチソウ除去後の草地に植樹する活動も始めている。

2023年から外部講師の指導を仰ぎ、森の植生を継続して記録する取り組みを始めた。今後の森の変遷の基礎資料となることを期待している。

除間伐や枝打ちにより発生した資源を出来るだけ有効活用するため、各種取り組みを行っている。枝葉や木の実なども森の工作体験会で森の魅力を伝えるイベントに活用している。



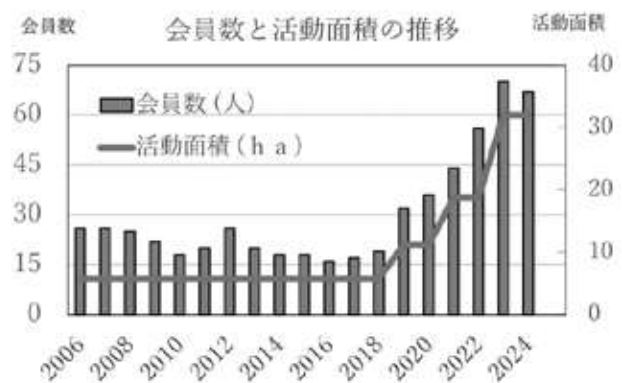
これからの活動について

- 帯広川の西側に位置する当会活動エリアが、帯広の森の一部であることを知らない市民は多い。私たちはこれからも様々な活動を通して多くの人を森に呼び込み、森づくりに興味を持つ仲間を増やしていきたい。
- H9年10年植樹域を主とするエリアは、市民が散策等を通して安全に森に親しむことが出来るエリアとして整備していきたい。
- 森づくり活動に伴って発生する木質資材等の利活用は現時点では限定的であり、今後一層の利活用を進める方法を、関係者と協力して考えていきたい。



【参考資料】

会員数と活動面積の推移



設立年月日	2021 年 1 月 1 日
代 表 者 (連 絡 先)	馬淵 征雄
会 員 数	25 名



設立趣旨

緑化活動等を通して地域社会の発展への協力及び
会員相互の親睦を図ることを設立趣旨としている。

このことから、市民の植樹活動の積み重ねで、帯
広の街を取り囲む形で森が作られた「帯広の森」を
郷土樹種を主体とした自然豊かな森に導くための育成・
管理を行い、子や孫に引継ぐことを活動の主目的
としている。

活動内容（写真にて紹介）



春一番に活動内容の検討会を行う



樹木が消失した個所への、植栽活動
アオダモ苗の植栽



稚樹を育成したイタヤカエデの植栽



近くに密生するミズナラ幼木の移植



森の下草刈り



密度管理のための軽度な除間伐



不要枝・危険枝の除去



森の環境整備(ごみ拾い等)



不要稚樹の抜き取り

帯広の森のこれからについて

森は、長い年数（何十年、何百年）をかけて変化を続けていくが、その森を持続的に維持管理していかなければならないのは、「帯広の森」も同じと考えている。

ただ、森は自らの力で森の形を作り出すことも出来ますので、除間伐や外来樹種の除去等を急ぎ、早急に森の形を見極めようとしてはならない。

私たちは、森の変化時に少し手を加え成長のお手伝いをする程度で、森を見守っていくことが肝要と考えている。

森づくり活動団体 帯広畜産大学公認
森づくりサークル もりともし

代表 亀井 幹人

設立年月日	2015 年 2 月 16 日
代 表 者 (連 絡 先)	亀井 幹人
会 員 数	25 人

設立趣旨

当サークルは「森で遊び、そのお返しとして森づくりをする」という森と人との関係性を大学生や市民に提案するために設立されました。サークル名の「もりともし」とは「森と持ちつ持たれつ!」というサークルの趣旨を略したものです。



活動内容

森と持ちつ持たれつをモットーに自然に親しむ活動をする。帯広の森では土地を少しお借りして森づくり活動を実行中。

○帯広の森観察会 (2024 年 6 月 8 日)

活動地にある動植物の現状を知り、これからの管理に活かすことを目的に観察会を行った。はぐくむの職員の方にガイドをお願いし、活動地付近の植物、虫、野鳥、土地の特徴などを詳しく教えていただいた。湿り気があり、草原も広がる特殊な植生の中でできることを考える必要があることを知る。



○ルピナス駆除 (例年 6 月頃)

ルピナスは活動地に生える外来種であるが、カラフルで綺麗な花を咲かす。繁殖力が高く根が太く張るため厄介な種である。スコップで根こそぎ掘り起こし、引き抜いたものは根から繁殖しないよう木にかけておいた。

もりともしでは毎年ルピナス駆除を続けており、今年はいままでの成果もありほとんど姿を見なくなっていた。引き抜いたルピナスの一部は草木染めに利用し大学の学校祭で販売するなどの利用も行った。



○その他外来種駆除 (2024 年 6 月 9 日)

観察会で得た知識をもとに、ルピナスのほかに繁殖力の高そうな外来種も取り除いた。活動地一面に広がるオオアワダチソウやフランスギクは通り道や保護したい種の周りのものを刈り取った。活動地の奥の一部分に生えるニセアカシアは、はさみやノコギリを使って幼木を伐採した。



○池の管理（2024年7月7日）

活動地付近にある小さな人工池の植生管理をエゾリスの会の皆様と行った。現地では斜面から流れてくる水が道路によってせき止められることにより水たまりができており、今やカエルやトンボなど水を利用する生物たちが集まるようになっている。しかし、自然に流れ出る水だけでは安定せず、植物が水面近くを覆ってしまうため、刈り取りや泥上げをして池の管理を行った。



帯広の森のこれからについて

今後、もりともが帯広の森で進めていけることは、以下のような活動だと考えた。

- ①ルピナス、オオアワダチソウ、フランスギク、コウリントンポポ、ニセアカシア、チョウセンゴヨウなどの侵略度の高い外来種を駆除する。
- ②アヤメ、コケイラン、ベニバナイチヤクソウ、ナガボノシロワレモコウなど在来の重要な植物の周りを重点的に保護する。
- ③活動地に杭を立てて、自分たちのスペースを分かりやすくしたり、区画ごとの植生や虫を調査する。

上記のような管理を続け、帯広の森を郷土の森に近づけることにつなげていくことが目標である。

森づくり活動団体 認定 NPO 法人
子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち

理事長 今村 江穂

設立年月日	2006 年 7 月 7 日
代 表 者 (連 絡 先)	今村 江穂
会 員 数	正会員 146 世帯 438 名 (2025 年 1 月現在)

設立趣旨

主に十勝の子どもと大人に対して、芸術文化や自然環境を含む生活文化などの生の体験の場づくりを通して、子どもと大人が共に学び合い育ち合えるぬくもりある豊かな地域文化環境をつくることを目指す。



活動内容

「親も子も共に育ち合い、安心できる居場所」「子育ては地域みんなで」を合言葉に、親も子も多世代の多様な人との関わりの中で、五感を刺激するあそびやリアルな体験の場を数多く積み重ねている。全国からプロのアーティストを招く舞台鑑賞やアート表現活動などの「芸術文化体験事業」、森のあそび場づくりやキャンプ、こども参画などの「生活文化体験事業」、未就学の子どもと親の学びとあそびの場《プレイセンター》、帯広ファミリーサポートセンター事業などの「子育て支援事業」、地域や人とのつながりを構築する「地域ネットワークづくり事業」など。

森づくり・森あそび「あしあとの森」活動

人・森・まちが育つプロジェクトとして、帯広の森・はぐくーむとの協働で取り組んでいます。



活動実績

■ 2017.9.22

森のあそび場づくりキックオフイベント

1 フォーラム「森のあそびを考えよう」基調講演／井内 聖氏、話題提供 日月 伸氏
 2 講演会『子どもが「育つ」場づくりとは?』講師 井内 聖氏 (学校法人リズム学園学園長、はやきたこども園園長 現安平町教育長)

■ 2017.11.5

プレイイベント「馬と一緒に森づくり、木こり体験」／51 名

■ 2018.1.27

苫東和みの森「月に一度は森づくり」視察

■ 2018.2.7

苫東なごみの森視察報告会

■ 2018.2.25

プレ企画「森のあそびを考えよう」はぐくーむ主催「みんなでもりをはぐくーむ」への参加／馬と一緒に森づくり、動物のあしあと・生き物さがし／58 名

■ 2018.4.4

帯広の森活動承認申請…昭和 55 年植樹区の一部 (4.5ha)

■ 2018.4.22

第 1 回「あしあとの森」実施／25 名

以降隔月で開催。～10 月第 4 回目まで会員中心に、12 月より市の広報でも周知。

2018 年度

あしあとの森／全 6 回実施／268 名

■ 2019.5.19

森のこどもらんど実施／550 名 以降毎年 5 月開催 (コロナ禍除く)

2019 年度

●あしあとの森／全 5 回実施／186 名

●乳幼児の森のおさんぽ会／@はぐくーむ周辺の森／通年隔週実施／全 19 回／296 名

2020 年度

- あしあとの森／全5回実施／301名
- 乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全18回／265名
- 研修会
- ①リスクマネジメント講習会／講師：どんころ野外学校 新野和也氏／13名
- ②自然体験活動を楽しむためのコツ／講師：えんりっと 小川真由美氏／18名

2021 年度

- あしあとの森／全6回実施／194名
- 乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全24回／約200名
- ちいさなあしあとの森
乳幼児期の会員親子を対象に、森に親しむための活動。あしあとの森活動のない月に全3回実施／73名
- 研修会
- ①野外体験活動のための救命救急講習／帯広ライフサポート協会 佐藤悦弘氏／11名

2022 年度

- あしあとの森／全5回実施／222名
乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全24回／約200名
- 森のこどもらんど／600名
- ちいさなあしあとの森／全5回実施／140名
- 野外活動のための救命救急講習／帯広ライフサポート協会 佐藤悦弘氏／17名

2023 年度

- あしあとの森／全5回実施／157名
- 乳幼児の森のおさんぽ会／通年隔週実施／全21回／320名
- ちいさなあしあとの森／全5回実施／124名
- 森のこどもらんど／300名

【助成金・表彰等】

2018～2024 年度

帯広市緑の募金緑化活動配分金

2019～2022 年度

緑の募金 子どもたちの未来の森づくり助成事業

2022～2023 年度

コープ未来の森づくり基金助成事業

2022 年度

ドコモ市民活動団体助成事業（ちいさなあしあとの森）

2023 年度

- 全国森林レクリエーション協会「地域美しの森づくり活動コンクール」特別奨励賞受賞

2024 年度

- 森と緑の会、北海道他実行委員会「森と人を育てるコンクール」木育活動を行う団体等部門最優秀賞受賞



帯広の森のこれからについて

先人たちが描いた、森に囲まれた緑豊かなまちづくりの構想の下、育まれてきた森の恵みを大切に継承していきたいと思います。

今を生きる子どもたちが、自然の神秘に触れ、五感を刺激されてイキイキと遊びこめる体験がたくさんできること。

子どもも大人も世代を超えて、共に汗を流して、森づくりの楽しさを共有できること。

一人ひとりの願いを持ち寄って、ゆるやかにつながり合えること。

そんな可能性にあふれた森の居場所づくり。

ちいさな森のコミュニティから、ふるさとへの愛着が生まれるように。ゆっくりと時間をかけて、森も人も育ち合っていきます。



森づくり活動団体 帯広の森町内会子ども会 思い出植樹の有志グループ

小宮 忠義

設立年月日	2019年5月27日
代表者 (連絡先)	中島 辰男
会員数	14名及び子ども会会員小学生15名

設立趣旨

平成28(2016)年夏に台風の襲来で被害を受けた森の一区画に於いて、子ども達が十勝地方・帯広の森の姿を体感出来、思い出となるように、天然生木を含む健全な成育の配置を考慮しつつ、適切な樹種を植栽し保育し、身近に親しめる健やかな森を造成していくように活動しています。

『帯広の森』の南東部の一角は、『帯広の森町内会』に接しています。

平成28(2016)年の台風襲来で、ツルに巻き付かれていた樹木が倒されたり、枝が折られたり荒らされた箇所を、藪状に多枝繁茂したヤナギ等も含めて整理し、森の中に育ってきている適種幼木を、移植して育てていく仕事を、平成30年(2018)に始めました。

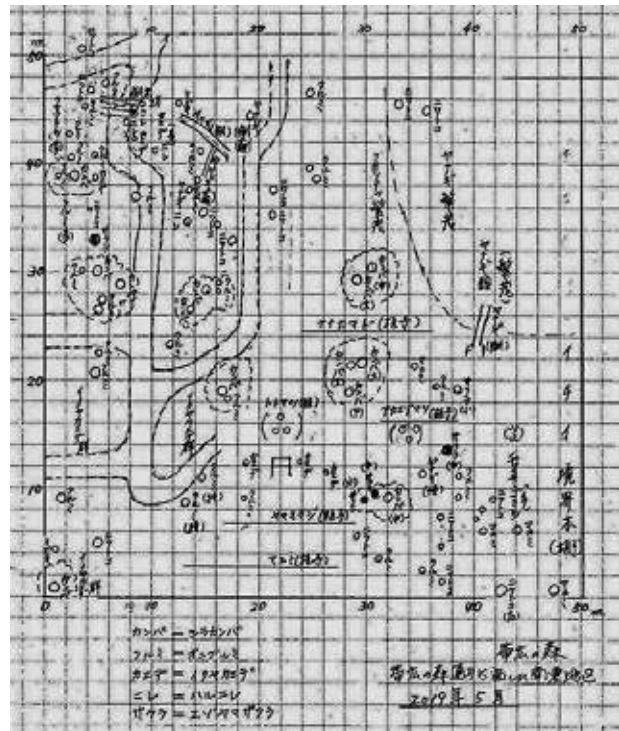
「帯広の森町内会の子ども会」の思い出となる植樹をする有志グループです。この6年間で、トドマツ、ヤマモミジ、マユミ、ナナカマド、エゾヤマザクラ、アカエゾマツ、と進めてきています。



活動エリア



2018年(初年度)秋季植栽



平成30年(2018)活動開始前の被害残存立木と改善移植予定群の位置図



令和5年(2023)秋季の移植群の状況

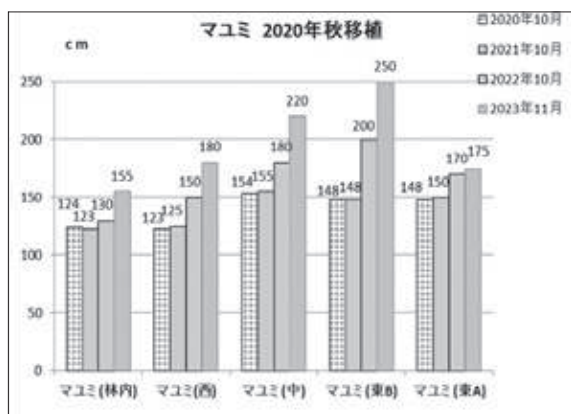
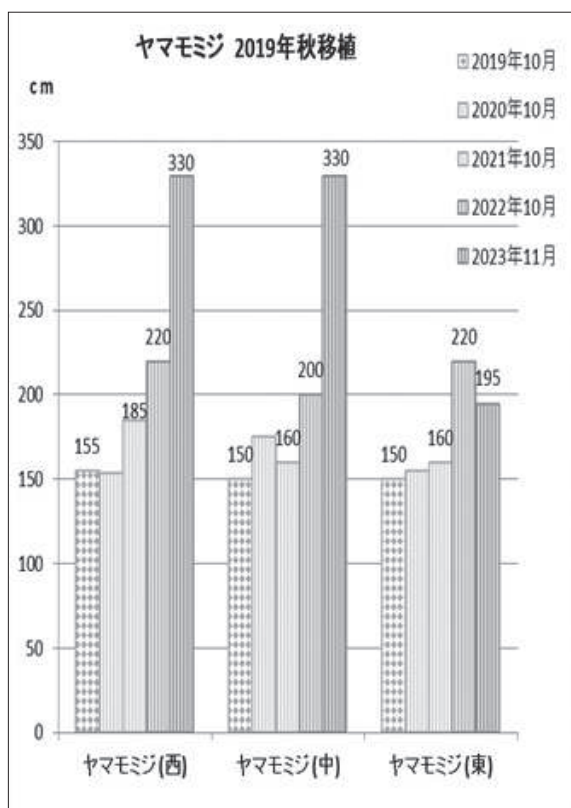
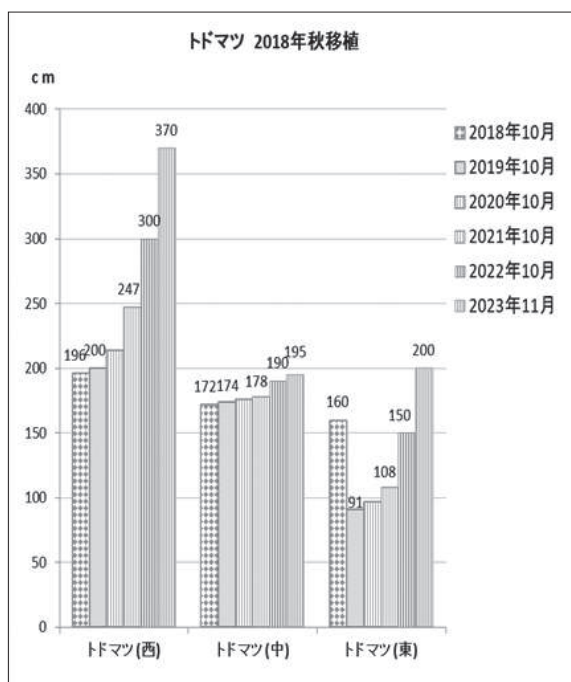


帯広の森町内会子ども会思い出植樹地 正面 ヤマモミジ列の紅葉、手前は、マユミ落葉。標示板の左奥に3本植えの常緑トドマツ。



移植後に株周りを雑草刈り・掘り取りを行い成長し始めていくトドマツ3株、及びヤマモミジ

植木の樹高成長 (cm) 2018年～2023年11月下旬までの状況 (抜粋)



最初に植え（移植）したトドマツは、最近3年間では年50cmも上長成長しています。ヤマモミジとマユミも年40cmも上長成長していますが、これから枝も含めた伸長を止める剪定を始めます。

活動内容

風倒木及び、乱雑に成長繁茂してきた枝やツル、草本類の、整理・伐除、刈取り、掘取りなど行なっています。子ども達が、親子協働で「帯広の森」内の美しく健やかな幼木類を移植し、手当て保育していく活動を通して、自然の中で健やかに育っていく環境を願いつつ。



台風により隣木で倒されたエゾヤマザクラの補修



元気な枝を自力で起き上がらせ快復していく



5月上旬の開花



植栽木根元の積雪を
踏み固め、野鼠による食害を防除

第2節 行政・事業者

帯広の森担当部署の変遷と帯広の森基金

帯広市 みどりの課

組織の変遷

帯広の森に関する事務を取り扱っていた部署は次表のとおりで、昭和 45 年に公園緑地課が設けられて以降、4 回の組織再編が行われ、現在に至っている。

【帯広の森担当部署の変遷】

年度	担当部	担当課	課管理職数	係体制	係員数	備考
昭和 45 年	都市建設部	公園緑地課	1 人	公園管理係、公園計画係	6 人	公園緑地課ができる
昭和 46 年			1 人	公園管理係、公園計画係	7 人	
昭和 47 年			1 人	公園管理係、公園計画係	8 人	
昭和 48 年			1 人	維持管理係、庶務係、公園計画係	11 人	
昭和 49 年			2 人	維持管理係、庶務係、帯広の森事業、公園計画係	14 人	
昭和 50 年			2 人	維持管理係、庶務係、帯広の森事業、公園計画係	14 人	
昭和 51 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 52 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 53 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 54 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、用地係、事業係	13 人	
昭和 55 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 56 年			2 人	維持管理係、緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 57 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 58 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 59 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 60 年			2 人	維持管理係、事業係	13 人	
昭和 61 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 62 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
昭和 63 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 元年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 2 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 3 年			2 人	緑化推進係、事業係	13 人	
平成 4 年	緑化環境部	みどりと花の課	1 人	みどりと花の係	2 人	機構改革により「緑化環境部」誕生、「公園課」と「みどりと花の課」に分課する。
		公園課	2 人	管理係、整備係	12 人	
平成 5 年		みどりと花の課	1 人	みどりと花の係	3 人	
		公園課	3 人	管理係、整備係	12 人	
平成 6 年		みどりと花の課	1 人	みどりと花の係	3 人	
		公園課	4 人	管理係、整備係	11 人	
平成 7 年		みどりと花の課	2 人	みどりと花の係	2 人	
		公園課	4 人	管理係、整備係	11 人	
平成 8 年		みどりと花の課	2 人	みどりと花の係	3 人	
		公園課	3 人	管理係、整備係	12 人	
平成 9 年		公園と花の課	3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	17 人	「みどりと花の課」・「公園課」を統合し「公園と花の課」に変更
平成 10 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 11 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 12 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 13 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 14 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 15 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	16 人	
平成 16 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 17 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 18 年			5 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 19 年		都市建設部	3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	「緑化環境部」から「都市建設部」に変更 みどりの課に変更
平成 20 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 21 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 22 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 23 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 24 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 25 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 26 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 27 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
平成 28 年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 29 年			4 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
平成 30 年	都市環境部	みどりの課	3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	14 人	
令和 元年			3 人	みどりと花の係、管理係、整備係	15 人	
令和 2 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	「都市建設部」から「都市環境部」に変更、環境室設置。
令和 3 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	
令和 4 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	
令和 5 年			2 人	みどりと花の係、公園係	10 人	
令和 6 年			2 人	みどりと花の係、公園係	11 人	

帯広市帯広の森基金

●目的

帯広市の緑を守り育て緑豊かなうおいのあるまちづくりをめざす帯広の森をはじめとする緑化事業推進の費用に充てるもの。

●設立年月日

昭和 61 年 4 月 1 日

●活用事業（令和 7 年 3 月時点）・

- ・帯広の森の育成及び利活用に要する経費
- ・フラワー通り整備や花壇コンクールなどの花のまちづくり事業
- ・慶事記念樹贈呈事業や緑化重点地区支援などの民有地緑化推進

●基金の財源

- ・寄附（おびひろ応援寄附金）
- ・公園緑地樹木等の剪定や伐採により生じる材の売払い収入
- ・小中学校を含めた市の公共施設で回収した紙パックの売却益

帯広市のこれまでの取組み

指定管理者に業務を一部移行したあとも、帯広市では帯広の森の普及啓発事業等を行っている。以下、その一部を紹介する。

■帯広の森を巡る散策ツアー

〔目 的〕

帯広の森の散策や森づくりの体験等を通じ、これまでの森の歴史、森づくり活動団体等の市民と行政の協働により森の育成や利活用が進められている現状、知られていない帯広の森の魅力等を市民へ周知する。

〔内 容〕

帯広の森各所へバスで移動し、基本的に徒歩でエリア内を散策しながら、各エリアの特徴や育成・利活用の様子、森の歴史、目指す森の姿についてガイドする。また、森づくり活動団体の活動エリアについては、団体メンバーが説明を担当することにより、森づくり活動団体の周知並びに新規メンバー勧誘の機会を提供する。

〔実施期間〕

平成 24 年度～令和 4 年度

※令和 5 年度からは指定管理業務で実施。



令和4年度散策ツアーの様子

■帯広の森展示キャラバン

〔目 的〕

市民が日常的に来訪する公共施設で、帯広の森の概要や歴史、育成管理や利活用等に関する展示を行い、帯広の森に関する市民認知度を深める機会とする。

〔内 容〕

- ・巨大航空写真の展示
各施設やビューポイント等を紹介
- ・帯広の森展示パネル
帯広の森の概要、歴史、活動団体等の紹介
- ・帯広の森今昔比較コーナー
造成前と現在の航空写真を比較する資料
- ・各種パンフレットの配布
はぐくむパンフレット、各活動団体の会報誌やイベントチラシ、ボランティア参加申込書など
- ・アンケート
年齢層、帯広の森に対する興味等を調査

〔実施期間〕

平成 24 年度～

〔展示会場〕

図書館、百年記念館、市庁舎市民ホール、市民活動交流センター、市内小学校及び義務教育学校



令和5年度キャラバンの様子

「帯広の森」の指定管理者として

(株)ケイセイ、帯広の森・はぐくむ
施設長(3代目) 日月 伸

はじめに

2010年に開館し、指定管理制度で運営されている帯広の森・はぐくむは、開館当初の第1期(3年、2010～)、第2期(5年、2013～)及び第3期(5年、2018～)は(株)ケイセイと(株)造景による共同企業体が、第4期(5年、2023～)は(株)ケイセイが単独で指定管理を担ってきた。

開館以来15年にわたり、多少の人員の入れ替わりはありながらも、継続して専任職員を配置して運営にあたってきた。15年を振り返りつつ、運営に込めてきた思いを記したい。

これまでの運営

(1) 第1期(2010～2012年度)

初めての指定管理者として、とにかく運営を軌道に乗せるべく奮闘していた時期である。通常、このような施設は新設時には一定期間、行政が直営で運営し、その後に民間委託されるという例が多いが、はぐくむに関しては開館当初から指定管理制度がとられたので、イベント開催や学校受け入れ、維持管理などあらゆることが全て手探りのスタートであった。



開館当初はインフラ整備も重要な取組
森の活動団体の協力を得て薪小屋づくり

館の管理そのものも初めてであり、初めて迎える冬は、タイマーや自動運転が効かない薪ストーブで、厳冬期に室内を凍結させずに乗り切れるのか不安で、

正月休みも毎日薪ストーブを焚きに来ていたというのは今となっては語り草である。

それでも、はぐくむ秋まつりや森の音楽会など現在も続く、大きなイベントは初年から開催されており、現在につながる土台となったのがこの時期である。

(2) 第2期(2013～2017年度)

土台作りの第1期を経て、第2期は、それを基礎にして、行動していく時期、前に進めていく時期であったといえる(筆者はこの期からの途中乗車である)。

主催行事としては、主催者である私たちがあらかじめ用意したプログラムを提供するようなものから、より市民参加の自由度の高い内容(四季の森めぐり、森の寺子屋など)に移行していった。

学校受け入れについては、第1期のころからつながりをつくってきた学校や教員から徐々に口コミなどで広がり、利用が大幅に伸びていった。当初は小学校が中心であったが、子育て支援センターや児童保育センターなど世代、態様も広がりをみせ、帯広農業高校の森林科学科との連携も始まった。



子育て支援センターとの連携による「もりのこ広場」
(月一開催で2025年中に通算100回を迎える)

森づくりに関わっては、2010年に市が行った(受注者は(株)ズコーシャ)木質バイオマス賦存量調査の調査結果を受ける形で、調査地点を再調査する「定点調査」にも独自事業として取組み始めた。

このころは、運営の「型」が概ね確立されてきた時期といえる。

(3) 第3期(2018～2022年度)

学校利用は、ほぼ受け入れ上限に近い現在の水準

に達し、来館者数の伸びも一旦落ち着いて、量としては一定段階に達してきたことも踏まえ、より質を意識した運営に視点を切り替えていった。このころから「つなぐ」ことを意識した取組へとシフトしていった。ぷれいおんとかちとの連携の取組や、おびひろ市民学で市内全中学校の利用が実現したこと、クロスカントリースキークラブと連携した冬季の歩くスキーレンタルの拡充などは、いずれも他機関、団体等とのつながりが広がり、深まることで進んだ取組である。

期の途中からはコロナ禍に見舞われ、臨時休館や団体受け入れの停止などを余儀なくされ、運営に苦心を強いられる時期もあったが、社会生活が少しずつ動き出してくると、密を避けられる森や公園はむしろ注目を集めた。オープンスペースとして都市近郊に広大な森林が広がっていることの意義を再確認できる機会でもあった。



コロナ禍で野外スポーツとして注目が高まった歩くスキー

期の途中からは、帯広の森全域が指定管理区域として加わり、名実ともに帯広の森の指定管理者となっていた。

(4) 第4期（2023年度～現在）

期の当初から帯広の森全域を指定管理区域として挑む初めての期である。長期的視点のもと、帯広の森全体を視野に置いて管理運営していくことが求められている。

その中で迎えた帯広の森50周年は、はぐく一む（及び帯広の森全域）の運営を担って15年目を迎える私たちのこれまでの成果、課題と今後の指針を再確認するマイルストーンとなる機会でもあった。5月の植樹イベント、9月のシンポジウム、絵本づくりや

記念誌づくりなど、指定管理者として蓄積したノウハウや人のつながりなどが、表現される場であったし、これまでの積み重ねを振り返る機会にもなった。

開館5年目に迎えた40周年からみると、進んだこともあれば、道半ばのこともある。課題が課題のままのものもある。もとより、帯広の森の取組も私たちの使命も、完成して終わりというようなものではなく、すべては続いていくこと、続けていくことこそが本旨である。大きな節目を経て、気持ちを新たに歩みを進めたい。



森の維持管理も大切な業務

森のつなぎ役として

(1) 帯広の森・はぐく一むの役割

こうして、理想を追い求めつつも、段階に応じてアプローチを変えながら取り組んできた。その過程で常に考え続けてきたのは、はぐく一むの役割は何なのか？指定管理者として果たすべき役割は何なのか？ということである。

帯広の森・はぐく一むは、「帯広の森の育成管理・利活用の拠点施設」である。この説明は非常にシンプルでありながら、それをどのように体現していくかはなかなか難しい。なぜならこの文章の中には、育成管理・利活用を進めるために、牽引役となるのか、サポート役となるのか、調整役となるのかなど、どのような「役割」で「何を」していくべきかについては一切書かれておらず、ただ「拠点」すなわち「場」であることが述べられている。

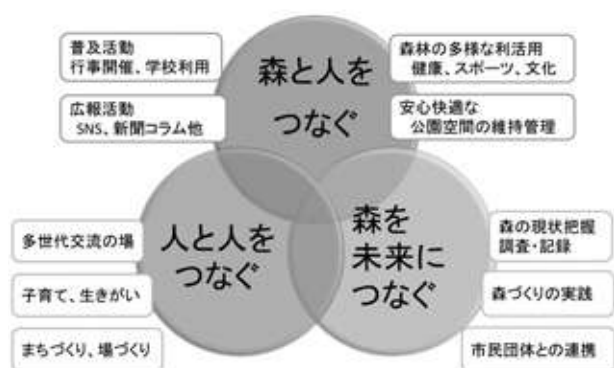
いろいろと考え、行動にも移してきたが、結果として帰着したのは、「拠点」という文字通りの役割である。拠点とは「拠りどころとなる場」のことで、すなわち軸（ハブ）のようなものであろう。

人が集い、つながる場
情報が集まり、発信される場
思いが結集し、活動が始まる場
森の過去と未来の結節点を取りもつ場
など・・・

求められるのは、拠りどころであるその場と機能をしっかり維持・発展させ、保証していくこと。時に船頭役、時に黒子、時にコーディネーターとなりつつ、基本は車輪の軸として、取組（車輪）を前に進めること、円滑に進むように調べていくことにあると考える。

また、ハブの最大の役割は「つなぐこと」にあると考える。指定管理者の重要な使命は、あらゆる物事をつないでいくこと、時代をつないでいくこと、様々なつながりをコーディネートしていくことである。

ここからは、「つなぐ」の中で特に大切と考える、「森と人をつなぐ」「森を未来につなぐ」「人と人をつなぐ」の、3つのつなぐをキーワードに論を進める。



(2) 森と人をつなぐ

はぐくむはいわば帯広の森の玄関口であり、森と人をつなぐのは基本となる役割である。市民と森をつなげるためには、行事の開催やインターネット、新聞など多様な媒体による情報発信など様々な取組がある。行事等については本誌第2章第2節にも詳述しているのでそちらを参照されたい。情報発信については、様々な努力をしているが、「帯広の森＝スポーツ施設」というイメージも根強く、帯広の森を知らない市民もまだまだ多い。これからも地道に継続していく必要があるだろう。多くの方々に伝える

手段としてはSNSなどが有効であるが、一方でダイレクトなコミュニケーションこそが力を持つ場面も多い。古い人間としては後者も愚直に大切にしていきたい。

人とつながるという意味では、ボランティア団体など森に関わる関係者や、外部の団体、専門家とのつながりも重要である。限られたわずかなスタッフのことに限界があり、そういった点では、様々なつながりが帯広の森の力となる。

次世代へつないでいくことも重要である。とりわけ未来を担う地域子どもたちへの普及、教育には力を入れてきた。開館以来、学校等の受け入れは右肩上がりに増え、現在は繁忙期の受け入れはほぼ飽和に達している。当初こそ学校等へのはたらきかけも行ってきたが、徐々に学校のリピート利用や、利用していただいた先生が異動後に新たな学校で生徒を連れて利用してくれるなどして広がりを見せていった。これは、実際に利用していただいた引率の先生方と丁寧にコミュニケーションを図ったり、教員研修等を積極的に受け入れてきた積み重ねの成果と自負している。



積極的に行ってきた教員研修(幼稚園・保育所、小中学校)

とはいえ、開館10年目までは、体験学習で帯広の森を利用するかどうかは学校の個々の先生方の一存によるところが大きかった。そのため、例えば市内でもすべての子どもたちが森の体験ができるとは限らなかった。そこから大きなステップとなったのが2020年から帯広市で始まった小中学生向けの全校共通のカリキュラム「おびひろ市民学」であった。市教委でその具体的カリキュラムを組み立てる際に、それまで私たちが学校等を積極的に受け入れてきた実績を評価していただき、中学生向けの「SDGsを

学ぼう」のカリキュラムの一環として、帯広の森での半日の学習が組み込まれることになった。このことによって、市内のすべての中学生が最低1回ははぐく一むを訪れ、帯広の森について学ぶ機会がもてることになった。これは私たちが目指していた大きなステップであった。



おびひろ市民学 はぐく一むでの学習の風景
念願だった市内の全ての子どもの受け入れが実現

子どもたちへの普及、教育については、未来への種まきという思いで取り組んできたものの、それがどのような芽生えにつながるのかは、なかなか具体的には想像はできずにいたが、ここ数年の間に、少しずつその萌芽がみられ始めている。例えば、かつて学校の授業で訪れた中学生が、その後学校の先生となって子どもたちを連れてきてくれたり、学校の体験学習やイベントで森の体験をしてくれた子が公園管理の仕事に関心を持って就職してくれたり、ささやかではあるが大きな果実が確実に見られ始めている。今後、はぐく一むで森の体験をしたことのある子どもたちが続々と成人して社会に出ていく。彼らの原体験の中に帯広の森の何かを残すことができているだろうか？近い将来、大人になった彼らが帯広の森に来て何を語ってくれるだろうか。今から楽しみにしたい。



世代間交流は体験の意義をより高める

森を未来につなぐ

人との関わりも重要であるが、それもしっかりとした森あつてのことである。豊かな森を育て、引き継いでいくことは取組の基盤となる重要な使命である。

指定管理当初の11年間は、管理区域ははぐく一む及びその周辺の一部区域に限られ、全体の森づくりへの直接的な関与は限定的であった。そのような立場で、森づくりの拠点たるはぐく一むを預かる私たちにできることは何か？ここで、私たちが取り組んだことの 하나가、森の現状を記録していくことであった。幸い2010年に市が取り組んだ「帯広の森木質バイオマス賦存量調査」において、帯広の森の全域にわたる100箇所以上の地点の調査がなされていた。こういった調査は、一度の調査ではその時点の森の状態がわかるのみだが、繰り返し同じ調査を行うことで、森の成長、変化を追うことができ、記録の価値が格段に上がる。そこで、同じ箇所、同じ内容での再調査を行うことにした。その成果の一部は本誌第1章第3節に記載のとおりである。他の業務と調整しながら、調査を実行することは容易ではなかったが、8年かけて再調査可能な100箇所の2回目の調査を終えることができた。今後、3回目の調査についても、私たちの体力の許す範囲で取り組んでいきたい。



地道に行ってきた森の定点調査

そして、帯広の森全域の指定管理者となった今は、全体の森づくりの実践者としての役割も担うこととなった。森の現状を見通す洞察力、10年、20年後、さらに50年後の将来を見据えた想像力、今何をなすべきかなさざるべきかを見極める判断力、それを実践に移す実行力。「技術者」として多くが求められる。そしてさらに、それを市民とともに進めていくのが帯広の森である。そのコーディネーターなども含め、ハー

ドルは決して低くはない。何とか力を尽くしたい。

学校や団体の体験利用についても、それぞれ個別の体験はその日限定の活動であることが多いが、それをつないでいくことができれば、森づくりの大きな原動力となる。例えば、チョウセンゴヨウの抜き取りは、小学生でも大人でも、できる作業量に劇的な違いはない。この作業に関しては、一人のスーパー林業マンよりも 100 人の小学生の力の方が大きい。このような場面をうまく設定していくことができれば、子どもたちも立派な森づくりの担い手になりうる。もちろん、大木の伐採のように、一人のスーパー林業マンが力を発揮する場面もある。適材適所で、多くの市民が役割を発揮できる場所をコーディネートしていくのも指定管理者の役割の一つである（日月 2024）。



チョウセンゴヨウの抜き取り・伐採／子どもの力は絶大

人と人をつなぐ

帯広の森は、壮大なまちづくりの取組である。その意味で、帯広の森自体がまちづくりの中で重要な場として機能していくことも大切な役割であろう。すなわち帯広の森が様々なまちづくり活動の場となり、人と人がつながる場となることである。

人と人のつながりを考える時、十勝・帯広のような地方都市の良さの一つは、人の距離感のほどよい近さだと感じる。初対面の人に実は共通の知人がいた、というのは誰しもによくある体験であろう。一人に 500 人の知り合いがいるとすれば、おおざっぱにいうと知り合いの知り合いは $500 \times 500 = 25$ 万人（重複もあるので単純にそうはならないが）。つまり、知人の知人まで広げると、十勝・帯広のほとんどの人とつながっている可能性があるということである。

帯広の森がそんなつながりを発見でき、深められる場の一つになるとしたら、それも一つの森の価値であろう。

帯広の森が、余暇の場であり、子育ての場であり、教育の場であり、文化の場であり、生きがいの場であり、健康増進の場であり、それらを通じた交流の場であり……。いわば森のコミュニティーセンターであれたらいいのかもしれない。

また、帯広の森が市民生活の中に、必ずしもそれ単独に存在するものではないことも認識しておく必要がある。帯広の森には、市民ボランティアとしてまさに生活の中心になるぐらい深い関わりを持つ方もいらっしゃる一方で、多くの方々にとっては、森はくらしの様々な側面のうちの一部分であろう。例えばたまに散歩にくる場として、通学路として利用する方もいる。年に一度何かの用事で訪れる方もいるだろう。いずれかがよい悪いではなく、ささやかでも多くの様々な市民の日常、非日常の中に存在することがまちづくりの中では重要なことである。森の魅力の一つは、例え主役でなくても、脇役にも、時に舞台にも、背景にでもなれる懐の深さである。ある人には日常の背景として、ある人には心のよりどころとして…多くの人のくらし、心に帯広の森があり続けられたらいい。もちろん、主役にもなれるのが森である。指定管理者として、その舞台はしっかりつくっていききたい。

そういった観点からも、帯広の森が、自然や森に限らない様々な機関・団体などとなつがっていくことは重要である。これまでも市民団体や、緑ヶ丘公園など他の公園施設、学校、動物園などの公的機関、商業施設、音楽団体、スポーツ団体など様々なセクターとの連携を進めてきた。今後もつながりを強め、深めていきたい。その際、一見組織同士のつながりのように見えるものも、その結節点の多くは人と人のつながりであり、そこには人と人との対話がある。このことも肝に銘じておきたい。

おわりに

帯広の森もはぐくむも、地域の重要なインフラ（＝社会的共通資本）である。それは自然資本としてのグリーンインフラであり、くらしやまちづくりの場としてのソフトのインフラでもある。多くの市民にとって、帯広の森がかけがえのない存在であること、そして未来の市民にとってもそうであり続ける

こと。このことこそが帯広の森を未来につないでいくための基盤となる。そのための森づくり、しくみづくり、つながりづくり……。帯広の森のハブとして引き続き追及していきたい。

中学生向けおびひろ市民学の授業では、SDGsの根幹である「持続可能」の実践例として帯広の森を紹介している。授業の最後には、帯広の森がここまで50年間続けてこられた理由は何だろう？と問いかける。答えはいくつもあるだろうが、その一つは、50年間あるいはその前から、その時々で関わる人々が意志をもってつないできたからであろう。時々の意志と選択の積み重ねをなくして50年という時間はなしえなかっただろうし、それは今後についても同じであろう。

帯広の森やはぐくむの指定管理者として、これまでの取組やそこに込めてきた思いなどをまとめてみた。私たちなりに精一杯取り組んできた15年ではあるが、もちろん至らない部分は多々あるし、課題は山積である。それらも含め、帯広の森がより良き森として、市民にとってより良き場としてあり続けられるよう、そして未来につないでいけるよう、引き続き、関係者・市民の皆さんと手を取り合い、時に叱咤激励をいただきながら取り組んでいきたい。

引用 _____
日月伸（2024） 自然とともに生きる森林教育学，
pp.167-173, 海青社



帯広の森運動施設区 指定管理者

一般財団法人 帯広市文化スポーツ振興財団
専務理事 原 孝則

はじめに

「帯広の森」と聞いて、あなたは何を一番に思い浮かべますか？

多くの木が茂った豊かな森、散策や通学で歩いた園路、子供の頃、親と一緒に重たいスコップを持って苗木を植えに行ったことなど、色んな思い出があると思います。

そんな中でも、帯広の森に集積された運動施設を一番に思い浮かべる人も多いと思います。

広い帯広の森の中であって、所謂、「森」とは違った場所、野球場や陸上競技場、市民プール、屋内スピードスケートリンクなど、多くの運動施設が集まっている場所、それが「帯広の森運動施設区」です。

運動施設区とは

運動施設区は、8ブロックに分類されている帯広の森の中では、第4ブロックに位置づけられ、「スポーツの森」とも称されています。

運動施設区は、帯広の森の当初都市計画決定区域（昭和49年2月）には含まれず、昭和52年10月の都市計画決定変更で追加編入されました。

その面積は、約80haで帯広の森全体の20%近くにも及ぶ一団のエリアです。

運動施設区には、通年、夏期・冬期営業を行う多くの屋内外施設が設置され、様々な競技種目に対応し、地域のスポーツ振興、国内外の大会や合宿、スポーツを通じたコミュニティ形成、学校教育との連携、さらには健康的なライフスタイルの普及など、様々な分野に大きな役割を果たしてきました。

運動施設区において、最初に整備された施設は、昭和58年度に供用開始した「帯広の森陸上競技場」です。以降、平成21年度に供用開始した「明治北海道十勝オーバル（帯広の森屋内スピードスケート場）」まで、全12施設（パークゴルフ場及び廃止された施設を除く）が整備されました。

令和5年度末時点で記録に残っている利用者数は、ピーク時には年間80万人を超え、その累計は、約2,200万人に達しています。

その利用者数からも、運動施設区が多くの人に親しまれ、利用されてきたことを窺い知ることができます。

計画等における位置づけ

運動施設区は、帯広の森の計画段階では、どのように位置づけられてきたのでしょうか？

当時のプランや計画に記載されている内容（一部抜粋）を以下に示します。（表記は原文どおり）

●帯広の森と街を創るグリーンプラン（S45.9）

街を抜けると森がある。

どの道を行っても、その前に十勝特有の大樹林が大きく我々を迎え入れる。そして、その森の中には、花壇、子供の遊び場、体育運動場、記念植樹、果樹園、彫刻の森等の施設が程よく配置され・・・。

●第二期帯広市総合計画（S46～S55）

昭和46年に策定された第二期帯広市総合計画において、「帯広の森」はまちづくりの主要施策として決定されました。

運動施設区については、「帯広の森」建設構想の推進の中で次のように記載されています。

「帯広の森の建設用地については、それぞれ特色ある樹木を植栽した森林区、（中略）、あるいは風致公園区、運動公園区などにわけ、市民がこの森を愛し、楽しみ、利用することができるよう造成を進める。」

●帯広の森造成計画（牧野案）（S50.3）

この計画は、森づくりの専門家による最初の造成計画で、その後の森づくりの礎となったとされています。

Ⅳの施設造成計画で、どんな施設をつくるか検討され、その中に「軽運動施設」、「グラウンド・球技場」などが示されていますが、グラウンドについては、次のように記されています。

「グラウンドは正式競技場としての設備がのぞましい。」

以上の3つの計画は、森づくりの基本となるものであり、そのいずれにおいても、帯広の森の計画段階から「運動施設」を設置することが織り込まれていたことが分かります。

運動施設区についての考察 ①

帯広の森には、多くの運動施設が設置されてきましたが、帯広市における当時の状況などを振り返ります。

「帯広の森と街を創るグリーンプラン」が策定されたのは、昭和45年。

「第二期帯広市総合計画」の計画期間は、昭和46年から昭和55年です。

帯広の森の運動施設は、昭和57年から平成21年

にかけて整備されました。

その時代を念頭に、運動施設の必要性を考える上で参考となるであろう「日本経済」、「帯広市の人口」、「小中学校の新設状況」、さらに公共施設の整備状況例として、住民に身近な「コミセン及び福祉センター等の設置時期」を確認し、帯広の森に運動施設が集約され、整備されてきた理由等を改めて考えます。

1. 日本経済

「もはや戦後ではない」と政府の経済白書が宣言したのが昭和31年で、昭和47年までが高度成長期とされています。

昭和48年から昭和49年にかけて、第一次オイルショックがありました。

バブルと言われたのが、昭和61年12月から平成3年2月でした。

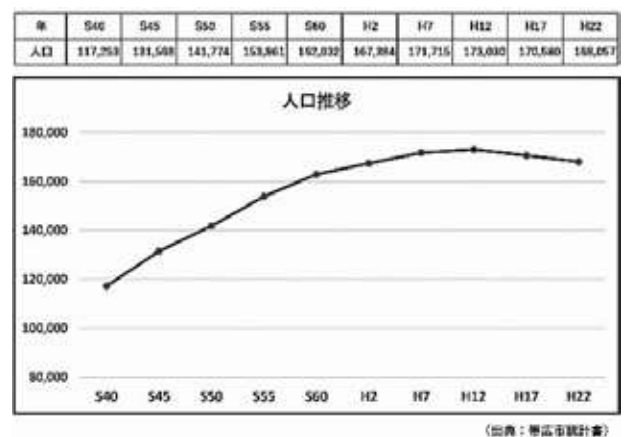
バブル崩壊以降、失われた30年と称されデフレ状態が長く続きましたが、その間にも、第14循環（いざなぎ景気）と言われる好景気が、平成14年から平成20年にかけて続くなど、日本経済は、世界情勢の影響を受ける中、大きな変動を続けてきました。

2. 帯広市の人口推移

帯広市の人口は、市制施行時（昭和8年4月）に32,506人でした。その後、毎年、数千人単位で増加が続き、昭和32年4月の川西村・大正村合併で9万3千人余りとなり、2年後の昭和33年には、10万人を超えています。

以降も産業の発展や十勝の中心自治体としての機能強化など、順調に増加しましたが、日本全体の人口構造には逆らえず、平成11年の約17万5千人をピークに減少し、現在に至っています。

今回の考察に必要な期間の人口推移を下図に示します。



人口と大きく関係する住宅地については、昭和42年に着手した「大空団地」造成をはじめ、昭和45年の市街化区域決定以降は、民間による個人、組合施行の区画整理や開発行為が盛んに行われ、現在までに1,000ha以上が開発されています。

一例として、昭和50年代の終わりから昭和60年代にかけて、帯広市西部で施行された区画整理事業（組合）は、帯広市最大規模で約184haの開発面積でした。

3. 小中学校の新設状況

現在、帯広市には、小学校が25校、中学校が13校、そして義務教育学校が1校ありますが、帯広の森の整備が始まったころの状況を基に各学校が開校された時期をグループ化し、数値を示します。

なお、現在までに中学校が2校統合され1校になったほか、小学校1校と中学校1校が廃校となり、新たに義務教育学校となっていることから、統合等以前の数値としました。

小中学校は、将来の児童生徒数、住宅の分布や住宅地の開発状況などを踏まえて、新設されていくと考えられますが、開校時期を見ると人口の伸びとの関係が分かります。

小中学校の開校時期					
開校時期	校数	比率	校数	比率	計
昭和39年まで	10	38.5	6	42.9	16
昭和40年から昭和49年	7	26.9	4	28.6	11
昭和50年から昭和59年	5	19.2	2	14.3	7
昭和60年以降	4	15.4	2	14.3	6
計	26		14		40

4. コミュニティ施設

帯広市では、地域住民のコミュニティ形成の場として、市内全域にコミュニティ施設（コミュニティセンター、地域福祉センター）を設置しています。

コミセンには、軽運動場も整備され、ミニバレーや卓球など、様々なスポーツにも利用されています。

昭和50年代に半分以上が開設されていますが、昭和60年代の早い段階を含めると6割を超える状況で、集中的に整備されたことが分かります。

コミセン・福祉センター等設置時期（農村部を除く）				
開設時期	コミセン	福祉センター	計	比率
昭和39年まで	0	0	0	0.0
昭和40年から昭和49年	0	2	2	4.9
昭和50年から昭和59年	7	16	23	56.1
昭和60年以降	3	13	16	39.0
計	10	31	41	

※上記1～4からの推論

地方自治体による公共施設整備は、地域住民へのサービス提供の一環として行われますが、財政的な制約などから必要なサービスの全てに対応できる訳ではなく、重要性などから優先度が判断されるものと考えられます。

帯広の森の運動施設は、昭和58年から平成21年度に整備されました。整備年次を見ると昭和58年から平成2年までに6施設、平成8年から14年に5施設、平成21年度に1施設で、整備費用は、合計で150億円（現存する施設の初期建設費用集計）を超えています。また、開設から相当年数を経過していることから大規模改修や日常的な修繕、さらには毎年の維持管理、運営費用などを含めると莫大な費用が投じられてきました。

昭和40年代以降は、高度成長期、オイルショックもありましたが、バブル崩壊まで経済成長が続いていました。帯広市の人口も急激に増加した時期で、住民生活に必要なインフラ（例：下水道）の整備も急速に進んだ時期です。

生活基盤が整ったことで、生活スタイルも徐々に変化し、芸術文化、レクリエーションなど様々なことへの関心も高まる中、小中学校をはじめ、コミュニティ施設やスポーツ施設等へのニーズも高まったと推測されます。

公共施設の整備には、自治体首長の考えも大きく影響します。時の帯広市長もこの時期に学校やコミュニティ施設、生活インフラなど公共施設を積極的に整備しました。因みに、とちか帯広空港の開港も昭和56年3月でした。

日本全体でも、国の制度も活用し、公共施設整備が盛んに行われた時期でした。

帯広の森に運動施設が整備された背景には、当然、その必要性を前提として、日本経済、人口、児童生徒数、住民意識の多様化など、様々な要素が関係する中、必然性が高かったものと考えられます。

運動施設区についての考察 ②

ここでは、帯広の森に運動施設が集約された理由について改めて考えます。

前述したとおり、経済成長によって、十勝の中心市である帯広市の役割も大きく変化してきました。産業面においては二次産業、三次産業における役割への期待も高まったと考えられます。

また、人口増加による新たな住宅地の開発、小中学校やコミュニティ施設の整備などにより、緑のオープンスペースが減少していった中、余暇の増大や多様なニーズとして、屋外レクリエーション、スポーツへの需要は量的、質的にも高まったと考えられます。

帯広の森運動施設区整備以前の帯広市には、緑ヶ丘公園に一部の運動施設が設置されていましたが、人口増加等による利用者増により需要に対応できない状態になっていました。

そのような状況も踏まえる中、帯広市の将来から見て、運動施設の拡充により市民が広くスポーツを楽しむ環境、記録を求め選手強化できる環境などの必要性が論じられたと考えられます。

また、既存施設の老朽化、大会等における駐車場問題、さらには十勝全体での大規模大会の開催などのため、広大な面積を持つ一団のエリアの必要性が高まり、帯広の森構想の当初段階から「運動施設区」の整備が盛り込まれたものと考えられます。

〈参考〉帯広の森運動施設整備以前の主な運動施設（緑ヶ丘公園）

- ・陸上競技場、野球場、テニスコート、和弓場、洋弓場、市民リンク
- （十勝川水系河川緑地）
- ・野球場、トラック、サッカー場

運動施設整備の状況

ここでは、帯広の森運動施設区に設置されている主な施設を紹介します。（整備年次順）

帯広の森陸上競技場



開場：昭和 58 年 4 月（平成 6 年度全天候改修）
（競技場）

- ・日本陸上競技連盟第 2 種公認 1 周 400m

- ・ 8 レーン（全天候型ウレタントラック）、フィールド（サッカー・ラグビー競技可能）
- ・ 補助競技場 250m 6 レーン クレー舗装



・陸上競技場は、全道、全十勝規模の大会が開催されるほか、部活動や走り方教室など多様な利用がされています。2023 年夏の全国高等学校総合体育大会（インターハイ）では、アーチェリー会場としても活用されました。



帯広の森体育館



開館：昭和 60 年 10 月

- ・ 1 階～第一体育館、幼児プレイ室、シャワー室、会議室、指導員室ほか
- ・ 2 階～第二体育館、第三体育館、走路
- ・ バスケット、バレーボールなどコートを使用する競技のほか、武道、卓球、エクササイズ、ヨガなどにも利用されています。



帯広の森アイスアリーナ



開館：昭和 62 年 8 月

- ・リンク～公認リンク
- ・1 階～ラウンジ、選手控室、研修室、レフェリー室
ほか、2 階～観覧席、ホワイエほか



帯広の森第二アイスアリーナ



開館：昭和 62 年 12 月

- ・公認リンク、選手控室、レフェリー室ほか
- ・アイスアリーナでは、世界大会など各種大会のほか、
スケート教室、オリンピックメダリストによるアイス
ショー。第二アリーナでは、タイヤメーカーのテ
ストなど、スケート以外の利用もあります。



帯広の森研修センター



開館：平成元年 1 月

- ・宿泊室、研修室、トレーニング室、レストランほか
- ・研修センターは、宿泊、レストラン等を備えており、
毎年、野球、スケート、バスケットなどの合宿に使用
されているほか、レストランは、運動施設利用者
以外の利用も多く、安くて美味しい食事を提供して
います。



帯広の森野球場



開場：平成2年6月

・グラウンド：両翼 97.60m、センター 122.00m

・諸室

ダックアウト、グラウンドキーパー室、選手控室、医務室、役員室、会議室、シャワー室、ホール、コンコース等

・収容人員 23,008 人（内野 8,008 人・外野 15,000 人、身体障害者用 36 人）



・野球場は、高校野球十勝地区大会をはじめ、プロ野球公式戦、野球合宿などに利用されています。



帯広の森市民プール：スインピア



開館：平成8年9月

・50m 競泳用 8 コース（日本水泳連盟公認）

・25m 競泳用 18 コース

・児童用、幼児用プール

・走路等



・市民プールは、各種大会、教室、水中ウォーキングなどのほか、小学校の体育の授業でも使用されています。



帯広の森弓道場・アーチェリー場



開場：平成9年9月

- ・弓道場～近的、遠的、室内近的ほか
- ・アーチェリー場～屋外短距離固定的、屋外長距離固定的ほか
- ・弓道場・アーチェリー場は、各種大会、練習など幅広い層に利用されています。



帯広の森テニスコート



開場：平成12年4月

- ・コート～砂入人工芝生20面（うち夜間照明設備付10面）
- ・クラブハウス（2階建て）～事務室、ロビー、ロッカー室、シャワー室、会議室等
- ・テニスコートは、各種大会、教室、部活動や同好会などで使用されています。



帯広の森スポーツセンター



開場：平成13年10月

- ・冬期：アイスリンク（公認60m×30m）



- ・夏期：軽運動場（卓球、バドミントン、インラインホッケー、フットサル、バウンドテニス等）
- ・スポーツセンターは、夏季・冬季で利用形態が異なり、アイスホッケー、フィギュアなど、大会や教室等で利用されています。



帯広の森球技場



開場：平成 14 年 7 月

・コート～30,240㎡（180m×168m）サッカー、ラグビー公式戦対応



・球技場は、サッカー、ラグビーに使用されています。全道、十勝規模の大会のほか、日本クラブユース選手権 U-15 大会にも活用されました。

明治北海道十勝オーバル：

帯広の森屋内スピードスケート場

開場：平成 21 年 9 月

・400m リンク標準ダブルトラック、中地多目的広場（4,130㎡）、ランニング走路 470m、トレーニング室ほか

・屋内スピードスケート場は、ISU ワールドカップ スピードスケート大会や全日本クラスの大会も多く

開催されています。また、中地は、テニスや各種教室などにも利用されています。



その他の施設等

・帯広の森運動公園パークゴルフ場

A コース（9 ホール）

B コース（9 ホール）



- ・帯広の森ミニスキー場（特設）
球技場東側に冬期間開設
- ・帯広の森運動公園雪中パークゴルフ場
研修センター南側に冬期間開設

運動施設区の役割等

帯広の森に運動施設が整備されてきた時代的背景、社会的背景、さらに整備された施設を整理してきましたが、ここでは、運動施設区が果たしてきた役割、また地域への影響（貢献）等について考えます。

帯広の森に最初の運動施設が開設されてから40年余り、この間、多くの施設が設置されてきましたが、帯広の森のように、多種目、宿泊など多様な用途に供され、約3,500台の駐車能力を有する施設が一つのエリアに整備されている例は、国内でも珍しく、特徴的なことで、競技者等からも高い評価を受けています。

この環境の良さから、サッカー、バスケットボール、野球、スピードスケート、アイスホッケーなど、プロ、アマチュアを問わず、多くの大会や合宿地として、選ばれています。

スポーツの大会には、選手をはじめ、関係者、観客など多くの人が集まります。大会期間を通じて、延1万人近くが関わる大会もあり、宿泊、飲食、交通など、地域への経済波及効果は計り知れません。また、大会が毎年開催されることにより、十勝・帯広の知名度アップ・発信力向上にも大きく貢献しています。

国際大会や全日本の大会が開催されることにより、高い技術に身近で触れることができ、競技者を目指す子供たちなどへ大きな刺激となります。2023年に開催されたスピードスケートワールドカップには、多くの観客が来場し、世界トップの滑りを目の当たりにしました。

競技者にとって練習環境が整っていることは、非常に重要なことで、帯広の森で練習に励んだ選手が世界で活躍し、オリンピックへの出場、さらには金メダリストも誕生しています。

例を挙げると、スピードスケートの清水宏保さん、高木菜那さん、高木美帆さん、堀川桃香さん、陸上の福島千里さん、パラ水泳の小野智華子さん、他にも多くの選手が帯広の森で練習し、世界に羽ばたいています。

帯広の森の運動施設は、競技者だけのものではあ

りません。市民が気軽にスポーツを楽しみ、身体を動かす機会を提供する場となっています。

個人で水泳を楽しむ人、グループでテニスをする人、トレーニング室に毎日のように通う人、親子でスケートに来る人など、様々な利用があります。さらに、各施設で開催されているヨガ、エクササイズ、スケート、水泳などの教室には、平成5年度で約2万6千人の参加がありました。

帯広市は、昭和63年10月に「健康スポーツ都市宣言」を行い、スポーツを楽しみ、健康な生活を送ることをまちづくりの柱の一つに据えています。帯広の森の運動施設は、その役割を担う中心的な存在になっています。

帯広市文化スポーツ振興財団

帯広の森運動施設区を説明するときに切り離せないのが、昭和59年7月に設立した「一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団（以下「財団」と言う。）」です。帯広市の指定管理者として、帯広の森の運動施設をはじめ、帯広市が設置する野球場やテニスコート、さらに、帯広市民文化ホール等の管理運営を行っています。

財団の定款で定める目的は、「生涯学習における文化・スポーツの振興普及並びに市民や団体の主体的な活動の後援をするため必要な事業を行うとともに、行政機関の設置する施設の管理運営事業のほか、スポーツ施設の設置と維持管理に関する事業を行い、市民の文化と体力の向上、社会参加や定住・交流の拡充をもって文化・スポーツの振興並びに地域社会の活性化に寄与することを目的とする。」とされています。

財団は、この目的に沿い、帯広の森の各運動施設を適切に管理し、利用者に安全な環境を提供するとともに、市民の健康増進や体力向上、各種スポーツ事業の実施などにより、交流人口の拡大など、様々な取り組みを行っています。

財団が主催する大会（一部掲載）として、少年野球、少年サッカー、ママさんバレー、ちびっこアイスホッケー、パークゴルフ、パラ水泳、卓球、スピードスケート競技会などがありますが、その歴史は古く、少年野球は昭和61年から開催されています。日頃の練習の成果を発揮する場として、財団主催の大会が目標とされていることも多く、地域のスポーツ振興に大きく貢献しています。

他にも、プロ野球公式戦、オリンピックメダリストによるアイスショー、国際スピードスケート大会など、様々な競技に関わっており、プロやトップアスリートが満足できる環境づくりに努めています。(例～屋内スピードスケートリンクでは、好タイムが期待できる製氷、プロ野球水準のグラウンド整備など) このように施設を高い水準で維持することが、国際大会などの誘致を可能にすると考えています。

帯広の森の運動施設は、財団が培ってきた技術等によってその機能を最大限に発揮できると言っても過言ではないと思います。

また、日本と韓国の高校アイスホッケー、バスケットボール交流事業、高校野球で使用し傷んだボールを障がい者の手で再生し、高校球児に活用してもらう「インクルージョンボール地域貢献事業」、まちなか歩行者天国への参加、帯広畜産大学、帯広大谷短期大学との連携協定に基づく事業実施など、青少年育成、社会貢献などにも取り組んでいます。

財団は、指定管理者としての責任を全うするとともに、地域のスポーツ振興や健康増進、地域活性化などの取り組みも期待される存在となっています。

昭和 59 年 5 月、第 6 代帯広市長田本憲吾氏（当時）を代表として、財団設立発起人会が設立されました。ここにその設立趣意書（一部割愛）を紹介します。

改めて当時の思いに触れ、帯広の森運動施設区と共にある財団の性格を確認し、今後の活躍を期待するものです。

「近年、市民の生活水準の向上と余暇の増大に伴い、市民の心身の健康づくりとして、文化・スポーツに対する考え方が著しく高まっており、健康で心豊かな市民生活の育成と健全な地域社会の建設のためにも、文化・スポーツ施設は欠かせないコミュニティの場として、日々気軽に余暇時間を十分活用しうる体制づくりが必要である。このことから、スポーツの生活化を促進するとともに、(中略) これら状況の中で、日常活動に結びついた文化・スポーツの一層の普及振興を図るには、施設の合理的、効率的な管理運営とともに、真に市民が要望する各種文化・スポーツ事業を市民自らの手で行うことが、最も望ましいと考えるところである。本趣旨から、帯広市が 3,000 万円の寄附行為をもって、財団法人帯広市文化スポーツ振興財団を設立し、帯広市における文化・

スポーツの普及振興のために必要な事業を行うとともに、帯広市の設置する文化・スポーツ施設の管理運営に関する事業を行い、もって本道における文化・スポーツの振興に寄与しようとするものである。」

むすびに

過日、帯広市が 2024 年に実施した「帯広の森に関するアンケート」についての報道があり、改めて「帯広の森運動施設区」の認知度の高さを確認することができました。

運動施設区自体は、森林区のような森とは、趣を異にしますが、緑に囲まれ、十勝らしさを感じることができるのは、やはり帯広の森の中に存在しているからだと思います。

私自身、市職員時代に帯広の森に仕事として深く関わり、帯広の森の構想に触れ、また、帯広の森に関わる多くの人との出会いの中から帯広の森の奥深さ、さらには 100 年後の姿に思いを馳せ、ぞくぞくした感覚を今でも覚えています。

現在は、運動施設区の管理運営に関わり、施設を利用する人々、特に合宿などで利用する本州の大学生や社会人などから話を聞く機会が多いですが、施設群の充実はもとより、「帯広の森」という言葉の響き、緑豊かな周辺環境の良さに言及される方が多く、嬉しく思っています。

そのような話を聞く度に、運動施設区は時間をかけながら帯広の森の中に溶け込んで来たのだと感じています。

各施設は、建設から時間が経過し、老朽化も進んでいます。この難しい問題への対処は、避けて通れないことで、様々な検討から今後の方向性が決まっていくのだと思います。

施設を所有する帯広市、利用者、関係者などの知恵でより良い運動施設区になっていくことを切に願っています。同時に「帯広の森」の中にあることが、最大のメリットとなる運動施設区として、さらに多くの人に活用され、発展していくことを期待しています。

第4章

「帯広の森」を未来へつなく



第1節 帯広の森50周年記念事業

記念事業及び実行委員会

帯広市 みどりの課

事業目的

帯広の森は、百年の大計で森づくりに取り組んでおり、令和6年に造成開始から50年を迎える。この大きな節目に、市民協働による実行委員会方式で記念事業を実施し、半世紀に及ぶこれまでの取り組みや森の成長を振り返り、市民の身近な憩いや安らぎの場等としての帯広の森の価値や魅力を、次の世代に引き継ぐことを目的とする。

事業コンセプト

「過去の軌跡・現状把握・未来へつなぐ」をコンセプトとし、それぞれの記念事業において、半世紀の軌跡（まちづくりと帯広の森）、帯広の森の今（植生・整備・利活用）、次世代へ引き継ぐ（森とまちづくりの思い）を意識した事業内容としている。

事業内容

実行委員会実施事業

記念ロゴマーク

フォトコンテスト

記念植樹・森づくりの集い

シンポジウム

絵本作成（漫画冊子・写真絵本）

記念誌

帯広市実施事業

高校生フォトコンテスト

帯広市共通封筒 PR 広告掲載

記念ホームページ

帯広の森展示キャラバン（小学校・義務教育学校）

YouTube 動画作成

帯広の森に関するアンケート

広報おびひろ特集記事

実行委員会名簿

役職名	氏名	所属団体等
顧問	高橋 猛文	元市民植樹祭実行委員長
顧問	林 光繁	元市民育樹祭実行委員長
委員長	三日市則昭	帯広市緑化審議会
副委員長	磯野 照弘	森の回廊@十勝
副委員長	澁谷 洋一	元植樹祭実行委員会
	赤嶺太紀子	帯広市 都市環境デザイン委員会
	伊藤 育子	エゾリスの会
	今村 江穂	NPO 法人 ぶれいおん・とかち
	小原 和弘	帯広の森サポーターの会
	清水 美晴	国際ソロプチミスト帯広（帯広市緑化審議会）
	橋枝 篤志	帯広商工会議所 参与
	畠山八重子	元森の少年隊指導委員会
	山田 英和	元植樹祭実行委員会
	大熊 勲	みどりと花のセンター
	日月 伸	帯広の森指定管理者
	宮崎 直美	帯広畜産大学 助教
	黒野 正博	帯広市 みどりの課長
監査	藤生 浩史	一般財団法人 日本森林林業振興会 札幌支部帯広支所
監査	馬淵 征雄	報徳会

実行委員会会議開催内容等

令和5年2月9日

設立準備委員会及び実行委員会立ち上げ

令和5年2月9日～令和6年6月7日

実行委員会 計7回開催

令和5年3月24日～令和6年3月21日

企画運営委員会 計7回開催

令和5年8月28日～

各記念事業ごとにグループ会議を実施

記念ロゴマーク

事業概要

制 作 日	令和 6 年 2 月 20 日
制 作 者	デザイン工房・金澤 代表 金澤 和彦
制作目的	帯広の森の魅力や周年事業をより広く発信し、様々な周年事業の機運を高めること

イメージ

- 市民の手で作られている帯広の森の特性を表現している。
- 子どもから大人までわかりやすく、親しみやすいもの。
- 一体感のあるデザインとし、帯広の地域性、帯広の森の歴史や豊かさ、帯広の森の思いを次世代につないでいく。
- ロゴ単体と 50 周年併記、日本語表記と英語表記の複数パターンを制作。

要 素

- ロゴマーク中央の手は、市民の手で作られていることを表現し、大きな手(大人)と小さな手(子ども)が幹を表現している。
- 手を囲み配置されているものは左から、エゾリス、ヤマモミジ、ミドリシジミ、カシワ、オオバナノエンレイソウ、ゴジュウカラ、ドングリであり、すべて帯広の森を代表する動植物である。
- 1975～∞は、造成開始(1975年)からこれまでつないできた森づくりの思いが、これから先もずっとつながっていくことを表現している

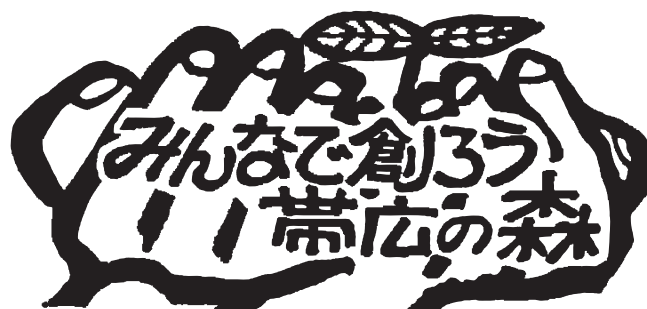


(参考)

令和 6 年度帯広市共通封筒に掲載



これまで使用してきているロゴマーク



フォトコンテスト

事業概要

〈周知チラシ〉



事業目的

フォトコンテストをきっかけに帯広の森を訪れ、帯広の森を知ってもらうことや利活用のきっかけづくりとなること。

募集イメージ

テーマは「あなたにとって帯広の森とは」であり、撮影者それぞれが感じる帯広の森の魅力を撮影してもらえるものとした。

また、募集期間以前の写真でも可とし、帯広の森の歴史が感じられる写真も募集したところ、当時の植樹祭の写真などの応募があった。

応募総数	206 作品
うち受賞作品	24 作品
・最優秀賞	1 作品
・優秀賞	3 作品
・優良賞	20 作品
(帯広の森へのいざないに掲載)	

展示会

日 付：令和6年9月27日～令和6年10月3日

場 所：とかちプラザ1階 アトリウム

内 容：令和6年9月29日開催のシンポジウムに合わせて、森づくり活動団体に関するパネルや帯広の森歴史パネルとともに、帯広の森フォトコンテスト及び帯広の森高校生フォトコンテストの受賞作品を展示した。



9月29日 展示会の様子

帯広の森高校生フォトコンテスト（参考）

募集期間	令和5年8月1日～令和5年11月15日
対 象 者	十勝管内の高等学校に在籍する生徒
応募部門	森の風景・生き物部門、人物部門
事業目的	帯広の森50周年記念事業フォトコンテストの先行事業として、同様の事業目的をもって実施したもの。
応募総数	54 作品
展 示 会	令和6年2月7日～令和6年4月11日 公共施設等8か所で実施

記念植樹・森づくりの集い

事業概要

実施日	令和6年5月19日（日）
参加者	総勢：約 100 名 記念植樹：高橋幹夫元市長 砂川敏文前市長 米沢則寿市長 森の里小学校児童 3 名 大空学園義務教育学校生徒 4 名 森づくりの集い：植樹活動 28 名 チョウセンゴヨウ抜き 30 名 （森づくりの集いサポート） 帯広の森 50 周年記念事業実行委員会 同会事務局（帯広市みどりの課） 森づくり活動団体メンバー 十勝造園緑化建設業協議会 ※その他一般見学者など

事業目的

記念事業の軌跡を帯広の森に残し、森づくりやまちづくりの思いを未来へつなぐとともに、記念植樹をきっかけに、市民が帯広の森を知り訪れる機会となること。

会場図



当日の様子

当日は快晴で、最高気温が 29.5℃ と 5 月の平均気温よりも 15℃ 以上高い絶好のコンディションの中で、認定 NPO 法人子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち主催の「森のこどもらんど」も同日に開催しており、帯広の森・はぐくむ周辺は朝から多数の来場者が訪れていた。

記念植樹は、大勢の参加者に見守られながら、高さ約 3 メートルのハルニレを 1 本植樹した。



記念植樹参加者

記念植樹後、森づくりの集いを植樹活動とチョウセンゴヨウ抜きに分かれて実施し、植樹活動では親子で参加している方などが、帯広の森にあるカシワやコブシ、ヤチダモなど 10 種類の苗木を植樹したほか、チョウセンゴヨウ抜きでは昭和 55 年植樹区エリア西側道路沿いに自生しているチョウセンゴヨウ（外来種）の稚樹を抜いた。

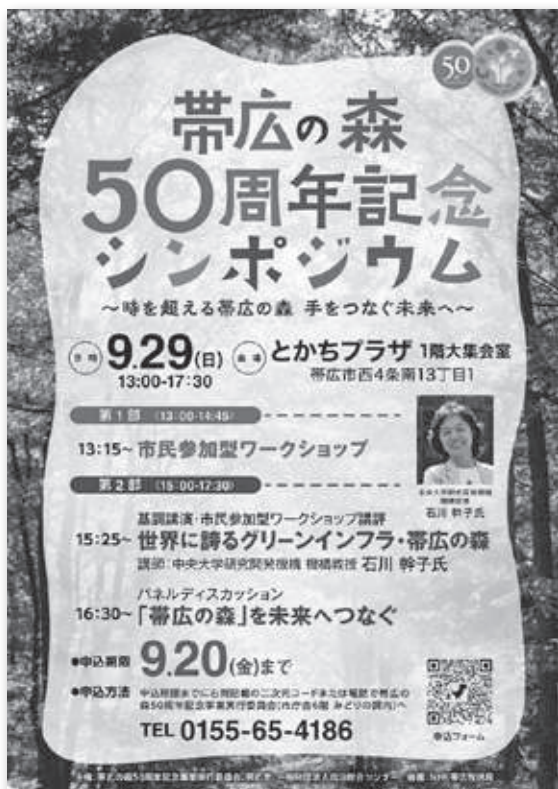


全体集合写真

帯広の森 50 周年記念シンポジウム

事業概要

〈周知チラシ〉



開催日時	令和 6 年 9 月 29 日 (日) 13:00～17:30
開催場所	とちプラザ 1 階 大集会室
参加者数	89 人 (うちワークショップ 23 人)

事業目的

シンポジウムを通じて、50 年の帯広の森づくりを振り返り、将来の帯広の森の姿や利活用のあり方などについて考えることで、市民の森づくりへの参加意識を高める。

市民参加型ワークショップ

13:05～報告、ワークショップ説明

- 日月委員から、帯広市の歴史、帯広の森の成り立ち、現在の帯広の森に関する内容の報告及びワークショップについて説明

13:25～市民参加型ワークショップ

テーマ「自分ごとワークショップ」

帯広の森が造られた歴史や文化、50 年に至るあらゆるプロセス、帯広の森が持つポテンシャルなど、帯広市民として貴重な財産である帯広の森を理解すること、そして市民の生活の一部となりうる可能性を、一人ひとりが自分ごととして考え、意見を引き出し、この先の帯広の森の目指すべき姿を会場全体で考える場となるよう実施した。

グループごとに、①アイスブレイク、②自己紹介、③帯広の森の好きなところ、嫌いところ、④今から 50 年後、造成開始から 100 年を迎える「帯広の森」に、「何があれば」あるいは「何ができるようになれば」みんなが幸せか、について意見を出し、発表内容を取りまとめた。

(グループごとの内容は、P139～142 参照)

また、一般参加者からも意見を聴取するため、会場内に上記④と同じテーマでホワイトボードを設置した。

15:05～ワークショップ発表

- 4 グループそれぞれが考えた内容を発表



基調講演

15:25～基調講演、ワークショップ講評

「世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森」と題して、中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授 石川幹子氏による基調講演と、市民参加型ワークショップに対する講評を実施した。

(講演内容は、P143～156 参照)

パネルディスカッション

16:30～パネルディスカッション

[コーディネーター]

山田 英和氏

(帯広の森 50 周年記念事業実行委員会)

[パネラー]

石川 幹子氏

金清 典広氏

(一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 会長

高野ランドスケーププランニング株式会社 代表取締役)

今村 江穂氏

(認定 NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち 理事長)

「帯広の森を未来へつなぐ」をテーマに、これからの帯広の森を考えるパネルディスカッションを実施した。

(ディスカッション内容は、P157 ～ 165 参照)



ワークショップ、パネルディスカッション等参加者集合写真



関連事業

開催期間	令和6年9月27日～令和6年10月3日
開催場所	とかちプラザ1階 アトリウム
開催内容	①帯広の森に関する展示 ・歴史パネル、巨大航空写真 ②R5.R6 フォトコンテストの展示 ③木のおもちゃふれあいコーナー ・ポテトイ、からっく、木のプール ・木育に関する展示 ※十勝総合振興局林務課協力 ・「帯広の森」の木材を使ったカスタネット作成体験 ④森づくり活動団体に関する展示 ・活動、イベントの周知 ・森づくり活動団体パネル展示
来場者数	342 人 (アトリウム延べ人数) 24 人 (カスタネット作成体験)



ワークショップ第1グループ

参加者一覧

山川 晋示、北久保 希愛、能登 綾香、
佐々木 梨江、磯野 照弘、田中 裕史、
井口 百合香、赤嶺 太紀子（ファシリテーター）



グループ内での議論について

まずは帯広の森のいいところと残念なところを書き出していただきました。いいところは「まちに近い」「広く、自然が豊かで生き物がたくさん」といった声の一方で課題・残念なところは「森を知らない人が多い」「使われていない」という声が圧倒的に多くでした。街に近い森がいいところなのに、バスがなく車でしか行けない。という利用上の課題が明確になりました。

この意見を踏まえて、50年後の「帯広の森」に、「何があれば」あるいは「何ができるようになれば」みんなが幸せか意見を出し合い、大きく3つの課題と対策を書き出しました。

- 1) 知られていない、使われていないを解消するために、情報発信の強化、学校利用の促進、ネットも使用した新しいアプリの開発など。
- 2) より多くの人が行きやすくなるように「散策路入り口」のようなバス停を整備したり、十勝らしさも反映して馬車で行けると楽しい。
- 3) 森のよさをもっと高め、広めるための活動として、自然活動と文化的活動を両方行うことや、自然度を高め本来の在来植生に近づけていくこと。

グループワークのタイトルは「来てみたくなる森」としました。これからたくさんの人に利用される帯広の森となること、市民だけではなく旅行

者も訪れるような帯広のアイコンとして愛される場所になってほしいという思いを込めています。



ファシリテーター感想

とても個性的なアイデアが多数生まれ、50年後の帯広の森の姿をわくわくして想像することができました。特に「森へのアクセス」については行きやすさだけではなく馬を用いる十勝らしい文化を織り交ぜる発想は、地域のアイデンティティに根差しとても魅力的なアイデアです。また、「もっと森と積極的に関われたらいいのに」という率直な欲求から「手のひらに乗る分は採っても良い」という森のおきてという発想は市民一人一人が森を楽しむことと森の生命力を共存させる素敵な意見でした。ワークを通じて積極的に森と関わる十勝・帯広らしい新たな文化の創造、そこでいきいきと森を楽しむ人々の姿、人々の活動から一層多様で豊かに育つ自然環境というポジティブな関係性。その上に愛される100年の帯広の森の姿をグループの皆さんと語り合えたことに感謝いたします。このアイデアが1日で終わらず、新たな交流や活動のきっかけとなれるよう、シンポジウムに関わった人間として取り組んでいきます。

ワークショップ第2グループ

参加者一覧

山越 芽依、関口 翔太、阿部 真由子、
永守 祥嗣、久保 美香、
宮崎 直美（ファシリテーター）



グループ内での議論について

最初に「帯広の森の好きなところ」について、自由に意見を出し合った。森で生き物に出会える驚きや楽しさなどが挙げられた。次に、「森の嫌いなところ／課題」について、意見を出した。自宅から遠くてアクセスしづらいこと、森を知らない人が多くて市民に浸透していないことなどが挙げられた。これらを踏まえ、50年後の帯広の森に「何があれば」あるいは「何ができるようになれば」皆が幸せかについて考えた。森では生き物と出会い、見るだけでなく、虫の声が聞こえるなど四季を感じられる自然が最大の魅力であることを確認した。また、虫の声を楽しみ、四季を感じるの日本人独特の感性で、こういった感覚を持ち続けながら、帯広の森の自然を大切に、50年後もつないでいきたいという話題が出た。そのために自分ごととして帯広の森に関わるには何が必要かを話し合った。森で宿泊キャンプができると新たな層を引き込めるといったアイデアや、市内の他の公園にも帯広の森を知ることができるサテライトブースなどを設置するといったアイデアが出された。誰がそれを担うかについては、これまで帯広の森に関わってきた人の中でも、子どものころから親しんできた高校生などの若い世代が講師になることで、幅広い世代から注目を得られるといった提案が出た。帯広の森に触れる新たなきっかけ

けや、森と市民をつなぐ新たな担い手の存在によって、50年後、人も動物も輝く自分たちの森として育んでいきたいという提案をまとめた。



ファシリテーター感想

参加者から最も意見を引き出したいテーマである、「50年後の帯広の森」を話し合う中で感心したのが、帯広の森の四季ある自然の魅力は、日本人だからこそ感じられるもので、これからも自分ごととして森に関わろうという意見が出たことだった。これまで私は少しでも多くの人に帯広の森に関心を持ち続けてもらおうと試行錯誤してきた。100年の森づくりには、これからも多くの力が必要で、市民にとって帯広の森に関わることは当然、ぜひ一緒にやろうという気持ちで森のことを伝えてきた。そこに、帯広の森の自然を将来につなぐことは日本人として当然という意見は、とても心強いものであり、少しのしくみや働きかけで、帯広の森を育む仲間がもっともっと増える大きなムーブメントを生み出せるような気がした。また、帯広の森のことを伝える担い手について、最初はグループで具体的な意見が出にくかった。しかし、幼い頃から行事などを通して森に親しんできた高校生の山越さん自ら、高校生がリーダーになりたいという素晴らしい意見が出された。この発言は、長年の帯広の森の取り組みが、継続的に森を育むことの大切さや、多くの人の行動・協力の不可欠さ、そのための方法を皆で考える必要があるという意識を、若い世代に植えつけることができた結果のひとつと言えるのではないだろうか。

ワークショップ第3グループ

参加者一覧

安齊 美星、二村 奏、中山 大志、
大井 和美、嶋野 奈津美、清水 隆典、
大石 拓人（ファシリテーター）



グループ内での議論について

まず、自己紹介の際に参加者の原体験「私と森（自然）」を話してもらった。帯広の森に限らず、出身地で森や自然の中で過ごした思い出を語り合い、グループ内でどのような人が参加しているのかを一人ずつ発表しあった。

自己紹介後、帯広の森の印象をそれぞれ付箋に書き出し、発表しあった。森の魅力的なところ、課題を思いついたままにキーワードだけ書き出してもらい、発表してもらう際には背景や補足を加えてもらった。癒やしや気軽さなどの肯定的な意見が多い中、昼でも暗い、公共交通が少ないなど、各自「もっとこうだったらいいのに」と思うところも少なからずあり、うなずきながら話を聞いていた。

次に、これから帯広の森でやってみたいことを聞いてみたところ、教育活動や安らぎの時間、キャンプ、サバイバルゲームなど多彩なアイデアが出てきた。

最後に50年後の森がどうなっていたらいいかを考えるうえで、これまで書き出したキーワードを俯瞰してみたり、項目分けしたりすると、第3グループは人（市民）が話題の核となっていることに気づいた。テーマであるみんなが幸せな森となるためには、「50年後も市民から必要とされる森」であり続けることが重要であり、そのために、森と一緒に、人も育てていかなければならないという結論に至った。



ファシリテーター感想

ワークショップ中は終始和やかに進み、意見も活発に出てきて、参加者も積極的に参画してくれたと思う。印象的だったのが、森と人との距離感という意見が魅力と課題の両方から出ており、年代や立場、生活スタイルによる感じ方の違いを実感した。距離感の中には物理的な距離、心的距離、野生動植物との距離、様々な意味合いが含まれており、帯広の森をはじめ市内の自然への関心の高さにも驚いた。参加者の一人から発せられた「森と育つ」。この一言にこれからの森と市民が築く、より良い関係が集約されていると感じる。帯広の森が公園や緑地としての役割だけでなく、教育や文化的な価値が付随している場所と認識してくれていることも、これまで、市民活動やはぐく一むで行ってきた森づくり活動の一つの成果だと考える。

一方で、森に対する興味の薄い層へのアプローチが課題であり、積極的な広報と次世代に向けた森づくり文化への昇華と引き継ぎ、安心して森に入れるような環境整備をこれまで以上に期待されていると感じた。

ワークショップ第4グループ

参加者一覧

佐藤 柑太郎、角谷 夏望、千葉 由香、
小野木 良、嶋野 丈治、
大熊 勳（ファシリテーター）



グループ内での議論について

第4グループのメンバーは、はぐくむの音楽祭に生徒とともに参加したことのある小学校の先生や、トレーニングとしてのランニングのフィールドとして帯広の森を日頃から使っている大学生、親子での森づくり活動を進めているNPOのメンバーなど、多様な形で帯広の森を活用している方々で占められていた。

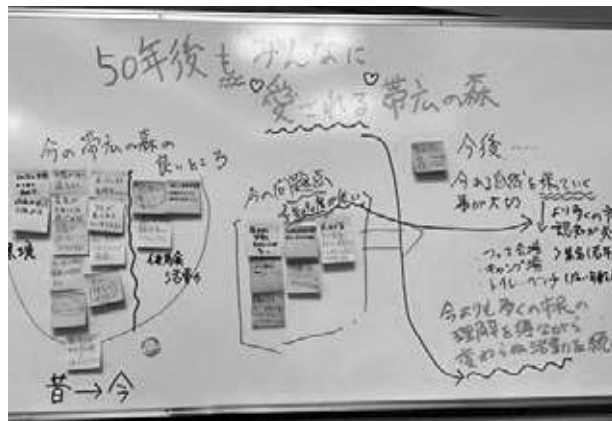
ワークショップの時間では帯広の森の良いところとして、森という環境が持っている良さ（景観の良さ、空気の美味しさなど）と、実施できる体験活動の良さ（森づくり活動やスポーツなど）が話題に上がり、過去から現在にかけて森の魅力が認知され、活用されてきたことの素晴らしさについて共有できた。

帯広の森の課題として、森の魅力の知名度が低いことが挙げられた。せっかくの魅力が多くの人に伝わっていない現状は、森の魅力が後世に継承されていかない可能性を示唆しており、解決すべき課題としてメンバーみんなで合意した。

認知度を高めるためには、音楽フェスの会場やキャンプ場として森を活用し、若年層を取り込むことが大切ではないかという意見が出た。他方で、現在の森にはあまり手を加えずに、トイレやベンチをしっかりと整備することで幅広い年齢層が帯広

の森で快適に過ごせるよう改善することが大事ではないかという意見も出た。

まとめの発表は「50年後もみんなに愛される帯広の森」というテーマとなり、知名度向上を目指しながらも今ある森の良さを損なわないよう今の活動を続けていこうという結論となった。



ファシリテーター感想

ワークショップでは森に新たな魅力や機能を足すことを提案する班が見られた一方で、4班はむしろ大きな変更を加えないという方向性を見出した。この結論は、メンバーのそれぞれがこれまで自身の活動のために実際に森を利用してきた実績があり、森の空気感をよく知っているからこそたどり着くことのできた結論だったように思う。

こうしたワークショップで提案されるあらたな方法での森の活用というのは、大なり小なり森に負担を強いることになり、時には不可逆的な変化をもたらすこともある。50年かけて成長してきた森の利活用を考えるにあたり、わたしたちは前向きな夢を描きながらも、慎重に森と関わる必要があるという重要な視点を会場に届けてくれた発表だったと感じた。

～世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森～

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授 石川 幹子

基調講演とワークショップ講評を行います。ここで基調講演の講師であります中央大学研究開発機構機構教授石川幹子先生を紹介いたします。石川先生は、東京大学農学部を卒業後、ハーバード大学大学院修士課程を修了され、慶應義塾大学環境情報学部教授、東京大学大学院都市工学専攻教授、中央大学理工学部人間総合理工学科教授を経て、中央大学研究開発機構・機構教授を務めていらっしゃいます。都市計画とデザインの両輪で世界的に活躍をされていらっしゃいまして、様々な著書、日本都市計画学会論文賞・計画設計賞など数多く受賞されています。石川先生、よろしくお願いいたします。



石川先生

石川でございます。ワークショップの発表、本当に素晴らしく伺いました。

基調講演のタイトルは、「世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森」です。実行委員会の皆様から50周年記念シンポジウムの基調講演の御依頼をいただきまして、「そんな大役はできない」と思ったのですが、清水の舞台から飛び降りる覚悟で、お引き受けいたしました。実は、私、「帯広ってすごい街だ」とずっと思っていて、いつか、この歴史の持つ迫力を皆様にお伝えしたいと思っていたからです。

もう、30年程前になりますが、私、アポイントメントもなしに、突然、帯広市役所に伺って、明治時代の帯広市の都市計画について伺ったことがありました。都市計画課の窓口で、御対応いただいたのですが、見ず知らずの私に、その方は瞬間的に御理解いただき、「この二つの図面が大事」と、明治28年と、昭和19年の都市計画図を見せてくださいました。いまでも、2枚の図面は、私の宝物で大事にしております。市役所の方が、御自分のまちの原点を確実に理解しておられることに感銘を受けました。

この基調講演は、帯広の森50周年を対象としたものですが、これからの50年、そして100年を考えるには、過去・現在・未来へのパースペクティブを持つていなければなりません。したがって、皆様には、すでに御承知のお話が多々、ございますが、滔々とした歴史の流れを俯瞰するという観点から、御容赦いただければ幸いです。

1. 近代化の歩み

十勝平野は、日高山脈、大雪山系、白糠丘陵に囲まれ、南部は太平洋へと広がり、中央を十勝川水系、歴舟川、利別川が流れる悠大な地です。御承知の通り、開拓は明治16年（1883年）、依田勉三の率いる晩成社の帯広への入植から始まりました。



写真1.晩成社移民団(明治16年) 帯広百年記念館所蔵

河西郡帶廣市村廣帯郡西河

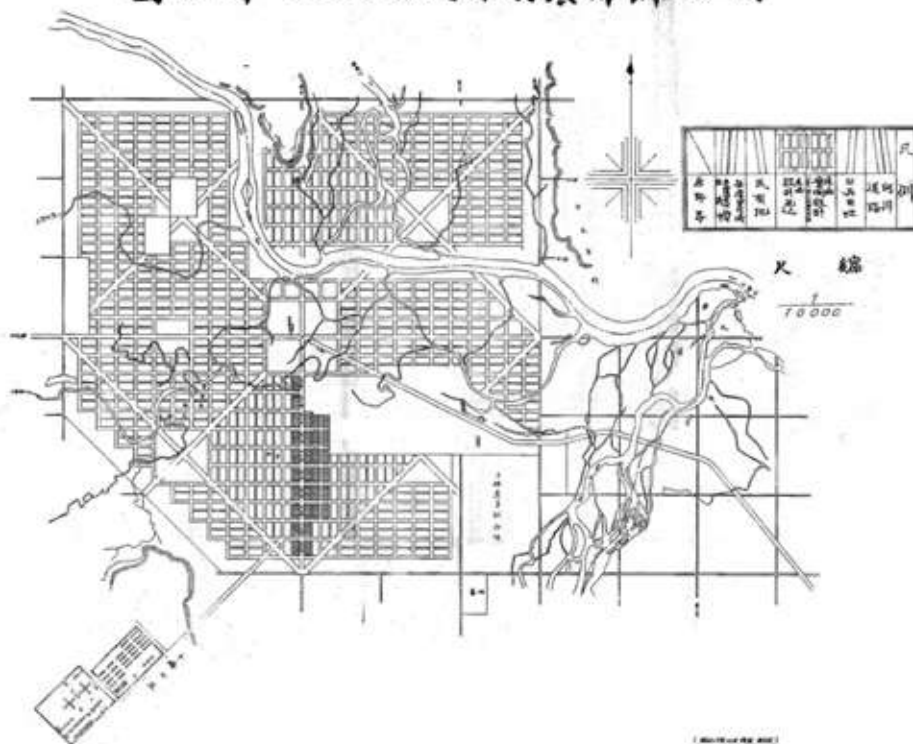


図1 河西郡帶廣市街予定地平面図(明治28年) 出典:帯広市史(2003年)

開拓は、トノサマバッタの大発生等、苦難の連続でした。一方、明治21年札幌道庁殖民課は、

「此の地、将来において運輸の便、生産の富、位置のよろしきを有す」

と帯広の地を高く評価し、測量を行い、斬新な市街予定図を作成しました。これが、私が30年以上前に帯広市から複写していただいたものと同じ「河西郡帶廣市市街予定地平面図」(明治28年)です。

見れば見るほど、不思議な図面です。格子状のグリッドの街路の中に、放射状の斜路が入っています。考案したのは、札幌農学校第一期生の内田澍、田内捨六、柳本通義等で、今日なお、帯広市の「水光園通り」として歴史を刻んでいます。



写真2 札幌農学校第一期生、右から内田澍、3人目田内捨六、4人目柳本通義
出所:「十勝をつくった人びと」

街区形成の意図については、格子型街路は「効用の原理」、斜路の広場は「参加の原理」とし、火防線としての役割も有したと記されています。新天地にける決意が伝わってまいります。

札幌農学校には、北米からクラーク博士が指導にあたっておられましたが、この街路計画は、アメリカの首都ワシントンの計画に準拠したものであると述べられています。

次に示す図面が、首都ワシントンの原型となるプランです。

ワシントンの都市計画は、ピエール・ランファンにより1791年につくられたものです。ランファンは、独立戦争の義勇兵として渡米した人物で、ベルサイユ宮殿の庭園師を父とし、宮殿の中で育った方でした。芸術的素養を認められ、ワシントンの都市計画を政府から依頼されて作成した図面です。ベルサイユ宮殿とまちの関係が投映された計画となっています。斜路が交差する様式はベルサイユ宮殿の庭園様式で、交差点となる広場には、通常、モニュメントや噴水がおかれており、首都ワシントンも、そのようになっています。

ところが、帯広の計画は、全く異なっています。斜路の交差する広場は、なんと、「参加の原理」を取り入れたと書かれています。これは、おそらく、どなたも考えつくことのできなかった思想であり、開拓者魂に、私たちは、いま、謙虚に学ぶ時なのだろうと思います。



図2 アメリカ合衆国首都ワシントン計画図(1791年)
出所:Brown,Glenn ed.(1901), *The Improvement of The City of Washington*, Washington D.C., Government Printing Office.

ピエール・ランファンの計画は、新政府の財源不足から遅々として進まず、双方に大きな溝が生じ、ランファンは解雇されることとなりました。その後、彼の計画は、助手を務めていたアンドリュー・エリコットが作成したものとされました。

ランファンは、失意の中で亡くなりますが、1902年になり、真の作成者であることが立証され、名誉回復が行われました。いまは、国会議事堂を遥かにのぞむ、アーリントン墓地に眠っています。

遙か太平洋を隔てた帯広の地で、ランファンの計画が、異なる形で受け継がれていることを知ったならば、彼は、何とすることでしょうか？

また、帯広市民の皆様も、自らのまちのルーツが、ワシントン、そしてベルサイユ宮殿の庭園にまで遡ることに思いを馳せることができるのは、まるで、夢のような物語です。

2. 鉄道の整備と産業の発達

明治38年に釧路線、明治40年に十勝線が開通すると、帯広では、豆に代表される雑穀の取引が活発に行われるようになり、ビート工場、バター製造、

そして十勝に豊富にあるカシワの樹皮からタンニンを取り、皮なめしの素材とする工業が盛んとなりました。軍の需要もあり、製紙業は隆盛を極めました。アイヌの人びとが護ってきたカシワ林は消滅してしまいました。



写真3.カシワの樹皮を剥ぐ作業 出所:『十勝国産業写真帳』

草創期を担った晩成社は、先駆者ゆえの資金の枯渇から経営破綻に陥り、すべての開墾地は人手に渡り、昭和7年、解散となりました。依田勉三は終始、貧困の中にあり、つぎのように詠んでいます。

「有難し 雨の降る日の衰(みの)とかさ
錦に勝ること な忘れそ」

3. 都市の発展とセントラルパーク

(緑ヶ丘公園)の整備：昭和初期

帯広は、昭和8年4月、市制を敷きました。戸数6,250戸、人口32,506人と記載されています。抜本的な都市整備計画が策定され、昭和9年3月には「帯広市風致景勝地・行楽遊観地・その他調査書」が策定されています。

①水光園(1.8ha、大正15年開設)：水光園、帯広川支流の清冽な湧水のある場所で、貸しボート等遊覧施設有り。

②緑ヶ丘公園(88.3ha、昭和4年開設)：南部の十勝刑務所のあった場所を、帯広市が買い取り公園としたもの。

③三井公園、④南豪植物園、⑤帯広競馬場、⑥鈴蘭公園、⑦帯広川逍遙地帯、⑧大通り公園予定地、⑨防風林及びその他樹林地帯(国有林50.5ha)等です。



写真4.戦前の水光園(水光園風景絵葉書より)

この写真が戦前の水光園で、ボート場や釣りで市民の皆様が楽しんでいる様子がわかります。背景に映っている橋は、現在も残っており、帯広市の原点です。保存、活用について皆様で考えていかれるのが、いいのではないのでしょうか。

このように、昭和8年の計画は、市内の公園だけではなく、河川逍遥地や防風林も含む、壮大な緑地計画でした。東京における緑地計画は、昭和7年に調査を開始、昭和14年に成案をみましたが、帯広市の緑地計画が同時期に行われ、今日の都市基盤を形成していることは、ほとんど知られていません。なかでも市の将来の発展を予測し、88.3haにものぼる緑ヶ丘公園を、用地を国から買い入れ整備したことは、百年後の今日、大きなレガシーを市民に残しています。どなたが、このように優れた計画をつくられたのか、しっかりとした調査を行い、後世の人びとに伝えていくことが重要です。

緑ヶ丘公園には十勝池が掘られ(写真5)、植樹が行われ、豊かな湧水を活かした逍遥路がつけられました。



写真5.十勝池(緑ヶ丘公園)

昭和30年代には「野草園」も整備され、「かけがえない貴重な自然をいつまでも保存し、自然に親しみ自然を愛する心を育てる場」として、貴重な十勝平野に自生していた野草や樹木105科530種が守り育てられています(写真6)。



写真6.帯広市野草園 野草インフォメーション



写真7.帯広市野草園 散策路

公園を歩きますと、崖線の直下には日本庭園が営まれた跡がありますが、様々の施設が建設された結果、現在では湧水は枯渇しています。しかし、一カ所だけ、今も滾々と湧く湧水が残っています。これは帯広市民の財産ですから、水の公園を回復する道筋を、皆さんでお考えになることが大事だと思います。



写真8.緑ヶ丘公園に残る湧水

帯広市は、鉄道により発展を遂げ、南部へと市街地が拡大します。図3は、私が、30年ほど前に帯広市から頂戴した昭和19年の都市計画図です。水光園通りに加えて、南部にも、斜路が交差する大通り公園が創り出されたことがわかります。

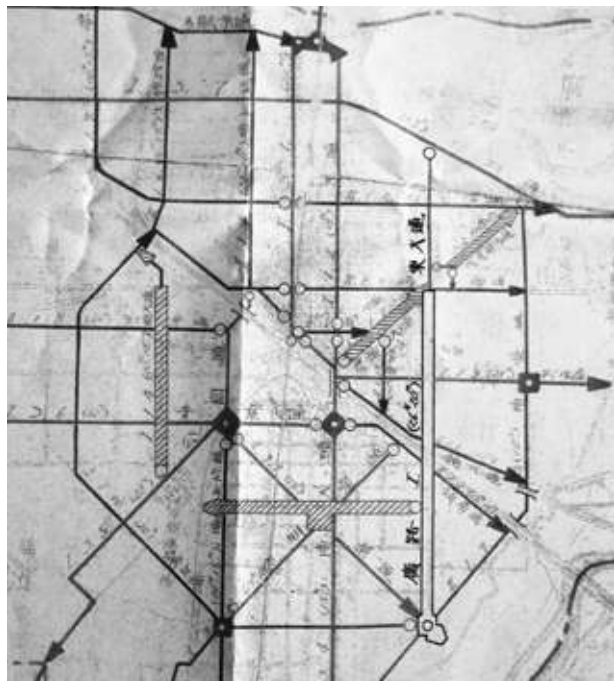


図3 帯広市都市計画街路一般図(昭和19年)

水光園通りは幅員 36 メートルで (図4)、両側に車道と自転車道があり、中央部がゆったりとした緑地帯となっており、帯広市の誇るブルヴァール (並木道) です。並木道に沿って、大正 11 年に建設され、国の重要文化財に指定されている旧双葉幼稚園園舎等もあり (写真9)、帯広市の歴史を物語る貴重な並木道です (写真10)。

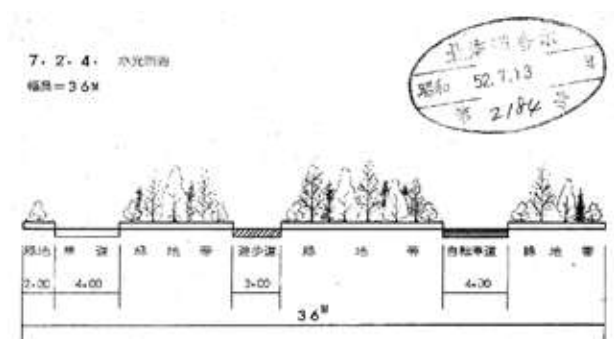


図4 水光園通り断面図(幅員36メートル)



写真9.旧双葉幼稚園(重要文化財)



写真10.水光園通り

大通り公園には、「参加の原理」が大胆に取り入れられました。4つの斜路が広場に合流するという、おそらく全国には例のない公園です。是非、次の世代へと確実に手渡していただきたい帯広市の「文化資産」です。



写真11.大通り公園

4.「近代的田園都市」と「帯広の森」

①都市の成長に対する戦略プランの提示

戦後、日本が高度経済成長へと突入する昭和30年8月、第五代帯広市長として、吉村博が就任されました。吉村市長は、まちづくりは「戦略的に行うべき」とし、当時は、ほとんど行われていなかった「総合計画」を昭和34年に策定しました。市の発展の基本的方向として、文化、産業の振興とあわせ、「北方の風土を生かした、住んで気持ちのよい美しいまちづくり」を掲げました。この市民の誰にでもわかる目標が、今日の帯広市の土台となっていると考えます。

吉村市長は、昭和44年6月にウィーンで開催された国際地方自治体連合の国際会議に出席する機会があり、ウィーンの森を訪れ一気に帯広の森へと構想がふくらんだといわれています。帰国後、時を置かず、昭和45年9月、「帯広の森とまちを創るグリーンプラン」を提示されました。概要は、次の通りです。(図5)

「街を抜けると森がある。どの道をいっても、その前に十勝特有の大樹林が大きく我々を迎え入れる(略)。市民の誰もが緑と太陽につつまれ、家族揃って一日を楽しく過ごす森、百年、二百年後の夢を描き、希望をもって新たな伝統と創造を生み出す母の森、この森が帯広の森である。」



図5 近代的田園都市構想図(昭和45年)

②ウィーンの森とは

ウィーンの森の約350年前の図面(図6)と現在のウィーンの森の位置です(図7)。



図6 ウィーン 1683年

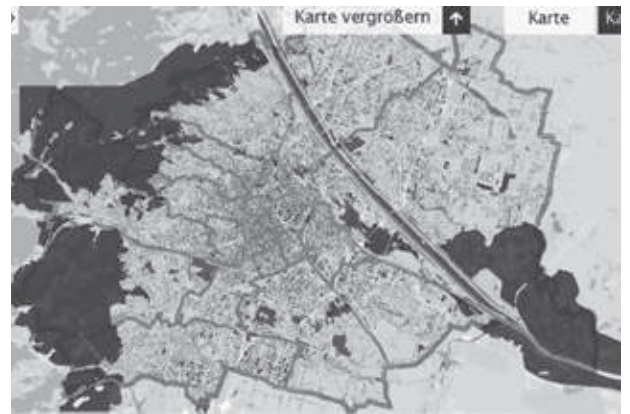


図7 ウィーンの森位置図(2024年)

出所:図6、7共に、ウィーン市ホームページ

図6にみられるように、17世紀のウィーンはハプスブルグ家が治める城壁で囲まれた都市であり、ドナウ川が流れています。市の郊外には、狩猟地であった森が広がっていますが、鬱蒼とした森ではなかったことがわかります。1870年、森の大部分を伐採する計画が進められましたが、広範な市民の反対運動により、ウィーンの森は護られ継承されています。

現在、ウィーンの森の枢要部は、ヨーロッパ自然保護区(Natura 2000)となっており、生物多様性の宝庫です。全市域を対象として、動物・植生・野鳥の生息地を評価したビオトープ・マップが作成されており、まちづくりの重要な指標となっています。

③田園都市のルーツ

吉村市長が掲げたコンセプトが、「近代的田園都市」でした。田園都市のルーツは、エベネザー・ハワードというイギリスの社会改良家が提案し、実施にうつした Garden City です。その理念は次の通りです。

ハワードは、1902年、『明日の田園都市』を発表しました。彼は、都市の有する娯楽・社交・雇用の機会・高賃金の魅力と、農村の有する自然美・新鮮な空気・低家賃等の魅力は、二者択一のものではなく、両者の利点を兼ね備えた第三の選択肢があると唱え、「都市と田園の幸福な結婚」を目標としました。

彼の提案した田園都市は、人口 32,000 人、市街地面積 400ha で、これを取り囲む 2,000ha の農地から構成されていました。重要な点は、以下の三つの原則が導入されたことです。

第一は田園都市の土地は、理想を持つ有志が支払う社債により一括買収され、土地は田園都市株式会社が所有し、地代による収益は、都市全体の運営に還元されるものとなりました。

第二に都市を取り囲む農業地帯は会社が所有し、恒久的に維持されるものとなりました。

第三には、一つの田園都市が計画された人口に達した場合は、少し隔たった所に、第二の田園都市をつくり、高速交通機関で結び、都市圏を構成するものとした。しかし、彼の理想に添って実現した田園都市は、わずかに二つに留まりました。

図8が田園都市のダイヤグラム、写真12が最初の田園都市レッチワース（イギリス）の現在の姿です。

人口は約3万人、周囲をグリーンベルトが囲み、都市の成長を制御しています。吉村市長の提唱された「田園都市」とは大きく異なっていることが、御理解いただけたと思います。記録を精査しましたが、吉村市長が、ハワードの田園都市を調べたという記録を発見することはできませんでした。

結果的に、このことは、世界に類例のない「帯広の田園都市」を生み出すことに繋がったのです。

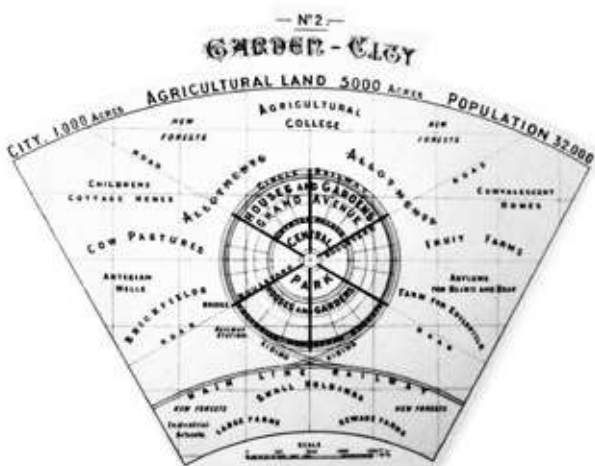


写真12.第一田園都市 レッチワース 筆者撮影

④先駆的都市計画の実施

吉村市長の「近代的田園都市」構想の、極めて独創的な考え方は、高度成長の時代に都市の適正規模を想定し、そのインフラとして「帯広の森」を提唱し実現していったことにあります。これは、時代に先駆けていた考え方であり、地球環境問題が顕在化する今日、世界の人びとが学ぶべき先例です。

すなわち、吉村市長は帯広市の将来人口を20万人とし、市の南西部に延長11.5km、幅員550m、面積686.13haの森を創り出し、北部の十勝川、東部の札内川と結び、緑地で帯広のまちを取り囲む構想を掲げました。この案は、第二期帯広市総合計画（昭和46年～55年）の主要施策となり、市議会で激しい論戦がかわされました。昭和40年代は四日市、水俣での公害問題が顕在化し、暮らしの安全・安心な場の形成が求められていました。議会での質問はこの点に集中しました。



The Garden City showing the rural belt of agricultural

図8 ハワード田園都市のダイヤグラム

出所:Howard, Ebenezer(1902),*Garden Cities of To-morrow*, London:Swan
Sonnenschein & Co.Ltd.

質問「森の莫大な事業費に対し、市民は都市基盤整備及び生活環境の充実を求める声も大きい。」
吉村「市民全部が、『よし、わかった、子孫のために、将来のために、何百年後のためにそれだけの力をだしていこうじゃないか』、という納得がいただければ、帯広の森は意味がないと思います。」

こうして、白熱した議論の結果、帯広の森造成事業計画は、昭和48年11月5日、特別委員会で賛成7、反対5（病欠1）、本会議で賛成18、反対15という僅差で可決されました。

帯広の森の特色は、国有林等の既存の森林を護ったのではなく、開拓で切り拓いてきた農地を再び森にかえし、多くの人びとが、将来にわたって憩うことのできる文化的ストックを創り出そうとしたことにあります。

一方で、開拓をしてきた人びとの揺れ動く、思いが綴られています。

「明治半ばより、祖父等が鋸を持って大木を倒し、斧や鎌をふるって木や草を払い、一畝一畝土を起し拓いた此の大地を、と思うと一言に協力せよと言われても答えはなかった。」

隣組や町内の会議は幾度となく繰り返され、また、「畑にしゃがんで考え込む姿」もあったと書かれています。

「皆それぞれに先祖の開拓の苦勞を思い、此からの生活を考えたのだろうが、関係地権者は時間がたつにつれ、同意方向になった。今思えば随分思い切った構想にのったものだと思う。この森が出来上がった時は、壮大なものになるな」と想像した時もあった。」

開拓の歴史を背負う一人一人が、過去と現在、そして、まだ見ぬ世界を夢みる思いが伝わってきます。市は、丁寧な話し合いを継続し、用地取得の合意には20年の歳月を費やし、牛歩の如く進められました。当事者の「市民的自由」、すなわち自由な

意志の発露と合意形成が、おそらくこの歴史的なプロジェクトを推進する力になったと考えます。

「帯広の森」の面積は、最終的に406.5ha、幅員550m、延長11kmとなりました。昭和50年に開催された第一回植樹は500人の参加でしたが、年々、増加し、第30回植樹祭が終了する2004年までに、148,000人、23万本の植樹が行われました。写真13は植樹の風景、図9は、現在の帯広の森の位置図です。



写真13.帯広の森 植樹風景(平成15年)



図9 帯広の森の位置図

5. 科学的森林育成計画の導入

帯広の森のもう一つの大きな特色は、科学的森林育成計画が、まず、始めに策定されたことでした。ここに持ってまいりましたのが、昭和50年3月に出された調査報告書です。作成された方は、以前、帯広営林局に在籍していた牧野道幸氏でした。ここでは、地形、地質調査を踏まえて、森の育成の基盤となる図面として、応用植物社会学に基づく「現存植生図」が作成されました。立地の有する潜在的特性を現地調査により科学的に検証し、百年の計を立てる基礎的作業が、50年前に行われたのです。

畑地として開墾された台地上の森林の潜在自然植生は、落葉広葉樹林（カシワ－ミズナラ林）です。残存していた樹林地の調査が行われ、帯広農業高校の樹林地に良好な群落が残っていることがわかりました。写真14は、この報告書に掲載されているカシワ－ミズナラ林で、写真15は、私が撮影した現在の姿です。階層構造が豊かで、高木・亜高木・低木・地被・野草が、優れた樹林地を形成しています。この森を目標とする階層性豊かな落葉広葉樹林への遷移を促す保全・育成活動が、各所で進んでいます。



写真14.カシワ－ミズナラ林
(帯広農業高校 1975年)
出所:「帯広の森計画基礎調査報告書」



写真15.カシワ－ミズナラ林
(帯広農業高校 2024年)

また、帯広の森には台地を開析して流れる帯広川などの小河川が存在しており、段丘崖と沢筋に添ってヤチダモ－ハンノキ林が分布しています(写真16)。生物多様性の宝庫で(写真17、18)、きめ細かな保全活動が展開されています。

苛酷な自然環境の中で、成長に時間を要するエゾマツ、トドマツ、耕地防風林のカラマツ林、植林の過程で導入されたチョウセンゴヨウ等の針葉樹については、現在、林業の経験者がサポーターとして活動しておられ、適切な間伐等の指導を、子どもたちにもできるように、市民総出の取組が展開されています。



写真16.小川沿いのヤチダモ－ハンノキ群落



写真17.バイケイソウ



写真18.エゾノシモツケソウ

6. 市民が育む「帯広の森」

2010年に活動拠点として「帯広の森・はぐくむ」がつくられたことは、一時期を画する出来事となったと思います。市民の活動拠点と森の育成、環境教育の場がたちあがったことにより、責任をもった市民活動の展開が可能となったのです。



写真19.帯広の森・はぐくむ

帯広の森は406.5haという広大なエリアであり、現在8つの市民団体が、それぞれ区域を受け持ち、活動を行っておられます。エゾリスの会、ぶれいおん・とかち、帯広の森サポーターの会、報徳会、もりとも！、森の回廊@十勝、日本森林林業振興会、帯広

の森町内会有志等の皆様で、本日も多くの方々が参加しておられます。お写真のみで恐縮ですが御紹介させていただきます(写真20～27)。



写真20.次世代育む森遊び(第7章「帯広の森」新聞記事 P257に拡大再掲)



写真21.たき火、大人がしっかりみまもる



写真22.ぶれいおん・とかち 今村江穂さん



写真23.木登り



写真24.帯広の森サポーターの会 小原和弘さん



写真25.帯広の森 報徳会 馬淵征雄さん、林業技術者のパワー 山田英和さん(帯広の森50周年記念事業実行委員会)



写真26.エゾリスの会 三田市則昭さん(中央手前左側)



写真27.エゾリスの会の観察小屋

写真 28 は、帯広の森にある展望台からみた、現在の帯広の森です。かつて開墾された畑と耕地防風林であった地には、豊かな森が立ち上がり、農業、市民菜園、スポーツ、国際交流の拠点（JICA）等、市民だけではなく、世界の人びとが訪れる、多様性あふれる森へと展開を遂げています。

このように歴史と人の営みの重層する優れた文化資産は、「世界に誇るグリーンインフラ」ということができます。

グリーンインフラは、「自然環境を生かし、地域固有の歴史、文化、生物多様性を踏まえ、地球環境の持続的維持と安全・安心な暮らし、人々の命の尊厳を守るために、戦略的計画に基づき構築される社会の富」です。

アイヌの人びとが護ってきた、千古斧鉞（せんこふえつ）を知らぬ森は、明治期の開拓により日本有数の農業地帯となりましたが、まちづくりの夢が、ワシントン、ウィーン、田園都市と、世界に繋がり、十勝の風土に溶け込みながら、市民の力で実現させていったことは奇跡とも思われます。何よりも一人一人の魂の自立を尊重する、開拓者精神が脈々と流れていることを思います。

上皇后美智子様は、北海道開拓 150 年にあたり、次のような歌を詠まれています。

この広き大地拓かむと来し人ら

依田勉三もその一人にて

出所：美智子（2025）：歌集ゆふすげ（岩波書店）

遥かに連なる日高山脈の峰々は、このような営みを、変わらぬ姿で抱擁しています。



写真28.帯広の森(2024年9月) 森・農地・菜園・牧場のモザイク。遥かに日高山脈がそびえる。

基調講演に続き石川先生のワークショップ講評

ワークショップの各グループの御発表への講評です。皆さん、短時間で、凝縮された素晴らしい内容です。この力は、帯広の森の次の50年への、大きな第一歩となると、確信いたしました。ありがとうございました。

①第1グループ

コーディネーター 赤嶺 太紀子
山川 晋示、北久保 希愛、能登 綾香
佐々木 梨江、磯野 照弘、田中 裕史
井口 百合香



第1グループのみなさん

- 50年後の帯広の森「何があれば、何ができれば幸せになれるか？」
- 良い空気、四季の変化、馬車でまちから森へいきたい、ウィーンの森との姉妹都市、自然と普段かわっていない人が、かわれるようなイベント、音楽、アプリ、バス停の整備、自然活動と文化的活動を両方行う、情報発信の強化。

講評：「来てみたくなる森」ということで、私もとても新鮮でした。今まではまだ育てている森で、いよいよ、皆さんいらしてくださいという、そういう時代になったのかなと。ですから、来てみたくなるというのは、次の50年に入ったということです。

馬車できたいというのは、とても、おもしろいですね。ニューヨークのセントラルパーク、私はずっと研究してますけど、公園を管理する方、馬車に乗ってるんですよ。カッコいいんですよ。馬車で公園の管理をしていらして、素敵なお帽子をかぶっていらっしゃいます。

市民や観光客の方が、馬車で帯広の森にいくことができれば、SNS等で発信すれば、これだけアジアの皆さんが北海道にきておられますから、人気スポットになると思います。

②第2グループ

コーディネーター 宮崎 直美
山越 芽依、関口 翔太、阿部 真由子
永守 祥嗣、久保 美香



第2グループのみなさん

- いま、がんばっている時。
- イベントで、森へいくきっかけが沢山うまれるといい。
- リピーターが増えることが大事。
- 虫の声が聞こえるなど四季を感じられる自然が最大の魅力。
- 宿泊キャンプができると新たな層を引き込める。
- 市内の他の公園にも帯広の森を知ることができるサテライトブースを設置する。
- 50年後、人も動物も輝く自分たちの森として育んでいきたい。

講評:第2グループの皆さん、とてもいい発表でした。人も動物も輝く、それから、とても印象に残ったのは、「自分たちの森」という、発表していらっしゃった方いましたよね、やはり誰かの森じゃなくて、ここは自分の森なんだよと、そういうことはすごく大事だと思います。それから虫の声。これは発表してくださる方もおっしゃってましたけど、日本だけですね、江戸時代の日本庭園なんか見ますと、鈴虫とか、音に対する物語があります。これはたぶん日本だけです。こういうことが、どんなふうにできるのかというのは、私たちが忘れていたことなのではないかなと思いました。

それから、高校生の方が「大人と子供の中間にいる。自分たちが何かできたら、子供がもっと楽しめるんじゃないかな」とこれもいいですね。

なるほど。高校生のお兄さん、お姉さんがちっちゃな子と、そうしたら、本当にみんな楽しく遊べるんじゃないかと、そんな気がいたします。

ご自分の気持ちがプレゼンの中に表れていて、とてもいい発表だったと思います。

イベントでリピーターが増えることが大事というふうにおっしゃってました。50年後も市民から必要とされるということですね。帯広の森というスポーツ。おそらく今大事なことは、帯広の森っていろいろ人によってですね、十人十色でいろいろあります。やはり森全体として包容力がある力強い森だと思います。ネーミングも含めて、これから、考えられたらいいのではないのでしょうか。

③第3グループ

コーディネーター 大石 拓人

安斉 美星、二村 奏、中山 大志

大井 和美、嶋野 奈津美、清水 隆典



第3グループのみなさん

● 50年後も市民から必要とされる森を目指す。

● 「森と育つ」

講評:極めて、重要な御指摘をされました。森の中で育っていく。子供たちとつないでいく。この「つなぐ」ということが大事という御発表でした。私の先程の基調講演も同じです。

「今と未来をつないでいく」ことが、それが50年後の未来の森に大事なことでないかという御発表でした。

④第4グループ

コーディネーター 大熊 勳

佐藤 柑太郎、角谷 夏望、千葉 由香

小野木 良、嶋野 丈治



第4グループのみなさん

● 時間がゆっくり流れる帯広の森

● 50年後もみんなに愛される帯広の森

講評:集合写真が面白い。手を広げていらっしゃる方がいらっしゃいます。「みんなに50年後も愛される」、いいですね。みんなに愛される森ってとってもいい言葉ですね。最初に発表なさった方が、子供の頃に自分が植えた木が、育っていく。これはおそらく一番大事なことだと思います。自分が植えた木が育ち、自分の子供とまた植え、そういう形で時間を共有する。そういうメッセージっていうのがですね、御発表の中から伝わってきたと思います。

最後に、今回の50周年のシンポジウム、引き受けることができないような大役を仰せつかりまして、どうしようと思ってですね、ずっとくよくよ考えてきましたけれども、みなさん素晴らしい御発表でした。

みなさんもちろん誇りに思っていらっしゃると思いますけども、外から来た私がこれだけ感銘を受けるのですから、世界に誇るまちであると思います。歴史のことを、前段で申し上げましたが、将来をどんなまちにしていくかは、市民の皆様、お一人お一人です。

皆さんの思いを形にして、輝かしい先人の皆様が築いていらした帯広を次の50年、そして100年につないでいていただけたら、とても素晴らしいことだと思います。

以上で私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

〈志をつないでいく〉

未来の世代へ手渡していく緑ヶ丘公園。

昭和4年（1929年）から、先人達が創り出し、手渡してきてくださった帯広市の珠玉の公園です。あと5年で、開園100周年（2029年）を迎えます。

隣接地の少年院跡の活用は、未来を見据えた、しっかりとした議論と検討が必要だと思います。



緑ヶ丘公園：空とつながる大地



緑ヶ丘公園：木洩れ日のシラカバ並木、隣接地が少年院跡地

帯広の森50周年記念シンポジウムパネルディスカッション

～「帯広の森」を未来へつなぐ～

山田さん

本日は帯広の森の今までの50年、今、石川先生からお話を受けたところで、これからの50年に向かって、早速パネルディスカッションを始めたいと思います。

今村さんは九州にお生まれで、九州で育った方です。成人になられてから我が帯広十勝に来られた方です。どうぞ自己紹介を含めお願いします。



いですがけれども、この先50年の帯広の森の未来ということで、何か力になれるような、皆さんと一緒に考えていける場にしたいなと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

山田さん

自分の生まれ育ったところと縁あってこの十勝に来られて、どんなふうに十勝を見ることができたのか、思うことができたのか。

思いという言い方をしてですね、どんなふうな風景が今村さんに影響しましたでしょうか。

今村さん

はい。私は政令指定都市北九州市の割と大きな町で育ちましたが、小さい時に親に連れて行ってもらった自然の中でサワガニをとるとか、ギンナンを拾いに行くとか小さな自然体験がかなり自分の中では原体験になっています。それで帯広に住むようになってから、こんなに豊かな自然の中で何ができるかな？本当にうらやましい限りの自然環境だなというふうに思ったんですね。子供たちと一緒に自然の中で遊ぶ、触れ合うきっかけを作りたいというふうにすごく思いました。帯広は私の故郷とは違って、冬、雪が降ったり、とんでもない寒さだったりっていう、その四季の変化というか、それがまずすごく魅力的だと思いました。

自然に触れ合って育つことが子供たちが生きる力になっていくんじゃないかなということをすごく感じて

今村さん

今村と申します。NPO法人ぶれいおん・とかちは、NPO法人になってから20年足らずなんですけれども、前身の親子劇場の創立から今年で50周年を迎えた、実は歴史のある団体でございます。

子どもも親も一緒に育ち合うというような活動で、その活動の一環として「遊び」をすごく大事に捉え活動を続けています。その遊びの場の一つが、自然の中での遊び、森遊びで、力を入れてやっていきたいと考えております。2018年から帯広の森の昭和55年植樹区を使わせていただきまして、森づくりや遊びの活動を行っています。先ほどから若い皆さん達にもいろいろな声がありましたけれども、多世代で森で過ごすという楽しさを共有できるような、そういう場をつくりたいというふうに考えて、あそびの森、あしあとの森とネーミングをしまして、活動を続けています。本当にこのような場に登壇させていただくのは、恐れ多



います。それまで帯広の森の活動を始めるまでは、はらっぱくらぶという別の名前で、十勝のいろんな場所、先ほどの発祥の地公園ですとか、緑ヶ丘公園ですとか、いろんなところに行って、とにかく自然の中で子供と一緒に遊んでいました。それが私自身のやりたいことでもあったし、十勝の子育ての魅力なんじゃないかなというふうに思っています。現在は帯広の森の定点で四季折々の変化を感じながら、活動を続けています。

山田さん)

金清さんも帯広十勝の生まれではありません。成人になりましたから、業務上という言い方はおかしいですけれども、会社ぐるみ、この帯広の隣町の音更町で集団移転されてこられた仲間でございます。

それ以来、我々と一緒に表になり裏になり、いろんなことでお付き合いをいただいていたという方でございます。自己紹介を含めてお願いいたします。

金清さん)

平成2年ぐらいの時だったと思うんですけど、東京にあった事務所が丸ごと音更町の鎮鍊（ちんねる）小学校に移ってきました。私は、現在、東京で働いていますけれども、事務所はその廃校跡で持続的に活動させていただいております。帯広の森との関わりは、かなり遡り、今回50周年ですけれども、30周年の記念のイベントの時には、実はこんな形で登壇させていただいています。それと、もう少し前に遡ると、帯広の森利活用計画という、先ほど先生のプレゼンテーションの中にあった立派な最初の報告書ではないんですけれども、帯広の森が20年を迎えるに当たって、このままで良いのか、一体どうするんだと。

今日、結構皆さんから森の利活用の話が出ていましたけれども、その20年目ぐらいの時に、もう既に大体植樹のめどが立ってきたので、後は利活用だということで計画を立てようというような話をいただいて、それは仕事でやったんですけれども、その時にはまだ森が十分森の実態を伴っていない状態、利活用と言っても、森の利活用ではなくて、敷地の利活用、何ていうんだろう、帯広市としては土地をいっぱい持っている。

だから、もっと有効に使えるんじゃないか、あれは森にするんじゃないんですかというところを、こういう風にも使える、ああいうふうにも使えるという森の利活用を何とか立案しろというような話が一方である中で、森としてどうしていくのかっていうのを考えようというような、ちょっとややこしい、難しいことに関わったことがあります。

その時には実態として、未だ森ではないので、今日の資料の中にも何かあったかもしれないですけども、森が育っていく100年の森づくりということを当初の計画の中でしっかりうたっておられたので、20年目は今どんな時点で、40年後には、20年経つとこんなふうになるだろう、50年の時はこんなじゃないのというようなことを想定して、そろそろ50年にもなってくると、森の実態というのが見えてくるでしょう。

そうしてからでも利活用を考えるのは遅くないんじゃないんですかというようなことを書かせていただいたのを覚えております。今見ると、まだ私は40代の頃にそのレポートを書いているんですけど、この先何10年後にどういう森になっていくっていう姿を描いている。

頭の中ではすごく明快に書いているつもりなんですけど、出しているレポートを見るとちょっとがっかりしており、こんなの書いてたかな、もうちょっとしっかり書いてたんじゃないかななんて思っていました。

山田さん)

本当に20年前にも金清さんが言われたように、最初に牧野先生がつくられた牧野案というのが帯広の森の実際の実施計画なわけです。帯広の森をこれからどう作ればいいのかということで、高野さんの高野案ということで、いろいろな検討をした経緯があります。確かにその時はある程度のことは書き込んだけれども、実際の利用、活用っていう部分でどうしようかっていうあたりまでには、はっきり言ってそこまでは踏



み込んでいません。こういう課題があるっていう課題設定がされてますけど、じゃあどうしようっていうところまでは残念ながらいきませんでした。

ただ、その辺のことをこの20年史の後、30年経って、実際に利活用をされている今村さんから、先ほどちょっとお話だけしていただきましたけれども、帯広市内の中で緑ヶ丘公園だとか発祥の地公園だとかで子どもたちと遊ぶということを一つのテーマとして、いろんなことを、フィールドワークをやられてこられております。

それで今村さんにお聞きしたいんですけども、帯広の森づくり、大事な過去、現在、未来をきちっと押さえることですよ。ということも言葉の中にありました。今、未来を見据えたときに、帯広の森で愁眉の問題っていうよりも、50年先にこんなあったらいいなって、今、ワークショップの中でいろんな話が出ておりました。

課題として出ていました。じゃあ実際に今現在やられているぶれいおん・とかちの活動の中から、本当に足りないものとか欲しいものとか、どんなものがありますでしょうか。

今村さん)

はい。私達の活動は、活動の対象としては赤ちゃんからおじいちゃんおばあちゃんも一緒に参加してくださいというふうに呼びかけていまして、どなたでも参加してくださいというふうにはなっているんですけども、先ほどよりありましたように、なかなか小学生とか子供が一人で行きたいと思って行ける場所ではないということがあって、親の理解があって送迎してくれるとか、親子で参加する、ということにどうしても限定されてしまうんですね。

それで、参加実態としては、乳幼児の親子で参加するというのが一番多くて、小学校のせめて低学年ぐらいの子たちがもっと参加してくれたらいいなということはあるんですけども、実態としては小さいお子さんの親子の活動になっています。そこは課題としてはあります。

まず、それはそれとして、親世代がやはり自然の中で遊ぶ楽しさだとか、その自然の中でどんなふうに過ごせるかとか、森が楽しいというような体験をしている人がすごく少なくなっていると思っているんですよ。

それで、子供を連れていって一緒に遊ぼうというふうに思える大人が減ってきているというところが一番のネックになっているのかなと思っているので、

これから先、本当に森の楽しさとか、魅力を感じられる関係人口を増やす、そういった裾野を広げていくといいますか、そこがこれからますます重要なかなと思います。

先ほどの第2グループの中で、高校生が小学生と遊んだり教えたりというようなことが出ていましたけども、さまざまな役割を誰が担うかというところが大切な視点ではないでしょうか。こちらの資料にあります「幸せな帯広の森がどうやったら実現しますか」っていうアンケートにも、これがあったらいいな、あれがあったらいい、こうしてほしいとかっていうことがたくさん出ていますけど、じゃあそれは一体誰がやるのかなというところで、全てを行政にやってもらえることはないですし、そのみんなが描くこんな森だったらな、っていうことをどう役割分担していけるのかなということを考えていく、そういう仕組みが必要なのかなと考えていますので、今日参加して下さった皆さんがここで解散しちゃうのはもったいないなと思って、ぜひ何か今日集っていろんな意見を言うて下さった皆さんが、どんな形でも、今後も継続して何かをやっている担い手になってもらえたらいいなというふうに、ちょっと勝手に妄想していたところです。

山田さん)

人がどういうふうにいろいろな社会的な活動と関わっていくかというのは、いろんな課題があると思います。まだこれから利活用と言ったときに、例えば交通の便のインフラ、それから急に降雨になったとか、雷が来たときの逃げ場所のインフラ、それからトイレのインフラ、具合が悪くなったときにどこかで横になれるようなインフラ、そんなものが多分どこかで必要な時期になってくると思っています、石川先生にもお伺いしたいんですけども、お話の中でですね、マネジメントという一括りの中でお話しされたと思うんですが、多分これはファンドも含めてですね、単に行政におんぶにだっこって言い方はおかしいけれども、行政がやるべき課題の一つだろうとは思いますが、本当に民間がやれるものがあるのかなのか、その辺は先生のご経験の中からですね、やっぱり公共投資だけでやってきたのか、それとも民間が何か、例えばなんとか商事提供のトイレです、なんてものがあるのかなのかわからないけれども、そんなようなことが可能性としてあるんでしょうか。



石川先生)

都市のインフラとしてしっかり緑地をつくっていくことは、公共だけではできません。ですから、いろいろな方が、ステークホルダーというふうに言いますが、やはり50年経ったから、名前をもう一回みんなで考えたかどうかというふうに思っています。つまり、公共事業だけで、絶対に帯広市のインフラの緑地をつくることはできません。今日あまりに盛りだくさんでご紹介しなかったのですが、アメリカのボストンにあるハーバード大学というところで勉強いたしました。

そのボストンのインフラとなる緑地は、「エメラルドネックレス、緑の首飾り」って、市民の皆様が呼んでいます。いろんな公園を、公園道路でつないでいます。小さな公園を繋いで、それを全部集めてエメラルドネックレスって呼んでいます。

さっきどなたかが帯広の森というとスポーツ公園というふうに思う人が多いっておっしゃっていましたよね。ご案内していただいた時も、やっぱりスポーツが一番で、私は、いいと思います。例えば、ボストンのエメラルドネックレスの中に、レッドソックスがあるんですよ。松坂大輔さんがおられました。私、イチローを見に、わざわざシアトルまで行くくらいの熱烈野球ファンです。レッドソックスの球場も何度も行きました。

フェンウェイ・パークという名前ですが、フェンというのは湿地という意味なんですね。フェンという湿地をうまく使って、野球場を100年前に作ったんです。その隣がですね、なんとボストン美術館です。そのちょっと先に、ボストンフィルハーモニーがあります。

小沢征爾さんが指揮をされていたところです。スポーツがあり、美術館があり、音楽があり、それからハーバードの樹木園が、つながっています。

そこには日本の植物がいっぱい。横浜植木なんていうラベルがついていて、幕末の頃に横浜から船出して、お嫁に行った盆栽なんかがあるんですよ。ですから、いろいろな文化の蓄積が、エメラルドネックレスという言葉の中で、ボストンの財産になっています。

帯広の森って、都市公園で森のところだけっていう風に考えてらっしゃるかも知れませんが、訪れる方にとっては、アイスクリーム屋さんも、市民農園も、みんな一緒だと思います。森という言葉をもう少し帯広市全体の名前にしていく時なのではないかと思えます。これだけ一生懸命おやりになって、押しも押されぬ世界に誇れる森になってるわけですから、50年を契機にお考えになったらいいのではないかなというのが、今日の私のメッセージです。

もう一つ私、どうしても言いたいことがあります。私は学術ですから、さっき報告書のことを非常に素晴らしいと言いましたが、やはり、がっちりとしたものは基本です。

先ほど、ウィーンのホームページを、お見せしましたが、ベルリンもそうです。都市計画の基礎にビオトープマップというのがあるんです。生態系の基本をきちんと調査をして公表しています。生物生息地の情報が、まちづくりの基礎となっています。

自然環境の基本的なビオトープマップ、これはヨーロッパ全体で作ってます。日本でも一時つくろうという気運が高まりましたが、日本の場合にはうまくいっていません。

都市計画に役に立つようなビオトープマップ。それはやはり、基本的には植生です。帯広市は、広大な台地があり、段丘崖があったり、湿地があったり、基本的なものが揃ってますから、ちょっと工夫すれば、できると思います。

ビオトープマップをベースに、これからの都市のマネジメントとして、活用していくことが大事です。日本では、まだどこも作っていません。鎌倉で私は30年やりましたが、これが詳しくすぎて、活用することが困難なのです。

帯広の森でこれだけのものがあれば、私は多分できると思います。

山田さん)

ありがとうございます。ビオトープマップ、イメージとしては分かるし、帯広市に作ったような記憶がないわけじゃないんですけど、ただし、先生がイメージされているものと僕がイメージしてるものは違うかもしれません。ただ、ビオトープという名前ではなかったような気もするんですけど、例えば、帯広も段丘平野の下の方にあるもんですから、湧き水の出る箇所が何か所かありまして、そこで今でも緑地が大山緑地とか3つ4つ残ってるんですね。

石川先生)

湧き水ってとても大事で、要するにビオトープマップというのはお手本があるわけじゃなくて、その場所、その場所で大事なものを選べばいいわけです。ですから不思議ですよ。ベルリンなんか、大きな森はもちろんはっていますが、生垣とか、そういったものがビオトープマップにはっています。例えば帯広なら、湧水地のビオトープ、そのところはきちんと入れ、町のその特徴に合わせて作ればいいわけです。

山田さん)

ありがとうございます。ただし、一つはつぶれてなくなっちゃいました。学校が建ってます。小学校が。

石川先生)

かつてあったというところは、大事です。過去に存在した湧水の位置を明示することは重要です。

山田さん)

実は今、ビオトープの話を先生の方に振ったわけでもないし、お願いしたのはですね、帯広十勝という1万800平方キロという分水嶺で出来上がった地域です。要するに水が大事なことは皆さんご承知の通りだと思うんですけど、水のヨーイドンで出発点からですね、海に行くまでが。

我が十勝は十勝川水系で成り立っています。大樹町、広尾町は歴舟川、広尾川とかありますけれども、基本的には十勝は十勝川という分水嶺から流れたところが我が地域なわけです。問題は、この地域経営の戦略って、帯広の森があるにしても、帯広市がどう個性を出すかにしてもですね、やっぱり地域経営の戦略的な視点というのが非常に大事だろうと思ってます。

ありがたいことに日高山脈が国立公園に指定されま

した。大雪山もあります。阿寒もあります。道立公園も一部含んでますけれども、白糠丘陵という山に囲まれた地域が我が地域なわけです。この中で特に近代的田園都市こそ、これを私なりに理解していけばですね、あの当時、昭和30年代は確かに人口が急増してきました。

その時、街も人もどんどん膨れ上がって行って、小学校が足りなくなって、それで小学校を急遽作らなきゃならないってということで、自衛隊の下にある小学校を作りましたというようなところが、しょっちゅうありました。その中で帯広市、当時の吉村市長がですね、辺境の大地という言い方はおかしいですけど、あの頃の物流はまだ鉄道が主体でした。

高速道路なんて夢にもない話は国中そうでしたから。その中でなおかつ峠で通れるのは、狩勝峠しかなかった時代です。あとは釧路の方に行く道と、日高から抜けていく海沿いの道ですね。道路でつながるのは。とにかく鉄道も国道も狩勝峠しかないという地域だったわけです。

そんな辺境の地で何があるのかということを吉村市長はだいぶ考えられておりました。その中から苦肉の策ではなくて、これは恵まれた地域なのか、恵まれてない地域なのか、今は評価の分かれるところですけど、じゃあそれならば近代的田園都市という、いわゆる十勝の風土に合った、今は畑作地区ですけど、当時はまだお米も作ってました。

農業を主体にした地域づくりをやろうと。その中核として我が帯広が行こうと。なおかつここでもう1点押さえなきゃならないことは、北海道は亜寒帯にあるということでありまして。亜寒帯の主たる意味は、今村さんは先程言いましたけど、冬になったら寒いですよ。雪降りますよね。僕らの小さい頃はマイナス35度ぐらいまで下がりましたから、夏は35度ぐらいあった。1年間で70度の温度差のある我が地域であります。そしてなおかつ年間降雨量は当時はまだ700ミリ前後でした。昭和30年代、40年代は、そして日本全体では2000ミリ、1700から2000ミリぐらいあって、湿潤温暖な地域で米作を中心にした農業っていうのがベースでありました。

それが昭和40年代後半からですね、農業基本法の改定もありまして。コメだけではなくて、畑作酪農の評価もきちっとしていこうということで、農業全般となってきたわけです。そういう限られた地域の中でどう生きていけばいいのかという話を吉村さんはされて

おられました。そこから出てきたのが、近代的田園都市構想 20 万都市論です。

これは全く別の話になっちゃいますけれども、今から 30 年ぐらい前に京都大学の上田篤さんという建築学で社会学をやられた教授がですね、人口論を唱えたことがあります。最適人口は 30 万人だっていうんですよね。その地域の広さではなくて、その地域と言われるのが 30 万人が一番適切だと。

どうしてなのか。私も 77 年生きてきて分かったんですけれども、初めてお会いしました今村さんとちょっと話をしました。そうしたら、金清さんが仲間だったんですとか、石川さんのお友達だったんですということが話のついでに出てくるがあります。

要するに、30 万人というのは、非常に分かりやすく言えば、人と人の繋がりが良くても悪くても繋がっていく地域だっていうことです。そしてなおかつ、これは集落と違いますから、日常的に常に見られてるとか、日常的に常に地域の中にだとか、そういう窮屈なものではありません。何かあった時に何か会って話した時に、ああそうか、お前そうだったのかというような、そういう付き合いがあったのかってことが分かる地域です。要するに地域経営の基本というのはですね、僕は人の繋がりとって思ってますから、その人の繋がりにってというのがどうあったらいいのかなってというのが、やっぱり帯広という町の中で帯広と帯広の森を考えてる時に、大事な一つの流れのポイントになるんじゃないかなっていうふうにも思っています。

そんな流れの中でですね、ここでもう一度金清さんをお願いしたいんですけれども、金清さん、成人になって、先程自己紹介を含めてこっちへ来られて、帯広の森にうまい具合に関わることが出来たと。僕らがお願いしたような経緯もあるんですけども、そんな中でですね、ここで商売をやられていて、なおかつ今は東京にお住まいですけども、子供もここで育てられてですね、そういうことを含めて十勝という地域を、その金清さんのご商売を通してどんなような楽しみと苦しみみたいなのを感じましたか。

金清さん)

十勝の話を随分されたので、僕がするかというところはありますけども、ランドスケープという私どものプロフェッションから考えるということが、実は今、十勝に限らず全国の地方都市ですごく、求められている。都市計画の中の一分野としての緑地とかというこ

とよりも、もう少し、例えばその街のプライド、誇りであるとか、シンボルであるとか、何かもっと精神的な拠り所を期待するものとして緑に絡むことが期待されているようになっていて、そういうふうな問いかけ。何とかならないかというようなことを我々の仕事の仲間に問われることが多くなってきていますね。十勝は何て言うんだろう、その吉村市長の時に、グリーンベルトというのもしっかり考えられて、都市はスプロールさせないという、しかも畑にしたところをまた森に戻すというすごい提案をされていて、それで今 50 年経って森になってきたと。

私たち、これから 50 年、100 年に向かってもっとそれを、質を上げていくとかっていうだけじゃなくて、何かできることはあるんじゃないかって、今日ここに来て考えていたんですけども、今日作ってもらった地図があるじゃないですか。大きくなって、その上を歩けるようになってるやつ。

グリーンベルトって横につなぐ。それって市民生活から言うと、出会うチャンスがそんなに多くはなくて、街から外へ横断していく時にちょこっと通るんだけど、その時には森の実感ってあまり感じないと思うんです。あの地図を見ていると、川とかいろんなものがまちの中に刺さっていく。

まちの外から日高の方から繋がってくるというような。それはグリーンベルトに対してウェッジ（楔のこと）っていうんですけど、楔をまちの中にどれだけ打ち込むかっていうのが、多分計画者としてはすごく重要なことかなと。そうすると、もっと普段の生活とより近い緑の関係、せっかくすごくできている、しっかりできつつある緑と市民の関係をもっと近くにできる可能性があって。

あの地図はうちの赤嶺が作ったみたいですけど、だいぶ脚色があって都合よく作られているから、ちょっとそういう楔が強く見える、実際よりも強く見えてると思うんですけど。さらにあれを今よりももっと強めていくようなことをこれから 50 年めがけてやると、まちは本当にすごく誇れるものになる。ちゃんとした田園都市が出来上がるのではないかと思います。

山田さん)

その楔を打つということ、もう少し詳しくお話しいただけませんか。そういうふうになると意味が全く違ってくると思うので、ぜひその辺のお話を聞かせてください。

金清さん)

ベルトってぐるっと囲むようにあるじゃないですか。地図より内側に。

もともと十勝川と札内川はこのまちを囲むように外側にベルトを通すという計画です。そこにこっち方向に川が入ってたり、帯広川とか売買川とかいろいろ川がありますけども、これをしっかりとしたその緑地として、市内でこの緑ヶ丘公園とかもそうですし、そういうのをもっとまちの中に展開していくと、人との触れ合う、住んでいるところから近いところで緑に触れ合えて、それがそのまま帯広の森にもつながっていく。

それは生物的にも連続していくだろうというようなことです。ベルトって、なんかすごく力強そうなんですけど、ベルトよりも実はこっちのくさびの方が街にとっては効果的なんです。だからこれから50年かけてくさびをいっぱい作っていったらどうですかっていう、そういう話でした。

山田さん)

ありがとうございます。

石川先生)

今の話はものすごく大事です。グリーンベルトという言葉は、1944年にイギリスのロンドンがドイツ軍から爆撃されて戦災復興計画の中で生まれてきた概念です。都市の膨張を防ぐために緑で制御する。

金清様のお話は、そこにくさびをいれていくという重要な提言です。その基礎となるものが、土地の自然環境、水、湧水も含めて、地質等を総合化したものが、先ほどのビオトープマップなんです。

この基礎となる図面を赤嶺さんが作成してくださいました。これがあればもっと細かくできると私は思っています。はじめの一步で、ものすごく良い図面を作っていただいたと思っています。小さな小川、普通はこういう十勝川の雄大なものに比べたら、小川なんて図面に入らないですよ。でも、そこに暮らす人にとっては、小さな川とか湧水とか、それから独立木とかが大事なのです。

それから緑ヶ丘公園、心配で心配で夜も眠れないぐらいです。正直言いますと、皆さん、市民の方がしっかりしていないとだめですよ。緑ヶ丘公園は、ビオトープマップつくれば、随分、大事さが、わかると思います。水があったり、湧水があったり、公園の潜在的力を理解することができます。

いまは、発信していくことが重要であると思います。逆輸出っていうんですか、それが帯広のまちの誇りにつながるし、プライド・オブ・プレイスですね。自分の生まれたところに誇りが持てる、そのために心を砕く。それが、帯広では、できると思います。

山田さん)

ありがとうございます。

時間がなくなってきたものですから、先へ進めたいと思います。今のビオトープの話ですけれども、ありがたいことに、街の中を流れている2本の川は売買川と帯広川、これは過去は何回か洪水を起こしたことがあるんですよ。

それは今、売買川は札内川に、それから帯広川は十勝川に放水路ができて、水量調整が市街化区域の中で調整できるようになっています。ということは、今帯広神社の横に流れている帯広川、これはちょっと上流に行くと帯広の森の中を流れていますから、帯広の森のところの帯広川はまだ放水路はありませんから、その下流側ですから。

ですから、今言われた新しいまちづくり、ビオトープ、何だろうなと思っていたんですけども、まちづくりの中で、単に帯広の森だけじゃないよっていうようなニュアンスでもないと思うんですけども、帯広の森っていう名前もネーミングを変えたらいかがですか、考えてみたらいかがですか。

これも一つの刺激だろうと思います。結果として帯広の森公園になるかもしれないけれども、じゃ、みんな帯広の森のネーミング考えてみようや。何かおもしろい、横文字は嫌だけれども、漢字だったらいよいよという人がいるかもしれない。そんなようなところの辺ができてくると面白いなって、今聞いていて思いました。

ということは、話を戻せばですね、帯広川も売買川も我々のためにもっと有効利用ができる。単に排水路じゃない、川だよっていうことを今言ってくれたような気がします。その辺でどう緑地を作っていくのがいいのか。

緑地というわけじゃないですけども、どう、市民が遊べれるような川を作っていけばいいのか。それから、ありがたいことに帯広市は先ほど明治17年にも開拓史の段階で都市計画図が一回出来上がってるわけですから、その時、格子状の20間道路、10間道路で本通り、中通りがはっきりしてまして、帯広市内の旧市街

地という言い方をしたら怒られちゃいますけれども、かなりの部分は都市計画区域の中のかかなりの部分がですね、本通りと言われているところはたいてい街路樹が入ってます。

その街路樹がいろいろクレームの対象になることもあるし、何かあった時に、もう古くなったりもあるから危険な場所もないわけじゃないですけども、それもありがたいことに、この木でなきゃだめだつていう決まり方は、歴代市長といひましようか、歴代部長といひましようか、歴代課長といひましようか、その時の流れつていうわけじゃないけれども、その時手に入りやすい木なのかかもしれないし、担当者の好きだった木かもしれないし、色んな木が入っています。

トチノキがあつたりですね、それから、マツはあんまりないですね。基本的に広葉樹が多い。そういう街路樹が帯広の中にたくさんあつて、本通りにほとんど入ってます。

ですから、人の住むところから、この市街化区域というのは帯広市だけではないわけですけども、日高山脈までは帯広市で、帯広市の中に国立公園がどかんとでかいがあるんですけども、それはちょっと今の話がそぐわないので、とりあえず都市計画区域という中で見ていったときに、この十勝 19 市町村の一番いいところにあるわけです。

オベリベリつてのが、アイヌ語で言えば川の集まる場所という意味ですから、その川が集まる場所に人が集まりやすいのも事実なわけですから、次なる可能性としてビオトープという一つのテーマをいただきながら、我々は新しい帯広の森のありようを考えていく時期なのかなと思っています。

さきほどワークショップのポストイットを眺めていたらですね、水あそびのことを言われている方が何人かいらしたようです。今、帯広の森はですね、残念ながら農業用の排水路という形での小川のような川はありますが、残念ながら川という名前の水はありません。

後々、これも考えようですね、もうちょっと帯広川の方から水をいただきましよう。そしてまたそれを元に戻しますよと。ただし、これは金がかかります。それから、先ほどどこかのワークショップのチームで言ったけれども、何かチームじゃなかった、金清さんに言われたのか。道路がですね、栄通りで切られているんじゃないかということを指摘されました。

西帯広ニュータウンから大空団地に上がつて運動施設に行く。あの道ですね、例えば人道橋を渡すとか、今そのために過去、大空団地の方々が、エゾリスが我が団地の中に遊びに来て、帰った時に随分車に轢かれてると、そんなような話が出ていました。今、実態としてこの間、私共もワークショップをやつてる時にエゾリスが潰されていました。別にエゾリスのためのまちづくりをするわけじゃないんですけども、そんなところも見えていくと、何かまだ目先でやることを課題としてやっていくこと、そして何よりも 50 年後という大きな夢を持っていこうということですから、今日ワークショップで出された課題というのはですね、我々市民に関わる動きの課題つていうのが非常に大きなものが、結果として施設とか何とかつて言ひましたけれども、やはり市民一人一人の普段の行いと心持ちがですね、いろんな形で影響してくるんじゃないのかなと思います。

これは帯広市民全員に考えてくれという意味じゃなくても、僕はいいと思つてます。関心のある人は一生懸命やろうじゃないかと。先程のワークショップの第 1 グループで、高校生がもう少し子どもの小学校とお父さん、お母さんの間に入つて、何かやれることがあるんじゃないかつていうようなことの提案がありました。

別にそれを組織だつてやる必要はないですが、ありがたいことに今、帯広の森ははぐくむという施設があります。そこの中に日月くんをはじめとして優秀なスタッフが揃つてます。そういうところへ相談していくとですね、またさらにいろんな繋がり、それからいわゆる市民が利用するための公園としてのものが一番の声なわけですから、もっと新しい夢と希望が出てくるんじゃないのかなと改めて感じたところでもあります。

時間ぎりぎりですけども、何か今村さんの方から順に最後にこれだけは絶対言ひたいということをお願いいたします。

今村さん

はい、そうですね。小さい子どもたちが森で自然の中で遊んだ体験というのが、きっと将来、私自身の子どもの頃もそうでしたし、何かそれが原体験となつて、自然のことを愛するつか、大切に思ふ気持ちになつていくつていうふうにいるので、そういうことが体験できる場所だということを情報として発

信するとか、なるべく多くの人に足を運んでもらえるような丁寧な活動をこれからもやっていきたいなというふうに思っています。はい、今日はありがとうございました。

金清さん)

さっきちょっと話したことにつながるかもしれせんけれども。

50年経って森の姿が見えるようになってきて、そこでどうやって使うかなというのがちゃんと考えられるステージに来たのかなと。

しっかりした計画があつて今に至っているわけですが、その中で多分いろんな試行錯誤をされて、森がちゃんと育ったところで全部切って何か作ろうとか、なかなか発想しづらいと思う。ちょっとずつ間伐してみたり、入れ替えてみたり、ちょっとずつちよつとずつ変わっていけばいいんだと思うんです。

それが多分、自然の森ではなくて、人が関わる森ですから、そこに住む人が一体どんなふうな思いでその森と接しているかっていうのが、いずれ形になって表れてくる。だから、森を見たら帯広の文化がわかるというか、文化を映す鏡というみたいな形でいずれ見えてくる。

100年後には多分そういう森が帯広の周りには展開しているんだろうなと。今はまだ森の姿をしているだけで、まだ文化とかそういうものまでこう投影されていないというか、反映されてない。これからそういう時代に入っていくんじゃないかなと思っています。

石川先生)

私は何が言いたいかといったら、「市民力」です。すごいと思います。今日、ワークショップやろうと言いだしたのは私なんです。でも、やはり、ワークショップってちょっと心配でした。

しかし、今日はお一人お一人の方がきちんとご自分の意見をおっしゃって、ファシリテーターの方も素晴らしかった。一人一人の皆さんがですね、きちっと問題に正面から向き合って、しかも自由に発言して、お互いにきちつと言いたいことを持ってですね、まとめて発表されて、私はこの力があればどんなことでもできると思います。

やはり嬉しいのは、帯広では、相手の方の顔が見えます。東京にいと分かんないんです。顔がみえれば、ヒューマンパワーが生まれると思います。

ありがとうございました。

山田さん)

市長は公務があるにもかかわらず、最後まで残っていただきました。もし市長、何か感想でも結構ですから、何かありましたら一言お願いできれば。

米沢市長)

今日は本当に皆さんどうもご苦労様でした。今、皆さんからお話を伺って、帯広市民の皆さんの持っているパワーですとか、これまでの50年でここに培ってきたといいますか、積んできたパワーといいますか、そういうものも改めて感じさせていただきました。

行政だけでできないことも十分認識しておりますけれども、行政でなければできないこともいっぱい感じております。先生から緑ヶ丘公園の件で随分夜も寝られなくて心配してと言われましたので、この辺もしっかりと受け止めなくてはいけないなというふうに感じているところです。

社会的共通資本のお話もございました。私、今4期目をやらせていただいていますけれども、4期目の公約には、森とみどり、みどりと一緒に住んでいくまちづくりという形を入れています。先ほどのお話にもありましたけれども、やっぱり我々の文化をこれからどう作っていくか、それが森にちゃんと反映されていくんだと言うお話も、なるほどと思って伺ったところであります。

言いたいことがいっぱいありますけれども、今日はとてもいい時間になりました。ありがとうございました。

山田さん)

市長がここまでいてくれるんだったら、初めからパネラーに入ってもらえばよかったですね。次回からそんなことを心がけながら、今日のシンポジウムをこれで終了したいと思います。どうもありがとうございました。

絵本作成（漫画冊子・写真絵本）

事業概要と目的

子供向け漫画冊子と一般市民向け写真絵本の2本立てとして、本の対象者や活用方法にメリハリをつけ、相互補完的に活用することで、帯広の森への理解と親しみを醸成すること。

なお、本事業の実施にあたり、デザイナーの檜山 知弘氏に携わっていただいた。

漫画冊子

制作者 北海道森林管理局 平田 美紗子 氏

- 北海道森林管理局の職員であり、かつ森林業漫画家として、森林・林業に関するイラストや漫画を多数執筆。
- 本事業の実施にあたり、地域連携事業として北海道森林管理局にご協力をいただいた。

対 象 者	子ども
制作目的	具体的な情報提供や知識解説を織り交ぜながら、帯広の森の歴史や価値をわかりやすく伝えて、思いなどを次世代につないでいく。
活用方法	指定管理者による帯広の森での体験学習としての活用や、小中学校やとかちプラザなどの公共施設への設置のほか、帯広市図書館の電子版による公開など。
規 格 等	B5版 16ページ（表紙・裏表紙込み）

写真絵本

制作者 写真家 写真絵本作家 小寺 卓矢 氏

- 「森のいのち」「いろいろはっぱ」など、森や自然に関する写真絵本を制作。
- 書籍出版のほか、スライドトークショーや写真絵本作りワークショップ、学校や公共図書館での写真体験プロジェクト指導など幅広く活動されている。

対 象 者	一般市民
制作目的	帯広の森が担う普遍的意義や森林生態系そのものが持つ存在価値を、より感覚的・抽象的・情緒的に伝える。
活用方法	保育所、幼稚園、小中学校や帯広市図書館等の公共施設への設置や、帯広の森での森林体験事業等での導入や動機付けなど
規 格 等	AB版 32頁（本文）



目 的

帯広の森の認知度や利用状況のほか、どのように過ごしたいのかなどの市民ニーズを収集し、今後の整備や利活用等を考える上での基礎データとすることを目的としている。

調査対象と方法

アンケートに関するチラシを、帯広の森・はぐくむや体育施設のほか、図書館やとかちプラザなどの公共施設、中学校や高等学校に配布し、web や用紙により回答してもらうこととした。また、帯広市 HP や帯広市公式 LINE でも周知し、帯広市民に限定せず幅広く調査を行った。期間は、令和 6 年 8 月 6 日から令和 6 年 10 月 15 日までとした。(回答数：1,061 人)

調査項目と内容

帯広の森の利用に関することや、これからの森での過ごし方などの 21 項目を設定した。質問内容の詳細、回答は以下のとおり。

調査結果の概要及び考察

(1) 回答数 1,061 人 (web 1,061 人、用紙 0 人)

(2) 回答者の属性

回答者の居住地は、帯広市内が 929 人 (約 88%)、帯広市外が 132 人 (約 12%) となった。

なお、回答者の年齢割合は図 1 のとおりとなった。

(3) 帯広の森に関する事柄で知っていること

【あなたが「帯広の森」に関する事柄で知っているものを選んでください。】という質問について、3 つまで当てはまるものを選択、回答してもらった。結果は表 1 のとおりで、「帯広の森」に関して知っているものは、多いものから順に「体育施設」が 905 人、「はぐくむ」が 598 人、「市民の森」が 490 人であった。

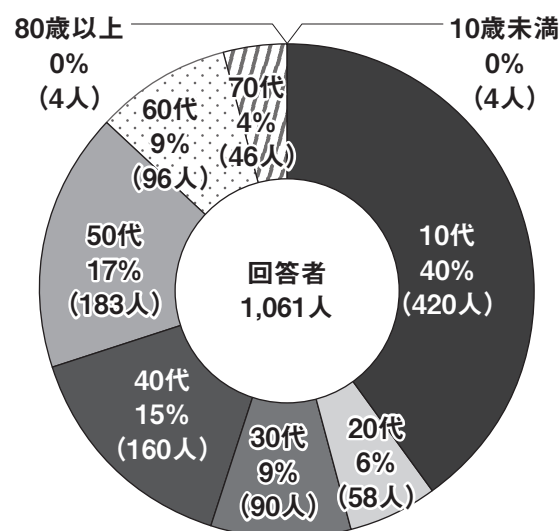
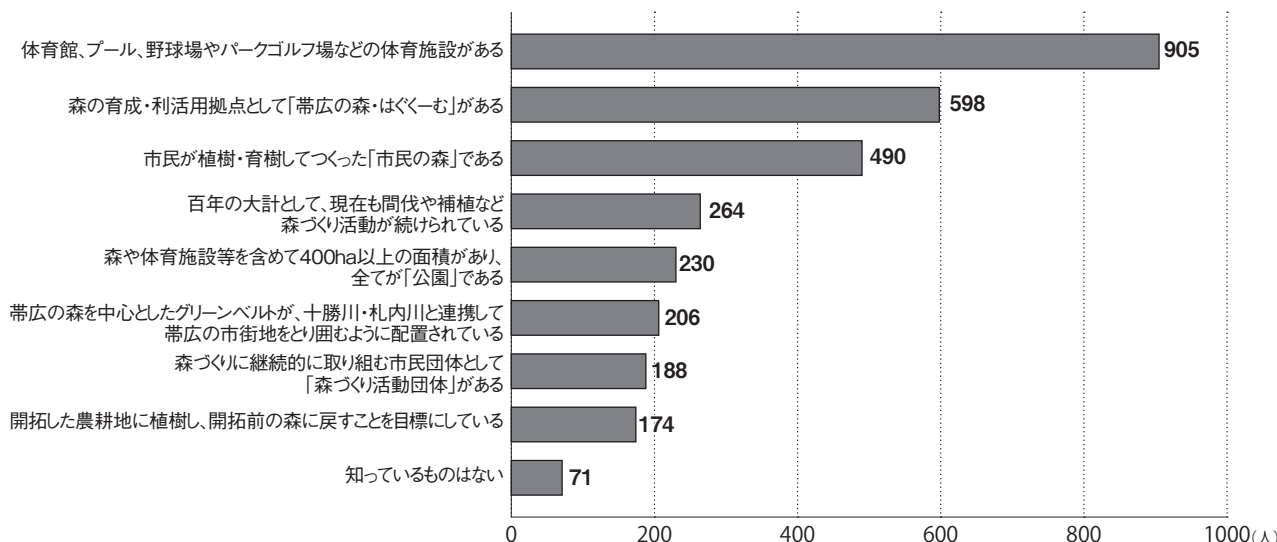


図1：年齢

表1：知っているもの



帯広の森の認識としての多くが「体育施設」である一方で、育成や利活用の拠点施設である「帯広の森・はぐくむ」や、「市民の森」であることを認識している人も一定数いるため、市民植樹祭などの市民協働の取組みのほか、帯広市や指定管理者のこれまでの活動が、そういった施設の存在を認知させることにつながったと考えられる。

(4) 「帯広の森」の好きなところ、好きな理由

【あなたは「帯広の森」のどこが好きですか。】また、【好きな理由を教えてください。】という質問について、自由記述で回答してもらった。

表2：好きなところ、好きな理由

好きなところ	人数	理由
自然が豊か、緑が多い、 動物、木、野鳥、草花、虫 など	291	自然がいっぱいだから 自然の中にスポーツ施設があるから リス等の動物が見られるから 身近に自然を感じられるから 静かでゆったりしていて心が落ち着くから 歩くだけで自然を感じられるから 空気が綺麗だから 広大だから
スポーツ施設が沢山あること、 プール、オーバル、野球場、 アイスアリーナ、サッカー場、 陸上競技場、体育館、弓道場、 テニスコート、パークゴルフ場、 研修センター など	279	スポーツ施設が綺麗に整備されていて使いやすいから 色んなスポーツができる又は観戦できるから 大規模な大会が開催されているから 子供がスポーツ施設を利用しているから 学生時代の思い出があるから 自然に囲まれて気持ち良くプレー出来るから
風景、もりの山 など	68	自然や緑が綺麗だから もりの山から市街地や日高山脈を一望出来るから 自然と都市の一体感があるから
特に無い、行ったことがない など	43	行ったことがないのでわからない
散策路、遊歩道 など	32	歩きやすいから 自然を楽しみながらウォーキングができるから
四季折々の景色 など	31	花、緑、紅葉、雪景色など色々な景色が見られるから
はぐくむ	24	様々な体験イベントに参加出来るから 子供が利用出来るから
その他 森の交流館、JICA、ぱわっく 帯広の森の成り立ちや構想 など	90	色々な施設が集まっているから
合 計	858	

前述の(3) 帯広の森に関する事柄で知っていることの回答では、「体育施設」が一番多かったが、帯広の森の好きなところでは「体育施設」よりも「自然が豊か、緑が多い、動物、木、野鳥、草花、虫など」が一番多く、自然の豊かさが帯広の森の魅力になっていることがわかった。

(5) 「帯広の森」利用について

【あなたは「帯広の森」を利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図2のとおりで、「利用している」が491人（約46%）、「過去に利用したことはあるが、今は利用していない」が405人（約38%）、「全く利用していない」が165人（約16%）となった。

現在、利用していない方々が半数を以上を占めており、帯広の森を利用しなくなった理由を把握することで、今後の利活用促進に向けた検討に活用できるものと考える。

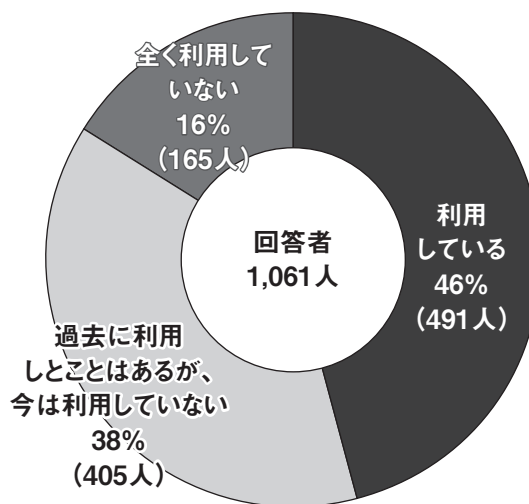
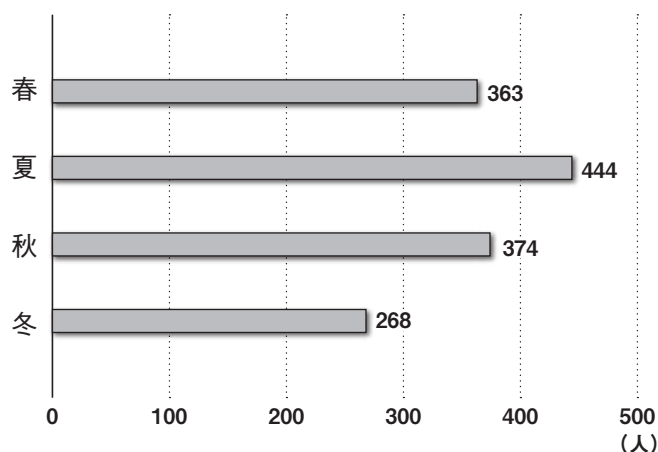


図2: 利用状況

(6) 帯広の森を利用する季節

表3: 利用する季節



【帯広の森をどの季節に利用しますか。】という質問について、当てはまるものを全て選択、回答してもらった。

結果は表3のとおりで、前述の(5)【あなたは「帯広の森」を利用しますか。】で「利用している」と答えた491人（以下、利用している人）が利用する季節は、夏（444人）が最も多く、続いて秋（374人）、春（363人）、冬（268人）となっており、夏場の利用が多い傾向ではあるが、1年を通じて利用されていることがわかった。

(7) 利用頻度

【どれくらいの頻度で帯広の森を利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図3のとおりで、利用している人のうち、利用頻度は多いものから順に「月に数回」が291人（約59%）、「週1～2回」が72人（約15%）、「ほぼ毎日」が70人（約14%）、「週3～5回」が58人（約12%）となった。

「ほぼ毎日」、「週3～5回」が4分の1を占めており、利用されている方は、日常生活の一部として利用されていることがわかった。

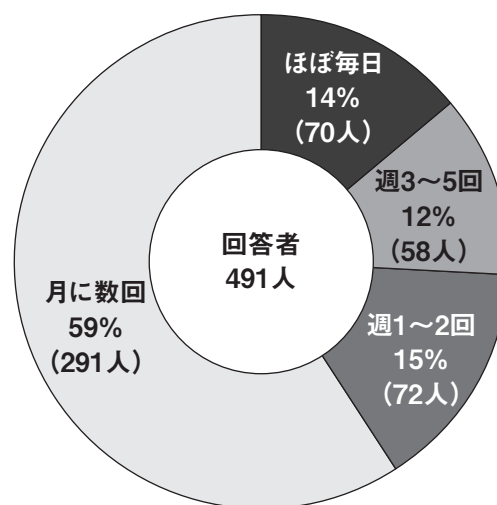


図3: 利用頻度

(8) 利用する時間帯

【主に何時ごろに利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図4のとおりで、利用している人のうち、利用時間は多いものから順に「9～12時」が142人（約29%）、「15～18時」が125人（約25%）となっており、1日を通じて満遍なく利用されている。

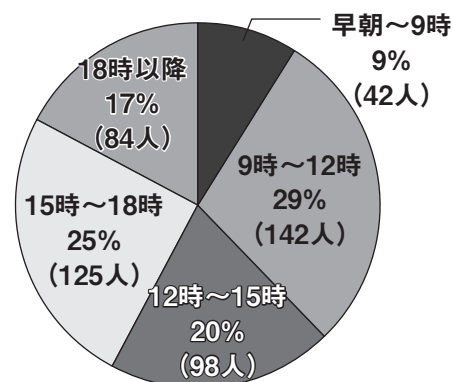


図4: 利用時間

(9) 移動手段

【どのような手段で帯広の森に来ますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図5のとおりで、利用している人のうち、移動手段は多いものから順に「乗用車（レンタカー含む）」が277人（約56%）、「自転車」が172人（約35%）と、乗用車と自転車だけで9割以上を占めており、これら以外の移動手段の確保が課題であることがわかった。

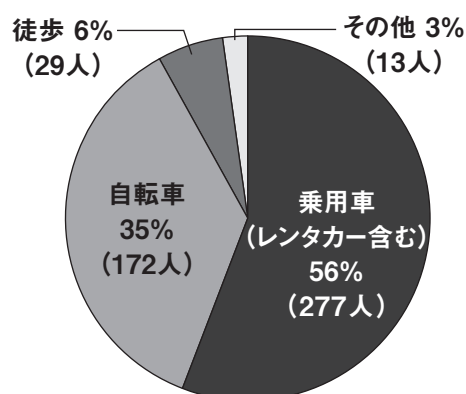


図5: 移動手段

(10) 誰と利用するか

【主に誰と利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図6のとおりで、利用している人のうち、誰と利用するかは多いものから順に「部活・サークル仲間」が192人（約39%）、「子供」が80人（約16%）、「ひとり」が69人（約14%）となっており、回答者の4割が10代を占めていることもあり、体育施設を利用する「部活・サークル仲間」が4割程度となっている。

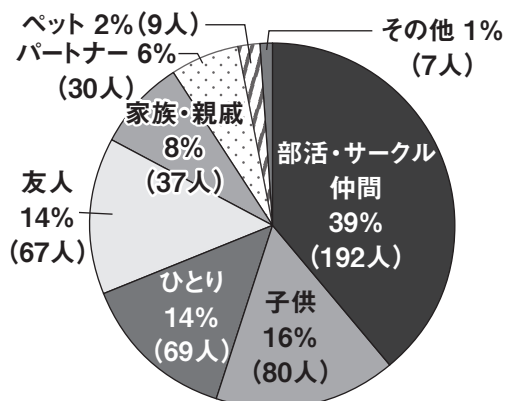


図6: 誰と利用するか

(11) 滞在時間

【1回の利用でどれくらい滞在しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図7のとおりで、利用している人のうち、滞在時間は多いものから順に「1時間～3時間」が313人（約64%）、「30分～1時間」が78人（約16%）、「3時間～5時間」が66人（約13%）となっており、3時間以内の利用が8割以上を占めている。

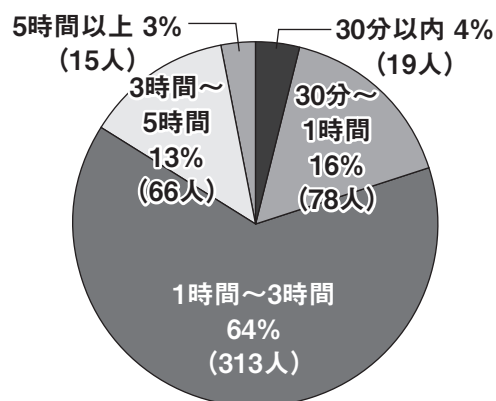


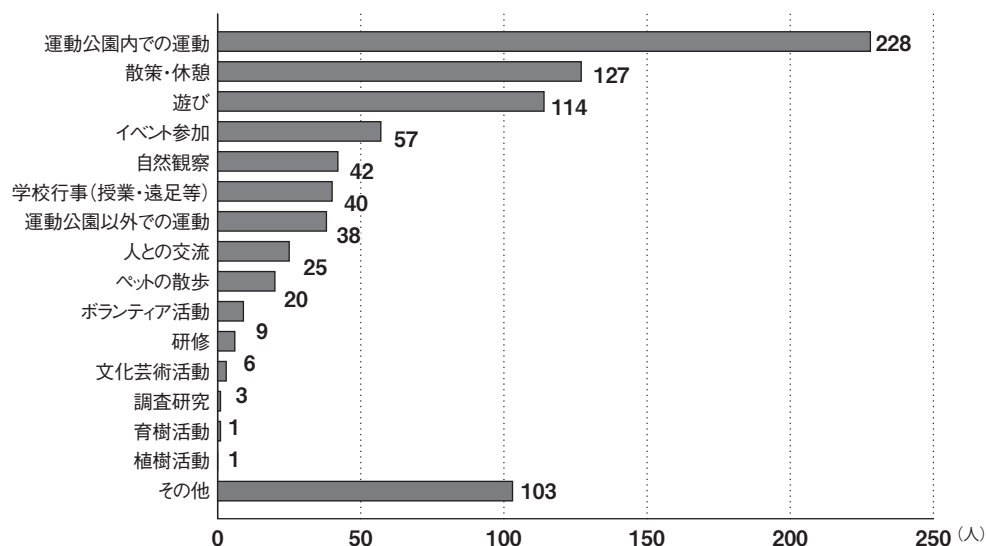
図7: 滞在時間

(12) 利用する主な目的

【帯広の森を利用する主な目的を教えてください。】という質問について、3つまで当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は表4のとおりで、利用している人の利用目的は、多いものから順に「運動公園内での運動」が228人、「散策・休憩」が127人、「遊び」が114人となっており、運動公園内での運動が最も多くなっている一方で、散策・休憩や遊びなども一定数いることや、それ以外の利用目的もあり、多様な目的で利用されていることがわかった。

表4:利用目的

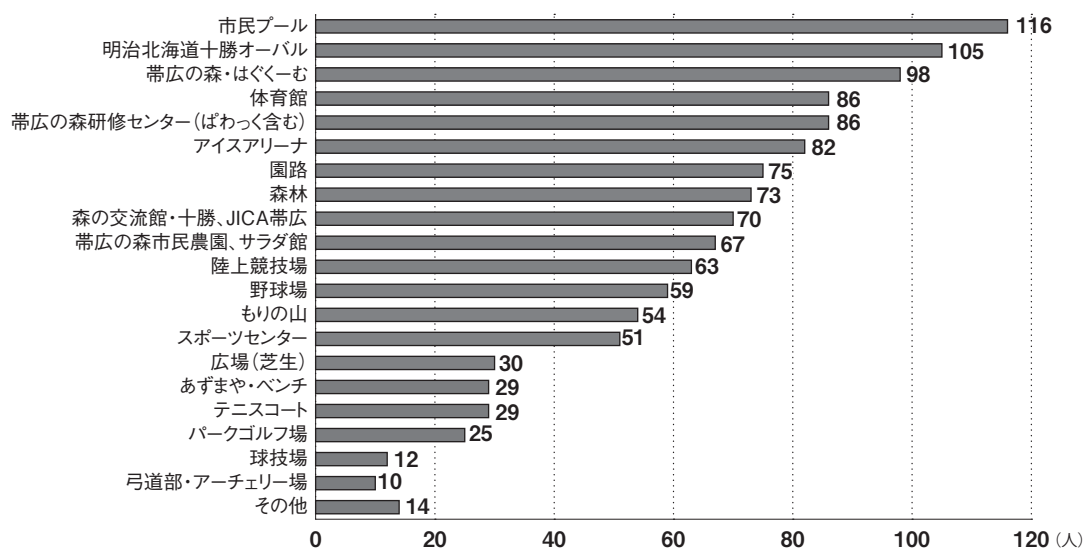


(13) 利用する施設

【主にどの施設を利用しますか。】という質問について、当てはまるものを全て選択、回答してもらった。

結果は表5のとおりで、利用する施設は、多いものから順に「市民プール」が116人、「明治北海道十勝オーバル」が105人、「帯広の森・はぐくむ」が98人となった。

表5:利用する施設



前述の(3)【あなたが「帯広の森」に関する事柄で知っているものを選んでください。】で得られた回答と同様に、運動公園内の施設利用が上位を占めている。一方で、帯広の森の拠点施設である帯広の森・はぐくむも同水準で利用されている。

これは、前述の利用目的である散策・休憩、遊び、イベント参加、自然観察などが、帯広の森・はぐくむの利用につながっているものと考えられる。

(14) 満足度

【帯広の森について満足度を教えてください。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらい、また、【上記の満足度の理由を教えてください。】という質問について、自由記述で回答してもらった。

結果は表6のとおりで、6割程度の人が「満足」、「やや満足」と回答している一方で、帯広の森に行ったことがない等の理由から3割程度の人が「普通」となっている。

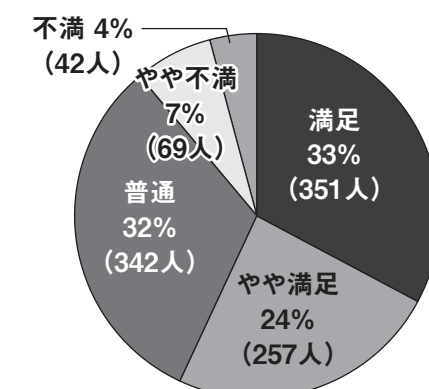


図8: 満足度

表6: 満足度

満足度	人数	理由
満足	351 (33%)	悪いところがない、きれい、広い 利用しやすい、心が安らぐ 気持ち良くスポーツができる 色んなスポーツをしたり観戦できる スポーツ施設が綺麗に整備されていて使いやすい 駐車場が広い 自然が豊か
やや満足	257 (24%)	施設が綺麗、施設が古い 利用しやすい、普段利用しない人にはわかりにくい 色んなスポーツ施設が揃っている 自然が豊か、虫がいる 近い、遠い
普通	342 (32%)	スポーツ施設があることしか知らない 行ったことがないからわからない、利用しない 最近は行っていない 良くも悪くもない 遠い、交通の便が悪い 何があるのかわかりにくい 施設が老朽化している
やや不満	69 (7%)	施設が古い、子どもの遊び場が無い、駐車場が足りない 空調等の設備に不満、各施設への入口がわかりづらい 遠い、自家用車がないと行けない、バスの便が少ない 色んな施設があるが入りづらい スポーツ施設では団体利用者が多くて個人で使いにくい スポーツ施設しか知らない、利用の仕方がわからない
不満	42 (4%)	遠い、森の手入れが悪い 利用していない、帯広の森のことがわからない
合計	1,061	

(15) 利用しない理由

【帯広の森を利用しない理由を教えてください。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図9のとおりで、前述の(5)【あなたは「帯広の森」を利用しますか。】で「過去に利用したことはあるが、今は利用していない」または「全く利用していない」と答えた570人のうち、利用しない理由が多いものから順に「目的がない」が249人（約44%）、「場所が遠い」が114人（約20%）、「時間がない」が73人（約13%）となった。

目的がないが4割以上を占めており、帯広の森が持つ様々な魅力の向上や情報発信ができていないことが1つの要因であると考えられる。

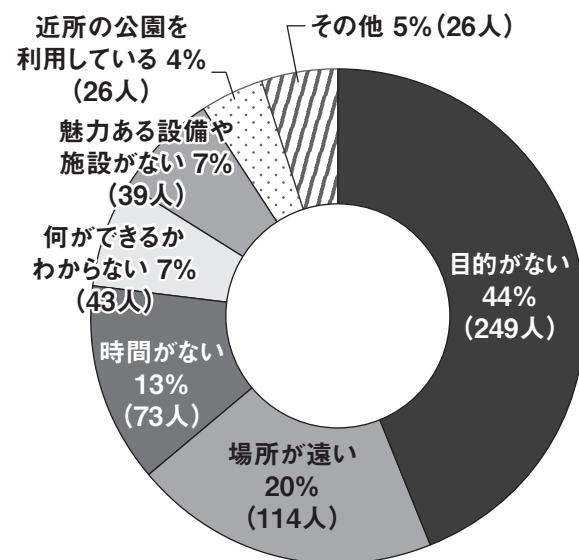


図9: 利用しない理由

(16) どのように過ごせたら楽しいか、またはやってみたいことはあるか。そのためには何が必要か

【あなたは、帯広の森でどのように過ごせたら楽しいと思いますか。または、やってみたいことはありますか。】、また、【上記の過ごし方・活動をするにあたって、必要なものは何ですか。】という質問について、自由記述で回答してもらった。

結果は、表7に9つの要素別にとりまとめた。帯広の森での過ごし方、やってみたいこととして、運動や遊び、ゆっくりのんびり過ごす、飲食などが多くあったほか、そのために必要なものとして、カフェやレストラン、遊具、キャンプ場などの施設、トイレやベンチなどのインフラ施設を求める声が多くあることがわかった。

表7: 過ごし方、やってみたいこと、必要なもの

要素1	ゆっくり、のんびり、ゆったり など	66人
過ごし方 やってみたい こと	●友達や家族と気軽に行ってゆっくりしたい、喋りたい ●1人で時間を気にせずゆっくり過ごしたい、くつろぎたい ●森の中をゆっくり散策したい ●読書を楽しみたい ●日陰でゆっくりしたい	
必要なもの	●ベンチ ●トイレ ●休憩所、四阿 ●カフェ、レストラン、キッチンカー ●芝生	
要素2	飲食、カフェ など	49人
過ごし方 やってみたい こと	●森の中や見晴らしの良い所にカフェがほしい ●自然の中でお茶や珈琲を飲んだり、おいしいものを食べたい ●家族で楽しめる飲食スペースがほしい ●運動後や散歩の途中で休憩出来る場所がほしい ●とかちマルシェのような食のイベントを開催してほしい	
必要なもの	●カフェ ●レストラン ●キッチンカー ●キャンプ場	
要素3	運動、スポーツ、トレーニング、散歩 など	163人
過ごし方 やってみたい こと	●子どもや犬と一緒に散歩がしたい、のんびり自然散策したい ●ウォーキング、サイクリング ●自然を感じながらスポーツを楽しみたい ●気軽に色々なスポーツを体験したい ●プロの試合を観戦したい	
必要なもの	●カフェ、レストラン、キッチンカー ●遊歩道、園路の整備 ●休憩所、ベンチ、トイレ ●バスなど交通機関 ●コンビニ ●宿泊施設、合宿所	

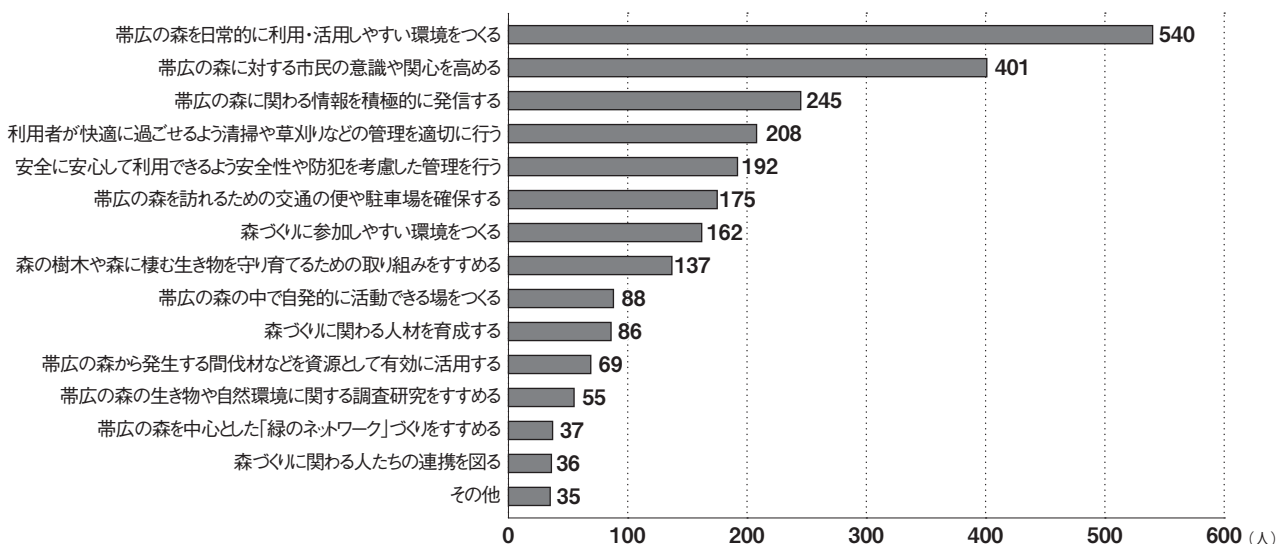
要素 4	自然、動植物 など	61 人
過ごし方 やってみたい こと	●森林浴、自然散策 ●リス、野鳥、昆虫、野草、木、花などを観察したい ●自然や四季を感じてリラックスしたい ●自然を感じながらスポーツを楽しみたい ●子供と一緒に自然の中を歩いたり、遊びたい ●自然の中で飲食したい	
必要なもの	●カフェ、レストラン、キッチンカー ●キャンプ場 ●自然を案内する人、案内図、魅力の発信 ●休憩所、トイレ ●遊歩道の整備	
要素 5	子供、子育て、乳幼児 など	52 人
過ごし方 やってみたい こと	●子供向けのイベントをやってほしい ●乳幼児や未就学児が屋内で安全に遊べる場所がほしい ●子供と一緒に過ごせる場所がほしい ●屋内外にもっと子供向けの施設がほしい ●子供が自然に触れられる空間がほしい	
必要なもの	●カフェ、キッチンカー ●キャンプ場 ●大型遊具、室内遊具、児童会館のような遊具 ●キッズスペース、乳幼児の飲食スペース、涼しい休憩スペース ●バス等の交通機関、トイレ	
要素 6	遊び、遊び場 など	71 人
過ごし方 やってみたい こと	●大人も子供も一緒に遊べる場所がほしい ●レジャー施設がほしい ●水遊びができる場所、冬でも遊べる施設がほしい ●市外にあるような広い公園、屋内遊戯施設が帯広にもほしい ●森のアスレチック、ハンモック、ブランコで遊びたい	
必要なもの	●屋内遊戯施設、屋外遊戯施設 ●大型遊具、木製遊具、木 ●水遊び場、キャンプ場 ●カフェ、キッチンカー ●涼しい場所、飲食スペース	
要素 7	イベント など	49 人
過ごし方 やってみたい こと	●野外音楽フェス ●子供向けのイベント、お祭り、花火 ●とちかちマルシェやファーマーズマーケットのような食のイベント ●芸術祭 ●自然を楽しめるイベント ●スポーツのイベント	
必要なもの	●キャンプ場 ●キッチンカー、カフェ ●飲食スペース、休憩スペース ●イベント情報の発信	
要素 8	バーベキュー、キャンプ、ピクニック など	69 人
過ごし方 やってみたい こと	●キャンプ ●バーベキュー ●ピクニック	
必要なもの	●キャンプ場、炊事場、トイレ、コテージ、宿泊所 ●カフェ、レストラン、キッチンカー ●芝生、テントを張るスペース ●テントや焼き台などのレンタル	
要素 9	その他	228 人
過ごし方 やってみたい こと	●ない、わからない ●犬と遊びたい ●交通の便を良くしてほしい、遠い、坂を上るのが大変 ●コンビニ、温泉、サウナがほしい ●施設内を涼しくしてほしい	
必要なもの	●カフェ、レストラン、キッチンカー ●ドッグラン ●交通手段 ●宣伝 ●冷房	

(17) 今後の「帯広の森づくり」に必要な取り組み

【次の50年に向けて、帯広の森の価値や魅力を未来に引き継ぎ、より身近に感じていただける利活用を促進するために、今後の「帯広の森づくり」にどのような取り組みが必要だと思いますか。】という質問で当てはまるものを3つまで選択、回答してもらった。

結果は表8のとおりで、「帯広の森づくり」に必要なと思う取り組みは、多いものから順に「利活用しやすい環境をつくる」が540人、「意識・関心を高める」が401人、「情報を積極的に発信する」が245人となった。

表8: 今後必要な取り組み



必要なインフラ等の整備、帯広の森が持つポテンシャルを市民に知ってもらい関心を持ってもらうこと、そのための情報発信を強化することが必要となることがわかった。

(18) おわりに

本調査から、造成開始から50年を経過する帯広の森の使われ方や利用実態、帯広の森の満足度や必要と思うもの等について基礎データを得ることできた。

現状では、帯広の森に対する認識は「体育施設」が一番であり、帯広の森を利用する人の利用形態もそれに沿ったものが多くある一方で、利活用の拠点施設である「帯広の森・はぐくむ」も一定程度利用されていた。帯広の森を利用しない人は「目的がない」ことが一番の理由となっていたため、今後、四季を通じた自然の魅力や各施設で実施している様々なイベント等の情報発信に加え、必要なインフラ等を整備すること、知ってもらう、利用してもらうといった仕掛けづくりが重要となる。

なお、これらの基礎データは、多くの市民の皆様により一層親しまれる森づくりを進めていくために、今後の森づくりの参考とするものである。

最後に、本アンケート調査の実施に際し、ご協力いただいた方々をはじめ、長年にわたり帯広の森づくりにご協力いただいている市民の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、今後ともさらなるご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

第5章

「帯広の森」を想う



歴代市長と「帯広の森」

本稿では、「帯広の森」に関わった歴代市長の思いを残していきたい。

第5代 帯広市長 吉村 博

1911年（M44）出生

1955年（S30）第5代帯広市長就任

1974年（S49）辞職

1983年（S58）逝去



昭和50年第1回市民植樹祭

—「風雪有情」 1974年（株）新時代社刊より抜粋

第3章 夢を未来につなぐ

「帯広の森」と二〇万都市構想

—— 将来をにらんだ街づくり

一九七〇年代は、ものの考え方の角度を変えさせたり、ものの見方の幅を拡げさせる年代である。六〇年代は、地域モンローにたった地域開発が必ずしも成功せず、かえって産業公害などに悩まれた時代であったが、七〇年代に入るや、国際的視点にたった規模の利益を考えるようになった。

たとえば、五〇万トン石油タンカーや十数万トンのコンテナ船が考えられるようになり、これま

での常識をこえた大きな港や工業地帯づくりが構想され始めた。

しかし、このような条件にあう地帯は、国内に数少ないため、いくつかの大規模な開発地域と大都市の間を空、陸、海の大量高速輸送手段と情報伝達処理機能のネットワークで結ぶ、いわゆる『大規模プロジェクト』が計画されている。

このような時代において、帯広、十勝地域が考えるべき視点は、一つは、国際化が進行していることから、北方諸国に目をむけ、アラスカ、カナダの石油、森林資源の交流、シベリア開発などの可能性が考えられる。二つは、狭い国土のなかで、六千平方キロメートルにおよぶ広大な平野部をもっていることを再認識することである。三つは、人間の価値観が変わりつつあるなかで、この地域が考え、頭脳を働かすに適した冷涼な気象、住むに快適な、すみきった空気、きれいな水、豊かな緑をもつことの重要性などである。

ここに、この地域の可能性があり、将来に十勝南部の大規模プロジェクト、国際学究都市などを胸深く秘めた都市づくりの構想がたてられるのである。

二〇万都市へ

このような新しい社会経済の潮流のなかで、帯広市は、都市づくりの努力によって、およそ十年後には人口約二〇万人をようする都市になるであろう。

この人口であるが、私は、よい都市とは必ずしも人口の多寡によるものではなく、市民からみて住み易い、働き易い都市であるか、あるいは子供を育てる場所としてどうか、というような点を総合して採点され、評価されるべきものだと思う。私は、特別に理由のある都市は別として、大体二〇万から三〇万人位の都市、できれば二〇万前後が一番住み易い都市でないかと思う。その理由として、一つは、都市公害が少ないこと、二つは、経済的にある程度充実し、都市に必要な種々の施設の維持が可能なこと、三つは、各分野で相当な

人材が居ついてもらえること、四つは、市長が直接目のとどく、キメの細かい行政の範囲がこれ位であろうこと、などがあげられる。

こうして、頭から人口規模をおさえ、すべての機能や施設を考えるのと、どこまで伸びるか判らない人口規模で将来図を考えるのでは、都市の整備状況や市民要求を満たす施策の度合いがちがい、前者の場合、真の計画的な行政ができると考える。

ここに、新しい十ヵ年計画では、人口約二〇万を想定し、つぎの目標の完遂に努めることとしたのである。

都市づくりの目標

近代的田園都市実現のために、

(一) 健康で明るい安全都市の建設—生活と生産の調和をはかり、きれいな水と空気をまもり、安全、健康で、明るい生活をおくることのできるような人間尊重のまちづくりを進める。

(二) 北海道内陸中枢拠点都市の建設—恵まれた自然環境をいかし、新しい時代にふさわしい都市の機能を高め、人材と情報を蓄積し、十勝を一体として、北海道開発の一翼をにない、北方諸国交流の拠点とする。

(三) 創造性ゆたかな北方文化都市の建設—内外との知的交流を促進し、まち全体が学問や芸術を大切にし、ゆたかな人間性と連帯意識のもとに、ざん新なアイデアが生み出されて北国の風土に根ざした特色ある文化を創造するまちづくりを進める。

とくに、さきに述べた二〇万を将来人口として計画的な都市づくりを行なうことと関連して、市民が緑と太陽と空間に恵まれた環境のなかで未来の夢を描き、風土に根ざした文化を創造するにふさわしいまちづくりを「百年の大計」として進めていくため、市街区域を約五五〇メートル幅の森でつつむ『帯広の森』を市民ぐるみで建設しよう考えている。



出典：吉村博著「味なき味」凍原社より



俳号「吉村 冬」として俳句集も出版

第6代 帯広市長 田本 憲吾

1929 年（S4）出生

1974 年（S49）第6代帯広市長就任

1990 年（H2）退任

2023 年（R5）逝去



平成2年第16回市民植樹祭

—「至誠天に通ず」2011 年（H23）

大同出版紙業（株）刊より抜粋

まちづくりへの夢

都市と自転車 1981 年

—東京でのシンポジウム 於日本商工会議所

ただ今ご紹介いただきました帯広市長の田本憲吾でございます。…（略）

帯広の森

ここでもう一つ申し上げたいのは、帯広市は人口十五万人であります。前市長さんは二十万で人口を止めようということで昭和四十五年の都市計画法の改正を機に、ちょうど私も都市計画委員長でありましたけれども、街を緑で包もうではないか、私の発想と前市長さんの発想とでは若干ズレがあったんですが、私は街の中に緑を造ろう、前市長さんは緑で街を取り囲もうということで、

決して意見の違いがあったわけではありませんけれども、昭和四十八年に、これは都市計画決定いたしまして幅五十メートル延長十一キロメートル区域面積四〇二・五ヘクタールの都市公園を考えたわけであります。たまたま昭和四十九年私が市長に就任した年からこの都市計画を進めさせていただいております。

これは、自然公園的なものであり、また創造の森とかいろいろな森を設定しようと考えまして、実は設計も出来ております。特に昨年から百ヘクタールの土地に百年掛かってもいいんじゃないかということで、運動公園の造成に着手いたしております。

当然、森の中には先程から申し上げております大規模自転車道路を考えておりますし、また創造の森など機能の違う森を結ぶサイクリング道路も考えております。

冬はどうしよう。冬はやはり歩くスキーのコースにしようではないか。でありますから雪が解けたらサイクリング道路になり、雪が降りましたら歩くスキーになるということであります。私は体重八十九キロありますけれども今年は歩くスキーをたまたま二月にやりました。

六歳の坊やから八十一歳のお爺ちゃんまで一緒に歩くスキーをやり、先立ってはご婦人方のサイクリングに加わってみましたら六十幾つのお婆ちゃんがペダルを踏んでいることが判りました。スポーツとしての自転車の考え方などが市民の発想の中にボツボツ現れてきたのではないかというふうに考えております。それでは若干スライドでご説明申し上げます。（それではお願いいたします。スライドで十勝大平原自転車道のルート、歩行者・自転車基本計画のネットワークについて説明。）

このように計画を立てておりますが実際の整備は現在三年ほど経っておりますが、約十パーセントほど実施されているところでございます。長い目で見ますとこれからのスタートであろうと思います。ですから現在私どものやっていることは単に点でしかない。この点を何とか線に結び、そして先程もスライドでご説明申しましたが面的な形で自転車道を含んだ生活道路を考えてまいりたいというふうに思っております。（1981 年）



田本憲吾 著「至誠天に通ず」
至誠天に通ず出版委員会

—市民大学講座 第10講 講義録より

緑は語る、ロマンのまちづくり

はじめに

帯広市は北海道の東部十勝平野のほぼ中央に位置し、十勝圏一市十六町三村が必要とする都市機能を一手に引き受けるとともに、道東内陸の拠点都市としての機能も担い、人口十五万七千人を擁している。

「日本の北の涯の農業都市、どこよりも雪融けが遅く、どこよりも霜の早くくる平原のなかに。」と久保栄の「火山灰地」に紹介されたこのまちは、東西に貫流する十勝川と、その支流である札内川の交点につくられ、四季の変化に富み、美しい自然に包まれている。

当市の開拓は、明治十六年、伊豆の人依田勉三が率いる晩成社一行の入植により始まる。開拓期の帯広は、カシワ、ナラ、などの原生林がブドウやコクワのツルをまとい、年々落ちて朽ちる厚手の葉は、やせた火山灰地を豊かな地味と清らかな水を有する地にかえていた。入植のため調査に訪れた依田勉三翁は「この地すこぶる肥沃にして広漠たり、水清くて冷ややかなり」とその記録にしている。

入植した人々は、冷害などの数々の災害にみまわれながらも、厳しい自然と闘いこれを克服し、また、オノヤクワを手には原生林を切り拓き、熊笹を焼いて原始の沃野を畑に変えてきた。やがて集落ができ、それがまちに変わり、開拓小屋で寒さに大木の割れる音を聞いた開拓者の情熱は、ようやく大地を制したのであった。

こうしてまちは発展をつづけ、一九八二年、昭和

五十七年の今年、当市は開基百年、市制施行五十年の記念すべき年を迎え、新しい世紀に向けた活気が街にみなぎっているが、開拓に明け暮れた道内の各市がそうであるように、急速な都市開発によって失われた緑の復元が、私たちのまちでも大きな課題となっているのである。樹木を主体にした市街地の緑被率約十パーセント、都心部においては約三パーセント、これが当市の緑の現状なのである。

このようにして、一度失われた緑を取り戻し、街に緑の調和を与えることは本当に困難なことである。しかし、この緑とオープンスペースの確保は、まちづくりのうえで誰かが取り組まなければならない現実の問題でもある。このため、帯広市では緑のマスタープランの策定を急ぎ、失われた緑を復元し、二十一世紀に向けて新たに創造していくことを目的とした「帯広の森」や、基幹公園の整備などをすすめており、現在、市街化区域三千四百七十八ヘクタールに対し、百十四か所百二十五・八ヘクタール→八十・七四㎡／人の公園緑地を都市計画決定し、このうち七十二か所百八十三・六二ヘクタール→十一・七八㎡／人を開放している。

さらに、失われた緑を復元することの難しさを痛切に感じている今、市街地内に残された樹木の保護も努めて行なうようにしており、道条令、市要綱などにより七か所四十六・七ヘクタールを守り育てようとしている。

夢は大きい「帯広の森」

かつて中国では城壁で国を囲ったが、都市を緑深い森ですばと包んでしまったら、どんな空間ができるのだろうか、そしてそれは可能なのだろうか。そんな一つの実験が、この帯広の森計画なのである。

要する時間は約百年、見込まれる総事業費は二百億とも三百億とも言われ、とにかく先の予測もつかない大計画だが、日本人が取り組んだ最大の規模の事業でもこれほどスケールの大きいプロジェクトはそうないと思われる。まさに、北海道ならではの帯広ならではのスケールでありロマンなのである。

それでは百年後の未来を覗いてみることにしよう。

◆まちを抜けると森がある。

◆どの道を行っても、十勝特有の樹々が私たちを迎え入れてくれる。

- ◆そこでは小鳥たちが囀り、虫の羽音が聞こえてくる。
- ◆緑深い森の中には、広場や花園、さまざまな運動施設が程よく配置され子供たちの歓声が聞こえてくる。
- ◆ふるさとの森には、スズランや黒ユリの可憐な花が咲き乱れる。
- ◆子供もお年寄りも緑と太陽につつまれ、北国の短い春を精一杯に楽しく過ごす。
- ◆「この木は僕のお祖父さんが植えたんだぞ」と威張る子。
- ◆「あれからもう五十年になるんだね」と金婚式を迎えた二人。
- ◆いろんな人生が、想出が残されて市民の歴史を刻む森。

これが、私たちがつくり出そうとしている帯広の森のイメージなのである。

帯広の森計画の概要

帯広の森は、市街化区域と調整区域の間を幅およそ五百五十メートル、総延長一万千メートル。総面積四〇二・二五ヘクタールの巨大な森林ベルトで覆い、さらに、十勝川、札内川の河川緑地と連携して雄大なグリーンベルトでまちをすっぽりとつつみ込もうとするものである。

森は都市の無秩序なスプロールを防ぎ、公害の緩和や都市災害を防止し、緑が与える安らぎやレクリエーションの場などを提供することが目的に計画

されており、さらに人間性回復の場としての大きな効果も期待されている。お年寄りには散策の場として、子供たちには自然の摂理の中で生物の知識と情操を深める教育の場として、また、静かな樹陰での読書、思索、スポーツや家族揃ってのピクニックなどなど、お年寄りから子供まで緑だけがもつ安らぎと開放感に包まれて過ごすことのできる環境づくりに、帯広の森が果たす役割は極めて大きいのである。

都市をつつむグリーンベルト

帯広の森は将来の都市環境の変化を考慮し、一般的にパターン化されているいくつかの手法の中から、環状式公園緑地系統を採用している。そして、帯広の森をベルト状にする理由としては、

- (1) 市街地の無秩序なスプロール化を防止し、豊かな生活空間を確保するとともに生産緑地を保全し、都市的土地利用に一定の制限を加える必要がある。
- (2) 居住地から距離的制約をなくし日常的な利用を確保するためには、環状パターンが理想的である。
- (3) 植生及び地形変化に対応するためには、相当の幅を持たせつつ、ベルト状に造成することが望ましい。
- (4) 市街地の公園や緑地、さらには、十勝川、札内川と帯広の森を緑道やサイクリングロードで結び、グリーンネットワークを形成して、緑化計画全体の相乗効果を発揮させる。
- (5) 樹木の持つ酸素供給、大気浄化、気温や騒音の緩和、防災作用は樹木の群落を形成することにより、いっそう効果が増大する。しかも帯広市は北西風が多く、市街地に隣接する南部から西部にかけて森林帯を設けることが望ましい。
- (6) 自然の再生を図るためには、生態学のメカニズムを重視しなければならない、そのミニマムとしての規模を確保する必要がある。

以上のものが上げられており、これらの点を考慮し帯広の森の骨格が定められたのである。

みんなでつくる帯広の森

「地球は人間だけのものではない。動植物と一体の生態系の保護が、今ほど必要なきはない。今こ



市長室にて(昭和54年)

そ自然との結びつきを深め、人間らしい心を取り戻すときではないだろうか。公害を排除し、豊かな自然を守り育ててゆく認識をもっと高めなければ。」一市民がこう熱っぽく訴える。

帯広の森は、未来における帯広市民の記念碑的（メモリアル・モニュメント）大事業である。

長い時間と莫大な資金を必要とし、そして何よりも六十万本を超える苗木を植栽し育て上げていかなければならない大事業であり、完成までには百年を要し、事業費も現在の試算で二百億円を超えている。百年後には、一体どれほどの事業費になるのかと、維持管理費のことなども考え担当者は気の遠くなる思いでいる。それでも、この事業にける市民の情熱は挫けることを知らない。帯広の森事業に対する市民参加は、その基本構想当時にさかのぼって語られなければならない。

昭和四十五年五月二十三日、第二期帯広市総合計画策定審議会が市民代表三十名により構成され、帯広の将来像を議論したが、「近代的田園都市」帯広の豊かな緑を担う旗手として、帯広の森は位置付けられその第一歩をここに踏み出したのであった。第二期総合計画は昭和四十六年三月市議会で議決され、三十回に及ぶ市民討議をえて結実していくが、そのプロセスは同時に「帯広の森」構想の揺籃期でもあったのである。

昭和四十九年七月には、帯広の森市民協議会が結成され、協議会には各界各層から幅広い年齢層の市民が集い、森が果たすであろう役割や、植栽樹種、施設設計などについて議論が繰り返され、また、遠い将来に託した壮大な夢を、夜の更けるのも忘れて熱っぽく語りあったのである。

また、事業が実施段階に入った昭和五十年には、市民協議会の方々が主体になって「帯広の森市民植樹祭実行委員会」が結成され、活動を開始している。昭和五十年六月一日「みんなでつくろう帯広の森」を合い言葉に五百人ほどの市民が参加し、第一回帯広の森市民植樹祭が開催されたが、それから八年、昭和五十七年五月十六日には八回目の市民植樹祭が開催され、子供からお年寄りまで六千人の市民が緑のまちづくりに参加したのである。

市民植樹祭は現在までに八回開催され、延べ二万人の市民が参加し、約八万本の苗木を植栽している。さらに、昭和五十二年四月に「帯広の森少年隊」が

結成され、植樹祭への参加、自然の学習、緑のボランティア活動にと活躍を続けている。

このように帯広の森は、あらゆる市民やサークルお年寄りから子供たちにまでささえられて、少しずつではあるが成長を続けているのである。

豊かなまちづくり、子孫に継承するふるさとづくりは、市民の自立精神と連帯に立脚するものでなければならぬと、このことを私たちに教えてくれたのは、他ならない「帯広の森」なのであった。

終わりに

本市は今年開基百年を迎えたが、この歴史も本州都府県が持つ歴史には遠く及ばない。そして、この都府県の長い歴史が育んだ豊かな緑を見るとき、北海道に住みまちづくりに携わる私たちは、非常に羨ましく思うのである。

しかし、歴史はこれから私たちが創りだすもの、緑についてもまた同じではないだろうか。帯広の森構想は、こうした考えに立ち、歴史の浅い北のフロンティア都市帯広が、開拓二世紀に向けて新たな歴史づくりをしようとするものであり、また、二十一世紀のまちづくりへの一つの提言でもあったのである。

まちづくりは一朝一夕にできるものではない。言い古された言葉であるが、私たちは帯広の森づくりを通して痛切にこのことを感じている。遠い将来を見通す眼と夢と、何よりも、それを実現するためにまちづくりの思想を後世に引き継いでいかなければならないからである。

だが、これからも帯広の森に市民の総意と情熱が注がれるなら、そして、市民のまちづくりにかける熱意が、地域や家庭に広がりまち中を覆い尽くすなら、緑溢れる帯広がつくれる日はそう遠くないはずである。

来年も再来年も十勝晴れの五月の空の下で、市民植樹祭が繰り広げられていくことであろう。そして「帯広の森」は、永遠に市民の手で創り続けられていって欲しいものである。そのとき緑は、私たちが抱いていた夢とロマンを後世に語りかけてくれることであろう。（1982年）

第7代 帯広市長 高橋 幹夫

1941 年（S16）出生

1990 年（H2）第7代帯広市長就任

1998 年（H10）退任

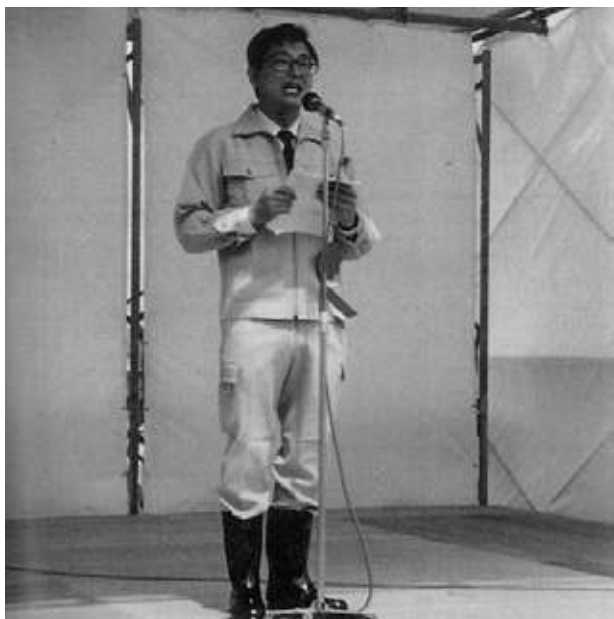


令和6年10月22日撮影

帯広の森 50 年に想う

帯広の森が昭和 50 年の第 1 回植樹祭から 50 年を迎えたという。

私の最も尊敬する故吉村博市長が、帯広に百年の大計として広大な緑のグリーンベルトで街を囲うという、夢の大構想が動き始めて 50 年経ったという訳である。こんな長い年月をかけた壮大な構想は、いまもって全国広しといえども探すことはできない。



平成2年（第16回）市民植樹祭

市長になる前の市職員時代、一時森の業務に携わったことがある。もちろん市長時代の森づくりを進めてきたものとして大変感慨深い。

この大構想が全国に注目され、帯広の知名度を全国区に引き上げたのはいうまでもない。私の市長時代にも、まちづくりに携わる多くの自治体関係者はいうに及ばず、著名な学者や国のお役人に至るまで、最大限の評価をいただき誇りに思ったものである。

何よりも嬉しいのは、市長が変わろうとも歴代の市長がしっかりと引き継ぎ、しかもまちづくりの中心に据えて取り組んだことであり、この間多くの市民が植樹祭や育樹祭にかかわり、自分たちの森として育ててきたことである。その中心となって情熱をもってこの大事業を長年支えてこられた市民団体のみなさんに心から敬意を表するとともに感謝申し上げたいと思う。



平成4年度（第18回）市民植樹祭

吉村さんは昭和 34 年に全国に先駆けて計画的なまちづくりのために総合計画を策定した。そこでは帯広の将来目指すべき都市像を「近代的田園都市」と謳った。田園都市構想は、1900 年頃イギリスの E・ハワードが、自然と共生し緑豊かな理想都市をつくろうと提唱した都市構想であり、1903 年にはロンドン郊外のレッチワースというところに、はじめての田園都市がつくられた。

帯広の田園都市構想は、それを模した訳ではなく、帯広独自のものとして構想したものであるが基本的なコンセプトは相通じるものがある。そしてこの「近代的田園都市」のシンボルとして 406.5 ヘクタールにおよぶ広大な森をつくることを考え

たものであり、そのなかに20万都市をつくるというのが吉村さんの発想であった。

帯広のまちづくりは、一貫してこうした考えのもとで進められてきたと自分は思っている。もちろん私の市長時代にも常に頭にあったまちづくりの考えであった。

森づくりは百年の大計といいながら、吉村さん本人は200年から300年を見据えていたようだ。50年である程度の森が形づくられてきたが、完成

といえるまでにはまだまだ多くの歳月が必要なのだろうと思う。だからこれからも森づくりの意義を若い人に伝え、この運動を地道に後世に伝えていくことが大切だ。

50年という節目に立って、いまさらながら先人の明に思いを馳せ、さらにこの森が市民の宝として愛され、大事に育まれることを心から願っている。



令和6年5月19日 帯広の森50周年記念植樹

第8代 帯広市長 砂川 敏文

1948年（S23）出生

1998年（H10）第8代帯広市長就任

2010年（H22）退任



森の楽しみ

1 森は生活の一部

南の森に住まいしていることもあって、帯広の森は日常的に訪れる場所である。樹々が成長し、園路も整備されて、酷暑の夏でも気持ちよく散歩できる。運動施設区では、テニスやスケート、野球やサッカーの試合を観戦することがあるし、研修センターの「ばわっく」では、お昼を食べたりおいしいスイーツを味わう。近くの「ウエモンズハート」のジェラートも外せない。JICAセンターの「おびくっく」では、各国からの研修生の顔が見えます。「もりの山」に登り、日高山脈や大雪山、十勝岳連峰そして市街地の展望を楽しむ。ここは帯広市の都市計画区域内では一番標高の高いところ。多分100メートルくらいかな。

そう言えばJICAセンターの近くには「帯広市水準原票」がある。「この基票は、東京湾平均中等潮位を基準としており、本市内の地盤高の原点となる

ものです。昭和52年7月帯広市」とあります。市内各所に設置されている帯広市水準票の原票です。

「帯広の森 百年の礎」の碑があります。「帯広の森西帯広地区地権者協議会、平成十六年五月吉日」とあり、森の造成に協力した地権者の思いが示されています。帯広の森の大構想を、発想、推進した吉村博さんの像も設置されています。

戦時中の航空機の掩体壕の跡も残されています。当時の帯広第一飛行場、現在の十勝飛行場の周囲に46基あったそうですが、現在森の中で確認されているのはこれ一つです。戦闘機の投影図が間伐材でほぼ原寸大に描かれています。

縄文時代の遺跡も散在しています。三の沢遺跡、宮本遺跡さらに森の区域からは外れますが自由が丘遺跡、暁遺跡、落合遺跡、さらに川西遺跡とつながっています。いずれも低地を望む高台の縁で、太古の時代から安全で住みやすいところだったようです。このように、森には帯広の地理や歴史、文化を偲ばせる事物が散在しています。これらをめぐって、四国88か所、西国33か所ではありませんが、帯広の森33か所めぐりとしやってみてはいかがでしょうか？

2 森を歩くと沢山の楽しみに出会う

園路沿いや林床には、多くの草花が見られます。季節の移り変わりとともに、次から次へと可憐な花を咲かせます。春一番はエゾエンゴサク、エンレイソウやベニバナイチヤクソウ。近頃、イチヤクソウの群落が広がってきたようです。夏にかけては、オオウバユリ、エゾエンゴサク、エゾクガイソウ、ハエドクソウやクサノオウなどなど。存在感があって目立つものから、よく見ないとわからない地味な花まで、盛りだくさんです。秋にかけては、萩、アザミ、アキカラマツやキツリフネなどなどへと移っていきます。それぞれの初物を見つけては、季節の移り変わりを感じています。

野鳥も多く見かけ、また鳴き声を聞くことができます。おなじみのカッコウ、隣の駐屯地からも聞こえてきます。「テッペンかけたか」のホトトギス、「じょっぴんかけたか」のえぞせんにゅう、「ちよっちゃんちよっぴーる」のセンダイムシクイ、「きょろんきょろん」のアカハラ、「みゃーおみゃーお」のアオバト、「ポッポーポッポー」のコ

ノハズクなど「聞きなし」もまた楽しいものです。樹々の成長が進んでくると、姿を見つけるのはむずかしくなってきますが、鳴き声はそういうことではありません。名前とか生態がよく分からない時は、「はぐくーむ」で確認したり、教えてもらったりしています。

園路を歩いていると、いろいろ素敵な人と出会います。自転車でのんびりとポタリングの人、仲良く手をつないで散歩している中年のご夫妻がいます。年配のご婦人が娘さん（お嫁さん？）の介助を受けながらゆっくり散歩しています。JICAの駐車場に車を止めて、園路を散策しているのでしょう。とてもなごやかです。春先にはクロスカントリースキーの人たちが、スキーを脱いで八線道路を横断しています。それぞれが、それぞれのやり方で森を楽しみ、森を大切な場所として大事にしているのだと思います。

八線道路は車道で年中開いていますので、車や自転車が多く通行します。そのせいかゴミが散見されます。マスクやお菓子のパック、空き缶、空き瓶、ペットボトルなどです。雪解けのころは、半年分のゴミがたまっていますので、エコフレンズの清掃ゴミ袋数枚にもなります。夏の間も十日に一度ぐらい回収しています。拾っている人がほかにもいて、時々今年は少ないですねとか話しながらやっています。ほかの場所でも散歩しながらゴミを拾っている人を頻繁に見かけるようになりました。やはり散歩するにもゴミの中を歩くより、清潔なところを、ゴミの花ではなくて本物の花などを楽しみながら歩きたいものです。

3 子供たちと森

「はぐくーむ」で子供たちが森の生態などについて勉強したり、「ちょうせんごよう」の抜き取りツアーに参加している姿を見かけます。

森の中に足を踏み入れるという経験は、子供たちにとって新鮮で感動的で、これからの人生への貴重な体験になると思います。人類は街で誕生したのではなく、森で誕生したのですから。

帯広市の小学生の全員が「プール学習」を経験するように、全員が「森学習」を経験するというのはどうでしょうか？三年生くらいかな？カリキュラムに「森学習の時間」を設け、学校単位で

実施するのを必修にすることは出来ないでしょうか？そうした経験をした子供たちは、それぞれが自分なりの森の楽しみ方を見つけ出していくに違いありません。

4 帯広の森 100 年

帯広市民の皆さんにとって、帯広の森は特別の時に、特別に出かける場所なのではなくて、日常の生活の場、日常生活における憩いの場、あるいは子供たちの大切な学びの場になってほしいと思っています。今後ともそのための機能を整備充実させていくことが、「帯広の森」構想を立案、推進した先人たち、また、その実現に協力を惜しまなかった地権者の皆様はじめ多くの市民の方々に恩返しする道だと痛感しています。来るべき100年には帯広の森がすべての帯広市民の胸に、「自分にとって地域にとって、大きくかけがえのない地域の誇り、財産として生きている」ことを夢見しています。

はじめに

帯広は十勝の中心都市であり、その開拓は民間によって実施された。この点で、北海道の他の都市とは異なる民力を感じる。そして街は、十勝川と隔離分布するケショウヤナギで有名な札内川、そして南西部に位置する「帯広の森」によって囲まれる。この森の、将来への期待を、森林美学の視点（小池 2021）から考察し、発展を願う一助としたい。森林美学とは、森を流れる小川を含む森林生態系の安定性を担保し、愛情を持って子孫へ届けるために持続的管理を行なう、19 世紀末のドイツで産まれた体系である。北海道に紹介されたのは、これを、天然生の針広混交林へ適用した内容であると考えている。

帯広の森は、住民が健やかに生活できる環境を保障するため、もとは農耕地であった場所に人手をかけて造成された（帯広市 1975；山田 1995）。この造成計画は 5 代目市長の吉村博氏がウィーンの森を視察したときに始まった。十勝にふさわしい森を目指し、市民の手で植樹・育樹してきたのが帯広の森である（帯広市 URL 2010）。その成果は、平成 5（1993）年には「都市景観 100 選」（国土交通省）、そして「生物多様性保全上重要な里地里山」として選定されたことに裏付けられる（環境省 URL2015）。

この森では“植樹に貢献してきた”鳥やエゾリスなどの小動物が生きいきと活動している。この場所を丸ごと子孫へ渡していくために、生態系の保全管理を目指す体系である森林美学の実践に提唱された 5 つの指針を順次紹介する。そして景観生態学でいう PCM（P- パッチ：森林など構成要素、C- コリドー：回廊、M- マトリクス：景観）モデルの考えによって（図 1）、今では北海道の至宝というべき帯広の森を考えたい。住民にとって、帯広の森は心のよりどころである。個々の自分史の原点、それを故郷というが、この森は悠久であって欲しい。

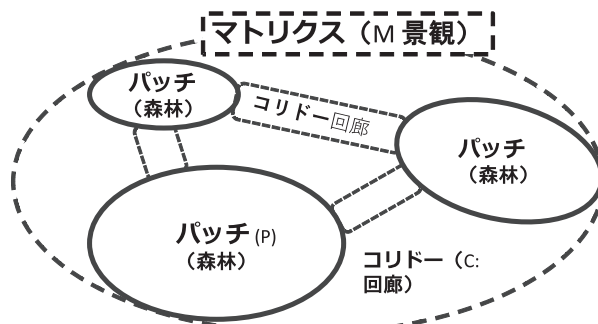


図1. PCMモデルと景観の見方
マトリクス：景観、風景、パッチ：整備する森林など、コリドー：回廊—森林の分断化を軽減

森林美学の指針と歴史

森林美学の提唱者はドイツ東部（現在ポーランド西部）の地主貴族であった H. von Salisch（以下、ザーリッシュ）である。先祖伝来の欧州アカマツと欧州ブナを中心とし、氷河期に置いていかれた岩石と湿地や小川を含む約 1000 ヘクタールの先祖伝来の森林を、領民とともに機能美に富む場所に造り上げた。その内容を基に、彼はイギリス式庭園の技法を取り込み、遠近法を利用した林分管理などの林内美を創造した体系である森林美学を出版した（1885；二版 1902 の訳—小池ら 2018）。

森造りの理念はザーリッシュ自身が述べているが、その実践方法は C. ワグナーの空間的規制^{*1}（井上 1974；筒井 1995）に従う。具体的には、秩序付けを基本として、以下の 5 つとされる。

- 1) 土地（土壌）が樹種に最適であること。
- 2) 樹種が混交している。
- 3) 環境が樹種に適合していること。
- 4) 森林が諸害に対して耐性を持つ。
- 5) (林道などの) 生産基盤が整備されていること。

もともとザーリッシュの森林美学は針葉樹人工林を対象に考究し、創り上げた内容である。北海道では、沙流川源流のアイヌ民族の聖地である針広混交林の美しさに魅せられた新島善直門下の村山醸造^{*2}が、樹形の記載を中心に森林美学（1918）を出版した。

森林美学のゴールは恒続林である（＝持続可能な森造り）。しかし、関東大震災で出版元が焼失し、コピーもない時代で、森林美学のテキストはあま

り広がらなかった。

森林美学の根底には、詩人であり哲学者であった V.J. ゲーテの言葉「私は自然と交わることが好きだ。自然は常に正しく、間違いは人間にある」という考えがある（小池 2021）。これらを踏まえ、帯広の森の保安全管理活動を維持するための考えを紹介したい。

*1:空間的規制:通常天然下種更新の事で、林床の状態を考え、常風の方向をにらんで伐採を徐々に進めることを意味する。

*2:後の昆虫研究者で、通称“ナラ枯れ”病の運び屋、カシノナガキウムシの命名者である。

事例に学ぶ森造りと病虫害対策

裸地や耕作放棄地などにその土地が収容できる森林を造成する（森林美学の指針 1.3；以下、指針）試みの例は、その目的や立地は異なるが、造成開始から 100 年（2020 年に迎えた）を越えた明治神宮の社叢（以下、神宮の森）に見ることができる。そこで帯広の森の、いわば先行例として、神宮の設計について、森林美学の視点を踏まえ紹介したい。

神宮の森の造成に当たって、大隈重信は、林学者の本多静六らに、明治天皇を讃えるため、日光東照宮のスギ並木のような荘厳な印象の森林造成を依頼した。しかし、本多らは科学的データに基づき、土壌、気象環境、そして鉄道からの大気汚染の問題を考慮して、広葉樹主体の森林を造成することを説き、さらにそれを全国からの献木によって実施することを政府に認めさせた（今泉 2021）（指針 1.3）。そして自然に倣い天然下種更新などによって森林自体が自律的に再生していく能力を人は手伝うだけに留めることを目指した。このために、明治神宮では 50 年ごとに 150 年にわたる林相予想図を示し、施業の指針とした。この様に、森林の推移を予見する図を提示することは、実務に携わり管理するためには、かけがえのない指針になる。帯広市は、造成当初からの計画書で既に予想図を提唱している（帯広市 1975、帯広市 1994）。そこには、従来の植物生態学で陥りやすい極相の概念（クレメンツの言う極相：特定のあるべき森林になる）は机上の話であり、森林の発達は、ギャップ（林内孔状地）、建設相、成熟相からなり、動的な存在である（鷲谷 2001）ことが示された（図 2）。この姿勢を貫いて欲しい。そこに、植樹・育樹な

どの人手をかけ、森林の若返り（風倒などによるギャップ形成を含む）の手助けを行なう意義があり、図 1 のコリドー（C）はカシワ、ミズナラなどの堅果を運ぶ小動物には不可欠の存在である。



図2. 帯広の森の林相予想図(帯広市資料から作成)。

育成期＝建設相、森林形成後＝成熟相

森造りを迷ったら、帯広農高の保護林を訪ねると良い。帯広の森より50年以上長く保護された歴史をもつ“モデル”林分があることは、心強い。

神宮の森の林相予想図でも経験済みであるが、帯広の森でも初期 50 年は動きが比較的早く、手入れの効果も認識できて、育樹にも熱が入ったと思われる。しかし、これからの約 50 年は、比較的安定した状態が続くと予想される。そこで、目標を当初の生活環境林の造成だけではなく、例えば、多機能*を発揮させるために、さらなる混交林化などの森造り（指針 2）など、帯広の森の役割が有する多面性への期待を膨らませることも一考に値する。

神宮の森づくりの指針では、石炭を燃料とした蒸気機関車による二酸化硫黄の影響は考慮されていたが、CO₂ 増加による林分構造の変化や動態への影響は考慮されていなかった。現実には、例えば、温暖化によって、耐陰性の高いシュロが林床を覆ってしまい、天然下種更新が妨げられたり、さらに、後述するブナ・カシ萎凋病（通称、ナラ枯れ）によって上層樹冠を構成する大径木の枯損が激害となって、林冠の一部が壊れるなどの問題が発生しているが、これらは想定されていなかった。

帯広の森の、現状の主な利活用は散策等である。大部分は平坦な場所であり、林道・作業道として活用できる基幹路が既に設けられている。これまでは生産林ではなかったが、今後の持続的な森林管理のためにも一定資金の確保が可能になると思われる。そこで良材の生産を見込むことができるなら、木材生産は視野に入れても良いと思われる。森林の健全性維持にとっても保育作業である抜き切りは不可欠である。そして、得られる材の用途は多様であって良い。ただ、広葉樹の場合は、体系だった施業法はまだなく（藤森・河原 1993；清

和 2022)、北海道ではいろいろな可能性のあるカシワの仲間であるミズナラの事例は参考になる。

用材生産を意識するなら、欲ばらず、太い枝までの枯れ上りが5m程度に達したら、樹冠を十分に拡大できるように個々の樹冠に注目して生育空間を確保するとよい。胸高直径で30cmを目指すなら樹形のパイプモデルから(城田 2021)、樹冠直径は約8m、40cmなら約10m必要である(櫻井 1993)、理想を言えば、樹冠長率(樹高に対する樹冠の長さ×100)を60%程度に維持することを心がける。また、抜き切りを行なう場合、幹の間隔から判断しがちであるが、抜き切る個体を選ぶときは、林冠(樹冠の連続体)に目をやって、残す個体の樹冠を十分に確保する必要がある。広葉樹は環境に応じて柔軟に幹や枝を伸長させるため、根元で混んでいても林冠での空間の重なりは無く、個々の個体の樹冠は発達する。針葉樹は根元で選んでも大きく間違えることはない。

森林美学の実践指針の4)では、諸害に耐性の有る森造りを謳っている。今後の懸念として、病虫害は環境変化の影響を強く受ける。近年の極端気象はこれまでに無かった脅威であり、また強風のあとは根が切られ衰退するので注意が必要である。カシワやミズナラの多い帯広の森の将来を考えると、ナラ枯れによる枯損が懸念される。ナラ枯れは、江戸時代から被害報告の記載はあった(山崎 2023)。2000年頃までは山形から島根県にかけて、主に日本海側での被害報告があった。冬期、偏西風によって運ばれてくる積雪中の窒素酸化物が蓄積して、ナラ類の根圏のリンや水分の吸収に重要な役割をもつ外生菌根菌の働きが鈍ってしまう(小川 2012)。菌根の発達には過湿と富栄養化が制限要因になる。このため、フェーン現象が生じると衰退が生じ、根に見合った樹冠サイズになるような枯れ下がり(ダイバック)が生じる。残念ながら2000年頃から太平洋岸の常緑のナラ(=カシ)を含み、ナラ枯れは全国に被害が蔓延していった。媒介者(ベクター)のカシノナガキクイムシ(カシナガ)は熱帯起源とされているが、近年の温暖化も手伝ってか、2023年には、ついに北海道南部のミズナラ林から被害報告があった。小泉ら(2013)は、媒介者の行動を、植生分布図と積雪深を利用してGIS(地理情報システム)から予測し、ナラ枯れは北海道南部を中心に蔓延するとした。積雪

深が50cmを越えると地表面の温度は0℃付近に維持される(傾斜木では谷側に空洞が出来て、外気温に近い)。このため、将来、帯広地域も油断できない。

枯損木は大部分が大径木で、水分通道をになう辺材部分へのカシナガの侵入に対する防御反応のため、通水機能が低下して枯死に至る(山崎 2023)。帯広には大径のカシワが数多く生育する。そして、ミズナラやカシワへのナラ枯れの脅威を住民は共有しておいていただきたい。今後、もし根元にフロス(カシナガ穿孔によって生じる“木くず”)を見かけたら(図3)、ためらわず伐採して焼却するか、丸太を薬剤燻蒸することが大切である。世界3大病害(ニレ立枯病;五葉マツの発疹サビ病;クリ胴枯病)の蔓延も危惧される中、樹木医の活動に期待する。



図3. ミズナラ大径木根天のフロスの事例
(鳥取・智頭町の保存林)矢印が蓄積したフロスを示す。左は媒介者のカシノナガキクイムシ成虫。

*:森林の公益的機能+木材生産機能を多機能と呼ぶ。

環境変化と森林の保育管理：取り得る対策

本州では、人口減少と高齢化の進行によって里山の利用が減って、ナラ類が大径木化し、カシナガが営巣できる辺材面積の増えたことがナラ枯れの素因とされる。事実、大分県での事例から、椎茸はだ木として直径15cm程度で収穫している林分での被害報告はほとんどない。そこで、樹齢が約30年までは萌芽更新がカシワにも期待できるので、いっそ、定期的に収穫して森林教育の一環としてキノコ栽培を行い、活動資金の一助にすることも一考に値する。

森林を含む景観(図1)は常に動いている。その

動態を知ることによって、より良い森林の保育管理が実現できる。産業革命以降、増え続ける大気CO₂濃度は、実は、林冠構造をも変化させる（小池ら 2013）。高CO₂条件では植物は気孔を閉じ気味にして、乾燥耐性を高めるが、一方では、樹種に依るが、シラカンバやハンノキ類などの陽樹では、特に分枝が進む（小池ら 2013）。ナラ類もその傾向がある。もちろん、地形に大きく関係するが、土壤水分の変化によって引き起こされる森林の衰退現象をまず述べ、続いて推奨できる回避策を紹介したい。

帯広の近現代の記録では、一部はアシなどの禾本科草原が湿地を中心に分布していたという（橋本ら 2017）。本州では屋根や肥料としてこれらは長期間利用されてきた。ススキ等が堆積し、泥炭層が形成された。こうした地帯でも排水対策が進められ、泥炭土であっても農地利用されていたが、地下水位は高くなりやすい。大雨が降ったとき、一見、平坦に見える場所でも、やや低地になっている所では湛水し、冠水耐性のないトドマツなどは、短期間の湛水であっても枯死した。一方、図4に示す通気組織（エアレンチマ）を形成できるハンノキやヤチダモ、浅根性のアカエゾマツは生き延びることができた。さらに、湿原の地下は酸素のない嫌気状態になっていることが多いので、温室効果ガスの代表であるCO₂の約25倍の温暖化力を持つメタンが生成され、エアレンチマを通じて地上へ放出され、温室効果ガスとして、日々、悪影響をもたらす。なお、メタンは湿原だけではなく、牛のゲップや水を張った水田からも放出される。

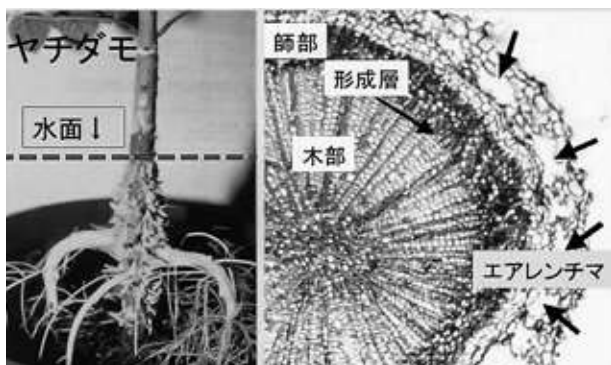


図4.ハンノキ、ヤチダモに形成される通気組織(右図の矢印、エアレンチマ)

大気CO₂濃度が増加して上層樹冠が繁茂し、この結果、林床へ届く光が減少する。Oikawa (1986)の熱帯林のデータを用いたシミュレーションの結

果が、増加し続ける大気CO₂濃度環境での森林の扱いに指針を与える（小池ら 2013）。大気CO₂濃度が約550 ppmに達すると、閉鎖した林冠では林床へ届く相対光量は5%以下になって更新稚樹の生存が危ぶまれる（丹下・小池 2016）。従って、林冠が多くても2/3程度残るくらいまで上層木を間引く必要がある。ここで出る樹木の小枝や葉は栄養分の循環を期待して林床に残し、太い枝や幹はチップにして歩道へ敷き詰め、歩道整備に利用することも一案である。

上層木の抜き切りによって林床へ光を届けると地温上昇につながる。これによって、ミミズの活動が活発化し、その結果、土壤の団粒構造が増えて、ミミズの穴が沢山できる（清和 2022）と好気条件になりやすい。好気条件になると林床表層がメタンの消費（＝吸収）源になる。また、ミミズの活動によって落葉が粉碎され植物に吸収されやすい形態になる（金子 2023）。このように、密度が高くなり易い林分からの間引きは、残った個体の成長を促す（＝CO₂吸収・固定）だけではなく、林分の環境保全機能を高めることにつながる（小池・高橋 2023）。

ミミズの活動を盛んにする養分にカルシウム（Ca）がある。林床に生育するカエデ類の葉にはCaが多く含まれる。Caは葉の細胞壁の強度を高める働きがあるが、落葉時でも樹体へ回収されない。このため、カエデ類は積極的に残し落葉を介してミミズの活性化を促すことも大切である。ただ、カエデ類は概して耐陰性が高いので高密度になると他の樹種の更新を妨げるので、林床における調節は必要である。

生産基盤の整備から学びの場へ

帯広の森の設定時から活動のために林道・作業道としても大切な基幹路が設けられているが（指針5）、さらに充実させていただきたい。これから帯広の森を支えるためには、市民の方々が帯広の森へ訪ね、楽しみながら整備することが基本である。それを保証するのが、基幹路であると言っても過言ではない。「林道（基幹路）は人が通って山の手入れをするため、そして木材の収穫の基盤」である（小池 2021）。このため、作業道も含め、今後の集中豪雨などを考えると、間伐木などを利用

して排水溝を作成し雨水浸食を回避する対応が必要とされる（図5）。

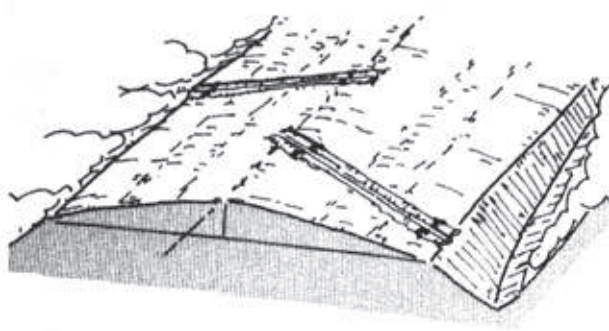


図5.間伐木を利用した基幹路の保全
笹賀一郎氏提供。かまぼこ形の路面と斜めに配した間伐木を利用した排水路。

さらに、保育管理の鍵でもあるチェーン・ソウの操作は、大変重要であるので、継承のためのイベントも意識しながら、現行の活動をさらに支援し、発展させて頂きたい。切に願う点である。

安全な帯広の森を確保する

森林が発達してくると落枝・倒木の危険は常に伴うので、定期的に専門家が参加するモニタリングと見回りは不可欠である。例えば青森の十和田湖～奥入瀬溪谷では、2003年に枝の落下で重傷者が出たため、その後、傾斜木や歩道への掛り木の除去が行われた。しかし、2023年には倒木に車が衝突し、死者が出て非常に厳しい状況が生じた。倒木対策の例は、大阪の万博跡公園にもある。仮に倒木があっても利用者を巻き込まないように歩道と同じ幅で左右の木を伐採していた。さらに、切り株にはいわゆる面取りを行い、安全に配慮している（図6）。



図6.万博跡公園の歩道と安全確保のための空間確保と根株の面取（左図）
両矢印の長さは歩道と両側の伐採空間を示す。

当面の対策としては、市民向けに、森林内での安全な活動方法や落枝・倒木のリスクについてのワークショップを開催することは有効だと思われる。安全意識を高めることで、事故の予防が可能となる。“予防的な間引き”活動も有効である。例えば、市民参加で間伐などの保育活動を継続することは効果的であろう。これによって、森林の健全な成長を促し、災害のリスクを軽減できる。

一部対策はとられているが、温暖化によってマムシも懸念されるが、野生生物による死亡率一位のスズメバチへの対策はしすぎることはない。1) 誘引する可能性のある果物やジュースなどやアルコール、エステル系を含むものは、山に入るときは香りがもれないようにすること、2) スズメバチが沢山舞っている場所へは絶対近寄らないこと（巣がある）、などは最低限の対策である。歩道や周辺に看板を設置する現行の活動の継続を願う。

将来への展望：森林環境教育への期待

帯広の森は、1992年の地球サミット以来、生物多様性の保全を意識した教育が求められている。豊かな自然が残っている帯広への期待は高い。理想は生態系の丸ごと保全である（矢原・鷲谷2023）。

帯広の森は十勝の厳しい気候でも根を張って、帯広の市民を、そして周辺の人々を護ってきた。その保全活動を積極的に紹介する必要がある（山田1995）。幸いに、拠点施設として整備された帯広の森・はぐくむ（現在、創立100周年を迎える㈱ケイセイが指定管理）を中心に、普及、教育の取組みが既に行われている（井上・杉浦2024）。特に、幼児期の自然体験はその後の人生へも大きく影響する。故郷での体験が過疎化をも低減する可能性が高い。著者の経験から次に紹介する。

森林景観の好みを問うアンケート調査を時々を実施してきた。まず、文字情報で「自然林と人工林の、どちらが好きですか？」と聞くと、森林科学系（既にバイアスのかかった集団であるが）の学生さんは、自然林を支持する傾向が高い。続いて、事前の解説無く、北海道大学中川研究林の箴島原生林と枝打ちなどの施されたトドマツ人工林を見せ、再度、同じ質問をする。今度は、驚くことに、トドマツ人工林が良い！と答える学生さんが増え

る。そして、事前に、幼い頃に家族と山へ出かけた経験の有無を聞くと、写真でも自然林が良いと答える方は、例外なく、幼い頃に野山での体験があるという。被験者の経験である「属性」の重要性を認識する瞬間である。

そこで重要性を指摘できるのが森林教育であり、帯広の森で実施されている現行での体験が紹介された（日月 2024）。小中高生らへの森林教育のプログラムが提供され、実践も進んでいる。さらなる“教材”の開発と提供が期待される。なにより“おらが森”であることを意識するためにも森林教育の必要性を感じる。地元ブランドへ発展させることで観光資源としての期待、特に、根室のようなシマフクロウ（見つからないように保護する）を除く野鳥・小動物の観光などが期待される。

森林美学は、生態系の概念が未確立の時代に、先祖からの土地での森林資源（木材、狩猟の獲物である野生動物、心を豊かにする美しい森など）を子孫に残す体系として生まれた（小池ら 2018）。はじめに述べた5つの指針にそった現在の活動を継続していただきたい。そして帯広のプライドへと展開して欲しい。帯広の森が市民や周辺住民にとって“空気”や“水”のような存在になることが最も大切である。

引用文献

藤森隆郎・河原輝彦（1993）広葉樹林施業、全国林業改良普及協会
橋本靖ら（2017）近代的な開拓前の帯広市周辺の自然の景観、帯畜大研究紀要 38：25～33
今泉宜子（2021）明治神宮 内と外から見た百年、平凡社
井上真理子・杉浦克明（2024）自然とともに生きる森林教育学、海青社
井上扶由（1974）森林経理学、地球社
金子信博（2023）みみずの農業改革、みすず社
環境省 URL（2015）生物多様性保全上重要な里地里山（https://www.env.go.jp/nature/satoyama/senteichi_ichiran.html）（2024 年 10 月訪問）
小池孝良ら（2013）化学と生物 51：559-564
小池孝良（2021）森林美学への道、海青社
小池孝良ら 監訳（2018）森林美学、海青社
小池孝良・高橋絵里奈（2023）山林 1668：42-59
小泉匡平ら（2013）北方林業 65：205-208

国土交通省 URL（1993）都市景観 100 選、https://www.mlit.go.jp/toshi/townscape/toshi_townscape_tk_000022.html（2024 年 10 月訪問）

帯広市（1975）帯広の森造成計画書、地質開発コンサルタンツ

同（1994）帯広の森利活用計画書、高野ランドスケーププランニング、31-33

帯広市 URL（2010）市民参加の森づくり～帯広の森について；https://www.city.obihiro.hokkaido.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/940/guidelines_49-55.pdf

小川真（2012）きのこに学ぶ、岩波新書

櫻井尚武（1993）ミズナラ林の施業、収録：広葉樹林施業、全国林業改良普及協会、57-75

清和研二（2022）スギと広葉樹の混交林、農文協

城田徹央（2021）樹形の形と森林の構造、収録：木本植物の生理生態、共立出版、70-79

丹下健・小池孝良（2016）造林学 4 訂版、朝倉書店

日月伸（2024）森林教育と市民協働の森づくり、収録：自然とともに生きる 森林教育学、海青社、167-173

筒井迪夫（1995）森林文化への道、NHK 出版

矢原徹一・鷺谷いづみ（2023）改訂版・保全生態学入門、文一総合出版

山田英和（1995）森づくりと人づくりと、収録：帯広の森 20 年史、東洋印刷（帯広）、169

山崎理正（2023）ナラ枯れ、収録：木本植物の被食防衛、共立出版、56-66

鷺谷いづみ（2001）生態系を蘇らせる、NHK 出版

帯広の森のこれまでの50年という年月は、歴史の重みを伴って存在します。公園緑地の元官僚の方と話をしている時に、帯広の森が50年になる話をしました。そうしたら当時のことを思い出されたようで、「あれはね、社会党の市長さんの企画だったけど、角さんが面白いプロジェクトだから応援してやれってことで予算化されたんだ。」という話をされました。「日本列島改造論」の著者の田中角栄のことです。

当時、革新系の知事が大都市部で活躍しており、都市部における自民党の失地回復の取り組みとして、盛んに都市政策の議論がされていたようです。都市政策大綱がまとめられたのもその頃です。その勢いで、「日本列島改造論」が上梓されました。「日本列島改造論」では、地方都市の在り方として、「新25万人都市」が謳われています。幅を持って、15～30万人ぐらいの規模感で構想していたようです。そこには、情報、流通、医療、教育、文化、娯楽などの機会を提供する都市機能を持つことが記されています。序文に、「私は、産業と文化と自然とが融合した地域社会を全国土におし広め、全ての地域の人びとが自分たちの郷土に誇りを持って生活できる日本社会の実現に全力を傾けたい。」と、その決意を示しています。その角栄さんが、帯広の森は面白いと。

吉村市長の近代田園都市構想、自治体の在り方としての都市像、市民定員論は、角栄の「新25万人都市」を先取りするもので「帯広の人口は20万人」、それを緑で包み込むという計画は、かなり先駆的なものであったと思います。

これが角栄さんの後を継いだ大平正芳の田園都市構想の元になったのではないのでしょうか。

—吉村元市長の街づくりメモが残っています。

以下にその一部を抜粋します。

街は生きものだし、歴史を造って行くものだ。だから**我が街には我が街の個性と伝統が必要だ**。それには時間がかかるし、基本、基礎になる原則が必要だ。この原則、基本は既にある程度は示されているけれど、これを何回も繰り返し繰り返し市民に訴え市民に理解させ、しかも具体的に創成し、形づくって見

せねばならない。

我々が住む大地や自然を重視し、その中でこそ、これらの思考が凝固するのだから自然の姿を残すことを大事にする。そしてそこから**固有の自然と密着させた人情や風俗、習慣、伝統をつくりあげて行く努力をするべきだ**。情報時代は世の中を均一化する。こうなればなるほどローカルを尊重する精神を培養する必要がある。

「帯広の森」の森が、森としての姿を見せ始めた今、ここからは、森の構想と一体となった農都帯広の姿、田園都市の構想を実現するステージではないでしょうか。

都市と農地、林地、自然保全地などが一体となって持続可能な豊かな暮らしを実現する地域のシンボル「帯広の森」が、大きな役割を果たす時です。

以下に帯広の田園都市の構想を実現するための道筋を3つの視点から考えてみたいと思います。

①豊かな森の実現

②グリーンベルト+グリーンウェッジの実装

③帯広の森を取り囲む農との連携

①豊かな森の実現

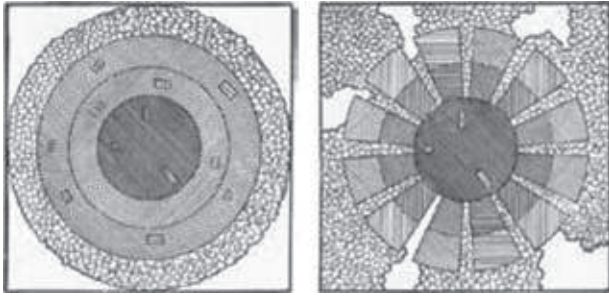
フランスとドイツの国境にライン川が流れています。ドイツ側には針葉樹の黒い森（シュバルツバルトの森）があり、フランス側には明るい落葉樹の森があります。この二者の違いは、もっぱら自然的な要因によるものではなく、歴史的な背景や文化的な背景によるものです。

都市の森は文化を映す鏡です。森を見ると地域の文化レベルが自ずと知れると思います。平地にこの規模の森を造成した事例は国内にはなく、文化の香る豊かな森として育んでいきましょう。

②環状緑地（グリーンベルト）と楔状緑地

（グリーンウェッジ）の実装

「帯広の森」の計画書には、環状緑地を採用した理由が記されていますが、楔状の緑地は取り上げられていませんでした。帯広は日高山脈襟裳十勝国立公園からの伏流水に育まれています。この水系を楔状



Eberstadtによるベルトとウェッジのモデル対比(1911)

緑地として、農村部と都市部を縦に繋ぎ、さらに帯広の森で横に繋がる。市民との接点も大幅に増え、山からつながる大地の恵みを日々感じながら豊かな田園都市の生活を送ることができるようになるものと思います。

帯広市河川現況図



資料：1 一般河川、2 一般河川及び準用河川調査（北海道土木協会）



市内に残る小川の風景

③農との連携

農業王国十勝にふさわしい農の活力を大いに示すような拠点を帯広の森に隣接して設けるなど、連携して都市と農を結びつけ、経済的な活性化と共に、将来の農業を担う人材の発掘にもつながるような十勝らしい活動を展開する。

さらに帯広の森の維持管理に農的な方法を活用できないだろうか。放牧による草地や林地の管理なども取り入れられたら良いと思う。

これらを実現することで、地方都市帯広が田園都市のお手本を示すことができます。河川、都市計画、道路、住宅、農政などの行政の縦割りの壁を超えて、まずは楔状緑地（グリーンウェッジ）を実装し、50年先に夢の田園都市を実現しましょう。

この豊かな湧水や小河川を、都市と農村部・自然を繋ぐ回廊として、多様な生き物の生息する豊かな小川に再生させることが次の50年の目標です。

世界が模範とする豊かな田園都市の姿を帯広・十勝で実現しましょう。そのための一歩は、帯広の森の50年で大きく踏み出しているのですから。

1973 年（S48）11 月 1 日 「帯広の森」が市議会で可決される。

「帯広の森」に至るまでの十勝帯広の開拓の歩みを、一市民の目で書いてみたい。

140 年前の第一歩から認識することが大事と思う。権力を持たない庶民が街を創り続けた日本の中でも稀有な街づくりの歴史である。

第 5 代帯広市長 吉村博の近代的田園都市論に、「帯広の森」に至るまでの思考と施策をたどってみたい。

「帯広の森」 前史

1884 年（M16）、依田勉三率いる晩成社が、十勝内陸の帯広に入植した。

江戸末期より、十勝には太平洋に面した豊頃町、大津、広尾町には少数の和人が場所請負制度により、夏場に住み着き、先住民族のアイヌの人々と、鹿の毛皮やら、昆布鮭等の物々交換による交易を細々と行っていた地域であった。

十勝を地形的に俯瞰してみると、3 方を日高山脈、大雪山系、阿寒白糠丘陵によって囲まれ、一方は太平洋に囲まれた地域である。海岸は湾がなく、20～30m の切り立った断崖が日高山脈から白糠丘陵まで、太平洋に面し、太平洋の荒波が常に打ち寄せ、湾や入江がない地域である。十勝帯広は日本の中で陸の孤島だった。

日本は 1868 年に江戸から明治の時代となり、一気に西洋の文化と文明が、日本人の価値観にダイナミックな変革を求めた。西洋、中近東では 1800 年代で現在の国の形が出来、アメリカは明治維新の前後で国の形を整えつつあった。

文明的にはワットの蒸気機関が実用化され、電気が光と情報を提供するようになった。

1904 年にはシベリア鉄道が開通し、ロシア帝国はヨーロッパからアジアへとその目を向け始めた。イギリス、フランス、ドイツなどのヨーロッパ列強はアフリカ、中近東、東南アジア、そして極東アジアへと、進出してきた時代である。

北海道はそのような時代背景の中で、アイヌ民族がすむ蝦夷地の急速な日本化が図られてきた。小樽札幌旭川を拠点地とし、ロシアの南下政策への防御として、滝川士別北見の線上に屯田兵の制

度を創り、農地の開拓と、国土防衛線を展開した時代である。

分水嶺と湾のない海岸線で囲まれた十勝地域は、国の施策による開拓は進まず、民間資本による開拓は明治 16 年晩成社（資本金 5 万円）による開拓まで、待たなければならなかった。

時を同じくして、明治帝国の富国強兵政策は、十勝に少しの光を当てた。当時の強兵策の施策として陸軍は徴兵制度と馬であった。馬具の生産が急務となり、櫛の樹液からとれるタンニンが馬具の鞣し材として大量に必要となり、十勝の平野部に大量に自生していた櫛の樹林が注目されるようになった。明治初期に開拓使による測量で地形的には十勝のあり様は地図上では線引きはなされていた。

十勝地域は、約 10,800km²の面積（岐阜県とほぼ同）を持ち、7,000km²の山間部と、3,800km²の段丘平野である。亜寒帯湿潤気候であり、十勝地域は年間降雨量が近年で 930mm 程度である。

十勝の開拓世代からの人の流れを概括的に見てみる。

開拓第 1 世代 内地（昭和 40 年頃までは本州を指していた）では急速に人口が増えていたが、北海道の大地に夢と希望を持つ人々が移住してくる。

開拓第 2 世代 幼少期に親と一緒に移住したり、北海道で生まれ育った世代。内地への望郷の念がある。出身地の県人会が作られる。

開拓第 3 世代 北海道を故郷と意識する世代。と同時に、交通、情報等が飛躍

的に発達する中で、国内での地域性と定住性は薄れていく。

開拓第4世代 この呼称は無くなった。昭和の終わり頃から、情報・物流は次的に発展し、日本では日常は等しく均等な社会となった。

帯広市の人口推移をみると、

1884(M16)	27 人	13 世帯
1898(M30)	1,251 人	261 世帯
1920(T 9)	16,081 人	3,084 世帯
1936(S10)	35,695 人	6,980 世帯
1960(S35)	100,915 人	23,312 世帯
2008(H20)	168,843 人	85,016 世帯
2024(R 6)	161,288 人	90,502 世帯

上図の表から見てくることは、明治38年釧路帯広間の鉄道が完成し十勝地域が釧路への道が拓かれ、明治40年に旭川札幌がつながり。時代の交通インフラは、遠距離は船と鉄道であり、近距離は馬である。北海道のネットワークに組み込まれていく。帯広という町が一気に創られていった。

明治末から大正にかけて、帯広に人・物が集積されて、町の形が出来上がってきた。

大きな工場があるのではなく、穀類を中心とした畑作が地域経営の骨幹であった。

人の流れを見るなら、1936年頃までは、開拓第1世代が切り拓き、前後して開拓第2世代が重なり合って十勝が防風林をもつ畑作地帯へと変貌した。第3世代は大東亜戦争敗戦後、戦後教育を受けた世代から、戦後復興の時代に生まれ育った世代である。

吉村博の近代的田園都市

1955年(S30)4月 吉村博(44歳)は帯広市の第5代市長に就任した。

戦後復興が一段落し、議会制民主主義がシステムとして機能を始め、高度経済成長へと歩み始める時期である。吉村は5期連続当選を積み重ねた。この時、次なる帯広の都市経営の戦略を具体的に歩み始めた。(5期途中で辞職(20年誌,P197参))

都市開発講座〔2〕開発の歴史と実態 昭和42年発行 鹿島研究所出版会より抜粋引用する。

補論I 地方都市・帯広の開発

第1節 序 論

1. 地方都市と巨大都市

巨大都市とは、住民の意志の反映できない、別の巨大な力で支えられ、住民とは関係なしに動いていく都市である。…地方都市は、地域住民が希望や夢を持ち、その夢の実現に努力する意欲を持ち、それが具体的に行政のなかに反映し、夢が実現できる可能性のある都市としてとらえられる。

2. 都市づくりの主体

日本伝統の政に、住民は「生さず殺さず」という、いわゆる国民的最低標準におさえこもうという精神がある。このため、住民のビジョンがこのなかに埋没し、折角の計画も画墁に期してしまう点に、住民意志の達成の先頭に立たなければならない首長の戸惑いが生ずるのである。

3. 都市開発の課題

第1に、市の発展には、地域産業の動向とその体質改善を進める基盤となる都市機能が問題になる。住民の消費水準の向上によって、文化、教育、福祉等の社会消費への要求が高まり、これらの充実に伴い、魅力ある都市となり、関連する都市の機能が增大することによって発展の可能性が開けてくる。

第2に、地域経済をどのようにみつめ、それがどのように展開していくか。

第3に、住民の高まる要望に対応し、都市発展の側面的支柱となる生活環境の整備および福祉行政をどのように推進していくか。

第2節 地域の特性を活かした計画づくりと

その推進

1. 地域の特性を活かした計画

その都市、その地方の地理的、立地的条件を十二分に診断する。その特性、立地性を活かしながら改造を加えていく。都市の地理的、自然的条件は動かすことのできないものである。これらのことをしっかり頭に入れて、将来図を総合的に計画しなければならない。構図のない、ビジョンのない都市づくりはあり得ないからである。

2. 市民と市でつくった総合計画

昭和30年に初めて就任したとき、企画本部をつくり、都市の将来構造をはっきりと見定めると公約した。

国・道の計画、市の担当者の構想、住民の声を積み重ねて、上から透視して写し出した図面のような計画をつくった。わが市の街づくりの基本となる「帯広市総合計画」(S34策定)である。当時、予算の単年度主義から、市町村は計画を持つべきではないという国の指導もあって、地方都市の計画も非常に少なく、このような策定例が全くなかった。

3. 近代的田園都市構想

実施してきた総合調査及び総合計画策定の作業段階において、これらの内容を良く眺めたうえで、私は、私たちの街を「近代的田園都市帯広」と命名した。これを一言にして言うと、豊かな未来を持つ十勝畑作農業を背景に、この安定成長をはかる近代的機能を集めた中核体である都市、十勝の美しい田園的風調を活かし、近代的な生活環境を持つ「帯広」を考えたのである。

わが帯広の市街地は、明治20年代の後半、十勝地方の官営による拓殖が始められたのとはほぼ同時に街づくりが行なわれた。最初から、十勝開拓民の行政を含むサービス給付の基地として造成されてきた街であった。しかも三方を山岳、一方を海に囲まれ、遅くまで交通条件に恵まれなかった地域だけに、帯広とその経済圏としての十勝地域は、極めて密接な関連を持ち続けてきた。このため、帯広は、十勝全体の中心都市として発展し、十勝農村とともに成長してきた典型的な都鄙共同体(ラーバン・コミュニティ)といえよう。広義のアグリ・ビジネスを中心に、十勝農村と一体的に発展すべき帯広市の姿が考えられたのである。帯広市は、より充実したサービス・文化都市として発展し得る特性を備えている。あわせて、住み易い、楽しい都市環境を造り上げる宿命を持っていると考えたのである。

第3節 住民生活を安定させる経済活動の強化 (略)

第4節 生活環境の向上と福祉行政の推進

6 望ましい都市規模

わが国では、人口の多い都市が上位の都市であるという間違った考え方がある。人口の多少は、街の優劣に何んの関係もないと思う。その街が、非常に均整の取れた、行政のゆき届いた都市であれば、人口にかかわらず立派な都市なのである。であるから、都市の自立できる限界について、それぞれ見方の相違はあると思うが、私は、わが市の人口は、およそ20万人から25万人程度が理想だとおさえている。

第5節 青少年の健全育成と後継者の定着

4. むすびにかえて

私は、最初に立候補したときから、こんなビジョンを持っていた。空気が澄んでいるこの街を、きれいな緑の並木の街にすべきである。

しかし、都市づくりは、われわれの子孫のことを考えながら推進さるべきものであろうから、こうした物理的建設のみに終始すべきではないと思うのである。

「老人と子供」を忘れての街づくりはあり得ないし、言葉をかえれば「伝統と近代化」「歴史と未来」を基本としない地方都市の開発施策はあり得ないと考える次第である。

吉村 博

1971年(S46)3月帯広市第二期総合計画が市議会で承認された。「帯広の森」が計画決定されたことから、延べ30回にわたる市民討議が開催され「帯広の森」に話題が集中し、11月の市議会で「帯広の森」は計画決定された。1975年(S50)6月に第1回市民植樹祭が開催された。其の後の経緯については「帯広の森」記念誌(20,30,40年誌)に記録が残されている。今回50年誌に3冊がデータとして収録されている。

グリーンインフラ

宇宙に地球が誕生して46億年といわれている。人類が地球に誕生したのは30万年前といわれている。日本では縄文時代は15,000年前から2,300年前の間といわれている。弥生時代はその後1,700年前まで続いている。

現生人類（ホモサピエンス）は火を持つという第1次生活革命を経て地球上の生命体の支配者としての道を歩み始めた。現生人類は森林から草原へと生活の場を移していった。文明としては古代四大文明（メソポタミア・エジプト・インダス・中国）の発生と衰退を経た。四大文明の衰退は、生態系の錯乱・社会システムの機能不全・モラルの退廃が大きな原因とされている。生態系の錯乱として想像されるのは、人が増えることによってエネルギー源と船を造るために樹木の伐採が生態系の錯乱を招いたのではないかと思われる。1765年に英国のワットが蒸気機関を発明し、第2次生活革命が起こり、地球上の覇者としての存在となった。

第2次生活革命以来、現在まで、高々250年間の時間量である。私の人生（78歳）で照らしてみれば、60年前には東京まで汽車と連絡船で24時間かかっていた。140年前、依田勉三は東京から帯広まで4か月以上かけていた。今は1時間30分で帯広から東京まで移動ができる。現在は、朝起きてテレビをつけると世界中の出来事が放送されている。ITの発達はバーチャルリアリティの世界を日常の世界に写し出すようになった。

この知性を持つ人類が、地球上の覇者として君臨しているかのようである。私たちはこの限られた地球上の生態系の一つでしかない。この十数年地球の温暖化が叫ばれている。しかしながら、投機的資本主義の過度な発達は、様々な矛盾を生み出している。費用対効果を追求する現状では、効果が見えない、もしくは効果が上がらないものは切り捨てられる可能性が高い。

ヨーロッパの列強が世界の覇権を争っていた時代に、日本は鎖国を国是とした江戸幕府統治下で270年間、対外的にも対内的にも平和な時代を送っていた。衣食住は当然すべて国内での生産であった。江戸初期の蝦夷地（松前を除く）を除く人口は2,500万人くらいであり江戸末期で3,000万人くらいであった。エネルギー源は、樹木である。これから生産される薪炭が、日本人の生活を支えていた。森を守り再生産するために、地域の文化が年月を経て熟成していく。文化とは地域の風土がつくる衣食住であり、遊びが日常生活の中で滑油的に深化し広がっていく。

ここに現在に至る日本の精神風土が培われてきた。エネルギー源の樹木は日常的に歩ける範囲の

中にある里山の存在が大事にされてきた。里山は地域住民の財産であり、地域で大事に育て、薪炭材の原料と水を供給すべく知恵と知識を里人は熟成してきた。

1868年明治維新によって、西洋文明が日本にも一気に押し寄せ、混乱を起こしながらも、西洋列強と肩を並べる国へとようになっていく。

1945年大東亜戦争の敗北によって、日本は議会制民主主義国家として新たな歩みを始める。経済的には原材料を輸入して製品を輸出する工業化の国として成長し、人口も短期間に増大していく。この現象は効率性を求め、都市化の波が日本全国に押し寄せていく。都市のスプロールと都市公害の発生である。

日本の現代を駆け足で振り返らなければ、次の50年をイメージすることが出来ない。

帯広市においても1945年（S20）には7万人だった人口が1960年（S35）には10万人を超え、現在は16万人の都市となり近隣町村と合わせ、20万人規模の街となってきた。吉村は§2で述べたように急激な人口増への危機感を強めていた。近代的田園都市を夢見、形にするならば、帯広は20万都市を想定し、街のスプロール化を物理的に止めるためにも自分の原風景である森を創る。市街化区域を河川と森で囲い込むという強い意志を持ち、「帯広の森」を政策として展開していった。

ここ数年 日常生活に見える現象として、地球温暖化の危機意識がSDGsに形を変えて、叫ばれている。地域に住む私たちにできることはたくさんあるが、身近に見えることとして、「帯広の森」がある。グリーンインフラという概念が私たちの「帯広の森」創りの道を示している。石川幹子とその著書で示している。

[グリーンインフラ]

地球環境の持続的維持に向けて

石川幹子著 中央大学出版部 2020年7月 発行
より引用する。

第9章 第3節 グリーンインフラの定義

以上、本書は、随所に存在する自然環境（山・川・海・湖沼等）が、社会的共通資本、すなわち、グリーンインフラとなりうる要件を分析し、社会が共有しうる視座を明らかにすることにより、今後の展開について考

察を行ってきた。結果として、優れた事例に共通する要件は、それぞれの時代の社会的要請を踏まえた明確な目的の存在、長期的ヴィジョンに裏打ちされた戦略的計画の構築、それを実現していくための法・施策・技術・社会的取り組みにあった。以上を踏まえて、本書では、グリーンインフラを次のように定義する。

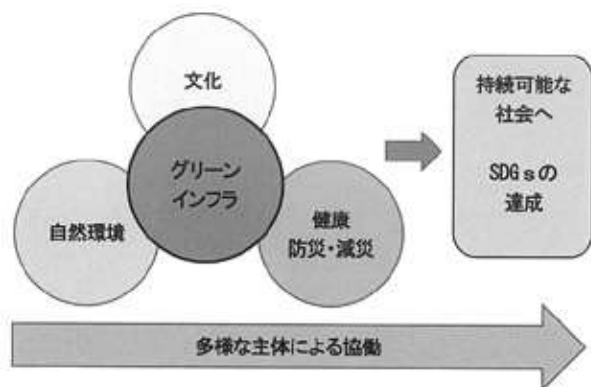
「グリーンインフラとは、自然環境を生かし、地域固有の歴史・文化、生物多様性を踏まえ、地球環境の持続的維持と安全・安心な暮らし、人々の命の尊厳を守るために、戦略的計画に基づき、構築される社会的共通資本である。」

原則1 グリーンインフラは、人と自然の共生を究極の目的とし、地球環境の持続的維持を支えるものである。

原則2 グリーンインフラは、コミュニティから都市、広域圏までつながりを有し、ネットワーク構造を有することにより、その真価を発揮することが出来る。このためには、技術、法、政策、財源、マネジメントの裏付けされた「戦略的計画論」の構築が必須である。

原則3 グリーンインフラは、優れて、それぞれの地域固有の形態を表出するものであり、生態系に回廊を形づくり、水循環を支え、安全で安心な暮らしの場を提供し、人と自然が生み出す文化的景観を形成するものである。

原則4 それ故に、グリーンインフラは、所与のものとして存在するものではなく、地域の暮らす人々の協働と不断の努力により動的に変化していくものであり、持続可能な社会に向けて将来世代へと手渡していく必要がある。



グリーンインフラの構図

石川 幹子

経済学者の宇沢弘文は、石川幹子の紹介を「経済学と人間の心」東洋経済新報社 2003 年 6 月刊で次のように紹介している。

第9章 緑地という都市環境をどう創るか

二〇〇一年一月、岩波書店から刊行された石川幹子さんの『都市と緑地 新しい都市環境の創造に向けて』は、二十一世紀の夜明けを象徴する書物である。美しく、ゆたかで、文化的環境の基礎となる、都市における緑地について、その創出と持続的維持という課題を取り上げる。緑地を社会的共通資本として理解することの重要性を、十九世紀中葉以降の近代都市形成のプロセスを通じて明らかにすることを目標として、新しい世紀における文明の担い手としての都市のあり方について、創造的、かつ説得的に論じた書物である。

宇沢弘文は「二十世紀を超えて」 岩波書店 1993 年刊で、社会的制度資本について次のように語っている。

新しい体制理念を求めて

市民的自由が最大限に保証され、人間的尊厳と職業的倫理が守られ、かつ調和的な経済発展が表現されるような経済制度は果たして存在するのであろうか。このような経済制度に対して、制度主義という概念がもっとも的確に、その基本的性格を表しているように思われる。

制度主義と社会的共通資本

社会的共通資本は普通三つのカテゴリーに分類される。

自然資本 森林、河川、土壌、海浜、湖沼、湿地帯、海洋、大気などである。そこに生存する様々な生物等。

社会資本 堤防、道路、港湾、鉄道、電力、ガス等の供給施設、上下水道、文化的施設等。

制度資本 教育、医療制度、司法、行政制度、警察、消防、市場、金融制度等。

また、私的資本とは、個々の個別的な経済主体に分属され、各経済主体が自由に、その使用ないしは交換を決定し、市場を通じて交換される。

社会的共通資本は、一国を構成する自然的、空間的環境を規定し、人々が様々な人間的活動を営む場を設定していると考えてよい。

以上

「公園」とは、社会的共通資本の自然資本、社会

資本、制度資本を一つの日常の中で形にしたものである。ここに私的資本がいかなる形で支えているのかが問われている。

一つの考え方として、日本経済新聞(2024.10.27版)で独ボン大学の哲学者であるマルクス・ガブリエル教授がインタビューで次のように述べている。

いま危機感を抱くのは資本主義を攻撃する風潮だ。欧米では貧富の格差や気候変動を招いた原因を資本主義にみる一方、共産主義や別の経済システムを模索する動きがある。「だが封建主義を否定した資本主義こそが人々に自由をもたらした。その自由が創造性や生産性を生み出したはずだ」と評価する。「現代の資本主義には『倫理』が欠けている。必要なのは利潤を求めながらも人々の欲望を排除し、相互扶助を徹底する考え方だ。そうでなければ自由や民主主義が衰退しかねない」と述べている。

「帯広の森」は吉村博が帯広市の街づくり戦略を立て日常的に見えるものとしての象徴とした。その後51年間、田本憲吾、高橋幹夫、砂川敏文、米沢則寿の歴代市長は、その街づくり戦略から大きく逸脱することなく、政策展開を継続している。

「帯広の森」熟成への旅路

1973年「帯広の森」が市議会で決定されてから52年経ち、市民と行政とが一体となって歩んできた。素材の仕込みが終わった。これからの50年間で熟成の時間となる。それを味わうことが出来るのは、1884年晩成社が初めて帯広の大地に鋤を入れてから190年目の2075年である。

どのような世界が見えるのだろうか。日本の街が創られたのは、2000年前くらいと云われている。現在日本の街の原形は1603年江戸幕府が拓かれ、日本全国に幕藩体制が出来上がり、その後420年の時間をかけて、今の街が出来ている。お城があり、神社仏閣があり、武家屋敷と庶民の街並みが、生活の営みの場となった。神社仏閣の広場は、住む人々の日常と非日常の交わる場となった。その全体が住む人々の原風景として、記憶されていった。

江戸時代のない十勝に住む人々の原風景は何だろう。遠景は三方を囲む山々であり、段丘平野の

丘であろうと思う。中景は樹々がもたらす色と雪である。近景は畑と防風林であり、庭であり、街並みの街路樹が風景を形づくっている。亜寒帯にある帯広の特徴は、四季折々の色と香りである。この日常を通して見える原風景を求めたいと思う。

地球が他の星と違うところは、有機物体としての生物が存在している事である。ここでいう生物とは、広辞苑によると、「生物とは栄養代謝・運動・成長・増殖など、いわゆる生活現象を表すものである。さらに植物とは草木など、根が生えて固定的な生活をしている生物をいい、動物とは運動と感覚の機能を持つ生物群を云う」とある。

動物は五感（視・聴・嗅・味・触）を持つ。人類は五感を更に磨き上げ、論理的思考を積み重ねてきた。地球上の生物の歴史の中で最後に登場した人類の原風景は森林と草原である。科学が急速に発達している今、我々に問われているのは、人類の原風景である森林・草原と文明との調和である。この調和を語るのが哲学であり、宗教であったりするのではないだろうか。

人類は火を手に入れることによって、草原で植物を保存することを学び、土器を作り、調理することを身に付けていった。人類として生きることの衣食住の原形がゆっくりと時間をかけて熟成していった。

人類が地球の自然に抱かれていた時代である。

北海道が蝦夷と称されていた時代は、松前を中心としたわずかな地域に和人が住んでいた。蝦夷地の全てに先住民族のアイヌ民族とギリヤーク民族が住んでいた。狩猟採集を生業とし、文字を持たない口承文化を持ち、蝦夷の大地に抱かれた生活を送っていた。江戸末期に十勝を江戸幕府から預けられた一橋家が十勝を調査した資料によると、十勝地域の住むアイヌ民族は川沿いに約750戸のアイヌ民族が生活していると調査されている。4,000人くらいであろうか。約3,000km²の段丘平野部で自然と共に生きる人類の数である。

しかし明治政府の開拓政策、同和政策により固有の慣習や文化の多くが失われ、人口も激減した。多分自然と共に生きるアイヌ民族は戦いを好まない、平和な民族であったのではないかと思われ、文化が文明を凌駕していたのである。

今「帯広の森」を思う時、アイヌ民族の生き方に思いを寄せることも大事な視線である。

前節で宇沢弘文の社会的共通資本の考え方を紹介したが、これからの「帯広の森」熟成にとっての指針となる。

自然資本は亜寒帯にある帯広十勝の気候風土であり、社会資本は十勝の畑作酪畜である。制度資本は帯広市の行政施策そのものである。日常の中で見えることができるのが十勝帯広である。1959年吉村の帯広市総合計画は、十勝の地政学的位置と亜寒帯を踏まえて策定された計画である。其の後幾度か見直しと国の施策による新項目が追加されてきているが、街づくりの基本的な戦略目標に大きな変更はない。

これからの課題としては、現在「帯広の森」に来る市民の多くは、運動施設のイベントとかトレーニングで来る人が多いと感じられる。しかしながら「帯広の森」に市民の常連の人も増えてきていると思われる。森の小道を散歩する人、冬は歩くスキーを楽しむ人、学校教育の一環としてバスで来る子供たち、はぐくむが主催する楽しい学習会等、ゆっくりと効果が上がってきている。これらは森の成長とともに増大することは間違いない。そのためのインフラ設備として

- ①熱中症、低体温症対策としての水洗トイレを併設した避難施設の点在設置。
- ②山火事対策としての水辺空間
- ③栄通りによって「帯広の森」が分断されている印象が強いので、森の交流館あたりの段丘に人道橋を設置し、帯広の森との一体化を計る
- ④弱者対策として園路のカートなどの設置
- ⑤市内から「帯広の森」へのバスなどの交通手段
- ⑥事故発生時の場所の確認できる地番表示
- ⑦牧野案（最初の案）では広い幹線路を創り、道の両端に駐車帯を設けるとあったが、時代の中で「帯広の森」に設置する駐車場の問題も整理する必要がある
- ⑧「帯広の森」は都市公園であるので手を入れる区域、自然のままにする区域などの50年後をにらんだ利活用計画の検討
- ⑨これらの財源の永久的確保の検討

まだ課題はたくさんあると思うが、市民と行政との長年培われた信頼関係があれば、一步ずつ歩を進めていけると信じている。

その先にあるのは十勝住民の平和な生活ではないだろうか。地球温暖化とはいえ、十勝地域は亜寒帯にある。吉村博はわが地域の伝統といえるものが欲しいと「風雪有情」（1974年刊 吉村博）の中で書いているが、時代が目まぐるしく展開している中で、おばあちゃんからおふくろさんへ、そして自分たちの世代に語り継がれている事とか、晩秋の風物詩である漬物などの家庭の味等が薄れてきている中にあって十勝独自の伝統とは何だろうか？次代の諸君に託すことで済むことではない。と思いつつも思考能力の衰えと、五感の衰えはいかんともしがたい現実であることを、認識しつつ次代の市民に託すことを考えていきたい。

「帯広の森」は伝統を生み出すフィールドとしては最高の舞台なのだから。



第1章 いとなみの記録

「帯広のみなさんは、地元にあるものを大事になさらない」

このショッキングな一言は、日本各地の都市公園の設計に造詣が深い中央大学の石川幹子先生が帯広市民に向けて投げかけたものだ。令和6年9月29日に開催された帯広の森50周年記念シンポジウム。会場は凍りついた…と思いきや、苦笑いに包まれた。わたしも含め、図星だと感じた人が少なからず居たのである。

石川先生が指摘した「地元にあるもの」とは「歴史」のことではないだろうか。わたしは思った。帯広の歴史というと、多くの人は開拓史や農業史、アイヌの人々の伝統的な生活のことなどを連想するだろう。これらが帯広の歴史のメインストーリーだということは、帯広が北海道十勝地方にあるという立地からして違和感はない。ただ、歴史とはそれだけではない。スケールの大きなことだけが歴史ではないのだ。あなたの祖父母の顔のしわを思い出してほしい。森の切り株の断面からなにを読み取れるのかを思い出してみしてほしい。ここでいう歴史とは、名もなき人、華美ではない景観、さほどめずらしくない生きものたちに見られる「いとなみの記録」のことである。

「いとなみの記録」は古くから日本各地で大切にされてきた。たとえば、城跡など古い建築物の跡地に見られる「礎（いしずえ）」がわかりやすい。秋田県の千秋公園（久保田城跡）にはかつて長坂門という門があった。公園として整備された現在では門は見られないが、門の柱を地中で支えていた直径1mほどの礎石の中心が4つ、当時の位置に残されていて、門がかつてどの位置に建っていたのか教えてくれている。だが、礎石が現存していることの価値はそれだけではない。礎石の中心には四角の穴が穿っており、ここに当時の角柱が差し込まれていたことが分かる。礎石のとなりに立つと、当時の大工たちが力をあわせて「ここに」巨大な角柱を挿したのだということ、当時の設計者が計算を重ね、決定した柱の大きさと深さが「これ」だったということ

が実感できるのだ。そして何より、こうしたことを後世の人々に感じ取ってもらおうと、城跡を公園として整備する際にわざわざ礎石をここに残す決定を下した人がいるということが分かるのである。これが、こうしたいとなみが、歴史でなくて何なのだと思う。

千秋公園は毎年、大勢の人々が訪れる観光名所の1つであるが、そのお目当ては決して長坂門の礎石ではない。園内の美しい日本庭園と秋田藩主・佐竹氏の資料館に対して、長坂門の礎石は公園内に点在する小さな史跡のうちの一つに過ぎず、大勢の人々を惹きつける要素ではないのである。それでも、礎石が丁寧に手入れされ解説板までつけられているのは、柱を設計し、建築した当時の人々の「いとなみの記録」の価値が人々に認められ、大切にされている証拠である。長坂門の礎石は、わざわざ口に出すほどでもない小さな小さな、しかし市民にとっての「誇り」なのである。造成から50年経った帯広の森でも、こうした愛すべき「いとなみの記録」を随所に見ることができる。

わたしが寄稿させていただくこの文章では、帯広の森の「いとなみの記録」をいくつか紹介したい。いずれも、それこそ森の切り株のようにさりげなく存在していて、ほとんどの人は気づかずに通り過ぎていく。どれも別に人に見られることを意識していない、さりげない存在なので、気づかないのが普通なのだ。しかし、有形無形の「いとなみの記録」は長坂門の礎石のように、誰かが誰かのために行動した証であることに間違いはない。ひとつひとつに体温がこもっている帯広の森の「いとなみの記録」を紹介することで、この森が世界に誇れる物語をいくつも持っていること、そしてその価値を、すこしでも説明できていれば幸いである。

「帯広の森はぐくーむ」裏手のカラマツ並木

帯広の森はぐくーむ（帯広市南町9線49-1）の正面駐車場で車を降りると、まずその静けさに驚く。直前まで走っていた道道1084線の車の音はほとんど聞こえず、駐車場をかこむ木々がはぐくーむの一带を街の喧騒から切りとる結界となっていることが

よく分かる。体は勝手に背伸びをし、息を深く吸い込む。自分が森の中に入ったのだという実感につつまれる。



駐車場の正面にあるはぐく一むを見ると、その屋根の向こう側にカラマツの並木が頭を出しているのが見える。カラマツたちは東西方向に列をなしていて、とにかく大きい。森の木々がまっすぐ列をなして生えるということはあまりないので、このカラマツたちは列をなしているという特徴そのものから、人が植えたものだということが分かる。さらにその20mをゆうに越す背の高さからカラマツたちは古くからこの場所にあったことが分かる。帯広の森ははぐく一むの周囲を含め、その大部分がかつて農地だった。このカラマツたちは、農地沿いに植えられたかつての防風林なのだ。

農地だった土地が帯広市に買い上げられ、多くの植樹祭や森づくり活動を経て、大きく成長してきた帯広の森。カラマツたちは森の主要施設であるはぐく一むの裏手にあり続けることで、森が森になる前の面影を静かに残しているのである。近年、はぐく一むには多くの親子が車やバスでやってきて、森を体験し、学んでいく。その裏手にカラマツがあることで、この森のルーツが分かる。人の手で農地が森に戻されたというオリジナリティが分かる。農地を森に戻す計画を立てる中で、先人たちはカラマツたちを切らずにわざと残したのだ。

もしカラマツに心があったとしたら、なにを思うだろうか。かつて自分が根ざしていた農地は、買い取られた直後に管理の手を離れ草地になった。そのうち子どもや大人が植樹祭のために、毎年のように大勢集まって木を植えるようになった。苗木たちは

カラマツの足元で大きくなり、いつしか木陰をつくり始め、やがて日陰を好む山野草が顔を出した。クルミやマツが大きくなって実をつけ始めると、こんどはエゾリスたちがやってきて、カラマツにも登るようになった。最近では、市内の全中学校の生徒たちがバスに乗ってやって来るようになり、カラマツの足元がにぎやかになることが増えた。長い年月を経て森の成長を見守ってきたカラマツはいま、何を思っているのだろうか。

園 路

はぐく一むの裏手から森を北方向へ進むと、木漏れ日が気持ちいい明るい森へと入っていく。キツキのなかま、アカゲラがケツケツと鳴きながら木に止まり、木を叩く音が心地よく響く。園路の遠くからランニング中のおじさんがやってきて、すれ違いざまにこんにちは、とあいさつしてくださる。週末の朝にこの道を歩くと、仕事や人間関係のことなどすっかり忘れ、森の中の穏やかな時間を味わうことができる。

そのまま北へと進むと、丸太で縁取りされた園路にさしかかる。丸太の中には相当に苔むしたものや、朽ちて崩れ始めているものがあり、相応の年数が経っていることが分かる。ふつう都市公園で園路の一部が異常をきたしていると、すぐに公園管理者に連絡が飛び、修繕するよう要請される。しかし、ここではそうではない。苔むしたり、朽ちている状態がふつうなのだ。だって森なんだからと、みんなが無意識に認めているのである。



縁取りに用いられている木は間伐材。つまり森の木々が健康に大きく育つようにするために、間引きされた木々である。森の成長のために除去された

木々たちが、こうしてさりげない装飾として活用されている。苔むしたり朽ちたりしている姿は、ここへ訪れた人々に森の時間が静かに動いていることを伝えている。見方を変えると、こうした目的を持って間伐材をここに並べた人間が過去に居た、ということが分かるのである。

さらに北へ進むと、何度か園路の分岐にさしかかる。先ほどのランニングのおじさんが通ったであろうなだらかな砂地の道と、ササがぼうぼうに茂っていてとても野趣に富んだ、けもの道かなと思える道が森の奥へと続いている。おそらく、この分岐へ訪れる人々のうち10人中9人が砂地の道を進むと思うのだが、わたしは何度か野趣に富む道を進んだことがある。この道はさらにその先で分岐していて、やがて車道へ繋がる道と、緩やかに道の体をなくして森に溶け込んでいく道がある。多くの人間は森に溶けていく道をあまり歩きたがらないかもしれないが野生動物はよく通っているようで、わたしはこの道でなんだかキタキツネと鉢合わせしたことがある。ある時は出会い頭にびっくりして、両者が同時に飛び上がったこともあった。

ともあれ帯広の森は「都市公園」だから園路が整備されているが、「森」でもあるため、人が主体の環境と自然が主体の環境との境界が曖昧になっている箇所があり、そのことが許されている。公園などの公共地につくられた道は、整備されているものとはともかく、整備が行き届いていないものは立入禁止になっているのが一般的だ。しかし帯広の森では取り立てて危険ではない道でさえも、こうしてアクセス可能になっていて、人の世界と自然の世界の移り変わりをグラデーションで見せてくれている。

森づくりの本質

「倒すぞー！」と大きな声が響き、森の中に緊張が走る。ここなら安全かなと思える位置から、念のためさらに距離をとって、わたしは声の主の方を向いた。チェーンソーのエンジンがかかり、途切れのない轟音があたりに響き始める。エンジンの回転数が最高潮に達すると、木の幹にブレードがそっと当てられ、食い込んでいく。その様子をじっと見続けていると、やがて仕掛け絵本のように少しずつ木が空間の中で浮かび上がり、次の瞬間にはメキメキメキパキパキパドシーーン！！と一気に倒れた。ブーーン、トトト・・・とチェーンソーのエン

ジンが止まる。わたしのほかに伐倒の様子を見ていたみんなはその場でじっとしたまま、伐倒の余韻を噛み締めている。木が倒れたときの強烈な地響きと、その直後に訪れた静寂のコントラストを、わたしは一生忘れないと思う。やがてみんなゆっくりと動きはじめ木に近づいていくと、折りたたんでいた手ノコをパキリと開き、木を運び出すために枝払いをはじめた。



わたしは2012年ごろから、いくつかの森づくり活動団体の活動に参加する機会に恵まれた。先述のシーンは、森づくり活動団体のひとつ、エゾリスの会のみなさんによる間伐作業的一幕である。当時、帯広畜産大学の学生だったわたしは、野生動物の研究に取り組んでいた一方で、自身の自然体験の乏しさに焦りや物足りなさを感じていた。そんな頃に出会ったのがエゾリスの会のみなさんだった。

森づくり活動というと植林のイメージが強いと思うがそれだけではない。エゾリスの会で教わった森づくり活動とは、森が森として育っていくのを「手助けする」という姿勢だった。たとえば、生長するために強い日光を必要とする木のために、日光を遮っている別の木を間伐して光の条件を改善するという作業が良い例だ。このほか、雨水が溜まる巨大な水たまりをエゾアカガエルやエゾサンショウウオの繁殖池として安定したものにするために、水が溜まりやすくなるよう底の形を整える作業がある。これも森づくり活動に含まれる。森づくり活動ではまず前提として自然状態、言い換えれば人が手をつける前からすでに生じている自然のいとなみを見つけ（強い日光を必要とする木の子どもが生えている、水たまりができてカエルが産卵しにきているなど）、

理解することが重要だ。そしてそのいとなみのスピードが早くなるように、あるいはより安定するように手を加える作業が森づくり活動なのである。人が手取り足取り甲斐甲斐しく森を育てる、というのではなく「森は勝手に育つものであり、人間は森が自分で大きくなっていくのをアシストするだけ」という立場をとるのである。この森づくり活動の考え方を知ること、わたしはこれまで「自然との共生」とか「自然を大切にする」という言葉の意味をきちんと理解できていなかったと痛感した。森づくり活動の姿勢は森の主体性、つまり文字通り「自ずから然る」ものを尊重するというものだったのだ。エゾリスの会の方々には間伐作業のほか、エゾリスの個体数カウント、環境省から受託しているモニタリングサイト1000の調査（鳥類相、植物相、チョウ類、カエルの卵塊数など）などの活動を1年中実施されており、この活動を何年も続けておられる。わたしはエゾリスの会に関わらせてもらう中で、実物の自然に触れる機会に恵まれ「自然を大切にすること」の本質に近いものを学ばせてもらった。その活動が今もなお続いていることには、心から尊敬するという以外に言葉がない。

森と持ちつ持たれつ

半袖に薄手の上着が心地よい初夏。自分の背丈よりもわずかに高い、細い木の横に立った。木の姿勢がどちらに傾いているのかを見て、周囲の木との位置関係を確認し、カチリと折りたたみ式のノコギリを伸ばす。帯広畜産大学内に立ち上げたサークル「森づくりサークル もりとも！」の後輩たちが見ている中、やや緊張しながら、この木を倒したときにどの方向へ向かうのかをもう一度イメージし、そのあたりまで下がってねと安全な位置を示す。一本の木を倒す、ということに対する緊張感と責任感とは裏腹に、直径10cm程度の細い木はものの3分ほどであっけなく切り倒されてしまった。帯広の本来の自然のすがたに近い森を作ることを目指している帯広の森では、この木、北アメリカ原産の外来種ニセアカシアは、罪はなくとも厄介者なのである。

後輩たちにノコギリの安全な扱い方をレクチャーし、そのまま切り倒した木の枝払いをしてもらう。幹だけの姿になった木をさらに3分割したら、森づくりサークルのみんなで2人1組になって運び出す。下草が茂った林の中、ただ一生懸命丸太を運んでい

るだけなのに、サークルのメンバーたちはふうふう言いながら、なぜかニヤニヤしている。森づくり活動には、こういうところがある。



森づくりサークルもりとも！はエゾリスの会同様森づくり活動団体として帯広市に登録していて、地図上でここからここまでをわたしたちが森づくりしますと申請してある。その範囲の中には、背丈3mほどの木々に囲われた5m四方程度の小さな広場があり、丸太はひとまずそこまで運んだ。丸太を運び込んで適当に並べるだけで、これまで原野にしか見えなかった広場に人の気配が強くなった。小学生たちがつくる秘密基地にすら遠く及ばないレベルではあるが、原野が「サークルの拠点」になった瞬間であり、森づくりサークルが居ることを森にすこしだけ許されたような気持ちになった。このときから、森づくりサークルもりとも！は帯広の森での活動をはじめ、もりとも！（森と持ちつ持たれつ！の略）を体現する活動を目指して歩みを進めることになった。

のびのび

ももこの幼児用ツナギを着たわが娘を抱っこして、駐車場から森の中へ続くけもの道を歩いていく。森の静けさがあたりをつつみ、娘はわたしの腕にしがみついている。雰囲気からしてきょうは参加人数が少ないのかな、と少し不安になりながら歩いていくと、次第に小さな子どもたちがきゃー！と楽しそうに騒ぐ声が聴こえてきた。

しいたけのホダ木が見えたと思うと細道は小さな広場につながった。レジャーシートに座ってじっとこちらを見ている赤ちゃんがいる。ぴよんぴよん飛び跳ねて、届きそうで届かない頭上の折れ枝

に手を伸ばす小学生たちがいる。子どもたちからやや離れた丸太に腰掛けて、談笑しているお母さんたちがいる。黙々と枝をどけたり並べたりして、園路を手づくりしているお父さんたちがいる。手慣れた様子で、どこか誇らしげにロケットストーブの準備をしているおじいさんがいる。誰もが思い思いの時間を過ごしている不思議な空間。ここは森づくり活動団体のひとつ、認定 NPO 法人おれいおん・とかち（以下、おれいおんと表記）のみなさんが管理している一角だ。



おれいおんは、子育てに取り組むさまざまな世代のつながりをうながし、子育て親育ちができる環境づくりに取り組んでいる団体で、前身の「十勝おこ劇場」から数えて 50 年以上の活動歴をもつ。近年「森のようちえん」に代表されるように、小さな子どもたちが自然豊かな環境で時間を過ごすことの重要性が見直されてきている。子どもたちが自然体験に恵まれるということは、運動能力や免疫力のほか、注意力や社会性、探究心など成績表の評点では表すことがむずかしい能力：非認知能力を高めることが科学的に分かってきたのである。おれいおんのみなさんはこれまでも川遊びや野山の散策など自然体験の機会を積極的につくってきたが、子育てに関わるみんながじっくりと自然に向き合えるようにと、森の中に定点を持つこととなった。それがこの活動地なのである。

この場の雰囲気を表すには「のびのび」という言葉がぴったりだ。親子でずっと家の中にいると、親が「あれをしなさい」「それはやめなさい」と子どもの行動を制限し、逆に子が親に対して「あれをして」「こっちみて」と求めることで、お互いに悪気はなくとも相手の時間の使いかたを決めてしまいがちであ

る。その真逆にあるのが「のびのび」の状態だ。この活動地にいる子どもたちは、一言でいうと「放牧」されている。この広場にいる子どもたちは自分の好奇心のおもむくままに、自分が触れたいものに触れ、集めたいものを集め、自分がいま居る世界のことを好きなだけ確かめることができる。一見危なっかしく思えるかもしれないが、この空間には大人たちが何人もいて、誰かの視界に常に子どもたちが入っているという「見守り合い」という状態が生まれている。たとえば、ある子どもが枝を拾って振り回しほかの子どもに当たりそうになったとき、親ではない大人がゆっくりと近づいて行って、枝を振り回すことの何が危険いかを子どもと一緒に考え、枝を降ろしてもらう。こうした「見守り合い」のおかげで、子どもたちも、そして親たちでさえ、家にいるよりもずっと「のびのび」することができるのである。

「のびのび」の状態は本当に尊い。この活動地では誰も「やらねば」「やるべき」という気持ちで動いておらず、子どもたちが親たちに「やりましょう」「やりなさい」と促されることもない。ただ「やりたい」と思ったことをやって、それぞれが森での時間を思い思いに過ごしているのである。

もちろん、おれいおんも森づくり活動団体のひとつなので、この活動地に集まるときは森づくり活動が予定されていることがほとんどだ。とはいえ、森づくり活動でさえもあくまで「やりたい」人がやることであり、別にやりたくない人はやらなくても良いことになっている。これは他の活動についてもそうで、たとえば未就学児向けに絵の具遊びがセッティングされていることがあっても、子どもたちは参加するかどうかを好奇心のままに選ぶことができる。このように親も子どもやりたいことだけをやることになっている場所で、それでも大人子ども関係なく誰かしらは森づくり活動をしているし、遊んでいるし、「見守り合い」をしている。近年の社会は大人にも子どもにも「忙しい人間」であることを求めがちなつくりになっていて、自分の時間の使い方を自分で決めるという権利、つまり「主体性」がないがしろにされてしまうことが多い。ここではこのかけがえのない「主体性」が大切にされているのだ。

おれいおんのみなさんは森を傷つけることなく、森の変化を遊び場として、長い時間をかけて見届けようとしている。活動当初、この活動地を訪れた当時 5 歳の女の子がいた。彼女はここで時間を過ごす

ことで、かつて森の雪原で野鳥や獣たちの足あとがにぎやかに混ざり合っているようすを見つけ、そこに自分の小さな足あとが加わって嬉しくなったことを思い出したようだ。この森の広場は彼女のなかに眠るそんな思い出を呼びさまし、自然と人が一体になれる森への憧れを込めて、この活動地には「あしあとの森」という名がつけられた。2018年にはじまった「あしあとの森」の活動。帯広の森でも比較的新しいこのいとなみは、森がこれからも私たちとともにあり続ける未来に対して、とても温かな光を当ててくれているように感じる。

以上が、2014年から2024年までの10年間、毎日ではなくとも月に1回は帯広の森に通い続けてきたひとりの人間が見つけてきた、帯広の森の「いとなみの記録」だ。これらはわたしの記憶に基づいた内容だが、実はこれまでにこの本のような記念誌、各活動団体のWebページ、地元新聞の記事など、何らかの形ですでに世間に紹介されてきたものでもある。ただ、冒頭で紹介した長坂門の礎石のように現地に解説板がついて紹介されているわけではないので、多くの人が現地で気づくことができず、たとえ話として見聞きする機会があったとしても、時間の経過とともに忘れていく形になっている。「市民協働の森づくり」を謳ってきた帯広の森の価値を語るとき、400haという広大な面積や畑を買いあげて森に戻したという画期的なストーリーが注目されることが普通である。これらも間違いなく帯広の森の価値だと思うが、こうしたスケールの大きなものばかりではなく、森に息づく小さなスケールの「いとなみの記録」もまた、帯広の森を形づくる大切な要素だとわたしは感じている。帯広の森を歩く方々がこうした記録を現地で見ることであれば、長坂門の礎石のように“わざわざ口に出すほどでもない小さな小さな、しかし市民にとっての「誇り」を生むと思う。

わたしはこの文章で紹介してきた「いとなみの記録」たちをもって、帯広の森50年の歴史の半分は「人のいとなみ」なのだということ、そしてこれらは胸を張って日本全国や世界に発信できるほど尊いものであるということを、声を大にして言いたい。言い換えれば、帯広の森は50年経ったことで帯広というまちの、あらたな「地元にあるもの」に成ったということである。

第2章 いとなみが続く森にするために

ご紹介した通り、帯広の森にはじつに多くの人々の、尊い「いとなみ」であふれている。こうしたいとなみが続き、末永く大切にされることを祈って、帯広の森の状況をより良くするためのアイデアをひとつご紹介したい。ひとつ断っておきたいのは、ここで紹介するアイデアは森づくり活動団体のみなさんをはじめ、帯広の森に日常的に関わっておられるみなさんの頭を飛び越えて検討されるべきものではないということだ。「木を見て森を見ず」という言葉があるが、帯広の森に通いつつも現状森づくり活動にすら関わっていないわたしは、人も森も、木すらまともに見ていると胸を張って言うことができない。それでも、多くの人の目に届けておきたい考え方があるので、無礼を承知でこの場をお借りして共有したい。

これまで紹介したエピソードに登場する人々は、何かしらのメリットを帯広の森に感じ、進んで帯広の森に足を踏み入れる人たちばかりだった。しかし、森がもたらすものは良いものばかりではない。森の風下に住んでおられる方々にとっては、帯広の森から飛んでくる大量の落ち葉は毎年秋に悩みのタネになっているだろう。家庭菜園を持っておられる家なら、森からキツネがやってきて困っているかもしれない。帯広市の財政に詳しい方にとっては、帯広の森は管理コストばかりがかかり大してお金を産まないお荷物な公共地と思っているかも知れない。環境保全だ、SDGsだと世間が盛り上がっている一方で、森とともに暮らす街に日常的な負担が課せられていることは事実だと思う。落ち葉のためのゴミ袋、キツネ対策のための資材、公園としての森の運営。負担の解消に少なくないお金がかかっているのが現実である。

森づくり活動についても、未来が明るいかというとは必ずしもそうとは言い切れない。若者の参加は見られるものの全体としては高齢化が進んでいて、いまの規模の森づくり活動を今後も維持できるかどうかは見通しが立たない。手入れが行き届かなくなった森は木が混みはじめて鬱蒼とし、ゴミのポイ捨てをはじめとした犯罪の温床になるリスクすらある。こうした現状への対策について、森づくり活動団体をはじめ多くの方々が議論されてきている。どのような形の議論であっても、根底には人手不足やその

前提として資金が不足しているということは共通の認識になっているとわたしは解釈している。これからは持続可能な形で森の利活用と森づくり活動をセットで行ない、オーバーユースを避けつつ、今よりも森へ向かうお金と人を増やすことが望ましいと言えるだろう。

近年、経済界で大きな動きが生まれつつある。平たく言うと、帯広の森をはじめとする自然が豊かな環境を保全し、活用することがお金を生む仕組みが生まれつつあるのである。第2章では、このウソのようなホントの話の具体的な根拠に基づいて紹介する。いくつか専門用語を交えて紹介せざるを得ないので、煩わしいと思われるかも知れないが各キーワードの説明を読んでどうかついてきてほしい。この解説により、帯広の森が消費的ではなく持続可能な形で利活用され、ひいては尊い「いとなみ」の数々が大切にされる帯広市になることを心から願う。

「生物多様性」について

帯広の森ではランニングをしたり、音楽祭を開催したり、はぐくーむで森づくりについて学ぶなど様々な体験ができる。こうした体験を下支えしているのが、帯広の森がもつ生物多様性だ。

生物多様性とは、生きものたちの「個性」と「つながりの豊かさ」のことだ。一般的には、生きものたちがくらす森や草地などの「生態系の多様性」、エゾリスやスミレなどある場所に生息する生きものの「種の多様性」、赤茶色のエゾリスや焦げ茶色のエゾリスなどある1種の生きものがもつ「遺伝子の多様性」で表される。

生物多様性と帯広の森での体験との関わりは、ランニングする様子を想像すると理解しやすい。たとえば、小学校のグラウンドのトラックをランニングすると、景色があまり代わり映えしないことが想像できると思う。一方で帯広の森でランニングすると、はぐくーむからスタートして木漏れ日が美しい裏手の森へ入り、青空が開けた草原へ出る。森ではエゾリスたちが走り回る様子が見られ、草原では大きな声で歌う野鳥の声があちらこちらから聞こえてくる。このように、私たちが森で感じる「気持ちいい」「気分転換になるな」という気持ちは、帯広の森の生物多様性と密接に関わっている。もし帯広の森がどこまでもうす暗いカラマツの森でカラスの声しか聞こえてこなかったら、気持ちいいとは感じ

ないだろう。

帯広の森をはじめとする都市公園がもつ生物多様性は、近年まちづくりにおいて大変注目されてきている。公園の生物多様性は「気持ちよさ」のほかにもさまざまな力を生み出すからだ。たとえば、木々や草花が多様な公園では、季節ごとの花々が楽しめるだけではなく雨水がたくわえられ、水害を防ぐ効果がある。木々は公園利用者に日除けをつくり、真夏でもスポーツをしたり休息とったりできる。このように社会の課題を解決する自然の力はグリーンインフラと呼ばれている。

グリーンインフラとしての力は生物多様性と深く関わっており、一般的には生物多様性が高いほど強くなる。近年、都市公園の生物多様性を高めたり守ったりする活動が行政や企業の手によって進められてきている。このような観点から、帯広の森を活用するには単なる「木がたくさんある場所」としての森ではなく「生物多様性が高い場所」としての森を維持していくことがとても大切だと言える。

「ネイチャーポジティブ」について

生物多様性は世界中で計測されてきており、残念ながらそのほとんどが人間による開発や資源の大量消費によって減少傾向にあることが知られている。日本についてもその傾向は変わらない。2024年10月のニュースで、スズメですら絶滅危惧種と同じスピードで個体数が減ってきているという話を聞いた方もいるかもしれない。このことを明らかにした環境省による調査結果（第1章で紹介したエゾリスの会も取り組んでおられるモニタリングサイト1000の調査結果）では、スズメ以外にも鳥類の15%、身近なチョウ類の33%の種について、記録された個体数が急速に減ってきていることが明らかにされた。このようすを強引にお寿司で例えると、いままでは寿司桶いっぱいにまぐろやサーモン、えび、いか、たまごなどがそれぞれ五貫ずつ色鮮やかにならんでいたものが、最近ではまぐろやサーモンが三貫になり、えび、いか、たまごについては一貫だけになってしまったんだか寿司桶が寂しくなった、というようなものである。お寿司といえば仲間うちで集まったときのお楽しみの一品だが、このようにお寿司多様性が低下してしまえば、仲間が集まっても場が興ざめしてしまうだろう。

このようなことが本物の自然環境で起きており、

生物多様性の低下によって食料生産が不安定になり、防災が難しくなり、人類の健康すら危ぶまれる事態になるので、生物多様性の低下は仲間うちの集まりが興ざめするどころの話ではないのである。こうした状況を「ネイチャーネガティブ」という。

この真逆の状況を目指して国連が打ち出した方針がネイチャーポジティブ（自然再興）だ。具体的には「2030年までに生物多様性の減少を食い止め、維持するだけでなく、増加させていこう」という内容である。重要なのは、この方針は単なるスローガンではなく2022年12月に開催された生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）や、G7 2030年自然協約において注目されているキーワードであること、そしてなにより世界中の投資家たちが関心を寄せていて、経済界に大きな影響を与え始めているという点である。

経済界の動きは2023年以降活発になってきている。投資家たちは、商品の原料の採集地など企業活動が影響を与えている自然環境について調査し、結果を公表し（TNFD レポート）、その影響を抑え生物多様性を向上させる取り組みを進めている企業に投資する意欲を強めている。投資家たちの注目度合いはめざましく、ネイチャーポジティブについての議論が盛んになっている COP16（生物多様性条約第16回締約国会議、2024年10月21日からコロンビアで開催）に、JP モルガン・チェースやバンク・オブ・アメリカ、ドイツ銀行など世界有数の大手金融機関が参加していることが話題になっている。端的に言うと、生物多様性の保全に取り組む企業は投資を受けやすくなるため、保全に関わることは企業が経営を安定化させるための手段のひとつになった、ということである。こうした「ネイチャーポジティブ経営」は国内でも注目されており、解説書が多く出版されているほか大手企業が参画を進めている。例えば三菱 UFJ ファイナンシャルグループ、東急不動産などが先述の TNFD レポートを公開したほか、十勝管内の企業でもその準備を進めている。

「自然共生サイト」について

生物多様性はともかく、ネイチャーポジティブと帯広の森との接点についてはもう少し丁寧に説明する必要がある。環境省は、ネイチャーポジティブに対する世界的な動きに対応するため、2023年から「自然共生サイト」の登録を進めている。自然共生

サイトとはまさしく帯広の森の森づくり活動などのような「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を指す。自然共生サイトは人の立ち入りを禁止した自然保護区のような場所ではなく、社寺林や遊水地、建物の屋上など、人の立ち入りがありうる多様な環境を指定することを想定している。十勝地方のニッタ株式会社が豊頃町に保有・管理している「十弗の森」や東京都八王子市の長池公園をはじめ、全国の社有林や社寺林、都市公園など235箇所が2024年6月までに登録された。

企業は自社の敷地内にある社有林などを自然共生サイトとして登録する動きを進めているほか、敷地外の自然共生サイトにおける環境保全に協力する機会をうかがっている。環境省は企業と自然共生サイトのマッチングを進めており、環境省は自然共生サイトの保全活動になんらかの支援を行った企業に対して「支援証明書」を発行する制度を準備している。企業は、この「支援証明書」を自社の TNFD レポートに反映させることで「ネイチャーポジティブ経営」が順調であることを投資家たちにアピールすることができるのである。

ここまで紹介したネイチャーポジティブや自然共生サイトの運用についての話は、2024年10月現在、環境省の主導で試行されている事業内容であるため今後変化する可能性があることについては留意されたい。ただし、随所で紹介した通り取り組みは進んでいて、自然共生サイトのマッチングは2023年から試行、2025年から本格運用される予定である。繰り返すようだが、ネイチャーポジティブの動きに対して特筆すべきは経済界、とくに大企業の注目度の高さだ。その源泉にあるのは投資家たちの自然資源に対する危機感であり、生物多様性の保全が世界的な課題としてあらためて認識されてきているということが分かる。

提案：帯広の森を自然共生サイトに

以上の背景をもって、第2章では帯広の森を自然共生サイトへ登録し企業による支援を受ける体制をつくることを提案したい。もちろん、営利を追求企業が森に関わることにについて、危機感を持たれる方もいると思われる。生物多様性の保全についての機運が高まっていなかった時代に、多くの企業が「自ずから然るもの」をないがしろにし、ビオトープと名のつくよくわからない水場をつくったり、遺伝的

多様性を無視して、また子孫を残すのに適した環境が備わっていないにも関わらず本州からホタルを導入したりと、歴史を見れば危機感を煽る出来事がたくさんあったことは事実である。わたし個人としても、第1章で紹介した自然物としての森の、またその森に息づく人々のいとなみが、損なわれることはあってはならないと強く思っている。

自然共生サイトの仕組みの良いところは企業による関わり方が「支援」という形になっていることだ。労働力の提供か、ノウハウの提供か、資金の提供か、どのような支援をお願いするかは帯広の森に関わるわたしたちがその方向性を決めることができる。大切なことは、過去から現在にかけてつづく森のいとなみを損なわない方法で、わたしたちが企業に求める支援の方法を決めることである。

一見難しそうに感じられるかもしれないが、支援の方法を決めるための考えかたはもうすでに森に息づいていると思う。「森づくり」の精神を共有して、自然のダイナミクスを尊重しアシストするという姿勢を大切にすること。「森と持ちつ持たれつ」の精神で森を活用し、その分お返しをすること。「のびのび」の精神で森に関わる人、企業の方たちでさえ、気持ちよく活動できる状況をつくること。この3つの精神を帯広の多くの人々に発信し、実現するために必要なモノやお金、そして新たな仲間を企業のみなさんをお願いすればよいのではないかとわたしは思う。

とくにPRにはこれまでとは段違いの力をいれるべきだろう。ここでいうPRとは単なるアピールのことではなくPublic Relationship、つまり帯広の森と市民の関係性を整理し、明確にし、日常的なものにするための活動のことである。帯広の森の素晴らしいところは、豊かなストーリーに恵まれていることである。「生物多様性」「湧き水」「河岸段丘」「宮本遺跡」「農業王国の畑を買い上げて郷土の森をつくる」「市民協働の森づくり」「400ha」「50周年」そしてここで挙げなかったものをふくむ「いとなみの記録」。こうして、キーワードを挙げるだけでもこの森がもつ「味わい深さ」は、帯広という土地の価値のひとつだと胸を張って言えるレベルだと思う。これらのストーリーは人々の関心を集め、共感を呼び、そして郷土に対する小さくて尊い誇りを生む。さらに、時代が変化したことで、ストーリーへの共感が企業の支援を呼ぶときが来たのである。

おわりに

帯広の森は、間違いなく帯広の財産である。多くの人の想いやいとなみがあふれる場所という意味でも、企業の注目を引き付けうるという経済的な意味でも財産と呼んで差し支えないだろう。この財産はいま、転機を迎えている。それは第2章で説明したネイチャーポジティブの流れをどう受けるかを考える時期に差し掛かっているという意味でもあるが、森が負債になる恐れもあるという話でもある。

広く知られている通り、全国各地の地方都市と同様に帯広市も今後は人口が減っていく可能性が高い。人口減少はそのまま税収の低下につながり、帯広の森の管理に充てられる費用も現在と同様の水準で維持されるかどうか保証はない。生物多様性が高く、多くの人が「気持ちいい」と感じる森を維持するには、人による手入れが欠かせない。本州に古くからある里山の多くは、木炭やきのこ類、狩猟資源の採集で古来より人に利用され、同時に手入れもなされてきた。時代の変化とともに里山文化がすたれ始めると、多くの里山は込み入った藪だらけになり人の立ち入りが難しくなっていった。帯広の森についても、手入れが入らなくなると400haの資源ではなく400haのお荷物になってしまう可能性があるのだ。その兆候として見られるものが、すでに生じている森づくり活動団体の高齢化である。

このまま帯広の森が負のスパイラルに陥っていくか、ネイチャーポジティブの風を受けて帯広の財産としての存在感を高めていくか、いまはその瀬戸際だと言える。よい未来に進むためには、「いとなみの記録」をはじめとする帯広の森のストーリーを見える形にし、多くの人々と企業に広めることが大切だ。帯広の森が市民も企業も元気にする存在になることを心から願い、わたしもまたできることから行動したいと思う。

「帯広の森」は、子どもたちにどのような刺激をもたらすのでしょうか？本稿では、僭越ながら筆者自身のこれまでの人生を振り返りつつ、「帯広の森」が持つ魅力とその影響力の大きさをお伝えできればと思います。

筆者の両親は共にエゾリスの会に所属しており、生まれる前から「帯広の森」に関わっていたと言えるかも知れません。当時はその影響を深く感じることはありませんでしたが、今振り返ると、「帯広の森」が私の人生に与えていた大きな影響に気づかされます。自己紹介が遅れました。筆者は元・帯広市民、現・札幌市民の伊藤萌林（いとう めぶき）と申します。高校卒業までを帯広市で過ごした後、北海道大学の獣医学部に進学し、この原稿を執筆している丁度1年前に獣医師免許を取得しました。筆者が獣医師を目指したのは小・中学生の時でしたが、幸運なことに、帯広の森での活動を通して複数の獣医師の方とお知り合いになれたことに大きく影響を受けました。

筆者が帯広市民だった当時は、外来種であるアライグマが十勝地域に侵入し始めた時期でした（山口, 2016）。外来種問題の解決のためには様々な分野の協働が必要ですが、その1分野として獣医学が挙げられます。それは、外来種であるにせよ、1個体1個体の動物は動物福祉の理念に則って扱う必要があるからです（日本獣医師会, 2007）。獣医師と聞くと「動物のお医者さん」のイメージが強いかもしれませんが、動物の命を扱うスペシャリストという立場から、外来種問題には多くの獣医師が関わっているのです。「獣医師の立場から環境保全に貢献したい」というのが私が獣医師を目指した大きな理由でした。

さらに、理科が得意だったことも獣医師を目指した理由として大きかったかもしれません。小さい頃から日常的に動植物に接するだけでなく、モニタリングサイト1000の調査を通して「データをとる」ことに慣れていたため、科学的な思考に対して抵抗感なく入り込むことができました。（次項に小学4年生の時の自由研究を掲載いただきましたので、ご参照いただけますと幸いです。）これ

は自慢ですが、特に生物に関しては帯広の森での活動を通して教科書以上のことを感覚的に理解していたため、感覚を体系的に理論に落とし込むことでしたくなり得意科目とすることができました。受験勉強はいわゆる「詰め込み勉強」になりがちです。しかし、経験（感覚）と教科書（理論）を擦り合わせることでより深い学びが得られることを実体験できたことが、学びに対する筆者の考え方の基礎となっています。

筆者は現在、大学院生としてダニ媒介性感染症の研究を行なっています。近年注目されている外来種のもたらす問題の1つに、感染症があります。一般に、外来種は病原体の新たな宿主となる可能性があることから、時として公衆衛生を脅かす感染症の動態に影響を与えます（Najberek et al., 2022）。アライグマは様々な景観を利用するという生態から、病原体を自然環境から人の生活環境に運搬しているのではないかと考えられており、例えば、人や動物を刺咬することによってウイルスや細菌といった病原体を伝播するマダニの分布に寄与していると指摘されています（Doi et al., 2021）。筆者はこれまでに、道央地域のアライグマに寄生するマダニ相とダニ媒介性ウイルスの感染状況、およびそれらに影響を与える生態学的要因を解明してきました（Ito et al., 2024a; 2024b）。まだまだ未熟者ですが、獣医師として少しでもこの環境問題へ貢献できているのであれば、大変嬉しく感じます。

さらに、研究を始め論文を読むようになってから、「帯広の森」を含む帯広市が重要な研究フィールドになっていることがわかるようになりました。例えば帯広では市街地でもよく観察されるエゾリスは行動（Uchida et al., 2015）や遺伝子（Takahata et al., 2024）の視点からよく研究されています。モニタリングサイト1000里地調査のコアサイトになっていることも、もちろん忘れてはいけません。調査の意義については環境省が2024年に発表した報告書（環境省自然環境局 生物多様性センター, 2024）を参照いただきたいですが、全国で18ヶ所あるコアサイトのうちの1つを担っていることは、

帯広の森で帯広市民の手によって継続されている調査が日本全体の環境保全にとっても重要なパートを占めていると言えるでしょう。



エゾアカガエルは帯広でも札幌でも身近な両生類の1種です(2017/4/2, 帯広の森にて)。

「帯広の森」は今でも筆者に影響を与え続けています。北海道大学は札幌市の中心部に位置するながらも、広大なキャンパスに豊かな自然環境を保有しています。私は大学入学直後から現在に至る7シーズンにわたって、キャンパスにおける両生類の繁殖状況調査を行なっています(写真1)。また同時にアライグマの侵入状況もモニタリングしており、両生類との関係性を研究しています。最近では北大事務局、関係教員、サークル等と共同で大学構内の両生類の保全活動も進めており、今後はさらにこの活動を拡大したいと考えています。私が現在北大で行っているこれらの活動は、都市におけるボトムアップの環境保全という点で「帯広の森」の理念と共通しているのではないのでしょうか。

本稿では、筆者がどのように帯広市民として生まれ育ち、どのように札幌市民として暮らしているかを紹介させていただきました。「帯広の森」の存在は帯広の子どもたちの成長にとって今や欠かせないものであるとともに、日本全国の環境にとっても大きな存在になりつつあると思います。今後も「帯広の森」が多くの子どもたちにとっての成長や学びの場であり続けることを心より願っています。

参考文献

- 山口英美, 2016. アライグマの感染症に関連する環境リスク要因.
- 日本獣医師会, 2007. 外来生物に対する対策の考え方.
- Najberek, K. et al., 2022. Invasive alien species as reservoirs for pathogens. *Ecol. Indic.* 139, 108879
- Doi, K. et al., 2021. Mapping the potential distribution of ticks in the western Kanto Region, Japan : predictions based on land-use, climate, and wildlife. *Insects* 12, 1095.
- Ito, M. et al., 2024a. Environmental and host factors underlying tick infestation in invasive raccoons (*Procyon lotor*) in Hokkaido, Japan. *Ticks Tick Borne Dis.* 15, 102389.
- Ito, M. et al., 2024b. Environmental and host factors underlying tick-borne virus infection in wild animals : investigation of the emerging Yezo virus in Hokkaido, Japan. *Ticks Tick Borne Dis.* 15, 102419.
- Takahata, Y. et al., 2024. Urbanisation has impacted the population genetic structure of the eurasian red squirrel in Japan within a short period of 30 years. *Conserv. Genet.* 25, 1111-1122.
- Uchida, K. et al., 2016. Seasonal variation of flight initiation distance in eurasian red squirrels in urban versus rural habitat. *J. Zool.* 298, 225-231.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター, 2024. モニタリングサイト 1000 里地調査 2005-2022 年度とりまとめ報告書.

帯広の森のチョウ

伊藤 萌林(小学校4年)

はじめに

2009 年 4 月 19 日～2009 年 8 月 9 日まで帯広の森に生息するチョウの種類と数について調べました。

方 法

毎月 1 回～2 回、植樹した林や自然林、じゃり道、池がある 3,000m のコースをエゾリスの会（モニタリングサイト 1000）の人たちと見たりとったりしたものをまとめました。

結 果

調さ日に見られたチョウの種類と数を〈表 1〉にまとめました。

全部で 30 種類 322 頭のチョウが見られました。

多くみられた月は、8 月 9 日が 1 位で 168 頭、7 月 20 日が 2 位で 50 頭、6 月 28 日が 3 位で 48 頭だった。種類は、4 月 19 日は 6 種類だったが、6 月 28 日 14 種類で、8 月 9 日になったら 15 種類になった。



いざ調査に出陣！

多かった種類は、ジャノメチョウが 1 位で 120 頭、オオモンシロチョウが 2 位で 40 頭、ヒメウラナミジャノメが 4 位で 18 頭、ベニシジミが 5 位で 14 頭、エゾスジグロチョウが 6 位で 12 頭でした。

全然モンシロチョウ、アゲハチョウは全然見られませんでした。



セミを見ている萌林君（左側）

考えたこと

帯広の森についてチョウの食草から考えてみました。〈表 2〉

シロチョウ科はアブラナ科、タテハチョウ科はイネ・カヤツリグサ・ササ、シジミチョウ科はマメ科・木の葉というように種類で食べる植物がちがっています。

食草で多かったのは、イネ・カヤツリグサが 1 番で 185 頭、アブラナ科が 2 番で 61 頭、少なかったのはマメ科が 1 番で、他は木の葉、その他でした。

帯広の森が森になると木がしげって牧草が少なくなり、イネ科牧草を食べるジャノメチョウ、ヒメウラジャノメ、コキマダラセセリがへって、自然がゆたかになり植物の種類が多くなると、マメ科や木の葉、その他を食べるモンキチョウ、コムラサキ、エゾシロチョウがどんどんふえていくと思います。

感 想

322 頭もみられるとは思いませんでした。これからはやるので 1,000 頭をこしたいです。種類はもう少しいてほしいなと思いました。



コムラサキ

調査日に見られたチョウの種類と頭数 〈表1〉

2009年 月 日	4月19日	5月10日	6月21日	6月28日	7月5日	7月20日	8月9日	合 計
種 類／天 気	晴	晴	晴／曇	晴	晴	晴	晴／曇	
エゾヒメシロチョウ						1		1
ウスバシロチョウ				1				1
オオモンシロチョウ		9		3	8	13	7	40
エゾスジグロシロチョウ	4	1		1		2	4	12
スジグロシロチョウ		2		1	1		5	9
エゾシロチョウ				2	2			4
モンキチョウ				1	1	1	6	9
オオミドリシジミ						1		1
ベニシジミ		2		5			7	14
ツバメシジミ				3				3
ルリシジミ						3		3
カバイロシジミ					1			1
ゴマシジミ							1	1
シジミチョウ？				1		3		4
アカタテハ							1	1
クジャクチョウ							1	1
ウラギンスジヒョウモン							1	1
ギンボシヒョウモン						1		1
コムラサキ							11	11
シロオビヒメヒカゲ				3				3
ヒメウラナミジャノメ				23	15	1		39
オオヒカゲ							4	4
ジャノメチョウ						10	110	120
クロヒカゲ				2	1		2	5
ヒカゲチョウ				1				1
キマダラヒカゲ				1	3			4
タテハチョウ？						1		1
ミヤマセセリ		2						2
コキマダラセセリ					4	11	4	19
ヒョウモンチョウ？						2	4	6
頭数合計	4	16		48	36	50	168	322
種類数	1	5		14	9	13	15	

注：？は種類が確実でないもの。

チョウの食草の種類による頭数 〈表2〉

種 類／食草	イネ・カヤツリグサ	ササ	アブラナ科	マメ科	木の葉	その他
エゾヒメシロチョウ				1		
ウスバシロチョウ						1
オオモンシロチョウ			40			
エゾスジグロシロチョウ			12			
スジグロシロチョウ			9			
エゾシロチョウ					4	
モンキチョウ				9		
オオミドリシジミ					1	
ベニシジミ						14
ツバメシジミ				3		
ルリシジミ				3	3	
カバイロシジミ				1		
ゴマシジミ						1
シジミチョウ？						4
アカタテハ						1
クジャクチョウ						1
ウラギンスジヒョウモン						1
ギンボシヒョウモン						1
コムラサキ					11	
シロオビヒメヒカゲ	3					
ヒメウラナミジャノメ	39					
オオヒカゲ	4					
ジャノメチョウ	120					
クロヒカゲ		5				
ヒカゲチョウ	1					
キマダラヒカゲ		4				
タテハチョウ？						1
ミヤマセセリ					2	
コキマダラセセリ	18	18				
ヒョウモンチョウ？						1
頭数	185	27	61	17	21	26
種類数	6	3	3	5	5	10

注：？は種類が確実でないもの。一種でいろいろな食草を食べるチョウがいるので合計はのせません。

第6章

「帯広の森」のこれから



造成開始から50年を経過した今、これまでの森づくりを振り返り、これからどのように森を育てていくのか、利活用を促進していくのかを考えていく。

1. 帯広の森の目指す姿

はじめに、帯広の森の目指す姿について確認する。

帯広の森のバイブルである造成計画書の冒頭には、こんな一節がある。

「マチをぬけると森がある。どの道を行っても十勝特有の樹々が私達を迎え入れてくれる。そこでは、小鳥達がさえずり、虫の羽音が聞こえてくる。緑深い森の中には、広場や花園、さまざまな運動施設がほどよく配置され、記念樹林、果樹園、市民菜園などがある。市民のだれもが緑と太陽につつまれ、家族そろって楽しい一日を過ごす。」

ここから読み取れる目指す森は、育成された森の中で、整備された施設を、利活用しながら楽しい一日を過ごす人々の姿である。

2. 帯広の森の現状と課題

帯広の森の目指す姿を踏まえ、その要点となる「育成」「施設整備」「利活用」の3点について、現状と課題を整理するほか、森づくりに欠かせない「森と人」との関わりについて確認していく。

(1) 森の育成

目指す森は、カシワ・ミズナラ林、エゾマツ・トドマツ林、ハルニレ林、ヤチダモ・ハンノキ林、ヤナギ林、アカエゾマツ林などの郷土樹種を主体とする森林である。

現在、森のステージプランでは育成期から森林形成期に位置している。植樹の際の苗木調達などにより必ずしも目標とする樹種を植えることができなかったため、その際に植樹したチョウセンゴヨウなどの外来種が広がり、管理に労力を費やしている。

また、自然林に接する植樹林において、在来種の広がりが少ない状況にあるなど、自然林とのつながりに課題があるものの、現状、樹木は概ね順調に成

長し、林冠が形成され、森林らしい景観となっている。林床は、植樹当初の牧草種による草原的な植生から森林性の植生へ移行しつつあり、イチヤクソウ類などが生育するようになった。また、キビタキ、ヤブサメなどの森林性の鳥類も見られるようになってきている。

今後も、目指す森の姿を意識しながら、競合樹種の伐採や外来種の侵入拡大を防止するなど、人的な誘導が必要であり、森の育成に関するモニタリングを行いながら、森づくりガイドラインにある3つの森林タイプや植樹区ごとの林型の特徴にあった間伐等に加え、林床管理や危険木除去などのきめ細かな育成管理が必要である。

(2) 森の施設整備

造成計画書では、帯広の森を8つのブロックに分け、それぞれの森の性格に応じた施設整備を行うことになっている。

現状は、冬期国体開催の関係もあり、早くから各種体育施設の整備が進み、平成22年に待望の森の育成管理・利活用の拠点施設として、帯広の森・はぐく一むが整備された。このほか、森の交流館、JICA北海道センター、パークゴルフ場、もりの山などが整備され、もりの山から東側の園路やトイレ等の基盤施設も整備された。

今後、森の成長に合わせてもりの山付近から西側に延びる園路やトイレなどの基盤となる施設の整備が必要である。一方で、造成計画書にある緑化植物園、文化センター、大池、キャンプ場、果樹林等の施設は、当面、整備は難しいが、時代の変化を踏まえた利便施設等の整備を検討していく必要がある。

(3) 森の利活用

最も整備が進んでいる体育施設は、多くの方に利用されている。園路やトイレ等の整備が進むにつれ、散歩やジョギング、クロスカントリースキーといった日常的な利用者が増加しているほか、森の成長により自然を身近に感じられる環境となったことで、昆虫や野鳥などの自然観察を行う人が見られるよう

になってきている。また、はぐくむを中心に様々なイベントや行事が実施され、令和5年度の来館者総数は過去最高の17,186人となるなど、利用が広がってきている。

このほか、動植物の調査研究の場としての利用もされているところである。

今後も、日常的な利用はもとより、森をフィールドとした多様な利用が広がるような取り組みのほか、果実や間伐材などの原則禁止となっている森の恵みの活用に向けてルールの柔軟化等も必要である。

(4) 森と人（企業・団体含む）との関わり

森づくりと市民との関わりとして誰もが思い浮かぶのが市民植樹祭と市民育樹祭である。市民植樹祭では、延べ148,500人の市民が30年に渡り約225,000本を植樹してきたほか、森の健全な成長に必要な間伐や下枝払い等の作業を行う市民育樹祭も15回にわたり開催され、延べ13,000人の市民が参加した。なお、これらを主催した実行委員会は、若手主体の市民運動から発展したものである。

平成16年に市民植樹祭、平成17年に市民育樹祭を終えた後も、小規模な植樹や育樹などは継続され、その後は、市民団体などによる育成や利活用が始められ、現在は8団体により森づくり活動が行われている。

現状では、植樹祭のように発信力があり、多くの市民が集まる大規模なイベントはなく、森への関心

が薄い市民の関与が限定的となっている。その一方で近年は、学生や親子などによる活動が主体の団体や身近で自然に接することに魅力と感じる会員が増加している団体もあり、このように市民の関わりの裾野が広がっていくことが重要である。また、継続的に活動が続けている市民団体の会員の高齢化や減少が見込まれることから、森づくり活動に参加する人材の確保や知見の継承、企業の地域貢献活動などとの連携が必要である。

3. 森に求められる役割や機能の変化

ここでは、帯広の森の構想段階から現在に至るまでの社会環境の変化と、帯広の森に求められる役割や機能がどのように変化しているのかを確認していく。

社会環境の変化は、造成以前から、継続的に策定されている全国総合開発計画（現国土形成計画）における社会背景を調べた。（表1）

吉村市長が帯広の森構想の原点となった「ウィーンの森」に出会った昭和44年に策定された新全国総合開発計画では、高度経済成長、人口や産業の大都市への集中、情報化・技術革新の進展が背景となっているが、直近の2つの計画では急激な人口減少や少子化、異次元の高齢化、インフラの老朽化のほか、ライフスタイルの多様化や働き方の変化などが背景として示されており、社会環境が大きく変化していることがわかる。

表1 全国総合開発計画（現国土形成計画）の変遷

	新全国総合開発計画(新全総)	第二次国土形成計画(全国計画)	第三次国土形成計画(全国計画)
閣議決定	昭和44年(1969年)	平成27年(2015年)	令和5年(2023年)
背 景	1. 高度経済成長 2. 人口、産業の大都市集中 3. 情報化、国際化、技術革新の進展	1. 国土を取り巻く時代の潮流と課題(急激な人口減少・少子化、異次元の高齢化、巨大災害の切迫、インフラの老朽化等) 2. 国民の価値観の変化(ライフスタイルの多様化、安全・安心に対する国民意識の高まり) 3. 国土空間の変化(低・未利用地、空き家の増加等)	「時代の重大な岐路に立つ国土」 1. 地域の持続性、安全・安心を脅かすリスクの高まり(未曾有の人口減少、少子高齢化、巨大災害リスク、気候危機) 2. コロナ禍を経た暮らし方・働き方の変化(新たな地方・田園回帰の動き) 3. 激動する世界の中での日本の立ち位置の変化

また、公害白書（現環境白書）でのキーワードの変遷を見てみると、造成当初の昭和54年以前では、公害、騒音、公害防止、大気汚染、水質汚濁といった公害に関するキーワードが多かったが、令和2年以降は廃棄物、生物多様性、気候変動、持続可能、循環といった地球温暖化やゼロカーボンに関するキーワードが多く出現している。

公害白書（現環境白書）におけるキーワードの変遷

順位	昭和54年(1979年)以前	令和2年(2020年)以降
1	公害	廃棄物
2	騒音	生物多様性
3	公害防止	気候変動
4	大気汚染	持続可能
5	水質汚濁	循環
6	環境基準	温室効果ガス・GHG
7	自然環境	生態系
8	排水	温暖化
9	廃棄物	化学物質
10	汚濁	脱炭素

ここまで国の計画等を参考に社会環境の変化を考察してきたが、最後に帯広市が令和2年に策定した第2次みどりの基本計画に記載している社会情勢の変化を掲載する。これは当然、帯広の森にもあてはまるものである。

第2次みどりの基本計画における社会情勢の変化

少子高齢化や人口減少の進行、価値観の多様化、地球環境問題など、様々な社会的課題がある中で、みどりは、温室効果ガスの吸収など環境面に資する機能、健康活動の場やコミュニティ醸成の場など社会面に資する機能、観光振興など経済面に資する機能など、多様な機能を有していることから、こうした機能をまちづくりに活かしていくことなどが期待されています。

これらを踏まえて、帯広の森に求められる役割や機能について再確認していく。

造成計画書では、帯広の森の役割や機能として、安らぎ、快適さ、豊かさなどの緑の固有效果や人間性回復の場、余暇活動の場、自然再生などを想定していた。現在においても、緑の固有效果などに大きな変化はなく、価値観やライフスタイルが多様化し、生物多様性の確保が課題となる中、これらの役割や

機能は、これから、ますます必要性が増していくものと考えられる。

一方、造成当初に想定していた公害緩和については、CO₂吸収源や気候変動への対応と変化し、グリーンベルトとしての機能であった市街地の拡散防止は、人口減少等の影響により、必要性が低下していくものと考えられる。

4. アンケートとシンポジウムから得られたもの

今年度実施した市民へのアンケートやシンポジウムを基に、現在地の確認とこれからの森づくりの参考としたい。

(1) アンケート

帯広の森を知っていると答えた人は93%となっており、認知度はあるものの、知っている順は、体育施設、はぐくむ、市民の森となり、体育施設としてのイメージが強く、拠点施設がその次という結果となった。

現在の帯広の森の満足度の設問では57%の人が満足・やや満足としており、32%の人が普通、やや不満・不満と答えた人は11%であった。不満と答えた理由としては、距離的な問題、交通の便が少ないことや帯広の森の情報が少ないこと、散策路の整備や森の手入れ不足などが挙げられた。

帯広の森でこれからどの様に過ごせたら楽しいか、やってみたいかの設問では、家族で飲食を楽しむ、時間を気にせずゆっくり過ごす、大人と子供と一緒に遊べるなどがあり、そのために必要なものとして、休憩スポット、カフェ、レストラン、キャンプ場、遊具などが挙げられていた。

(2) 50周年記念シンポジウム

シンポジウムの基調講演では、有識者から「帯広の森が成功したのは、強い理念のもと戦略的な計画があったことが重要であり、これからは、世界に誇るグリーンインフラとして、市民らが工夫して繋いできた帯広独自の財産として発信すべきである。」など、森づくりに対する評価と提言があった。

続いて行われたパネルディスカッションでは、「親世代が子どもたちと共に自然の中で遊ぶ姿勢を持つことが、世代を超えた交流を生み、子どもたちに自然への愛着を育む要因となる。」「グリーンベルトか

らまちの中へくさびとなるみどり（緑地）を展開することで、生活と緑の関係性が構築される。」「まちのプライド、シンボルとして、100年後の森は帯広の文化を写し出す鏡である。」などの未来への提言があった。

また、基調講演の前に実施したワークショップでは、これからの提案として、情報発信の強化、トイレやベンチの増設、フェス会場やキャンプ場、地域の高校生が主体となったボランティア活動の促進、暗さを利用した星空観察やサバイバルゲームの開催、バスなど公共交通の整備などが挙げられた。

5. 現在地の確認と方向性

冒頭で述べたように、帯広の森で一日楽しく過ごす（利活用が進む）ためには、十勝特有の樹々や動植物が住む緑深い森を育成し、その中に程よく様々な施設が整備されていることが必要となるが、50年を経過してそうした森になったのか、また、100年に向けてどのような方向で森づくりを進めればよいのかを、市民と森との関わりの変化や社会環境の変化も踏まえて考えていく。

(1) 森の育成

現在、概ね、育林期から森林形成期に相応しい森林としての成長がみられる。これからも、森づくりガイドラインに則した間伐や補植などによる目標とする林型への誘導や林床の管理、外来種対策など、必要なモニタリングと適切な手入れをすることで、理想とする森に近づけることが可能になると考えられる。

ただし、年月の経過とともに、当初から森に関わってきた人の関与は低くならざるを得ず、人口も減少していく中で、森の育成管理に関わる技術の継承や情報の共有、作業に関わる担い手の確保が必要である。また、危険木の除去等の継続的な安全対策も求められる。

(2) 森の施設整備

体育施設群の整備に加え、森の育成・管理と利活用の拠点となるはぐく一むが整備されたほか、もりの山以東まで園路やトイレなどが整備されている。

これからも、安全安心に利用できるよう、既存施設の維持管理を行いながら、園路やトイレなどの基

盤整備を順次進めていくほか、目指す森の姿の実現に向けて憩いや遊び、食を楽しむといった利便施設などの整備が求められてくる。

ただし、公共施設の整備を抑制せざるを得ない社会環境の中、造成計画にある多様な施設の整備は難しく、利便施設の整備にあたっては、Park-PFIなど公民連携の手法を模索しながら取り組む必要がある。

(3) 森の利活用

森の利活用は、森の育成や施設の整備に比例して利用が増加する傾向があり、現在は、整備が最も整っている体育施設群の利用が多くを占めているが、森が成長してきたことで、従来からの園路の利用に加え、森をフィールドとして利用する市民が増加してきているほか、はぐく一むでのイベントや行事等により、森を訪れる人が増加している。新たな公共投資が容易ではなく、緑の多面的な効能に関心が高まる中にあるのは、森のフィールドとしての利活用をより一層進めていくことが必要である。

ただし、前述のとおり、利活用にあたっては一定の施設整備が必要であるほか、利活用を進めるために効果的な情報発信や新たな仕掛けが不可欠である。また、親子又は子供たちが安心して楽しく利用できる環境を整えることが大切であり、森に負担がかからない範囲でルールを柔軟化を進めていくことも必要となってくる。

森の「育成」「施設整備」「利活用」は相互に関係しており、森を楽しむ人が増えることで、森を守り育てる意識の醸成が進み、育成にも関わる人が増えることが期待され、企業等による関心も高まり、施設整備にも好影響を与える可能性がある。

また、帯広の森が帯広市の緑のネットワークの核であることも踏まえ、国立公園である日高山脈や大雪山系から流れる十勝川や札内川の緑地のほか、緑ヶ丘公園をはじめとする市街地の公園や緑地と連携することで、市民の豊かな暮らしや帯広市のイメージ向上につなげていく必要がある。

6. 帯広の森の価値（効能）

造成時に描いていた帯広の森を目指していくには、前述のとおり、「育成」「施設整備」「利活用」のそれぞれの取り組みが必要であり、そうした取り組みを

進めるうえで欠かせない共有すべき認識として、帯広の森の価値（効能）について、改めて整理する。

造成時に掲げていた理念は、利活用計画書によると「自然と人間の共生」「地域自立の象徴」「森は歴史的、文化的、自然的存在」である。

これまで検証してきたように、造成時に掲げてきたこれらの理念は今なお色あせることなく、むしろ、重要性を増してきている。

ただし、高度成長から低成長へ、公害対策から気候変動対策へなど社会環境が変化し、少子高齢化や人間関係の希薄化、社会のあらゆる面での多様化が進む今日において、現代から未来へとつながる道標として、これからの時代に即した言葉を提示したい。

先ほど、「利活用」を進めるために必要な事項として、「情報発信」や「新たな仕掛け」が重要となってくると述べたが、帯広の森の価値（すごさ）を発信（アピール）することで、森への関心を高めることにつながり、後述する様々な仕掛けにも効果を発揮すると考えられる。そのターゲットとしては、第一に市内の住民や団体・事業者、次に市外の住民や事業者、ひいては世界に発信していくものであり、そうした観点も含めて、次の3点が重要と考える。

●シビックプライド^{※1}～まちづくりの象徴～

市民が木を植えて森を造ってきた歴史と市民が継続して森を育てていることがシビックプライドへとつながり、まちづくりの象徴となる帯広の森

- ・原野から苦勞して開墾した畑を市民の手により植樹して森に戻す構想を具現化
- ・多くの市民や森づくり活動団体による維持管理・運営が継続されている市民の財産

●グリーンインフラ^{※2}～地球にやさしい～

動植物の生息環境の保全、気候変動にも対応するグリーンインフラである、地球にやさしい帯広の森

- ・生物多様性に貢献（ネイチャーポジティブ）
- ・カーボンニュートラルに貢献
- ・日高山脈からつながるみどりのネットワークの核

●ウェルビーイング^{※3}～人にやさしい～

家族や友人と過ごせる場として、生活の一部としてウェルビーイングを感じられる、人にやさしい帯広の森

- ・みどりの持つ憩いや癒しの効果を実感できる場

- ・心豊かな生活を支えるサードプレイス^{※4}
- ・食や健康、スポーツや環境学習の場
- ・誰もが日常的に利用できるインクルーシブ^{※5}な公園

用語解説

- ※1 地域に対して市民が誇りや愛着をもち、自ら地域をより良くしていこうとする気持ち。
- ※2 自然環境が有する機能を様々な課題解決に活用し持続可能な地域づくりを目指す考え方。
- ※3 個人や社会のよい状態、本質的に価値のある状態、健康と同じように日常生活の一要素であり社会的、経済的、環境的な状況により決定された状態
- ※4 自宅や学校、職場とは別にある居心地の良い第3の場所。
- ※5 多様な属性やニーズを受け入れる、様々な背景を持つ人が排除されない状態

7. 利活用の進め方

これまでの50年間の森づくりを振り返り、現在地の確認と帯広の森の方向性や価値を整理してきた。これらを踏まえ、これからの帯広の森の利活用の進め方を考えていく。

帯広の森では、過去には市民植樹祭などの大規模なイベントにより市民が集い森をつくっていた。現在は、大規模なイベントはないが、個人での利用は増加し、市民団体による森づくり活動が継続しているなど、森と人との関わりが変化している。森の目指す姿の実現に向けては、これからも人が森と関わっていくことが必須である。

そのための森と人との関わり方の手順として、【森を知る→森に来る→森に通う→森で活動する→森を伝える→】を基本として取り組んでいく。

森を知ってもらい、来てもらうことを発端に、何度も森に訪れ、通うようになる。通い続けているうちに仲間ができ、森への活動へと関わりを深めていくことで、人と森、人と人とのつながりが深化し、さらに新たな人を呼び込むなど、人の活動が拡大することにつながる。

こうした森と人との関係性を構築しながら、利活用を促進するための取り組みをイメージし、3つの柱を掲げた。

- 森に関わる機会を広げる（森との接点をつくり、安全安心なインフラを築く）
- 森に関わる仲間を増やす（森の価値を高める関係性をつくる）
- 森に関わる人を引き込む（森の価値を伝える人をつくる）

こうした取り組みの柱のもと、多くの市民が森に関わる仕掛けとして50周年事業で製作した絵本や記念誌を使った情報発信のほか、間伐材を活用した玩具などのきっかけづくりとなるイベント、公民連携の検討などの利活用の促進を図りながら、その基盤となる森の育成管理や園路などの施設整備に取り組んでいく。

8.「帯広の森」のこれから

造成から100年を迎えた帯広の森をイメージして、第1回植樹祭の日に生まれた、ある帯広市民を主人公とした物語をつくりました。

皆さんは、百年の計「帯広の森」にどんな夢を描きますか。

ある市民の物語 ー帯広の森に出会ってー

プロローグ

70歳で定年してからは、毎日のように帯広の森に来ている。そして、誕生日は、「もりの山」に登り、日高山脈や帯広の街なみを眺めながら、記念写真を撮るのを楽しみにしてきた。

年によっては、台風のような強い風が吹く日や大雨が降る日もあった。季節外れの真夏日も3回あった。ゼロカーボン20年以前に達成されているのに、地球温暖化の影響は暫く続くようだ。

たいていは、妻と二人だが、米寿のときには、孫を連れた息子夫婦と一緒に来た。100歳の誕生日の今日は、ひ孫も一緒に総勢18人で登りにきている。今日は、妻の体調も良いので、みんなで一日中森で過ごすつもりだ。こんな楽しい思い出づくりをあと何年続けられるのだろうか。もう少しで、ひひ孫も生まれるらしい。あと、1年でも2年でもいいからできるだけ続けたい。このふるさとの森で過ごす大切な一日を……。

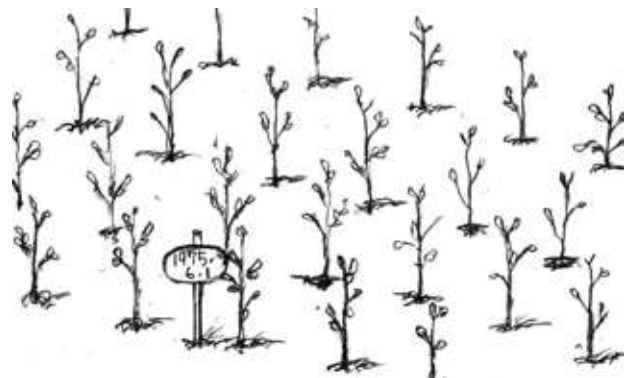
思い返せば、50年前が転機だったのかもしれない。人生100年時代と言われ始めてから数年後、

100年の計と呼ばれる帯広の森が造成から50年を迎えた。僕は、帯広の森に関わっている友人から頼まれ、これからの森について考えた。

生い立ち

僕の人生は、森と運命づけられていた。僕が生まれたのは、1975年6月1日。第1回市民植樹祭が行われた日だ。僕の父親は、町内会の役員をしていて、その日の未明に僕が生まれたのを見届けた後、木を植えに行った。後日、僕の生誕記念の標柱を手作りし、父が植えた木の傍に立ててきたと聞いた。

僕が初めて木を植えたのは、小学4年生の時だ。3歳年下の妹も連れて家族で植樹祭に行った。音楽のイベントもあって、みんな楽しそうにしていたのを覚えているし、上級生がカウボーイのような服を着て、カッコいいと思った。



翌年、僕は「森の少年隊」に入隊した。普段、通っている学校の子とは異なる友達や上級生たちと一緒に遊ぶのは新鮮だった。どんぐりを拾って苗を育てたり、木を植えたり、巣箱をかけたり、川で遊んでキャンプもした。充実した2年間だったし、家でテレビを見ているより遥かに楽しかった。ジュニアリーダーにならないかと誘われて迷ったけれど、中学からは、大好きだった野球に専念することにした。

それから部活が無いときは、両親や妹と植樹祭に行き、育樹祭にも参加した。父は、はっきりとは言わなかったが、第1回目に父が植えた木は、育ちが悪かったらしく、枯れたのか、間伐されたのか、無くなっていたようだった。

そして、その場所に残っていた標柱も土に埋もれ朽ちかけていた。少し残念な気持ちもあったけど、これも森をつくっていく過程の一つなんだろうと思ったのを覚えている。

僕は、高校3年生のときに、帯広の森野球場で3試合戦った。北北海道大会には行けなかったけれども、決勝まで仲間たちと勝ち進んだ暑い夏の一週間は、僕の人生のハイライトの一つだと思っている。

高校卒業後は、一浪してから進学のために上京し、そのまま、都内の会社に勤めた。将来を共にしたいと思える彼女と出会い、東京での定住を考えていた矢先、父が病気で倒れ、久しぶりに故郷に帰った。

父は思いのほか衰弱していたが、窓から見える外の景色を眺めながら、孫と一緒に森で遊ぶまでは死ねないなあと僕に言って微笑んだ。でも、その3日後に、父は帰らぬ人となった。

告別式が終わって、十数年ぶりに帯広の森に行った。そして、驚いた。木が大きくなり、部分的に森らしくなっている。球技場など体育施設の整備も更に進んでいた。母の事が心配だったこともあるけれど、何よりも自分の子どもをここで育てたいと思った。僕は、隣で歩いていた彼女に思いを打ち明けた。彼女は目を潤ませながら静かにうなずいてくれた。

1年後、僕は妻と帯広に移り住み、実家の傍の帯広の森の近くに家を建てた。子どもも二人授かった。都会で生まれ育った妻は、事あるごとにこの環境を褒め称える。こんな贅沢なところはほかに無いよと。しかも自分たちで造ったなんて凄いことだよと。

僕も高校生までは、地元の街のことを田舎町の一つくらいにしか思っていなかったし、森の価値もよく解っていなかったけれど、東京から戻ってきてからは、妻に近い感情を持つようになっていた。

「この木は、お父さんが小学生のときに植えたんだよ」、「ふーん、随分大きいんだね」、「お父さんが大きくなった分だけ、この木も大きくなったんだよ」どこかで読んだ、こんな会話を子どもとするときもあった。

植樹祭や育樹祭は終わっていたが、程なく「はぐくむ」ができて、時々、子どもたちと遊びに行つて、昆虫をつかまえたり、外来種の抜き取りをしたりした。

成長した子どもたちは、部活動を始め、それぞれ森に行ってくると言つて、テニスやサッカーをしに行くようになった。夏には、家族揃つて、もりの山に花火大会を見に行くこともあったし、冬は、クロスカントリースキーを楽しんだ。



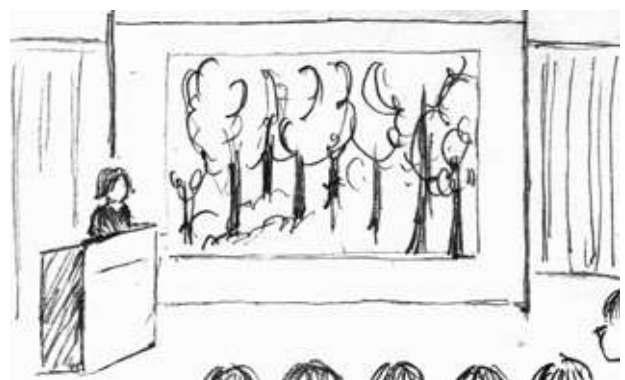
50年を迎えて

僕たちにとって、帯広の森は楽園だった。

でも、幼なじみで市役所に勤めている友人は悩んでいるようだった。今年、造成から50年を迎えるのに、この森の大切さがみんなに伝わっていないような気がする。そして、これから先どう進めていけば、本当の意味で市民の森になるのか、それを考えて、毎日、眠れないらしい。

よく話を聞くと、計画とか、ガイドラインとかは、しっかりとしたものがあるらしい。そういったものを踏まえて、これからの時代を見据えて、どういった方向性で森をつくり、使っていけばいいのか、そんなことを考えたいようだった。

僕は、自分の人生とも重ね合わせながら、友人と一緒に帯広の森のことを考えた。そして、僕の考えの一部は、彼らの考えにも反映され、友人から感謝された。僕は、これをきっかけに、より強くより深く、まるで自分の庭のように帯広の森を思うようになった。



友人は、50周年を記念して、写真コンテストやシンポジウムを企画したり、未来を担う子どもたちのために絵本をつくったりして、森の大切さを伝え、50周年の集大成として記念誌をつくり、これまで

の森の歴史とこれからの森づくりについて取りまとめた。

そして、帯広の森の認知度は少しずつ高まっていき、市民が力を合わせて50年先をみつめた森づくりが続けられていった。

50年経ったからといって、森づくりの基本が大きく変わるわけではない。造成時につくられた計画書をベースにしながら、時代の変化を踏まえて、手直しをする感じだろうか。

大きな括りとしては、10年くらい前に作られた「森づくりガイドライン」で示された、森の保全に重点を置く“原生的自然の森”、森の利用に重点を置く“散開林”、森の利用と保全を両立する“森”の3つの区分に沿って、森づくりが進められた。

具体的には、第二柏林台川沿いなど開拓前から残る自然を活かしながら、できるだけ人が手をかけずに原生的なふるさとの森の再生を目指すエリア。森の雰囲気を感じながら、便民施設なども配置して一般的な公園のように多様な利活用を目指すエリア。その中間として、双方とのつながりを意識しながら、適度に整備された森林の中で森ならではの利活用を目指すエリア。それぞれのエリアの適性に合った過ごし方をイメージしながら、森の育成・管理とハード・ソフトの整備が進められていった。

100年の森

樹木の成長は進み、今では、二世代目、三世代目への更新がみられる場所も増えてきた。自然林と人工林の区別がつかなくなっている。生い立ちを知らない観光客には、市民が苗から育てつくりあげてきた森だということはわからないだろう。今後も人為的なコントロールは必要ようだが、過度に手を加えるのではなく、森の自律的な成長を手助けするイメージだ。

帯広の森には、原生の森を復元するというコンセプトはあるものの、実際には、郷土樹種を中心にしながら、より多様性のある森になっている。

また、全てが森林になってしまうと生息しづらい動植物や虫もいるらしく、ところどころに草原的な場所が残され、景観上も良いコントラストになっている。目を見張るような大木も増え、50周年事業で植えたハルニレも、シンボルツリーの一つになっている。

森の園路は全てつながり、子ども向けやお年寄り

向け、クロカンやサイクリング向けなど様々なモデルルートが設定された。

さらには、十勝川や札内川と結ぶ「帯広環状線ルート」や緑ヶ丘公園など市街地に点在する公園や緑地を巡る「森と緑にくらすまち帯広ルート」、岩内やポロシリにつながる「国立公園ルート」など、帯広のみどりのネットワークを堪能するルートがつくられ、地元民や観光客に親しまれている。

森の園路沿いに点在しているトイレは、日陰でも発電するソーラーパネルが付けられたことで自立し、いつでも快適に使い、一部は冬も開いている。かつての農家住宅だった屋敷林跡は、それぞれ、異なる特徴を持った植物が植えられ、休憩所兼観光スポットとなっている。案内板には、帯広の森の歴史とともに、開拓の歴史や先祖が苦難の末に拓いた畑を森に返す苦悩なども書かれている。

銀世界から新緑、様々な色の花や紅葉など四季を通じて変化する景色に加え、鳥や虫の鳴き声、植物の香りやそよ風が五感を和ませる。草原でチョウやバッタを追いかけ、森林でクワガタを探す子どもたちの姿は昔も今も変わらない。野草園でみられるような貴重な草花も園路からそっと足を延ばせば見ることができる。

そういえば、園路を歩いているときに見つけたエゾリスの数だけ願いが叶うらしく、滅多に出会えないシマリスを見つけた人は、その日一日は良い事があると孫から聞いた。

僕が子どものときから、病は気からという言葉はあったが、21世紀の社会人にとっては、ストレスコントロールが最大の関心事になり、その対策として森でリラックスして過ごすことが効果的であることが広く認知された。市街地にあり利便性の高い帯広の森は好適地として有名になり、企業の福利厚生事業としての活用が進んでいる。体育施設での軽運動や農業体験などのアクティビティも組み込まれた長期滞在者向けのプログラムは、週末に訪れる観光客にも人気で、一週間を通して予約でいっぱいのようなのだ。

社会的な責任が大きい企業にとっては、従業員の確保対策と社会貢献事業をセットで考えることができるため、森づくり活動にも関わるケースが多く、森の維持・管理の助けとなっている。

森の体育施設は、施設の大規模改修や更新に合わせて、軽量・薄型のソーラーパネルと蓄電池などが

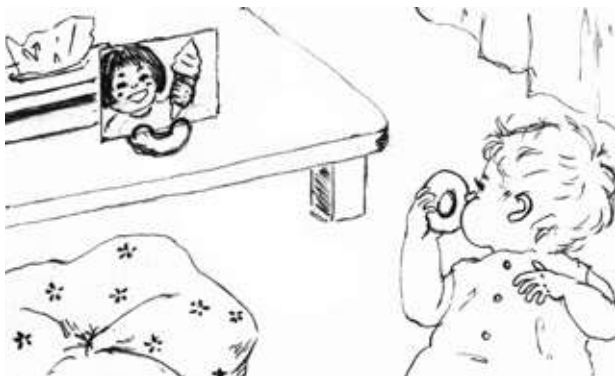
整備され、ゼロカーボンを実現するとともに、災害時の避難所になっている。これらも含め、帯広の森一体は、比較的早い段階からゼロカーボン区域となり、今では、二酸化炭素吸収量の方が排出量より多いカーボンネガティブになっている。

はぐくーむは、森の総合案内、育成管理、環境教育の場として、時代のニーズに合わせて進化しながら機能し続けている。孫夫婦の話によると、帯広市の小学校の児童は、必ず一回は、はぐくーむに行つて、帯広の森のことを学び、森づくり体験を行うようだ。いつからかはわからないが、泥んこになって好き勝手に遊ぶメニューもできて、シャワールームも整備されている。

中学生向けには、間伐と木工のカリキュラムが用意され、そこで興味を持った生徒のための限定有料メニュー「実生のトドマツでつくる生クリスマスツリー」が人気となっている。

また、50周年を機に帯広で生まれた子どもに、帯広の森の間伐材から作られたおもちゃが配られるようになり、市民が帯広の森の大切さを再認識するきっかけとなった。

生後4か月を目途に配られた丸い木のおもちゃは、赤ちゃんの歯固めとしての役割を終えた後、はぐくーむの行事で写真立てに加工し、多くの家庭で子どもの記念写真とともにリビングに置かれ、まるで、帯広市民の証のようにになっている。



加工する行事に参加した同年代の子を持つ親たちは、その場でつながりを持ち、幼児期から森遊びを体験できるイベントに定期的に参加するようになり、やがて小学生になった子どもたちは、森をフィールドに冒険遊びを楽しむようになった。

大人たちの優しい眼差しのもと、「危ない」や「汚さないで」などから解放され、気持ちの赴くままに、

枯れ枝や虫の抜け殻、水たまりやふかふかの土など森のあらゆるものをおもちゃにし、大人たちの想像を超える遊びに夢中になる子どもたち。

擦り傷や軽い捻挫は日常茶飯事だったが、目くじらを立てる親はいなく、むしろ、北欧の国々でしかできないような森や自然を体感しながら創造性や柔軟性を養えるこの一連のプログラムを目当てに、移住をしてくる若い夫婦も数多くいた。

森のレストランもオープンした。市街地にありながら360度を樹木に囲まれ、夜は星空がきれいに見える環境は稀有で、客にとってもシェフにとっても憧れの場所となり、管内で唯一の三つ星レストランに選ばれ続けている。

口コミ情報によると、道内で一番予約が取りづらい店になっているようだ。ただ、帯広市との協定により地元枠が別に用意され、市民は2年に1回くらいは、手ごろな価格で食事ができるシステムになっている。

この「もりの山」の近くには、子どもたちが遊ぶ遊具やお母さんたちに人気のカフェが設置されている。僕たちもこの後、ここで2時間くらいは過ごす予定だ。一番年下のひ孫は早く行こうとせがんでいる。帯広の森の中に遊具を置くことにためらう意見もあったが、森らしさを感じられるのであれば良いと折り合いがついたそうだ。

カフェには、十勝産の食材に加えて、森で取れたハチミツやクルミが使われたパンのほか、長年の試行錯誤の末に辿りついた芳醇な味と香りのエブタンポポコーヒーがこの店限定でメニュー化されていて人気になっている。

森のレストランでも、里山方式で伐採されたカシワやミズナラから作られたオーク樽で熟成されたワインが数量限定で提供されている。

こうした帯広の森の恵みやブランドの活用は、資源の持続性やアピール性などの観点からのルールがつくられ、企業の参入促進や管理経費の削減に効果を発揮しているようだ。

森の中には、多目的に利用できる場所も設けられた。市民が自ら決めたローカルルールの範囲である程度自由に使えるようになっている。普段は家族連れを中心とした遊び場になっていて、大きな音を出してもいい時間帯が週に数回ある。その時には、色々な年代の個人や団体がロックやジャズ、民謡など様々なジャンルのライブ演奏を披露する場となって

いる。移動式のレストランやバー、ショップも適宜営業まれ、昼夜を通して、市民が、賑わい、憩う場になっている。

もちろん、森の中で、ゆっくりのんびり過ごす人も多い。散歩がてらに森に出かけ、鳥のさえずりを聞きながら、スマートグラスに映し出されるお気に入りの本を読む人もいれば、活動団体に入って、より深く森を楽しむ人もいる。子どもが成長するように木や森も成長する。同じ日、同じ場所にいても、目に映る風景は毎年違う。森の成長や移ろいを五感で感じながら、草刈りなどの作業や林床植生などの調査に汗を流し、木の実やキノコなどの森の恵みを少しいただきながら、仲間たちと一緒にランチやおやつを楽しむ。僕も時々参加しているけど、「贅沢な休日の過ごし方だね。」が、みんなの口癖になっている。

温暖化が進むに連れて、十勝の適性作物も変化し、帯広の森を取り巻く環境も変わってきた。新たな外来種も増え、ナラ枯れ対策も必要になっている。森の管理はより複雑化しているが、活動を続けている市民団体などの英知と AI が融合し、最適解が得られやすくなった。作業道具も急速に進歩し、かなりの部分が自動化された。帯広の森に愛着を持つ市民が増えるにつれ、ゴミの不法投棄は減り、今では、大多数の市民がこの豊かな環境を未来に残すために自分ができることをしている。

10 年前に亡くなった友人に最後に会ったとき、40 年前に思い描いた森になったのかと聞くと、「おかげさまで」と頭を下げられ、「帯広の森周辺の住宅地の地価は札幌より高いようだしな。でもまだ、栄通りのオーバブリッジができてないんだよねあ」とにっこり笑っていた。

カフェでみんなで休憩しているときに、映像関係の仕事をしている孫娘が、いつか帯広の森を題材にした映画を撮りたいと語りかけてきた。

孫曰く、人工林の双壁となっている神宮の杜と帯広の森とを比べると、あっちは、国家プロジェクトとして、選りすぐりの職人と樹木を全国から集めて移植して造っていて、こっちは、素人の市民が寄せ集めの苗木を植えて試行錯誤しながら造っている。この違いは、北海道の中で官主導じゃなく依田勉三が手斧で拓いた帯広の開拓の歴史に似ていて面白い。よく言えば「挑戦」、悪く言えば「無謀」、でもこれが帯広の DNA なんじゃないか。

そして、「シビックプライド」とか、「グリーンインフラ」とか、「ウェルビーイング」とか 21 世紀のキーワードが全部詰まっている帯広の森を 100 年前に発案したなんて凄すぎる。しかも 3 票差で可決とかドラマ性もあるよね。私、頑張るから、おじいちゃん出資してと真顔で言われたので、思わず苦笑した。

映画ができるまで生きていられるかなあ。本当にできたら、天国の友人も喜ぶだろうなあ。・・・

エピローグ

「お父さん、お父さん」、「いつまで寝ているの」、「にたにた笑っていたけど大丈夫？」

妻に起こされてようやく気づいた。夢だったのか。でも、帯広の森を考えた吉村さんも夢だって、言っていたよな。

妻も実は子どもの頃から北海道に憧れていて、毎日のように自然の森の中で家族と暮らす夢を見ていたらしい。僕と結婚していなくても移住していたと後で聞き、少しがっかりしたのを思い出した。

そういえば、今の市長も「夢かなうまちおびひろ」って言っていたなあ。明日、今日見た夢の話を友人に伝えることにした。この言葉を添えて。

「お前の夢を市民が共有できれば、前に進めるんじゃないのか。そもそも帯広の森って、壮大な夢に共感した人たちに支えられて、今があるんだろ。」



はじめに

マチをぬけると森がある。

どの道を行っても十勝特有の樹々が私達を迎え入れてくれる。

そこでは、小鳥達がさえずり、虫の羽音が聞こえてくる。緑深い森の中には、広場や花園、さまざまな運動施設がほどよく配置され、記念樹林、果樹園、市民菜園などがある。市民のだれもが緑と太陽につつまれ、家族そろって楽しい一日を過ごす。

「この木は、おとうさんが小学校に入ったときに植えたんだよ。」

「ふーん、ずいぶん大きいんだね。」

「お父さんが大きくなった分だけ、この木も大きくなったのさ。」

こんな会話が聞こえてくるような……。100年後、200年後に夢をたくし、新しい歴史をつくり出す母なる森、それが私達のめざす帯広の森である。

開拓初期のオビヒロは、カシワ、ナラなどのうっそうと生い茂る原生林におおわれていた。入植した人々は、手にオノを持ち大木を切りたおし原始の沃野を畑に変えてきた。開拓は、伐採を意味したのである。やがて集落ができ町に変わり、町は、まわりの緑を食べながら急速に成長していった。こうして約 100 年、開発に明け暮れた私達がふと足をとめてまわりを見まわしたとき、豊かであったはずの緑は消えていたのである。

帯広市では、こうしたマチづくりの反省にたち、市街化区域内に適正な人口をたもち、都市施設や社会福祉施設が過不足なく配置された、まとまりある都市形成をはかるマチづくりを進めている。帯広の森は、

人間社会と自然環境の調和をはかる、マチづくり戦略の一環として構想されたものに他ならない。また「帯広の森」は、市街地で不足する大公園、緑地の補充、余暇時間の増大に対応するレクリエーション機能の整備、精神的なやすらぎ、土に親しむよろこびなど、子どもから老人にいたるまで、すべての市民の生活をうるおす、多くの機能と目的を有する大規模な緑の総合都市施設でもある。

「帯広の森」予定地は、その大半が平坦な畑であり、60 万本以上の樹木を植えなければならない、気の遠くなるような作業であり、長い時間と膨大な資金を必要とする。そしてなによりも、広大な用地の確保のために、開墾の汗を流し築き上げてきた農地を手放し、生活の転換を余儀なくされる、多くの人々の協力が必要である。帯広市開基 100 年を期して運動施設が建設され、「帯広の森」は、ようやく造成から実質的な利用へと、新しい段階に入ることになる。開拓の汗と努力の積み重ねのうえに、現在に生きる私達が、未来に残す遺産は、いま目に見えるものとなって第一段階の結実をむかえようとしているのである。

マチづくりは、一朝一夕にできるものではない。私たちは、「帯広の森」づくりを通じて痛切にこのことを感じている。遠い未来に夢を託し、2 代、3 代と続けられなければならないからである。今年もまた、市民植樹祭が開催される。緑につつまれた美しいふるさと帯広を夢みて、植えて行く、子どもも、お年寄りも……。

第7章

「帯広の森」 新聞記事

2007（平成 19）年から 2025（令和 7）年までの森づくり活動やイベントなど、帯広の森に関する主な新聞記事を集めたものです。



第 8 章

年 表



年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
昭和30年 (1955年)	8月 6日	吉村博、第5代帯広市長に就任		
昭和44年 (1969年)	6月14日	吉村市長、国際地方自治体連合国際大会のため、ウィーンへ出発	5月23日 5月26日 7月20日	政府「公害白書」を発表 東名高速道路全面開通 米「アポロ11号」月面に着陸
昭和45年 (1970年)	4月 1日 5月23日 9月11日	公園緑地課、機構改革により発足 帯広市第二期総合計画策定審議会発足 (市民代表30名で構成) 同上審議会答申(グリーンプランとしての提起)	3月14日 4月22日	大阪で「日本万国博覧会」開幕 米で環境保護の「アース・デー」
昭和46年 (1971年)	3月 7月 6日 ～8月26日	定例市議会で「第二期総合計画」承認 「第二期総合計画」の市民討議 (延30回開催、「帯広の森」に話題集中)	2月 2日 7月 5日 8月15日	ラムサール条約採択 日本、環境庁発足 ドルショック(1ドル=308円)
昭和47年 (1972年)	2月29日	帯広市都市計画委員会に説明	2月 3日 5月15日 5月26日 6月 5日 7月 7日 8月26日 9月29日	札幌オリンピック開幕(～2月13日) 沖縄返還協定発効、沖縄県の発足 環境庁、初の環境白書を発表 第1回国連環境会議(～6月16日)ストックホルム開催「人間環境宣言」と「人間環境行動計画」を採択 田中内閣成立 ミュンヘンオリンピック開幕(～9月12日) 日中国交回復
昭和48年 (1973年)	2月18日 3月 5月 2日 5月13日 8月14日 8月17日 11月 1日 11月 5日 11月16日 12月 4日 12月 5日 12月22日	関係市民との懇談会 (2月18・24・25・26日と4回開催) 定例市議会に「市政推進5本柱」の一つとして提案 「帯広の森」調査特別委員会設置 (調査費200万計上) 「帯広の森」調査特別委員会審議開始 「帯広の森について」市職労第1回学習会 パンフレット「帯広の森計画のあらまし」発行 「帯広の森」調査特別委員会計画案可決 臨時市議会計画案可決 農業振興地域整備計画一部変更依頼 (帯広市長から芽室町長へ文書依頼) 帯広市農業地域再開発促進協議会兼帯広市農業振興地域整備促進協議会開催 (帯広市農業振興地域整備計画の変更説明) 帯広市都市計画委員会へ計画諮問 同上委員会原案どおり答申 農林省に対し帯広市から事前説明 (芽室町農業振興地域整備計画の一部変更について)	1月27日 2月12日 2月14日 3月19日 6月28日 10月 6日 10月23日	ベトナム和平協定、パリで調印 ワシントン条約採択 日本、変動相場制に移行 E C 6カ国、共同変動相場制に移行 国際捕鯨委、3年以内にナガスクジラを全面禁漁に決定 第4次中東戦争始まる オイルショック この年狂乱物価始まる

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
昭和49年 (1974年)			1月 5日	日中貿易協定調印
	2月12日	帯広圏都市計画公園決定 (面積334.6ha都市計画法第18条第1項による 知事決定)		
	2月21日	第1回「帯広の森を語る市民の集い」世話人会 開催		
	2月25日	帯広市農業振興地域整備計画の一部変更 (農用地区域から「帯広の森」分235haを除外)	2月24日	イスラム諸国首脳会議、天然資源の 恒久主権等のラホール宣言を採択
	2月26日	帯広圏都市計画公園事業認可 (面積233.0ha 都市計画法第59条第1項による 知事認可)		
	3月	用地買収開始(帯広市域分)		
	3月 4日	吉村博、帯広市長を辞職		
	3月14日	「帯広の森市民協議会」事前打合わせ会議開催		
	3月21日	「帯広の森市民協議会」第1回準備会開催 (26団体、35名出席)		
	4月21日	田本憲吾、第6代帯広市長に就任	4月 9日	国連資源特別総会、発展途上国が団結 して新国際経済秩序の樹立を宣言
	5月27日	帯広の森市民協議会第2回準備会開催 後半を設立総会に切り替え、協議会発足 (25団体、33名出席)		
			6月	米国、ローランド教授らが 「フロンによるオゾン層破壊説」を発表 (ネイチャー誌)
	7月 8日	帯広の森市民協議会第1回常任委員会開催		
	8月13日	帯広の森市民協議会会報第1号発行		
	8月17日	「帯広の森模擬市議会」開催 (帯広市勤労者福祉センター大ホール、 帯広の森市民協議会主催、田本市長、 模擬議員8名、傍聴市民50名)	8月30日	「世界人口行動計画」採択
	9月 9日	農業振興地域整備計画並びに道営畑地帯総合 土地改良事業伏古地区の一部変更について依頼 (帯広市長から芽室町長へ文書依頼、昭和47年 着工、受益6.81haの変更)		
	10月31日	「帯広の森」事業計画協議了承 (芽室町長から帯広市長へ)	10月18日	フォード大統領、現職では初来日
	11月23日	第1回中央公園シンポジウム (帯広の森市民協議会主催)		
	12月 3日	農業振興地域整備計画特別管理地域の指定 (知事)	12月 9日	三木内閣成立
	12月 6日	帯広市緑化審議会発足		
	12月20日	帯広圏都市計画公園事業認可変更 (面積307.3ha 河川改修計画決定に伴う追加変 更 都市計画法第59条第1項による知事認可)		
昭和50年 (1975年)	1月21日	第2回中央公園シンポジウム	1月 5日	環境庁、緑の国勢調査の結果発表
	2月12日	「帯広の森」事業計画説明会 (芽室町北伏古地区住民対象)		
	2月20日	第3回中央公園シンポジウム		
	3月	帯広の森造成計画書策定 帯広の森計画基礎調査報告書作成	3月10日	山陽新幹線開通(新大阪～博多間)
	4月	公園建設事業開始(帯広市域分) (第2ブロック、苗圃及び見本林の整備)		
	6月 1日	第1回記念帯広の森市民植樹祭(8.7ha)		
	6月23日	芽室町農業振興地域整備計画の一部変更(農用 地区域から「帯広の森」分62haを除外)		

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
昭和50年 (1975年)	8月 8日	道営畑地帯総合土地改良事業伏古地区の一部計画変更(当該地区を除外)	9月30日	天皇・皇后両陛下、初の訪米
			11月15日	第1回先進国サミット、仏ランブイエ城で開催
昭和51年 (1976年)	1月27日	第1回十勝鉄道シンポジウム (帯広の森市民協議会主催)		
	2月24日	第2回十勝鉄道シンポジウム	2月 4日	インスブルック冬季オリンピック開幕 (～2月16日)
			2月 6日	ロッキード事件表面化
	3月	帯広地域緑化推進計画策定 (第1期:昭和50年度～昭和54年度)		
	4月13日	第3回十勝鉄道シンポジウム		
	5月16日	第2回帯広の森市民植樹祭(3.4ha)		
	9月18日	「十勝鉄道、講演と演劇のタベ」開催 (帯広の森市民協議会主催)	7月17日	モントリオールオリンピック開幕 (～ 8月1日)
昭和52年 (1977年)			12月24日	福田内閣発足
	2月18日	帯広の森市民植樹推進委員会結成 (帯広の森市民植樹祭実行委員会は構成機関として同時に発足)		
	4月27日	芽室町議会同意議決		
	5月 7日	森の少年隊発隊式	5月27日	ソ連200海里水域内の日本漁業に 関する暫定漁業協定正式調印
	5月 8日	第3回帯広の森市民植樹祭(4.6ha)		
			7月23日	ニューヨーク23時間大停電
	10月 5日	帯広圏都市計画公園変更計画決定 (面積402.2ha 都市計画法第18条第1項による 知事決定 既決定面積334.6haから道路面積 2.4haを除き、芽室町分70.0haを加えて402.2ha に変更)		
昭和53年 (1978年)	10月15日	森造成のためのカシワの種子(ドングリ)採取会 開催(帯広の森市民植樹推進委員会、森の少年 隊、ローターアクトクラブ参加)	1月10日	総理府、第1回「婦人白書」を発表
	2月17日	帯広圏都市計画公園事業認可 (面積374.9ha 都市計画法第59条第1項による 知事認可) 同上告示(北海道告示第321号北海道知事)		
	5月14日	第4回帯広の森市民植樹祭(5.0ha)	5月20日	成田国際空港が開港
			7月25日	英マンチェスターの病院で試験管ベ ビーの第1号誕生
			8月12日	日中平和友好条約、北京で調印
昭和54年 (1979年)	11月29日	芽室町北伏古地区農地転用許可(面積62.1ha)	12月 7日	大平内閣発足
			1月	第2次石油危機始まる
	3月	パンフレット「帯広の森」発行		
	5月13日	第5回帯広の森市民植樹祭(4.3ha)	5月 3日	マーガレット・サッチャー英国初の女 性首相となる
			6月28日	第5回主要先進国首脳会議(東京サミッ ト)開催

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
昭和55年 (1980年)			2月13日	レークプラシッド冬季オリンピック開幕(～2月24日)
	5月11日	第6回帯広の森市民植樹祭(5.0ha)	5月20日	南極海洋生物資源保存条約採択
			6月22日	史上初の衆参同日選挙
			7月17日	鈴木内閣発足
	9月22日	陸上競技場着工	7月19日	モスクワオリンピック開幕(～8月4日)
昭和56年 (1981年)			9月22日	イラン・イラク戦争始まる
	3月 1日	新帯広空港開港(旧空港は十勝飛行場として供用)	11月 4日	ロナルド・レーガン大統領が当選
	5月24日	第7回帯広の森市民植樹祭(5.0ha) 大分市緑の親善訪問団、初参加	4月12日	スペースシャトル・コロンビア号初飛行
	11月26日	「帯広の森造成計画について」帯広市緑化審議会に諮問、答申	7月29日	英チャールズ皇太子、ダイアナ・スペンサーと結婚
昭和57年 (1982年)			3月 1日	ソ連の「ベネラ13号」金星に初上陸
	5月16日	第8回帯広の森市民植樹祭(6.7ha)	5月18日	国連人間環境会議10周年のUNEP会議で「ナイロビ宣言」採択
	5月31日	「帯広の森造成計画書」発行	6月23日	東北新幹線開業(大宮-盛岡間)
	7月17日	「北方圏農林博覧会」帯広の森で開幕(開基100年記念事業、通称「十勝博」)		
	10月18日	帯広の森「緑の都市賞」建設大臣賞受賞	11月15日	上越新幹線開業(大宮-新潟間)
	11月10日	帯広圏緑のマスタープラン、市町村分決定	11月27日	中曽根内閣発足
	12月30日	陸上競技場完成	12月 6日	「国連海洋条約」採択
昭和58年 (1983年)	2月 3日	帯広圏都市計画公園変更計画決定 (面積402.5ha 都市計画法第18条第1項による知事決定 既決定面積402.2haから一部不整形地の整形のため6.5haを除外、6.8haを加え402.5haに変更)	2月 4日	日本初の実用静止通信衛星「さくら2号a」打ち上げ
	3月 8日	帯広圏都市計画公園事業認可 (面積368.3ha 都市計画法第59条第1項による知事認可)		
	4月14日	吉村博、死去		
	4月28日	帯広圏緑のマスタープラン、都市計画決定		
	5月15日	第9回帯広の森市民植樹祭(4.6ha) 第1回おびひろブルーグラスコンサート開催		
	8月26日	スピードスケートリンク着工 (屋外パイピングリンク)		
	10月 5日	スピードスケートリンク着工	10月14日	日本初の体外受精児、東北大学医学部附属病院で誕生
	11月26日	「緑の都市賞」建設大臣賞受賞記念モニュメント「蒼穹」完成、除幕式開催(第4ブロック「スポーツの森」内に設置)		
昭和59年 (1984年)			2月 8日	サラエボ冬季オリンピック開幕(～2月20日)
	5月13日	第10回帯広の森市民植樹祭(4.4ha)	4月26日	レーガン米大統領、現職大統領として初めて中国を訪問

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
昭和59年 (1984年)	5月29日	帯広の森の造成により「緑化推進功労者」内閣総 理大臣賞受賞		
	6月 9日	帯広の森市民植樹祭実行委員会「第2回朝日森林 文化賞」受賞		
	7月 1日	財団法人 帯広市文化スポーツ振興財団設立	7月 1日	総務庁発足、初代長官は後藤田正晴
			7月29日	ロサンゼルスオリンピック開幕(～8月 13日)
	8月11日	帯広の森体育館着工		
昭和60年 (1985年)	9月27日	内閣総理大臣中曽根康弘来帯、 帯広の森第2ブロックにて記念植樹		
			10月31日	インディラ・ガンジー首相暗殺
			11月 1日	新札発行(1万円、5千円、千円)
			3月10日	青函海底トンネル貫通
			3月22日	「オゾン層の保護に関するウィーン 条約」締結
	4月 1日	帯広市みどりのまちづくり条例施行	4月 1日	電電公社民営化によりNTT発足
	5月12日	第11回帯広の森市民植樹祭(4.4ha)	5月17日	男女雇用機会均等法、衆議院本会議で 可決
	8月 2日	帯広の森体育館完成		
	8月 3日	第1回博物館セミナー「未来への遺産・帯広の森」 ～4日 開催(帯広百年記念館主催)		
	9月29日	第1回帯広の森・秋の記念植樹開催		
昭和61年 (1986年)	10月11日	アイス・アリーナ着工		
	10月31日	スピードスケートリンク完成		
			1月28日	米スペースシャトル「チャレンジャー」 打上げ失敗
	4月 1日	帯広市帯広の森基金設立	4月28日	ソ連政府、チェルノブイリ原発の爆発 事故を発表
	5月11日	第12回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)	5月 4日	東京サミット開催(～5月6日)
	8月13日	帯広の森野球場着工		
	8月20日	日本建築学会地域シンポジウム(帯広大会) 「都市と農村を結ぶまちづくり」開催		
昭和62年 (1987年)	10月17日	森の少年隊「都市緑化及び都市公園保全美化運 動における都市公園功労者」建設大臣表彰	9月 8日	土井たか子、初の女性党首に就任
			4月 1日	国鉄民営化、JRがスタート
	5月17日	第13回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)		
	6月 1日	サブ・アイス・アリーナ着工 (帯広市文化スポーツ振興財団により施工)		
	7月24日	アイス・アリーナ完成		
			9月14日	第11回全国育樹祭、野幌森林公園に皇 太子殿下をお迎えし開催
			9月16日	「モンテリオール議定書」(フロン)
昭和63年 (1988年)			11月 6日	竹下内閣発足
	12月24日	サブ・アイス・アリーナ完成		
			2月14日	カルガリー冬季オリンピック開幕(～2 月28日)
			4月10日	瀬戸大橋開通
	5月15日	第14回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)		
	5月28日	吉村博の像、第2ブロックに建立(吉村博追悼の 碑をつくる会により除幕)		
	8月 3日	研修センター着工	8月 8日	イラン・イラク戦争 停戦協定成立
			9月17日	ソウルオリンピック開幕(～10月2日)

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
昭和63年 (1988年)	12月21日	研修センター完成	10月31日	「ソフィア議定書」締結(NOx)
昭和64年 平成元年 (1989年)	1月28日	第44回国民体育大会冬季大会、開催	1月 7日	天皇崩御、87歳
			1月 8日	新年号「平成」施行
			3月11日	世界環境問題首脳会議(環境サミット) ハーグで開催 有害廃棄物の越境移動及びその処分の 規制に関するバーゼル条約採択
	5月14日	第15回帯広の森市民植樹祭、前日の降雪のため 史上初の順延となる	4月 1日	消費税実施(3%)
	5月21日	第15回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)	4月26日	特定フロンの全廃に関する「ヘルシン キ宣言」採択
			6月 3日	宇野内閣発足
			6月 4日	北京で天安門事件発生
			8月10日	海部内閣発足
			9月13日	地球環境保全に関する東京会議開催
			11月 7日	地球温暖化対策に関する「ノールドベ イグ宣言」採択
			11月 9日	ベルリンの壁崩壊
平成2年 (1990年)	3月13日	帯広の森野球場完成	3月15日	ソ連の初代大統領にゴルバチョフが就任
	4月21日	高橋幹夫、第7代帯広市長に就任	4月 1日	花の万博、大阪で開幕
	4月26日	野球場駐車場着工		
	5月13日	第16回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)		
	7月 6日	野球場駐車場完成		
	7月27日	帯広デザイン振興協議会第1回ケーススタディ 「帯広の森の役割とデザイン」開催(帯広商工会 議所6階会議室)	8月 2日	イラク軍、クウェート侵攻
	10月28日	帯広の森市民植樹祭実行委員会、営林署、帯広の 森を育てる会(営林署OB会)と帯広市による「育 樹祭準備会」、プレ育樹祭を実施	10月 3日	東西ドイツ統一
			10月23日	「地球温暖化防止行動計画」策定
			11月12日	天皇陛下即位の礼
	12月14日	第1回市民環境シンポジウム 「これで良いのか帯広の森」開催 (公害対策市民会議、緑の十勝会議主催 道新ホール2階中会議室)	12月 2日	秋山氏、日本人初の宇宙飛行
平成3年 (1991年)			1月17日	多国籍軍、イラク攻撃を開始。 湾岸戦争に突入
			3月 9日	新宿に新都庁舎、完成
	5月12日	第17回帯広の森市民植樹祭(3.0ha)		
	6月22日	エゾリスの会が富士グリーンファンドの助成を 受けて「野鳥の観察小屋」を建設	6月 3日	雲仙岳噴火
	10月16日	森の少年隊 財団法人 大和営林事業財団より全 国顕彰	10月	IUCN等が「新・世界環境保全戦略」発表
	10月20日	第1回帯広の森育樹祭(昭和51・52年植樹地)		
			11月 5日	宮澤内閣発足
	12月 5日	グリーントーク「森との語らい」開催 (市民文化ホール小ホール、十勝毎日新聞社、エ ゾリスの会主催)		

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成4年 (1992年)			2月 8日	アルベールビル冬季オリンピック開幕 (～2月24日)
	4月 1日	機構改革により緑化環境部誕生 公園緑地課、みどりと花の課と公園課に分課		
	5月17日	第18回帯広の森市民植樹祭(3.0ha)	6月 3日	環境と開発に関する国連会議「地球サ ミット」ブラジルのリオデジャネイロ で開催
			7月11日	山形新幹線開業(福島-山形間)
	7月25日	「みどりのいむ'92」緑ヶ丘公園で開幕	7月25日	バルセロナオリンピック開幕(～8月10 日)
	8月24日	運動施設区パークゴルフ場及び園路着工		
	9月28日	帯広の森市民育樹祭実行委員会設立		
	10月18日	第2回帯広の森育樹祭(昭和51～53年植樹地)		
	12月 1日	運動施設区パークゴルフ場及び園路完成		
平成5年 (1993年)			1月15日	釧路沖地震発生(M7.8)
	2月16日	「帯広圏地方拠点都市地域」に指定		
	3月 5日	帯広圏都市計画公園変更計画決定 (面積405.6ha 都市計画法第18条第1項による 知事決定 既決定面積402.5haに栄通等の計画 決定に伴い3.1ha増加し405.6haに変更)		
	3月31日	帯広圏都市計画公園事業認可 (面積331.1ha 都市計画法第59条第1項による 知事認可)	4月23日	天皇・皇后両陛下が歴代天皇として初 めて沖縄を訪問
	5月16日	第19回帯広の森市民植樹祭(3.0ha)	6月 9日	釧路市でラムサール条約第5回締約国 会議開催
	7月31日	陸上競技場全天候改修工事着工	7月12日	北海道南西沖地震発生(M7.8)
	8月 3日	「帯広圏地方拠点都市地域・基本計画」承認	8月 9日	細川内閣発足
	8月11日	森の少年隊「第11回前田一步園賞」受賞		
	10月 4日	帯広の森「都市景観大賞」建設大臣賞受賞		
	10月17日	第3回帯広の森市民育樹祭(昭和53年植樹地)	11月 1日	欧州連合(EU)発足
			11月12日	「環境基本法」成立
平成6年 (1994年)	2月25日	「帯広の森利活用計画」策定	2月 4日	初の純国産ロケットH2の打上成功
			2月12日	リレハンメル冬季オリンピック開幕 (～2月28日)
			4月28日	羽田内閣発足
	5月15日	第29回帯広の森市民植樹祭(4.5ha)	6月30日	村山内閣発足
	8月19日 ～20日	帯広の森のワークショップ「新しい視点での森 づくり」開催(第3ブロック、昭和55年植樹地 高野ランドスケーププランニング(株)と共催)		
	8月31日	陸上競技場全天候改修工事完成	9月 4日	関西国際空港開港
	9月16日	平成6年度「環境共生モデル都市」に指定(エコシ ティ)	10月 4日	北海道東方沖地震発生(M8.1)
	10月16日	第4回帯広の森市民育樹祭(昭和54年植樹地)		
	12月 3日	'94/95スピードスケートワールドカップ 帯広大会(第1戦・第2戦)開催		
	12月 7日	'94/95スピードスケートワールドカップ 帯広大会(第3戦・第4戦)、史上初の連続開催	12月28日	三陸はるか沖地震発生(M7.5)

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成7年 (1995年)	3月30日	帯広の森20年史『帯広の森～私たちと帯広の森づくり』(帯広の森20周年記念実行委員会20年史編纂委員会編)発行	1月17日	阪神・淡路大震災発生(M7.2)
	4月30日	帯広の森20周年記念実行委員会がタイムカプセルを埋設	3月20日	オウム真理教による地下鉄サリン事件発生
	5月12日	第21回帯広の森市民植樹祭(4.2ha)		
	10月15日	第5回帯広の森市民育樹祭(1982年植樹地)	11月 9日	MLBで野茂英雄がアジア人初の新人王に
			1月11日	橋本内閣発足
平成8年 (1996年)	4月 1日	森の交流館・十勝および北海道国際センター(帯広)開設		
	5月12日	第22回帯広の森市民植樹祭(5.0ha)		
	6月 5日	森の少年隊が「みどりの愛護」功労者建設大臣賞受賞	7月19日	アトランタオリンピック開幕(～8月4日)
	9月28日	帯広の森市民プール開設	11月 5日	米クリントン大統領が再任
	10月13日	第6回帯広の森市民育樹祭(1980年植樹地)	11月21日	雌阿寒岳噴火
			12月 5日	原爆ドームが世界遺産に登録
平成9年 (1997年)			3月22日	秋田新幹線開通(盛岡-秋田間)
	5月11日	第23回帯広の森市民植樹祭(5.0ha)	4月 1日	消費税が3%から5%へ
	9月 1日	帯広の森弓道場および帯広の森アーチェリー場開設	7月 1日	香港が中国の特別行政区となる
	10月12日	第7回帯広の森市民育樹祭(1983年植樹地)	10月 1日	北陸新幹線開業(高崎-長野間)
			12月11日	京都議定書採択
平成10年 (1998年)			2月7日	長野冬季オリンピック開幕(～2月22日)
	4月21日	砂川敏文、第8代帯広市長に就任		
	5月 7日	帯広ライオンズクラブが記念植樹等による「桜の広場」造成活動を開始	6月10日	サッカーFIFAワールドカップフランス大会開催
	5月17日	第24回帯広の森市民植樹祭(4.3ha)	7月 4日	日本初の火星探査機「のぞみ」の打ち上げに成功
	6月	エゾリスの会が「里山をつくろうプロジェクト」を開始	7月30日	小渕内閣発足
	10月 4日	帯広の森市民育樹祭実行委員会が「国土緑化推進機構理事長賞」受賞	10月8日	金大中韓国大統領来日、日韓共同宣言を発表
	10月25日	第8回帯広の森市民育樹祭(1981・1984年植樹地)		
平成11年 (1999年)	5月16日	第25回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)	2月28日	国内初の脳死移植
			5月 1日	瀬戸内しまなみ海道開通
	10月17日	第9回帯広の森市民育樹祭(1984・1985年植樹地)	9月21日	台湾で大地震、死者は2400人以上
			10月15日	国境なき医師団がノーベル平和賞を受賞
			12月 4日	山形新幹線開業(山形-新庄間)

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成12年 (2000年)			2月 6日	太田房江氏が日本初の女性都道府県知事として大阪府知事に当選
			3月31日	有珠山噴火
			4月 5日	森内閣発足
	4月30日	帯広の森テニスコート開設	7月 1日	金融庁発足
	5月21日	第26回帯広の森市民植樹祭(3.8ha)	9月15日	シドニーオリンピック開幕(～10月1日)
	10月15日	第10回帯広の森市民育樹祭(1976・1977年植樹地)	10月10日	白川英樹氏がノーベル化学賞を受賞
	11月28日	森の少年隊が「財団法人ソロプチミスト日本財団環境貢献賞」を受賞	10月13日	金大中韓国大統領がノーベル平和賞を受賞
平成13年 (2001年)			1月26日	インド西部でM7.7の大地震
			3月31日	ユニバーサル・スタジオ・ジャパンがオープン
	4月17日	高橋猛文、帯広の森市民植樹祭実行委員会実行委員長に就任	4月26日	小泉内閣発足
	5月20日	第27回帯広の森植樹祭(3.5ha)	9月 4日	東京ディズニーシーがオープン
	10月 8日	帯広の森スポーツセンター開設	9月11日	米で同時多発テロ事件発生
	10月21日	第11回帯広の森市民育樹祭(1991・1992年植樹地)	10月10日	野依良治氏がノーベル化学賞を受賞
			11月20日	MLBでイチローが新人王とMVPを同時受賞
平成14年 (2002年)			2月 9日	ソルトレークシティ冬季オリンピック開幕(～2月25日)
	5月19日	第28回帯広の森市民植樹祭(4.0ha)	5月31日	サッカーFIFAワールドカップ韓国/日本大会開催
	7月	帯広の森球技場開設	8月26日	地球サミットがヨハネスブルクで開催
	9月21日 ～23日	第10回2002年全国雑木林会議とかち大会(同実行委員会主催、とかちプラザ・帯広の森ほか)開催	10月 8日	小柴昌俊氏がノーベル物理学賞を受賞
	10月20日	第12回帯広の森市民育樹祭(1987・1988年植樹地)	10月 9日	田中耕一氏がノーベル化学賞を受賞
	11月 1日	森の少年隊が「帯広市開拓120年・市政施行70年記念団体特別表彰」を受賞		
	11月	「森の回廊@十勝」が森づくり活動を開始	12月 4日	東北新幹線開業(盛岡-八戸間)
			12月14日	種子島宇宙センターで「H-IIAロケット4号機」を打ち上げ
			2月 1日	米スペースシャトル「コロンビア号」が空中分解
平成15年 (2003年)	3月28日	帯広圏都市計画公園変更計画決定(自由が丘地区の緑地0.9haを追加編入、計画面積406.5haに)	3月	中国でSARSが大流行
	4月29日	帯広の森30周年記念映像の撮影に着手	5月 9日	小惑星探査機「はやぶさ」打ち上げ成功
	5月18日	第29回帯広市民植樹祭(4.0ha)	9月26日	十勝沖でM8.0の大地震、負傷者800人以上
	9月20日 ～21日	とかち森づくりシンポジウム「癒しの場としての森の可能性を探る」(同実行委員会主催、帯広の森ほか)開催		

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成15年 (2003年)	10月 2日	帯広ライオンズクラブの「桜の広場」造成活動が完了		
	10月19日	第13回帯広の森市民育樹祭 (1989・1990年植樹地)		
平成16年 (2004年)			3月13日	九州新幹線開業(新八代-鹿児島中央間)
	5月16日	第30回帯広の森市民植樹祭(5.5ha)、市民植樹祭が終了	8月13日	アテネオリンピック開幕(～8月29日)
			8月22日	夏の甲子園、駒大苫小牧高校が北海道勢初の優勝
	10月17日	第14回帯広の森市民育樹祭 (1993・1995年植樹地)	10月23日	新潟県中越地方でM6.8の大地震
	11月20日	帯広の森30周年記念シンポジウム「考えようこれからの帯広の森」開催(寿御苑)	11月 1日	20年ぶりに新紙幣が発行
	11月30日	エゾリスの会が「第5回十勝環境賞環境特別賞」(十勝毎日新聞社主催)を受賞		
			12月26日	スマトラ島沖でM9.0の大地震、死者及び行方不明者数30万人以上
平成17年 (2005年)	1月31日	帯広の森30周年記念映像「街を抜けると森がある～帯広の森・30年の軌跡」完成	2月17日	中部国際空港開港
			3月25日	愛知万博開幕
	5月15日 ～30日	児童・生徒らによる植樹活動(帯広市主催、0.6ha)		
	5月22日	帯広の森自然観察会「春の森あそび」(帯広市・エゾリスの会・森の回廊@十勝主催)	6月 1日	クールビズスタート
	8月～	北海道「もりの学校推進事業」により、帯広の森に「げんきの森」区域を設定し、森の少年隊が同区域内で体験活動の取り組みを開始	8月25日	米国南部に過去最大級のハリケーン「カトリナ」上陸 死者1000人超
	10月 1日	帯広の森自然観察会「秋の森あそび」(帯広市・エゾリスの会主催)開催		
	10月17日	第15回帯広の森市民育樹祭(1999年植樹地)市民植樹祭が終了	11月20日	宇宙探査機「はやぶさ」が小惑星イトカワに着陸
平成18年 (2006年)			1月 1日	東京三菱銀行とUFJ銀行が合併、世界最大の銀行へ
			2月10日	トリノ冬季オリンピック開幕(～2月26日)
	3月 1日	「十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会」設置		
	4月	帯広の森に関する情報誌「帯広の森だより」創刊(帯広市発行)		
	4月 1日	帯広市「市民団体による帯広の森づくり活動の促進及び支援に関する要綱」施行		
	4月10日	北海道「『北の里山』づくり構想」に基づく「北の里山」に登録される	5月27日	ジャワ島で大地震、約6000人死亡
	5月	帯広市「(仮称)帯広の森管理センター」整備基本構想策定		
	5月21日 ～6月 3日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動(帯広市主催、0.7ha)		
	6月11日	帯広の森育樹体験ワークショップ(帯広市主催、森の回廊@十勝・帯広みやま会協力)開催	7月 5日	北朝鮮が「テポドン2号」を含むミサイル7発を発射
	7月26日	森の少年隊が「平成18年度緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰」受賞	9月 6日	秋篠宮妃が親王を出産、12日悠仁と命名

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成18年 (2006年)	9月24日	帯広の森自然観察会「秋の森を歩いてみよう」 (帯広市主催、十勝グリーンインストラクター協 会協力)開催		
	9月29日	十勝飛行場周辺の帯広の森づくり検討会が提言 書とりまとめ	9月26日	安倍内閣発足
	10月22日	帯広の森育樹体験ワークショップ(帯広市主催、 森の回廊@十勝協力)開催	10月 9日	北朝鮮が地下核実験実施、国連が制裁
	11月15日	帯広市「十勝飛行場周辺の森づくり計画書」策定		
	11月19日	帯広の森自然観察会「初冬の森を楽しもう」(帯 広市共催、エゾリスの会協力)開催		
	12月～	財団法人林野弘済会帯広支部が帯広の森で森づ くり活動を開始		
平成19年 (2007年)			1月 9日	防衛省発足
	3月	帯広の森30周年記念誌「帯広の森 私たちと帯 広の森づくりvol.2」発行		
	4月22日	「帯広の森サポーターの会」が森づくり活動開始		
	5月20日 ～28日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動 (帯広市主催、0.8ha)		
			7月29日	参議院選挙にて自民党が歴史的な大敗
			9月14日	月探査衛星「かぐや」打ち上げ成功
平成20年 (2008年)			9月26日	福田内閣発足
			10月 1日	郵政民営化開始
	1月21日	水野トシ氏遺言執行人より、寄附申込書の提出 あり(帯広の森基金)	1月30日	中国製の冷凍餃子から殺虫剤などに使用 される有毒成分メタミドホス検出
	2月 5日	故水野トシ氏に感謝状贈呈		
			4月 1日	後期高齢者医療制度開始
	5月 5日	エゾリスの会、森の回廊@十勝が「モニタリング サイト1000」調査受託		
	5月18日 ～27日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動 (帯広市主催0.9ha)		
	7月22日	帯広市が「環境モデル都市」に指定		
	7月24日	第1回帯広の森意見交換会開催		
			8月 8日	北京オリンピック開幕(～8月24日)
平成21年 (2009年)			9月15日	米「リーマン・ブラザーズ」経営破綻
			9月24日	麻生内閣発足
			10月 7日	南部陽一郎・小林誠・益川敏英らがノー ベル物理学賞を受賞
			10月 8日	下村脩氏がノーベル化学賞を受賞
			11月 4日	米大統領選、バラク・オバマが当選
	2月25日	第2回帯広の森意見交換会開催		
			3月23日	第2回WBC(ワールド・ベースボール・ クラシック)で日本代表が連覇
			4月 5日	北朝鮮がミサイル発射(日本上空を通過)
	5月17日 ～22日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動 (帯広市主催1.4ha)		
	7月 6日	第3回帯広の森意見交換会開催		
			8月 6日	裁判員裁判開始
	9月 1日	帯広の森づくり協議会設置 明治北海道十勝オーバル落成	9月 1日	消費者庁発足
			9月16日	鳩山内閣発足
			10月 9日	米オバマ大統領がノーベル平和賞受賞
	11月17日	森の回廊@十勝が第5回帯広市まちづくりデザ イン賞(まち育て部門)を受賞		

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成22年 (2010年)			1月12日	ハイチでM7.0の大地震、死者22万人以上
	2月	第6期帯広市総合計画策定	2月12日	バンクーバー冬季オリンピック開幕(～2月28日)
	4月 1日	帯広の森・はぐくむオープン指定管理者制度導入(第1期)	4月 1日	子ども手当法・高校無償化法施行
	4月21日	第9代市長に米沢則寿就任		
	4月29日	「自然にいいこと、再出発。カンナ・カンナ」が森づくり活動開始		
	5月16日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動		
	～6月 8日	(帯広市主催1.3ha)		
	6月 8日	「美幌報徳会」が森づくり活動開始	6月 8日	菅内閣発足
			6月13日	小惑星イトカワ着陸の探査機「はやぶさ」が7年ぶりに地球に帰還
			8月 5日	チリのサンホセで鉱山落盤事故
平成23年 (2011年)			9月21日	中国、レアアース対日輸出禁止
	10月29日	帯広の森木質バイオマス賦存量調査業務完了	10月 6日	根岸英一、鈴木章両氏がノーベル化学賞受賞決定
			12月 4日	東北新幹線、新青森まで全線開通
			1月20日	中国、2010年の国内総生産(GDP)で日本を抜き世界第2位
	3月	十勝飛行場周辺の帯広の森づくり基本設計策定		
			3月11日	東日本大震災、三陸沖震源でM9.0
			3月12日	福島第1原発で爆発
				九州新幹線開業(博多・新八代間)
	5月12日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動(帯広市主催2.8ha)		
	5月29日	第62回北海道植樹祭開催		
平成24年 (2012年)			9月 2日	野田内閣発足
	10月23日	エゾリスの会が前田一步園賞を受賞		
	2月29日	帯広の森における調査取りまとめおよび帯広の森リーフレット作成業務完了 リーフレット「帯広の森のいま」完成		
	5月15日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動(帯広市主催0.6ha)	5月 5日	北海道泊原発3号機、運転中止(国内の原発はすべて運転中止)
			5月21日	金環日食観測
			5月22日	東京スカイツリー開業
	6月 2日	帯広の森を巡る散策ツアー開始		
			7月27日	ロンドンオリンピック開幕(～8月12日)
			10月 8日	京都大学山中伸弥教授がノーベル医学・生理学賞受賞
			12月26日	第2次安倍内閣発足
平成25年 (2013年)			1月20日	米オバマ大統領再任
	2月 2日	帯広の森展示キャラバン開始	2月25日	韓国朴槿恵大統領が女性初の大統領として選出
	4月 1日	帯広の森・はぐくむ指定管理者制度更新(第2期)		
	5月 1日	「帯広の森ファンクラブ」が帯広の森で森づくり活動を開始	5月23日	三浦雄一郎が世界最高峰・エベレストに史上最高齢(80歳7ヶ月)で登頂に成功
	5月14日	児童・生徒、海外からの研修生らによる植樹活動(帯広市主催0.6ha)		
	～26日		6月22日	世界遺産に富士山が登録される

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成25年 (2013年)	8月 8日	「モニタリングサイト1000」のカメラに特定外来生物のアライグマが確認される		
	10月 5日	森の少年隊が全国緑の少年団活動発表大会優良賞、森の少年隊指導委員会が緑の少年団育成成功労賞をそれぞれ受賞		
			12月 4日	和食が無形文化遺産に登録されることが決定
			12月14日	中国の無人探査機「嫦娥(じょうが)3号」月面着陸に成功
平成26年 (2014年)	1月21日	帯広の森 森づくりガイドライン検討開始	1月 6日	小額投資非課税制度「NISA(ニーサ)」開始
	2月28日	十勝飛行場の支障木撤去完了	2月 7日	ソチ冬季オリンピック開幕(～2月23日)
	3月	帯広市教育研究所が小学校社会科副読本「おびひろ」で帯広の森のDVD教材を作成	3月 1日	ロシアによるクリミア侵攻
	4月13日	米沢則寿が市長に再選 普通選挙法施行後、初の無投票選挙	4月 1日	消費税が5%から8%へ
	5月13日 ～25日	児童・生徒、海外の研修生らによる植樹活動(帯広市主催0.5ha)		
	8月28日	帯広の森40周年記念実行委員会発足	9月27日	御嶽山噴火
	11月30日	「帯広の森40周年記念ティーチ・イン」開催	12月13日	小惑星探査機「はやぶさ2」打ち上げ成功
平成27年 (2015年)	3月30日	帯広の森 森づくりガイドライン策定		
	6月28日	帯広空襲を語る会 絵本作りワークショップ開催		
	7月 6日	環境省生物多様性保全上重要な里地里山に選定	9月25日	国連サミットで「SDGs」採択
			10月 5日	大村智氏ら3氏がノーベル生理学・医学賞を受賞
			10月 6日	梶田隆章氏がノーベル物理学賞を受賞
平成28年 (2016年)			11月30日	パリ協定採択(地球温暖化対策の世界共通の目標を定めた)
	3月	大空、森の里小学校児童に築山名称募集し「もりの山」に決定	3月26日	北海道新幹線開業(新青森 - 新函館間)
			4月14日	熊本地震発生(M6.5)
			5月27日	オバマ米大統領が現職の大統領としては初めての広島県に訪問
	6月10日	帯広畜産大学公認森づくりサークル もりとも! 森づくり活動開始		
	6月20日	「もりの山」完成	8月 5日	リオ・デ・ジャネイロオリンピック開幕(～8月21日)
			10月 3日	大隅良典氏がノーベル生理学・医学賞を受賞
平成29年 (2017年)	3月	森の少年隊活動終了		
	4月28日	とかちキムンカムイの森 森づくり活動開始		
	6月10日	エゾリスの会 「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰 受賞	10月 5日	カズオ・イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
平成30年 (2018年)			2月 9日	ピョンチャン冬季オリンピック開幕(～2月25日)
	4月 4日	認定NPO法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち 森づくり活動開始		
	4月27日	十勝きこりクラブ 森づくり活動開始		
	9月 3日	富士通株式会社帯広支店 森づくり活動開始	9月 6日	北海道胆振東部地震発生 (M6.7) 道内で大規模停電発生
平成31年 令和元年 (2019年)			10月 1日	本庶佑氏がノーベル生理学・医学賞を受賞
			5月 1日	新天皇の即位に伴い「令和」へ改元
			5月 4日	大樹町から民間として初めて宇宙空間 へ「MOMO3号機」打ち上げ成功
	5月27日	帯広の森町内会子ども会想い出植樹の有志グループ 森づくり活動開始		
	9月21日	帯広の森づくり協議会視察研修 視察先:帯広農業高校カシワ林		
令和2年 (2020年)			10月 1日	消費税8%から10%へ
			10月 9日	吉野彰氏ら3氏がノーベル化学賞受賞
	11月23日	アジア都市景観賞 受賞		
	4月 1日	おびひろ市民学がスタート。中学生向け「SDGsを学ぼう」にはぐくーむでの帯広の森の学習が採用される		この年から新型コロナウイルスが世界的大流行する
	9月13日	NHKさわやか自然百景で帯広の森が放映される	7月 1日	全国でレジ袋の有料化がスタート
令和3年 (2021年)	11月30日	宮崎直美氏 日本緑化工学会研究奨励賞 受賞	9月16日	菅内閣発足
	3月21日	帯広の森・はぐくーむにて「はぐくーむ10年の歩み活動報告会」を開催		
	8月17日	富士通株式会社帯広支店 森づくり活動終了	7月23日	東京オリンピック開幕(～8月8日)
			9月 1日	デジタル庁発足
令和4年 (2022年)			10月 4日	岸田内閣発足
			10月 5日	眞鍋淑郎氏がノーベル物理学賞受賞
			2月 4日	北京冬季オリンピック開幕(～2月20日)
			4月 1日	成年年齢が20歳から18歳に変わる改正民法が施行
令和5年 (2023年)	6月30日	十勝きこりクラブ 森づくり活動終了		
	12月13日	十勝飛行場周辺駐車場・園路 完成		
	2月 9日	帯広の森50周年記念事業実行委員会発足		
	4月 4日	帯広市開拓140年・市制施行90年を記念した動画、もりの山編、吉村博像編を製作 YouTubeで公開	4月 1日	こども家庭庁発足
令和6年 (2024年)	8月 1日	帯広の森高校生フォトコンテスト実施		
			10月 1日	インボイス(適格請求書)制度がスタート
			1月 1日	能登半島地震発生 (M7.6)
	2月20日	帯広の森50周年記念ロゴマーク作成		
	3月31日	とかちキムンカムイの森 森づくり活動終了		
	4月 1日	帯広の森フォトコンテスト 実施		
	5月19日	帯広の森50周年記念植樹・森づくりの集い開催		
			6月25日	日高山脈襟裳十勝国立公園が誕生

年	月日	森づくりに関する動き	月日	日本・世界の動き
令和6年 (2024年)			7月 3日	新紙幣発行
			7月26日	パリオリンピック開幕(～8月11日)
	8月 6日	帯広の森に関するアンケート 実施		
	9月29日	帯広の森50周年記念シンポジウム 開催		
			10月 1日	石破内閣発足
	11月 1日	ぶれいおん・とかち 森と人を育てるコンクール 「木育活動を行う団体部門」最優秀賞 受賞		
	12月17日	三日月則昭氏 北海道社会貢献賞(林業関係者 功労者)受賞		

第9章

「帯広の森」に係る論文等



[掲載リスト]

本記念誌巻末に、以下の調査報告書等をDVDに収録しています。

1. 帯広の森計画基礎調査報告書
発行：昭和50年（1975年）3月
帯広市（委託先：（株）地質開発コンサルタンツ）
2. 帯広の森造成計画書
発行：平成2年（1990年）2月22日
帯広市
3. 帯広の森利活用計画報告書
発行：平成6年（1994年）2月
帯広市
（委託先：高野ランドスケーププランニング（株））
4. 帯広の森20周年記念誌
発行：平成7年（1995年）3月30日
帯広の森20周年記念実行委員会
5. 帯広の森30周年記念誌
発行：平成19年（2007年）3月
帯広の森市民植樹祭実行委員会
帯広の森市民育樹祭実行委員会
6. 帯広の森40周年記念誌
発行：平成27年（2015年）3月
帯広の森40周年記念事業実行委員会
7. 帯広の森 森づくりガイドライン
発行：平成27年（2015年）3月
帯広市都市建設部みどりの課
8. 十勝飛行場周辺の帯広の森づくり計画書
発行：平成18年（2006年）11月15日
帯広市
9. 帯広圏都市計画図（帯広市）
発行：令和6年（2024年）2月
帯広市
縮尺 1：15,000
※複製、再配布禁止
10. 十勝平野の森林の変遷と現状
—森と郷土の共生のために—
発行：平成14年（2002年）9月
どんぐりばんく
11. 「帯広の森」：市民参加による都市近郊林造成の意義
発行：平成12年（2000年）2月
神沼 公三郎；小鹿 勝利
北海道大学農学部 演習林研究報告,57（1）,1-26

12. 帯広の森周辺航空写真（昭和46年）
13. 帯広の森周辺航空写真（平成28年）
14. 井手任・武内和彦・伊藤育子・池田亨嘉（1996）「帯広」生態回廊都市へ—そのポテンシャルと現実の間を埋めるもの—, BIO-City, 8：18-25.
15. 武内和彦（1998）自然環境の復元—おびひろの可能性—, 帯広百年記念館紀要, 16：55-74.
16. 橋詰直道（2004）帯広市におけるグリーンベルト計画—帯広の森づくりと市民の関わり—, 駒澤地理, 40：83-103.

上記調査報告書等以外に、様々な帯広の森に関する論文等をご紹介します。

- 池田亨嘉（2020）チョウが示す「帯広の森」が還る自然, 昆虫と自然, 55（2）：12-15.
- 池田亨嘉・伊藤育子（1996）市民の自然とのふれあい—帯広市の事例—, ランドスケープ研究, 59：154-155.
- 石下亜衣紗・高杉麻莉子・日野貴文・吉田遼人・上原裕世・吉田剛司（2015）, 帯広の森における鳥類ラインセンサスによる記録, 酪農学園大学紀要, 40（1）：17-21.
- 市村恒士・黒澤和隆（2005）都市林の二酸化炭素固定効果に関する研究—北海道帯広市「帯広の森」を事例として—, 日本建築学会環境系論文集, 597：81-87.
- 伊藤育子（1997）まちを緑で取り囲もう—森で遊び, 森を育て, 自然との関係性を結び直す—, 森林科学, 19：64-68.
- 伊藤育子（2019）楽しく集い、森を育む。エゾリスの会と「帯広の森」のちょっといい関係, 森林保護, 350：6-7.
- 伊藤育子・佐々木梨江（2023）未来のための森づくり 第4期 エゾリスの会, グリーンレター, 45：20-21.
- エゾリスの会（1994）GREEN TALK 森との語り, 88pp.
- エゾリスの会・さっぽろ自然調査館（2021）FGF 富士フィルムグリーンファンド助成 未来のための森づくり事業「帯広の森 里山づくり2017～2020年度報告書」, 82pp.
- 大熊勲・堤公宏・伊藤育子（2016）都市公園「帯広の森」におけるアライグマの分布状況, 帯広百年記念館紀要, 34：55-66.

- 自然環境研究センターグリーンレター編集部 (2021) 100 年をかけて帯広の森をつくる, グリーンレター, 43: 4-7.
- 紺野康夫・平工哲夫 (1996) 帯広の森内につくられた記念の森における針葉樹の生育と林床植生, 帯広畜産大学学術研究報告, 19: 243-252.
- The JR Hokkaido 編集部 (2013) エゾリスで知る? 帯広の森と街づくり, The JR Hokkaido (JR 北海道車内誌), 310: 32-33.
- 鈴木貢・小林英嗣 (2003) 帯広の森と協働のまちづくり (都市計画), 日本建築学会技術報告書, 18: 303-306.
- 曾川秋恵・山内健生 (2023) 北海道帯広市の都市公園「帯広の森」のあり相, 都市有害生物管理, 13 (2): 43-52.
- 中本雪絵・佐藤雅俊・丸山純孝 (2004), 帯広市の公園林における植生と鳥相の関係, 日本緑化学会誌, 30: 145-150.
- 丹羽真一・渡辺展之・渡辺修 (2001) 帯広の森における植栽林の現況評価と里山作りへの提言—市民調査の結果から—, 帯広百年記念館紀要, 19: 55-66.
- 丹羽真一・渡辺修・渡辺展之・宮崎直美・伊藤育子・三日月則昭・池田亨嘉・佐藤雅俊 (2024) 帯広の森における植栽林の構造と 17 年間の変化, 帯広百年記念館紀要, 42: 1-17.
- 宮崎直美 (2011) 帯広の森における植物種多様性と人々との関わり, 帯広畜産大学修士論文, 82pp.
- 宮崎直美 (2017) エゾリスの会 森を見つめ続ける人をつなぐ帯広の森 植物相調査, モーリー: 北海道ネイチャーマガジン, 46: 26-27.
- 宮崎直美・三浦華織・平田昌弘 (2017) 都市公園「帯広の森」で植栽後 33 年を経て定着した在来草本・木本の分布と林分タイプとの関係, 日本緑化学会誌, 43 (1): 62-67.
- 宮崎直美・平田昌弘・菊池俊一 (2019a) 都市公園「帯広の森」で植栽後 35 年が経過した落葉広葉樹林・常緑針葉樹林の林床環境が木本実生の侵入定着過程に与える影響, 日本緑化学会誌, 45 (1): 27-32.
- 宮崎直美・平田昌弘・菊池俊一 (2019b) 都市人工林に自然侵入した若齢木の地際直径, 樹高による樹齢推定式の作成および適用性の検討, 日本緑化学会誌, 45 (1): 212-215.
- 宮崎直美 (2020) 北海道十勝地方の都市人工林における木本実生の侵入定着過程と天然更新を促進する管理方法に関する研究, 岩手大学大学院連合農学研究科博士論文, 138pp.
- 宮崎直美 (2023) 都市人工林の植生管理とモニタリング—「帯広の森」を事例として—, 日本緑化学会誌, 48 (3): 488-489.
- 木村ほのか (2022) 「市民協働」の森づくり都市公園「帯広の森」を事例として, 帯広畜産大学卒業論文, 43pp.
- 斉藤新一郎 (2004) 帯広の森 30 周年基調報告, 十勝毎日新聞掲載文 (参考: 30 周年記念誌 P57).
- 斉藤新一郎 (2018) 帯広の森サポーターの会・市民による森づくりの要点
- 斉藤新一郎 (2018) 帯広の森サポーターの会を現地指導してのコメント.
- 斉藤新一郎 (2019) 帯広の森サポーターの会を現地指導してのコメント (その 2).
- 斉藤新一郎 (2019) 帯広の森におけるアオダモ及びアカエゾトウヒの植栽方法へのコメント.
- 鈴木俊一 (2016) 都市で森を育てつづけてきた 40 年, Civil Engineering Consultant, 273, 22-25. 一般社団法人建設コンサルタンツ協会
- 日月伸 (2015) 「公」の森を「共 (協)」で管理する—むかわ町有林と帯広の森の事例—, 開発こうほう 2017-4, 41. 一般財団法人北海道開発協会
- 日月伸・大熊勳 (2024) 資源をもちより、地域をよりよく—公園管理における管理者の枠を超えた連携 (北海道帯広市の三者連携の事例)—, 公園緑地, Vol85No1, 23-24. 一般社団法人日本公園緑地協会
- 日月伸 (2015) 市民が育て、都市と共生する「帯広の森」, モーリー: 北海道ネイチャーマガジン, 39: 68. 公益財団法人北海道新聞野生生物基金
- 日月伸 (2024) 森林教育と市民協働の森づくり, 自然とともに生きる森林教育学, 167-173. 海青社

編集後記

「帯広の森」市民植樹祭が始まって50年を経ました。思い返せば、52年前、大学の卒論の最後に、森の芝生広場にひっくり返って青空を見ている自分がいる。

そのようなことを書いて終わったことを思い出します。夢を夢見ていた時が青春というものだったのでしょうか。人の人生には休みがありません。時は常に進みます。

「帯広の森」に関わって52年経ちました。団塊世代として帯広に生まれ、大学時代は東京に暮らしていました。時代背景は戦後復興から世界に出ていく日本が活性化していった時代です。また様々な矛盾も出てきた時代です。陽と陰が混沌とした時代であって、己を見失いがちな時代でもありました。バンングラディッシュの独立とヴェトナム戦争があり、国という事を強く意識した出来事でした。そして何よりも人として生きることを考えた時でもありました。そんな日常生活で吉村博市長の近代的田園都市論と出会いました。生まれ故郷に帰ろうと決め、帯広で父の経営する会社に勤めました。爾来、志を同じくする仲間恵まれ、様々な活動をするようになりました。通奏低音として「帯広の森」を価値軸の原点に据えることによって、私の論理体系はなされてきたのだと思います。

「帯広の森」50周年記念事業を迎え、実行委員の一人として携われることは大いなる喜びであります。20年誌30年誌40年誌50年誌と全てに関わることが出来ました。このことは市民だけではなく、帯広市の担当課の皆様と一緒になされて来ました。また50周年事業を展開するにあたっては、帯広市の予算付けはもとより、市民、団体、企業の方々からも多くの協賛金を戴きました事を無くして記念事業は出来ませんでした。ここに実行委員会として深く感謝申し上げます。また記念誌を発刊するにあたりまして、多くの市民の皆様からご寄稿いただき感謝申し上げます。

基調講演をいただきました石川幹子先生。記念誌に特別寄稿を戴きました小池孝良さん、写真絵本の小寺卓矢さん、帯広の森たんけんブックの北海道森林管理局の平田美紗子さん、デザインの檜

山知弘さん、記念誌のデザイン編集の七尾喜弘（大同出版）さんには限られた予算と時間の中で素晴らしい出版をして戴きました事感謝申し上げます。

吉村市長は毎年成人式に四文字の漢字からなる言葉を贈っていました。これは昭和47年市長として最後に贈られた言葉です。

——「草波樹海」（風雪有情より）

アカシヤ、白樺、すもも、など短距離に強いものに、檉、楡、榆、かつらなど長距離を得意とするランナーを配して、“帯広の森”チームを編成したいものである。そのためには、どうしても、全市民の力を借りなければならない。市民一人ひとりに植樹をしてもらい、それを大事に育ててもらいたいと考えている。私は、そういう行為を通じて、はじめて街の伝統というものができのだと固く信じている。（一部略）

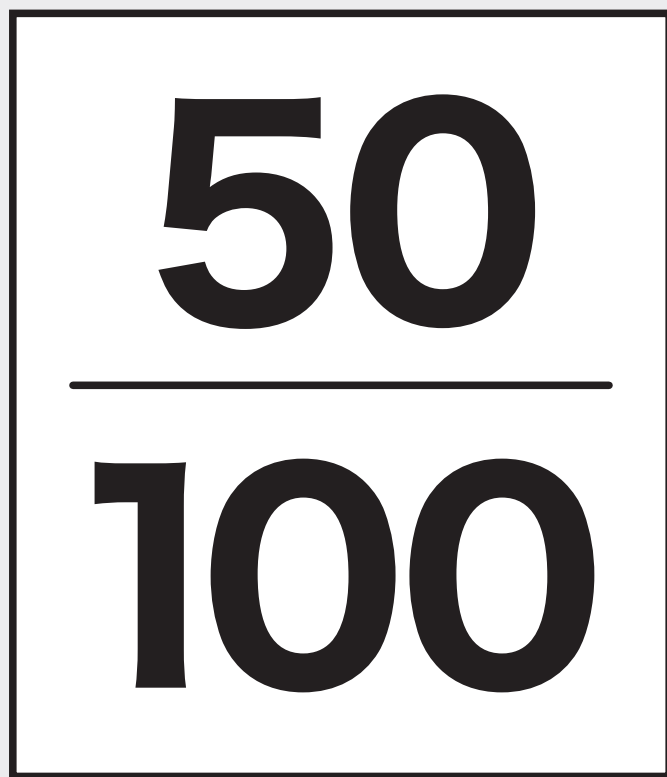
「帯広の森」50周年を迎えるにあたり、「グリーンインフラ」という概念に出会いました。

30年くらい前から宇沢弘文の社会的共通資本という言葉にひかれていました。しかし公園という単語は社会的共通資本の中では出てきませんでした。昨年石川先生の「グリーンインフラ」を読み込む中で、社会的共通資本の3のカテゴリーの全てに当てはまるものとして、公園が我々の見えるものとしてあるという事の思いを持つことが出来ました。「帯広の森」は帯広のまちづくりの見える化としては最高の資本として存在しているのです。

今、世界は大きな変化の時かと思います。

日本では十勝は辺境にあります。十勝の経済連鎖は畑作酪畜を地域経済の基盤としています。四季折々が十勝人の日常生活に映し出されています。世界を見ながら日常生活を見ることが出来ます。

50年後に100年経った「帯広の森」は帯広十勝のみんなにどんな姿を見せているのだろうか？



帯広の森 50 周年記念誌
帯広の森 私たちと帯広の森づくり

発行日 2025 年 3 月 31 日
発行所 帯広の森 50 周年記念事業実行委員会
事務局 帯広市西 5 条南 7 丁目 1 番地
帯広市 都市環境部 環境室 みどりの課
編集責任者 帯広の森 50 周年記念事業実行委員会
山田 英和
印刷所 大同出版紙業株式会社
帯広市西 7 条南 6 丁目 2 番地 1



